滿洲文化綜合雜誌

Geibun.

藝文

特輯 國民勤勞奉公制度

大東亞戰爭一周年紀念號

十二月號

康德九年十二月一日發行（每月一回一日發行）

藝文　第一卷　第十三號　十二月號

目次

扉・詔書 …… (5)

大東亞戰爭一周年と 思想戰概觀 …… 長谷川宇一 (6)

國民勤勞奉公制度

勤勞奉公制の理念と内容 …… 半田敏治 (22)

勤勞奉公制度の國民的基礎 …… 大森峯雄 (42)

世界石油戰の一端を衝く …… 伊藤硯郎 (73)

興村方策への唱道 …… 田中宋太郎 (53)

國民生活と世帶の構成 …… 市川仁平 (115)

十二月八日の倫理 …… 遲鏡誠 (88)

崩れゆく米英國家群

軍擴に狂奔する米國 …… 坂口恭平 (80)

土壇場に喘ぐ英國 …… 大庭欣一 (83)

孤立する濠洲 …… 津久井治雄 (86)

蹶起する印度 …… 久富進 (88)

雜記 …… 松井武州 (91)

藝術 …… 林田茂雄 (152)

中央アジア學術探檢の話 …… 柿沼介 (88)

融明樓閒話 (前承) …… 田所耕耘 (144)

滿洲文學概觀 (文藝評論) …… 富田壽 (108)

南方作戰と原住民族…(座談會)

…… (126)

崩れゆく米英國家群

軍擴に狂奔する米國……坂口恭平 (80)
土壇場に喘ぐ英國……大庭欣一 (83)
孤立する濠洲……津久井治雄 (86)
蹶起する印度……久富進 (88)

華中雜記……松井武州 (91)
民族の藝術……林田茂雄 (152)
中央アジア學術探檢の話……柿沼介 (98)
融明樓閒話（前承）……田所耕耘 (144)
滿洲文學概觀（文藝評論）……富田壽 (108)

南方作戰と原住民族……（座談會） (126)

全聯傍聽……牛島春子 (139)
滿洲溫泉瞥見……西田彰一 (84)
エミグラントの年中行事……大野澤綠郎 (178)
短歌 大東亞戰爭史……小池三良助 (159)
人類飛行の黎明時代……美保千代和 (174)
俳句 秋色濃鏡泊湖畔……上田三樽 (83)

藝文回顧

美術……古長敏明 (164)
演劇……藤川研一 (165)
映畫……轟木三平 (167)

放送……仁智築坊 (168)
音樂……井村雷太郎 (169)
寫眞……小塚光彥 (171)

創作小說 草莽唱……秋原勝二 (184)
白鼠……冬木羊二 (206)

この一年（大東亞戰爭重要日誌）……(217)

人文閣版

東京牛込早稻田町四四
振替東京一四七五八三

大東亞戰爭第一周年記念出版!!

新亞細亞の誕生

村田光烈著
￥一・八〇 〒・五〇

二十年來復興亞細亞の問題、特に印度問題に潛心して來た著者研鑽の精華

新刊

支那貧窮問題研究 柯象峰著 陸麻呂利輔譯 ￥三・五〇 〒・五〇

赤裸の日華人 井上鴻臣著 秉川島浪速翁序 ￥一・五〇 〒・五〇

支那古今奇聞 烏有山人著 ￥二・五〇 〒・五〇

支那文化叢書

即刊の一部

- 支那近世學術史　梁啓超著　上卷・下卷 各￥二・八〇 郵稅・五〇
- 支那教育史　任時先著　上卷・下卷 ￥上二・五〇 下二・〇〇 郵稅・五〇
- 支那近代文化史　陳登原著　￥三・〇〇 郵稅・五〇
- 支那民族權成史　宋文炳著　￥二・〇〇 郵稅・五〇
- 支那食糧政策史　馮柳堂著　￥三・〇〇 郵稅・五〇
- 支那屯田兵制史　張君約著　￥三・〇〇 郵稅・五〇
- 支那地方政制史　鄧自明著　￥二・〇〇 郵稅・五〇
- 支那文學史　譚正璧著　上卷・下卷 各￥二・八〇 郵稅・五〇
- 支那音樂史　朱謙之著　￥三・〇〇 郵稅・五〇
- 支那法制史　陳顧遠著　上卷・下卷 各￥三・〇〇 郵稅・五〇

第一書房新刊

東京麹町區三番町・振替東京六四二二三

山崎斌編

島崎藤村文學讀本

春夏の卷　一圓六十錢 送十五錢
秋冬の卷　一圓五十錢 送十五錢

大作家にして季節の詩人たる藤村先生の全貌を展望するに完璧を期した編輯によりて日本の美しき四季を描寫せる文學讀本。そして同時に詩情深き人生讀本としても讀者を衝つ!!

板垣直子著

現代の文藝評論

書きおろし長篇評論　一圓五十錢 送十五錢

轉形期の現代文藝界に於ける評論の動向を歷史的に批判して敍述した著者獨自の勞作　文藝批評の將來を論じて銳い!!

須佐晋長著

良寛の歌

一圓八十錢 送十五錢

良寛に造詣深き著者が愛誦する短歌三百首の感想と註釋を附加した興味深き名著である!!

高神覺昇著

靖國の精神

增刷　一圓三十錢 送十二錢

ウルセル　大島豐譯

東西哲學の比較研究

一圓八十錢 送十五錢

東洋哲學と西洋哲學との比較研究の重要性を論述し實證的なる比較方法の理論を確立してそれを對照研究・應用した點、世界最初の著述・大島氏苦心の名譯

岡田正三譯　全十二卷

プラトン全集

第二卷出來

各冊 三圓五十錢 送二十錢

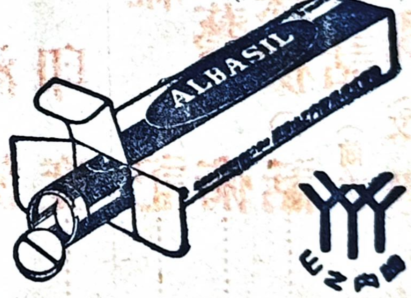
本邦唯一の原語譯として好評を得たプラトン全集愈々第二卷。譯者稷官の名譯にて大思想の全幅を汲み盡され上

化膿症に

瘭疽・面皰　外傷化膿　扁桃腺炎　中耳炎　蓄膿症　齒槽膿瘍　トラホーム　麥粒腫　淋疾　第四性病　婦人科化膿症

アルバジルは内服により各種化膿症の起因菌を直接殺滅し、化膿疼痛・發熱を迅速に消失、短期間に根元的治癒を促進せしめる！

二〇錠・五〇錠・一〇〇錠



アルバジル錠

阿爾巴基爾片

滿洲山之内製藥株式會社　奉天市大和區紅梅町二番地

鷲尾雨工 **豐臣秀吉** 第一卷 淀殿

織田信長（既刊七冊）の後をうけ、豪宕壯大なる桃山時代に筆を染め、秀吉の天下統一戰を中心として、風を呼び雨を呼む妖姫淀殿の生び立ちを描く雨工の第一作

B6 清裝四一六頁 價一・八〇 〒・二〇

高野六郎 **新結婚讀本**

優生國策（高野六郎）結婚相談（高野六郎、林醫學）性生理と性生活（林醫學、北川正厚）結婚と病氣（高野六郎、田村一）妊娠と育兒（富田市郎）鎭目專之助）第三刷出來

B6 清裝四五六頁 價二・五〇 〒・二〇

鷲尾雨工 **織田信長** 全七卷 各一・八〇 〒・三〇

喜多六平太 **六平太藝談** 一・八〇 〒・三〇

桑木嚴翼 **能謠一家言** 一・八〇 〒・三〇

中川・古川 **停車場** 三・五〇 〒・四〇

岩崎磯五郎 **汽車と鐵道** 二・〇〇 〒・三〇

寺尾新 **魚・海・人** 一・八〇 〒・三〇

カーライル サーター・リザータス 二・五〇 〒・三〇

カーライル **フランス革命史** 1三・〇〇 〒・三〇

Wペーター ルネサンス 二・〇〇 〒・三〇

東京日本橋區吳服橋二ノ五 振替口座東京二四八一六番 **春秋社**

和蘭の東印度經略概史 外務省一等通譯官 村松薰譯編 A5 函入 價二・五〇 送料一五

三百年に亙る和蘭の東印度經略の歷史は侵略と搾取に充ちた舊秩序の典型であつた。本書は和蘭及關印當局の統治に痛烈な論評を加へたキールストラ博士の名著「印度諸島に於ける和蘭政權の樹立」を根幹とし更に諸書を參照譯編せるもので蓋し我が南方建設の貴重な指標となるであらう

拓士の生活 安東收一著 B6 上製 價二・〇〇 〒一五

若き滿洲國とともに健かに伸びて來た滿洲開拓團の十年に亙る歷史は苦闘の連續であつた。或時は鍬持つ手に銃を把り或時は地理的環境の變化に災されつゝ血と汗の建設は遂に今日の隆昌を將來した。本書は拓士の袂に無限の信賴と感謝をこむる著者の繪と文による拓地訪問記である。

ガンサー著 **中南米の內幕** 價一・七〇 送料 一五

本間幸次郎著 **ビルマ** 價一・八〇 送料 一五

東京京橋銀座一丁目 振替東京一三六一二五 **大日本出版株式會社**

片岡鐵兵 **東京の曆** （長篇小說）價一・八〇 〒一五

片岡鐵兵 **消ゆる樂譜** （長篇小說）價一・五〇 〒一五

片岡鐵兵 **美しき鬪志** （長篇小說）價一・八〇 〒一五

芹澤光治良 **沈默の薔薇** （短篇小說）價一・八〇 〒一五

芹澤光治良 **美しき秩序** （長篇小說）價一・七〇 〒一五

武田麟太郎 **花模樣** （長篇小說）價二・〇〇 〒一五

鈴木彥次郎 **街の日輪** （長篇小說）價一・七〇 〒一五

山岡莊八 **櫻の宴** （長篇小說）價一・五〇 〒一五

菊池寬 **明治海將傳** （傳記小說）價一・五〇 〒一五

國枝史郎 **大捕物仙人壺** （長篇時代小說）價一・六〇 〒一五

三上於菟吉 **南海劍俠傳** （長篇時代小說）價一・七〇 〒一五

三上於菟吉 **黎明の若鷲** （長篇時代小說）價一・九〇 〒一五

東京市芝區田村町 **萬里閣** 振替東京二二九三四

新刊 聖鍬部隊 昭和義勇開拓團長 研谷靜著 B6判 二五〇頁 價一・八〇 〒一五

第一年度の滿洲開拓青年義勇隊の中隊長たる著者が、渡滿以來哈爾濱外二訓練所に於て隊員と共に體驗せる生活と環境、並に激變する時代の影響等から義勇隊開拓團に獨立する迄を、隊員を中心に卒直に綴つた記錄で、その貴重な體驗と素朴流麗な表現は「土と戰ふ」の幹部版として推賞に價する。

滿洲農村紀行 大瀧重直著 價一・八〇 〒一五

新しい國造りの創造精神に共感した著者が、再三の滿洲行脚と先住民、開拓者或は白露人との生活から感得した印象と感動を淳朴な筆に現はしたもの。

新十津川鄕 平野直著 價二・〇〇 〒一五

大和の秩境十津川鄕が、明治の初年水禍より起上つて北邊に我が國最初の分村移住を敢行した史實に取材せる雄渾悲壯な開拓文學

東宮大佐 福田清人著 價一・五〇 〒一五

「開拓の父」東宮大佐が、亞細亞再興の念願に燃え、新しい國造りの礎を築き上げた壯大な構想と多彩な生涯を、雄勁な筆致に描いた興亞文學の白眉。

劉家の人々 大瀧重直著 價一・八〇 〒一五

大陸の曠野に移住し、荒蕪や凶作や誅求の隙間にも屈せず開拓建設に勵む滿農一家と、建國前後の慌しい雰圍氣を描いた日本人作家による最初の大陸農民文學。

東京市四谷區舟町二八 振替東京一四七九八〇番 **東亞開拓社**

詔書

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國天皇ハ昭ニ忠誠勇武ナル汝有衆ニ示ス

朕茲ニ米國及英國ニ對シテ戰ヲ宣ス朕カ陸海將兵ハ全力ヲ奮テ交戰ニ從事シ朕カ百僚有司ハ勵精職務ヲ奉行シ朕カ衆庶ハ各〻其ノ本分ヲ盡シ億兆一心國家ノ總力ヲ擧ケテ征戰ノ目的ヲ達成スルニ遺算ナカラムコトヲ期セヨ

抑〻東亞ノ安定ヲ確保シ以テ世界ノ平和ニ寄與スルハ丕顯ナル皇祖考丕承ナル皇考ノ作述セル遠猷ニシテ朕カ拳々措カサル所而シテ列國トノ交誼ヲ篤クシ萬邦共榮ノ樂ヲ偕ニスルハ之亦帝國カ常ニ國交ノ要義ト爲ス所ナリ今ヤ不幸ニシテ米英兩國ト釁端ヲ開クニ至ル洵ニ已ムヲ得サルモノアリ豈朕カ志ナラムヤ中華民國政府曩ニ帝國ノ眞意ヲ解セス濫ニ事ヲ構ヘテ東亞ノ平和ヲ攪亂シ遂ニ帝國ヲシテ干戈ヲ執ルニ至ラシメ茲ニ四年有餘ヲ經タリ幸ニ國民政府更新スルアリ帝國ハ之ト善隣ノ誼ヲ結ヒ相提攜スルニ至レルモ重慶ニ殘存スル政權ハ米英ノ庇蔭ヲ恃ミテ兄弟未タ牆ニ相鬩クヲ悛メス米英兩國ハ殘存政權ヲ支援シテ東亞ノ禍亂ヲ助長シ平和ノ美名ニ匿レテ東洋制覇ノ非望ヲ逞ウセムトス剩ヘ與國ヲ誘ヒ帝國ノ周邊ニ於テ武備ヲ增强シテ我ニ挑戰シ更ニ帝國ノ平和的通商ニ有ラユル妨害ヲ與ヘ遂ニ經濟斷交ヲ敢テシ帝國ノ生存ニ重大ナル脅威ヲ加フ朕ハ政府ヲシテ事態ヲ平和ノ裡ニ回復セシメムトシ隱忍久シキニ彌リタルモ彼ハ毫モ交讓ノ精神ナク徒ニ時局ノ解決ヲ遷延セシメテ此ノ間却ツテ益〻經濟上軍事上ノ脅威ヲ增大シ以テ我ヲ屈從セシメムトス斯ノ如クニシテ推移セムカ東亞安定ニ關スル帝國積年ノ努力ハ悉ク水泡ニ歸シ帝國ノ存立亦正ニ危殆ニ瀕セリ事既ニ此ニ至ル帝國ハ今ヤ自存自衞ノ爲蹶然起ツテ一切ノ障礙ヲ破碎スルノ外ナキナリ

皇祖皇宗ノ神靈上ニ在リ朕ハ汝有衆ノ忠誠勇武ニ信倚シ祖宗ノ遺業ヲ恢弘シ速ニ禍根ヲ芟除シテ東亞永遠ノ平和ヲ確立シ以テ帝國ノ光榮ヲ保全セムコトヲ期ス

御名御璽

昭和十六年十二月八日

各大臣副署

最新刊

田中茂穂著　随筆　魚の眼
東大名譽教授田中博士が、世界中の魚族を一管の筆に託して語る興趣と科學の異色ある隨筆集である。
A5和紙特製　定價三・八〇

佐藤垢石著　耳舌[illegible]談
洒脱人垢石の處生と人生に綾なす興趣深き隨談篇中「耳舌紀行」は蓋し刻下の名隨筆である。
A5和紙特製　定價三・八〇

小説集　北の旅　徳田一穂著
哀調切々たるこの旅愁感もげに文學のもつ喜びの一つである
B6 價二・〇〇

文協推薦　北風ぞ吹かん　寒川光太郎著
B6 三六〇頁　定價二・〇〇

武者小路實篤著　價二・五〇
青野季吉著　文學の本願　二・五〇
徳田秋聲著　息子の結婚　價二・五〇
加能作次郎著　世の中へ　二・五〇
宇野浩二著　挿話　價二・五〇
和田傳著　部落の道　二・〇〇
富澤有爲男著　夢みる部屋　價二・〇〇
佐藤春夫著　日本頌歌　價二・五〇
ふるさと
龜井勝一郎著　現代人の救ひ　價三・〇〇

東京小石川大塚町三六　振替東京一一九〇五三
櫻井書店

技術新書

B6判・二〇〇頁
9ポ活字横組・上製
各種設計圖・統計表寫眞・多數挿入
【内容見本進呈】

最近に於ける國際情勢の推移は、我が國獨自の國防機械化資材の大量生產が要請され生產部門に於ける技術の向上發展が急務とされるに至つた。蓋し質量兩面に於ける生產增强は技術の昂揚なくして考へられず新たなる大量生產の觀點から新たなる技術が研究されなければならない。弊書房が技術新書を刊行せんとする微意もここに存するものに他ならない。幸ひに本計畫を發表するや各方面より絶大なる贊同を寄せられ特に生產部門に於て實際的指導者として活躍せられつつある技術者を中心として斯學の權威者の厚意ある協力を得、最も嶄新なる内容を最も合理的に體系化することを得た。學窓を出でて多年の研鑽を實地に實用せられんとする青年技術者並に既に携はれる各專門部門に就きより深くより新しき知識を求められんとする各位はその多端なる日々の伴侶として本書を選ばれんことを切望する。

工學博士　永澤清著
特殊鋼の理論と實際
價一・二〇　送・一五
本書は個々の鋼種のもつ本質的特徴及び日常頻發する諸現象に就いて專門的解説を加へると同時に特殊鋼全般に通ずる基礎的事項又は一般的現象の敍述にも十分意を盡し、理論的使命をも果すやうに配慮され、特に現場技術者のため常用に便ならしめた。

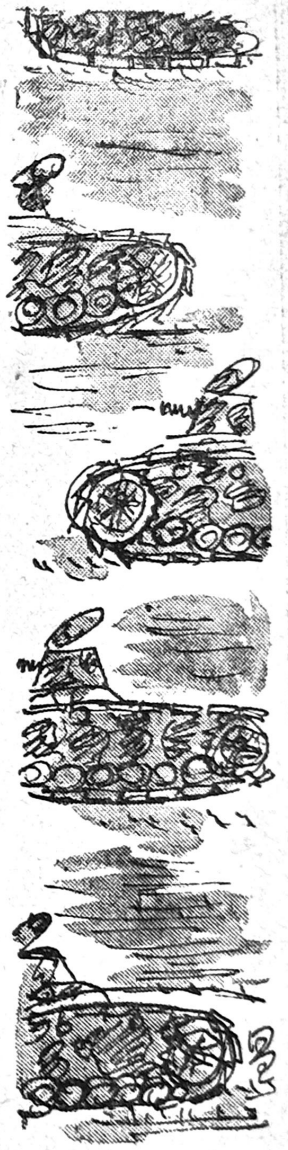
大阪府技師　竹谷勢一著
切削刃物の設計と製作
價一・二〇　送・一五
切削刃物に關する理論的・技術的研究は工場において實際化されず非能率的狀況に放置されてゐる。著者は各方面に多年の經驗と情熱とを以て工員に對し切削理論と設計並に製作に關する視察を結果、適する合理的指導書として本書を著された。

生產工學
川崎重工業參與　神馬新七郎著
工具管理
（A5判）價四・三〇　送・三〇
厚生省技師醫學博士　山口正（　）著
健康管理
（A5判）價三・八〇　送・三〇
〔内容見本進呈〕

東京・日本橋・通三
振替東京一〇八〇二
河出書房

文藝

第一卷第十三號
十二月號



大東亞戰爭一周年と思想戰概觀

關東軍報道部長
陸軍軍中佐　長谷川宇一

○はしがき
○思想戰態勢の考察
○國內態勢の反省
○戰爭と生命
○東西新秩序の問題
○總體と全體
○米英的範疇の脫却
○むすび

はしがき

周り來る十二月八日を迎へ、武力戰では東條首相が言明せる如く大體第一期の目的を達して、軍需優先を以て建設を遂行しつゝあるのであるが、この建設が何年續いて第二段の飛躍を爲すものであるか我々末輩には知る由もないが、過去の戰果を綜合し、現在の努力から見て、殊に南方發展の根元をなしてゐる滿洲の充實した樣相から見て、まさかアメリカが死物狂ひの國力充實を完成した時に、我々が未だ整つてゐないといふやうな後手を打つことは到底考へられない。しかしこれは武力戰、資源戰等の可視的分野に於ける見究めであつて總力戰中の主要部門である思想戰方面で果してこの武力戰に相伴つた實績をあげ、又將來あげ得る確信があるかと云ふことについては、我々として大いに考へねばならぬ所だと思ふ。

世間では克く斯う云ふ意味の事を言ふ。「日本竝にこれと肩を並べて居るドイツ・イタリーは武力戰に於いて勝つだらうことには文句はない。又經濟戰に於いても嘗て心配した程大したことでなくなりつゝある。併し他の文化面の戰爭に於いて果して英米に勝てるのであらうか」。と勿論斯ういふことを露はに言ふ人は一人もないけれども、さう云ふ危惧を潛在的に持つて居る人が相當にあるのではないか。併し恐らく現今の武力戰が如何なる基礎の上に形成されて居るかを考へるならば、右の言句は甚だ矛盾してゐる。いふ迄もなく現在の武力戰はあらゆる文化部門の總力の上に立つてゐるのであり、その廣い意味の文化が結局、對手よりも優つてゐたればこそ武力戰に於いても亦勝ち得たのである。經濟戰又然りであつて、文化の基底を有しない武力戰、經濟戰などいふことは實在しないものである。かゝる觀點よりすれば武力戰に勝つたことは、文化戰に於いても亦、勝つてゐたことを意味する。卽ち我々としては、それが何處から湧き出たかは後で考察するとして、現實にさう云ふ底力を持つて居ることを先づ自覺し、自信を以て戰爭遂行に當ることが必要である。この根柢がないといつまでもフワ〳〵として敵の思想戰に乘ぜられることにならう。赫々たる武力戰の戰果、著々として進む經濟建設の一箇年をふりかへつて、先づ思ふのは、この戰爭遂行の基盤を確認せねばならぬといふことである。

思想戰態勢の考察

思想戰の問題を考へる際に先づその戰略態勢を一瞥すると反樞軸國側は、過去一箇年に於て、完全に思想戰は敗北して居ると見られる。我が盟邦ドイツと鬪つてゐるソ聯をとりあげて見れば、ソ聯はその年來の思想的敵手なる英米と手を組み、そして世界赤　の目標とは全く對蹠的なる强度な國家主義—それは今の敵手なるドイツの主義である—を採用して居る一點を採つて見ても既に明瞭である。其他社會生活の面に於いては、嘗つて自ら社會の阿片なりとして極力排斥した宗

教を今や擁護せねばならない立場に追ひ立てられ、又名譽といふが如きは一の遊戲觀念にすぎないとし、その「子供だまし」の表象としての勳章や階級を世界に先立つて放棄したその國が、今や大眞面目になつて勳章を次々と制定し、他人に目立たぬやうに小刻みに、赤軍將兵の階級を復活して軍紀の維持につとめねばならぬのは、何といふ皮肉であらう。つまりソ聯は、自らの主義、主張にドイツ、ナチズムを降伏せしめんとしながら、實は己れの凡てを擲ち、却つて敵手の凡てを頂戴借用して、辛くも自己の生存を續ける力にしてゐると見るべきであつて、これは形からのみ見ると正に思想戰の完全なる敗北と言はざるを得ないのである。

このことは英米に就ても言ひ得る。即ち英米がデモクラシー擁護を振り翳し、獨裁主義を打破すると云つて起ち上つた、その英米が實は他に類例を見ざる所の獨裁主義に立たなければ、國家を此の激浪の中から渡り得ないと云ふ事も、亦彼等反樞軸陣營が思想戰略態勢に於て完敗したと言ひ得るのである併し事實は果して然りであらうか、成程以上の見方も一應の見方であり、何しろ彼等が敗けてゐることは事實であることに相違ないのではあるが、以上の觀察からのみ、我々の完勝と見るならば、それは危險である。私は前に、ソ聯は、自己の呼號する主義主張を捨てゝ、相手の主義、主張をふりかざして戰つてゐると言つた。しかしそれでもその敵の主義、主張を取入れたと同時に、一擧に崩壞することもなく、寧ろ强化されて戰つてゐるといふ事實は、實體としての思想戰に、決して敗れてゐないことを證してゐるのである。

一方から言へば、そんな口頭の呼號などで、國民の思想戰線が動搖する程ケチな根據の上に、國民は立つてゐなかつたのだとも、或は國民は思想戰などにかゝはり合ふことのない別な根據—それが何であるかは別として—に立つてゐたのだ。即ち思想戰の危險區域外に始めから安置されてゐたのだ。更にいへば、國民は思想などいふものには、凡そ無關係なやうに置かれてゐたのだとも考へられる。孰れにしても理窟の上では負けた筈のソ聯は、事實負けてはゐないといふ不思議な態勢に置かれてゐるのであつて、他の國家國民では出來ない藝當である。

斯う考へると「負けた筈」と思ふことが抑々の錯覺であつて大體、彼等指導者が呼號するやうな思想なり政治なりに全國民が二十年もの間訓練されて來たのが事實であるとすると、その習性化された訓練を、獨ソ戰に於て危機至ると見て、一朝にまるで反對の他人樣の思想なり政治なりを借用して間に合ふ、否間に合ふ許りではない擧國一致して「祖國」を守るなどいふことは、凡そ人間の順應性を無視した解釋である。今までスターリングラードの防衛に於て示したあのソ聯の前線も銃後も一丸になつての强靱な愛國心は、二十年の間、事實上祖國主義が國民の間に徹底したからこそ可能なのであつて昨日まで國家本位でなかつた國民が、今日から祖國のために生命を捧げて惜しまないなどいふことは、到底あり得ないことである。故にソ聯が革命時及びそれから以後掲げた呼號は如何ともあれ、國內は實質的には純粹な國家主義によつて實踐的に、而も徹底的に鍛へられてゐたと斷ずるより外ないのである。そしてその實體とは反對の呼號に躍つたのは、ソ聯國內ではなくて、世界中の他國のインテリ、コムミニストであつた。即ち當時のソ聯としては、世界に向つては國家主義は人類の敵なりと宣傳しつゝ、自國の大衆に對してはそれとは反對の國家主義を、實質的に著々と實行せしめてゐたのである。從つて、今や國家が危急存亡の場合に際會するや、その看板だけを塗り替へて名と實とを一致せしめたに過ぎない、國家主義によつて、全く實踐的に鍛へられてきた青年共は、今や愛國の明確單純な理論をも併せ與へられ、益々その血を燃やして祖國戰を戰つてゐると見るべきではないか。

斯ういふ見方は、或は思ひ過ぎ、考へ過ぎであるかも知れぬが、斯くの如くに見る以外に、現在獨ソ戰線に於いて全滅を豫期するトーチカに據つた、若いソ聯の兵士達が、「ソヴェート萬歲」、「レーニン萬歲」を叫んで死んで行く事實を了解することが出來ないのである。

以上私の見方を要約して言へば、思想戰に於いてはソ聯が敗けたのだと云ふことは全く表面の話であつて、頭の良い革命の一連の指導者達は、革命を成就し、又それによつて成立した國家を育成强化する手段として、世界に向つてはその國家本來のあるべき姿とは反對な思想謀略を用ひ、而も國內に於ては、その國家として歩むべき本當の方途を定めて二十年間之を一貫して來たのであるから、彼にとつてはむしろ筋書どほりの思想戰を實行しつゝあると見るべきである、といふのである。この考へ方は前にも言つたやうに、邪推し過ぎたことかも知れぬが、國民益々困窮して愈々結束を固くするソ聯と、勝つて勝ち抜きながら、赤化分子を今更この聖戰下に檢束せねばならぬ日滿兩國の現實を直視する時、斯く判斷せざるを得ないのである。然るに日滿兩國にはソ聯の形だけの思想戰敗北を稱へ、又英米の思想戰の矛盾を指摘して、それだけで、ドイツの勝を卽斷し、日本の完勝に安心して居

る事がないであらうか、そしてこれは、もつともつと遠大な彼等の謀略の、實は思ふ壺であるといふやな結果になるのではないか。故に彼等が思想戰に完敗したと見るのは大きな誤りである。しかし少くとも看板を塗りかへねばならぬ所に、彼の弱點があり、そこから敗退の第一歩が始められることは確かである。總體として反樞軸側が負けてゐることは前節に於て概說したとほりである。要は、今後この敗退の第一歩に樞軸側の猛烈な急追が加へられるか否かによつて、彼等が完敗するか否かが決まるのである。かゝる觀點から對策を持つに非されば、彼の第一次歐洲大戰に於いて武力戰で勝つて最後に思想戰に敗北の憂目を見たドイツの轍を踏んで、今度は思想戰の表面に於いて勝ち、思想戰の實體に於いて敗れると云ふ、嘗てのドイツと同樣な運命に陷るの危險なしとしない。玆に日滿の指導者、特に思想・文化の面を擔當する人々に大きな實踐的責務があると謂はねばならぬ。

國內態勢の反省

今こそ對手の思想戰的弱點に突入し、その戰果を擴大し、猛烈な追擊をすることが思想戰士の責務であると私は言つた。然らば之を實行すべき日滿の思想戰的實行は如何。

之を一言にして言へば、大勢は追擊戰を敢行するに十分の底力を持つてゐる、殊に日本は歷史といふ强みを持つてゐる。しかしこの力を統合して十全に發揮する面に於ては、若干の阻害抗力がないでもない。それは何かと言へば露はな反國家言動ではなくて、却つて愛國的時局便乘のそれである。

卽ち表面極めて愛國的であり、戰時に適はしき言動にも拘らず、一皮めくつて見る時に、それとは似てもつかない英米的なもの、英米を制するもの、さう云ふ陰險なる思想行動が潛んでゐる。これが意識的に行はれるならばそれは日本に對する叛逆であり、無意識に行はれるとすれば、餘りに無知である。かくの如き現狀では武力戰としての米英打倒は陸・海・空・緊密な統一の下に著々進められてゐるけれども思想戰としての米英打倒は全然不統一の足並で、互に力を減殺しながら戰つてゐることになる。これは他の場合なら看過も許されるが、此の大戰下には捨ておけない事象である。しかるに事實は中々巧みに米英思想が日本的な、東洋的な相貌を以て橫行してゐる。

例へば「今は戰時である、我々は、全民族竝に東亞の諸民族を擧げて、米英打倒に全力を盡しつゝある。かゝる非常時であるから民族と民族との、又同じ民族の間に於ける各階級、

各人の間の一切の摩擦は止め樣ではないか」あらゆる改革なんかは此の際は愼むべきだといふ。誠にこんな時の內輪喧嘩は戰爭遂行力を阻害すること甚しいものである。併し「斯う云ふ時代だから舊體制をそのまゝ維持すべきである、國內問題でいへば、資本主義が良いとか、惡いとか、今迄の經濟機構をどうしようとかいふことは止めた方がよい」といふことになると、これは米英の現狀維持を擁護する以外の何ものでもない、前半の戰爭遂行といふ尤もらしい言說から、巧に實は戰爭阻害の要因培養に轉身してゐる。

この米英的な現狀維持を擁護乃至禮讚するものとして、次の如きものもある。卽ち「大東亞戰爭開始以來の日本のあげた戰果は實にすばらしく、米英の遠く及ばざるものである」とほめておいて、然らばこの戰果はどこから來たかといへば何と言つても結局米英から貰つた文明の御蔭であるといふ風に誘導するのである。しかし彼等は簡單に「だから先師ともいふべき米英と鬪ふな」などといふヘマな話の筋には持つて行かない。「惡逆の米英はどこまでも討つべし」といふ看板を高く揭げながら、その討つべき米英と源流を同じうする文明卽ち大同小異の同質文明を以て戰ふといふ前提から「質を同じうするならば、その優劣は結局する所、量である。量となると

戰爭初期ストツクのある時機とか短期戰とかに於ては、貧乏國日本も勝てたが、果して長期戰となつたらどうであらう」といふ疑問に持つて來る。米英は討つべしと標榜しながら、實は擊てないのだぞ、早くあきらめたがよいぞと嗾かしてゐるのである。この種の誘導は、このやうに簡單に、このやうに露骨に語られず、もつと巧に語られるのであるから、明治以來沁み込んだ米英的考へ方には、案外スラ〳〵と納得され、そして國內問題としては現狀維持、國外問題としては米英との提携、當面の問題としては戰爭の早期中止、といふやうな國論分裂が陰謀される危險があるのである。

又之と同工異曲なものとして、建設重視の逆用がある。卽ち「今や戰爭の第一段階が終つて將に南方の建設が始められてゐる。我々の目ざす所は結局大東亞の建設なのだ、だから一日も早く戰爭を切り上げて、專心建設に邁進すべきだ」といふのである。ここでは先づ戰爭といふ觀念を、破壞といふ風に觀念せしめ、建設と相反するものであるやうに思はしめる米英的謀略が存する。日本に於ける戰爭そのものがいかに建設的なるものであるかは、後で觸れることにするが、たとひ如何なる解釋にもせよ、これから百年二百年の長期戰を決意するときに、戰爭中止を謳歌するやうな言說は、一切叛逆

と見なすべきである。

又滿洲に關係あることで言へば、王道政治のすりかへがある。彼等米英の手先は、まことにしやかに「滿洲に於ける王道は、所謂支那思想の王道ではなくて、皇道と軌を一にするものである」といふ。さうしておいて語をつゞける、「所謂王道にしても、權力を以て治める霸道を排するのである、況んや皇道化した王道に於てをや」と。この皇道化した王道と從來の王道とのすりかへによつて、神武不殺、而も斷乎として許さざる日本の威力發動を未然に封ぜんとするのである。そしてグウタラ政治に導き、戰爭反對を誘發せんとするのである。彼等をして言はせるだけ言はしめるならば「結局戰さを以つてするのは、目的がいかに高からうと最良の手段ではない、第二次的のことをやつて居るのである、これをしも聖戰と言ひ得るであらうか」と結ぶであらう。これは厭戰思想の鼓吹であり、戰爭目的の攪亂である。而も出發がいかにも皇道を王道から高く區別するかの如き口吻であるだけ、極めて稚拙なごまかしでも、乘ぜられ易いのである。

以上述べたやうな思想なり言說なりは、實に我々國民の一致團結を牽制し、その力を減殺するものであつて、所謂思想第二戰線に外ならない。

としようとか、或はデモクラシー擁護の爲めの戰爭としようとか、それは言葉が長すぎるとか、未だにやつてゐるといふことであるが、それは結局アメリカに明確な、又動かし難い戰爭目的が實はなかつたことを露呈したまでゝ、我々が大東亞戰爭と稱し、全國民否全東亞民族が目標を一にし、一丸となつてその目的達成に邁進して居るに比するとき、彼等一部階級の專恣によつて戰爭が始められ、之を何とかアメリカ全體の國民運動にまで持つて行かうといふ醜體を如實に窺ひ知ることが出來るのである。

そしてこの努力は、幸か不幸か、打ち續く敗戰によつて拍車を加へられ。ルーズベルトの獨裁默認の程度にまで漕ぎつけたやうであるから、彼等としては一應の成功であらう。けれども問題は今後、戰爭の意義を如何に見るかによつて、折角まとまりかけた民心が、又相反撥するに至るやも知れぬ。ここでは他國のことに御せつかひしてゐる暇はない、簡單に日本に於ける戰爭の積極面に就てのみ觸れたい。

元來戰爭は二者(群)の對立に始まること、東西同じであらうが、我國の戰爭は、對手をして在るべき所に在らしめ、對手に生命を與へる所に眞義があつて、對手を抹殺し、自己一人天下に存在するといふやうな利己目的は許されないのである。現在、歐洲に於て問題になつて居る第二戰線は、獨ソの戰爭に於いてソ聯を生かす道としてドイツの後方に作られるべき現實の戰線であるが、第二戰線は決して歐洲だけではなく、世界至る所にドイツの戰力を牽制し消耗させる戰線が作られると同樣に、樞軸側の思想戰線を牽制し弱體化せしむべき戰線は、決して交戰國間にのみ存するのでなく、世界至るところ、又自國內にも存し得るのである。そして思想戰に於てはこの背後的第二戰線の方がより始末が惡く、又危險なのである。

我々は現在一つの明確な目標に向つて大東亞解放戰爭を戰つて居る時に、これを脇道に逸したり、後に引戻すが如き一切のものは、凡てこれ第二戰線であり、第六列であり、叛逆者であつて、この點は嚴重に呵責なく考へなければならぬ。一口の妥協もあつてはならない。特に滿洲は、その思想第二戰線結成の適地として、四周から、ねらはれてゐることを思ふとき、その態度の峻嚴を要すること切なるを痛感するのである。

戰爭と生命

ここで少し日本の戰爭觀に就て觸れたいのであるが、きく所によると今次戰爭勃發以來アメリカに於てはこの戰爭の名稱さへ附いてゐないさうである。之を漠然と第二次世界戰爭る。これは我が國の宣戰は　天皇の大權に發し　天皇の大權皇謨の一切は總て萬邦をして其のところを得しめ兆民をして其の堵に安ぜしめるといふ肇國の神意に基くことを顧み奉れば何の疑もない所である。

更に遡つて、我が民族の世界觀をたづぬれば、我々は西洋流の對立といふことを知らぬ、—或は乖り超えた—民族である。世の中の總てに區別、卽ち各々の分は認めるが、それは絕對に相容れぬ對立者として終始鬪爭するものだなどとは考へないのである。最も原本的な自然の觀方に於ても、我々は人間(心)と自然(物)とを區別はしてゐるけれども、對立鬪爭するものとは見てゐない。

寧ろ一人の神樣から山川草木も人間の祖先の神樣も生れたといふ神話によつて明かなやうに、元來物・心は融合し助け合ふべきものとしてゐる。世界を人間(精神)と自然(物質)とに截然と區分し、人間がその宿命の敵手たる自然を壓倒し克服する所に、文化が生れ、世界の進步があるとする西洋流の對立觀、鬪爭觀とは全く反對な調和觀、融合統一觀に立つものである。しかし我々は、先にも述べたやうに、そのあるべき區別、分限は率直に之を認めて、その分を超えることは決して許さないのである。神話でも「草木がものをいふ」といふ

ことは怪しからぬこととされてゐる。その分限に於て、物心が互に相手に生命あらしめるやうに扶け合つて、十分にその能力を發揮する、卽ち物心各々其の所に於て全生命を生き拔くやうに扶けあふ所に、世の進歩があると我々民族は考へてゐるのである。

この自然觀を、人間社會、國家の觀方に持つて來れば、そのまゝ萬邦をして各々その所を得しめ、兆民をしてその堵に安んぜしめるといふ肇國の大精神となるのである。これは萬邦をして本來の生命を得しめ、兆民をして眞の生き方をなさしめるといふことであつて、ここに　天皇の御政治があるのである。實に戰爭はその御政治の强きあらはれに過ぎない。故に、各々其の分を守つて、全生命を發揮する所には、皇道の慈光、熙々として輝くのであるが、その分を紊るところ忽ち天譴を蒙る、そしてその本來あるべき所にあらしめるまで戰ふといふのが、我が戰爭のやりかたである。從つて、我が國では、戰爭は常に大義名分と終始した、私鬪と目されるものに於ても、名分がやかましく、それによつて大勢が事前に決する有樣であつた。

又元來戰ひは奪ふよりも與へるもの、殺すよりも生かすものと觀念されてゐたから、國內に於て國民族が相戰ふことに、何等の慘忍性も不倫性も一例外はあるにせよ—感ぜられず、むしろ優にやさしい戰が明治維新までつゞけられてゐたのである。これが米英流の戰爭觀によるものであれば、大和民族は既に亡びてゐたであらうし、又殘存者があつたとしてもその歷史は實に悲慘な、見るにたへない文字を以て綴られてゐたであらう。

而してこの關係は、戰爭が國外にまで擴つても同樣であつて、分を紊るものは同じアジア民族であつても天譴を蒙るのである。蔣介石は同じ東亞の同胞ではないかといふやうな感傷やごまかしで、大義名分は曲げられないのである。

ここに我々は、はつきりした戰爭觀を持ち堂々と戰爭遂行に邁進し得る民族性的根柢を有してゐる。しかし斯ういふ相手を生かすための戰爭といふ戰爭觀は、二元的世界觀に立つ米英人には、決して理解されず、一の詭辯としか受けとられぬであらう、しかし我々は何も米英人の承諾を得て戰鬪してゐるわけではなく、却つて彼等の誤れる世界觀、之に基く世界政策を打破し是正せんとして戰つてゐるのであるから、今更彼等の思惑を氣にする必要もなければ、之に追隨する如きは勿論以ての外である。

從つて、戰爭といふものは相手を抹殺し、あらゆるものを破壞するものであり、戰後の經營といふことも、其の土地に生命を與へる代りに自國の一切をそこに押しつけるものだといふやうな、米英の戰爭觀、植民地觀で、大東亞戰爭や大陸經營を批判するのは飛んでもない話である。

我々に於ては戰爭そのものが建設であつて、これは所謂「且つ戰ひ且つ建設する」といふ言葉以前のものでなければならない。所謂且つ戰ひ且つ建設するといふことは、形の上からすれば西洋流の戰爭觀に立つても當然あることで、手廻しのよい外征將軍は、古來誰でもやつてゐることである。彼等の戰は相手の抹殺破壞であり、相手から一切を奪ふことであり、建設は自己一色による塗りつぶしであるとすれば、彼等こそ一日も早く戰爭を切り上げて、彼等の所謂建設にとりかからねば、折角の戰爭の「取前」が一日だけ遲れることである。

しかし我々に於ては、何度も繰りかへすやうに、戰爭そのものが既に相手に與ふることであり、建設であるのであるから、戰場附近に於ける一切の建設が、戰爭遂行に寄與し、所謂大陸の經營が作戰優先の形をとつても、決して「建設」の遲滯でもなければ「建設」の犧牲でもない。

戰後の儲け仕事を「建設」と見る米英的商魂に於てのみ、早く戰爭を切り上げて、建設に邁進しようではないかといふやうな不逞なる言辭が生れるのである。

東亞新秩序の問題

斯ういふ米英的商魂からは、更に東亞新秩序の衝突といふやうな日獨離反のデマも作り出される。日本は東亞に於て、獨伊は歐洲に於て、新秩序を建設したら、最後には、日本と獨伊とが一大戰爭をすることになるといふのである。

正に米英の對立的世界觀、米英の掠奪的戰爭觀、米英の獨占的建設觀によつて、我々の新秩序といふものを獨斷したならば、或は彼等がいふやうに、又彼等が希望するやうに、日本と獨伊とは遂に相爭ふに至るであらう。

しかし米英には氣の毒ながら、獨伊は、米英的歐洲、所謂沒落しつゝある西洋から見切をつけ、東洋への復歸にその民族の活路を見出したのである。そこに彼の新秩序の意義があるので、唯單に米英の盤踞した舊秩序を打ちこはして、その同じ平面の上に、形だけ新しい秩序を建てるとするならば、依然舊秩序であつて主人が代つたのみである。

所が今や、獨伊は、米英の立つ地盤を捨てゝ、我々東洋民族の立つてゐる、更に一段高き地盤に立ち、又立たんと努力し

てゐるのである。この地盤の上には、鬪爭を宿命とする人間觀は有しないのである。相手をみなごろしにして、己れのみ生きるといふ戰爭觀はないのである。獨伊は萬邦をして各々其のところを得しめ、兆民をして各々其の堵に安んぜしめるといふ、日本と同じ目標に邁進してゐるのである。

若し各々新秩序完成の曉、兩者相戰ふことありとすれば、それは誠に不幸なことである。それは兩者が折角平和になつた世界を半分に割つて戰ふといふ人類の悲慘事を再びくりかへすから、といふ意味からでなく、日獨伊の孰れかゝ、戰爭目的、建設目標を踏み外したといふ意味で、又その孰れにか依然として米英的世界觀が殘存してゐたといふ意味で、それは言ひかへれば、我々はマンマと米英の最期的策謀に乘り、世界をして再び米英的低次の地盤に墮したといふ意味に於て、洵に悲しむべき不幸と謂ふのである。

そして、かゝる不幸がありとすれば、それは日獨伊三國の共同責任と一應は言ひ逃れは出來るかも知れないが、實際、日本こそ元來の地盤に立つものであり、新秩序の發願を獨伊に示唆したものが日本であり、更に一國に實力さへあれば、他の過失を引ずつて正しきに就かせ得るものであることを思へば、かゝる不幸を惹起せしめるか否かは、日本の決意、日本の實力如何に依ると斷言し得るのである。故に米英的世界觀に從へば、將來東西新秩序の衝突は必然と觀られるであらうが、我々にして、否我が日本にして眞の日本的世界觀に立ち、之を貫遂するの實力を有する限り、必至なるものは東西の大調和である。前述米英のデマに杞憂を抱くものはこの二者乃至その一を缺くものであるが、しかしこの二者は、決して居ながらにして得られるものでなく、又現に存してゐるものでもない。今後我々が孜々として體得し、營々として蓄積せねばならず、而も之で完全だといふ限界のあるものではない。益々深め、愈々大にするを要するものである。

故に米英のデマを杞憂とするか否かは、我々の今後の努力如何によると斷ずべきである。

總體と全體

私は前節に於て、日本的戰爭の本質は生命を與へることであり、その正しく行はれる所、萬邦兆民悉くそのあるべき所に安んじ、決して永劫的鬪爭が存しないと述べた。

併し、その戰爭遂行そのものに幾多の生命が失はれ、國民はその生活を極度にきりつめてゐるではないか、又その萬邦といひ兆民といひ、その所に安んずるといふ裏には、多少の

差こそあれ、そこに自己犧牲といふものがあるのではないか、それは嘗て米英が支配したときに存した搾取と、其の質に於て結局は同じものではないか、謂はゞ八紘爲宇といふやうなことは一の羊頭であつて、中味は少し上等の狗肉でしかないのではないか、と米英者流はいふかも知れない。

ここで私は犧牲といふことを考へて見たい。私の考によれば、犧牲といふことは總體の世界にのみあつて、全體の世界にはないものである。ここで總體といふのは、私が勝手に作つた言葉であるが、元來別箇のものゝ集合體をいふのであつて、全體とは有機的全一體を指すのである。この總體と全體とは外見似てゐるが、本質が全然違ふのであつて、之を區別しない所にいろ〳〵な誤解が生じてゐるやうに思ふから、一應この區別を述べて見たい。

よく世間では、全體主義と言ふ言葉を使ふが、言つてゐる意味は、私のいふ總體主義である場合が非常に多い。

總體といふのは、獨立した箇々の集合であつて、その集合の目的は元來、箇々に分散しては力が弱いから集合によつて箇々では主張し得なかつた自我を、多數によつて主張し貫徹しようといふのである。だから形は似てゐても、個我主義の上に立つ總體主義は、個我主義と全く對蹠的地位にある全體主義と相反するは當然である。故に總體主義によつて、總體のために個我を捨てよといふことは、元來矛盾であつて、その多數のために捨てられた個我こそ、犧牲になつたのである。

多數を少數よりも重しとするのは、結局民主主義で民主主義と全體主義が、相對するものであることはいふまでもない。この明瞭な區別をとりちがへるのは、一には全體と總體とを混同するがためであるが、更に眞の全體といふものが自然界には—卽ち生命體として—存し得ても、人間社會にはさうザラにないからでもある。なるほど社會學の理論としては、ゲマインシヤフトといふ全體的社會なるものは存し得るが、果して眞の意味の全體社會が存してゐるであらうか。世界のあらゆる所に於て、既にゲマインシヤフトといふ總體的社會に轉身してゐるのである。

その最も原本的單位である家族に於てすら、西洋諸國に於ては既に多分に利益社會の性質を帶びてゐることは周知のことである。それ以上の社會單位に眞の共同社會を見出さんとすることの不可能なるはいふまでもない。

斯う見渡したときに、醇乎として醇なる全體社會は、實に日本國家あるのみである。日本國內の他の社會單位に於てはそ

の共同社會的性質を失つてゐても、國家に於ては立派に全體性を保有してゐる。

それは恰も支那に於て、家族が比較的全體性を保有してゐるに似てゐるが、その全體性の强度に於て、到底比較にならない。而して、これは決して家族の全體性が、村・地方・國家と擴張されて來て、國家に强く殘つたのではなくて、日本は建國當初より國家こそ唯一の全體であつたのである。我が國の神話が著しく國家主義的であると謂はれるのは、この間の消息を傳へるものである。

かゝる全體社會は、いはゞ社會の生命體であるから、忽然として無生的總體社會から轉變し得るものではない。昔から生き永らへて來るか、或は先行する全體社會から生命を注入されて新たに生れるより、發現の仕方はないのである。これらに就てもつと具體的の例を擧げて說明すると明瞭になるであらうがここでは唯、國本を奠定せられた後の滿洲國こそ、世界中第二の全體國家になり得るものであることを指摘するに止める。

以上で總體と全體の關係、眞の意味の全體社會は日本國家のみといふ私の主張は分つて頂けたと思ふのであるが、然りとすれば我が國に於ては他の總體的國家にあるやうな「國家の爲に犧牲になる」といふ事實は存しないのである。而も我が國民は、決してこんな廻りくどい理解からでなく、直截簡明に、個我を捨てゝ國家の中に生きる途を直觀體得し、實行して來たのである。米英的主知主義から見ては全くの無自覺無反省と思はれるやうな態度で、欣然と國家の中に投入して來たのである。

我々は、戰場に散華せらるゝ幾多の英靈を弔ひ、又銃後生活の逼迫を感ずる毎に、戰爭遂行の中々容易でないことを思ふのであるが、かゝる時、動もすれば「そんな犧牲を拂つて損はないか」といふ米英謀略のさゝやきを聞くのである。たしかに彼等にとつて、戰死や困窮は一の犧牲であらう、この犧牲によつて、他の多くが個我を守り得、又いつかその代償が得られると考へるのであるから。

しかし之を我が國にあてはめて考へるとすれば、それはその人はもはや米英の思想的捕虜であつて、我が國家の本質を忘れ、戰爭の本義を忘れ去つたと言ふべきである。

米英的範疇の脫却

今、私は思想的捕虜と言つたが、此の聖戰下自覺的に米英の捕虜になつてゐるものは一人としてあるまい。けれども知

らぬ間に、米英の鐵鎖につながれて、その思考の形式なり範疇が、米英のこれを脫し得ないのが、決して少くないと思ふ。

一番最初にも觸れたのであるが、日本の優秀性を得々としてほめるが、扨てその優秀なる所以を尋ねて見ると、皆米英的價値の尺度を以て測定したものである。そして本人は氣がついてゐないのである。

之等が、未だ歐洲諸國內の比較なら許されもするが、全く獨自の存在であり、全く歷史を異にしてゐる日本を測定するに、米英の尺度を以てして、何の比較になるであらうか、かくの如くであるから、米英にあつて日本にないものがあればそれは、日本の未開といふことになり、米英になくて日本にのみ存するものがあれば、それは不問のまゝに價値の範圍外に放置されるのである。

故に、彼等の言葉だけ聞いてゐると、いかにも米英を追越した日本の偉大さを讃嘆し、日本主義者になり切つてゐるかのやうであるが、認識の根據は皆米英から發してゐる。從つて日本が逐次進步して米英的のものを脫却するにつれ、彼等は日本が墮落し或は衰退したと感じ、愛國的であればある程、日本の進步を、ムキになつて阻止するであらう。

若し不幸にして彼等の力が强かつたならば、日本は米英に武力的には勝ちながら、實は米英から遂に脫却し得ず戰爭が終るや、再び米英的尺度を以て舊秩序が新組織の相貌を以て再登場することになるのである。かゝる事は、事實として勿論あり得べからざることであるけれども、今のやうに、國民の相當多數の頭の中に、米英的尺度が殘存してゐる間は、この危險は、傾向として、いつまでも續くのである。米英のデマ放送そのものも恐るべきだが、もつと之を米英的に解釋する根柢の方が恐ろしいのである。言ひかへれば、皇軍のあげてゐる戰捷は一刻一刻、米英を東亞から驅逐してゐるのに、思想戰に於ては之を放すまいと引とめてゐるのである。矛盾とか滑稽とかいふ域をこえて一つの悲劇であると言はねばならぬ。

今や米英打倒の聖戰を起してから、正に一年を經過した。我々は、一刻も速かに、各自の頭に存する米英思想を、その米英的尺度を除去せねばならぬ。これには我々は今までの所謂學問を未練なく捨て、白紙になつて出直すことである。今までの所謂學問をとつておいて、その中から米英的なものだけを捨て去らう抔いふ根性では、何時まで經つても、米英脫却は出來ない、況んや「米英的なものでも、我國にとつて無害有益なものは存しておいてよいではないか」など言つたら、永劫に米英の捕虜である。如何となれば大體その選擇の標準が

米英的なのだからだ。

日本的標準によつたときのみ他の長をとり短を捨てることが出來るのである。故に極めてむづかしいことだけれども百尺竿頭、思ひ切つて更に一歩を進めて、全くの白紙に立ちかへることが先決條件である。白紙のあとに何を書かうかなどあせる必要はない。白紙のまゝでさへあれば、そこに日本人は自ら浮び上つて來る。日本人にさへなり切れば其の價値標準は自ら定まつてゐる。これは決して日本人の能力を誇大に妄想しての話ではない。我々の大和民族がいかに優秀なものであるか、顧みれば顧るほど偉大さを增して來る體驗からの信仰である。大和民族の優秀な能力に就ては、他の雜誌で書いたこともあるから玆では繰りかへさないが、我々はもつと我が民族の能力を自覺し、自信を持ち、勇敢に他國依存と訣別すべきである。

むすび

滿洲にある我々日本人は、滿洲國民の中核として我々よりも米英依存の强かつた他民族を、大東亞戰爭の目標に、一筋に向けて行かなければならぬ責任を持つものである。而も滿洲は前述したやうに、米英其他が思想攪亂の適地としてねらつてゐる所である。日本內地に於ける人々よりも、更により日本人的であることが絕對に必要である。

その日本人になり切ることは、前述の如く白紙になることが先決條件であるが、いかにしたらその白紙にかへれるかは古來の名僧すら苦心した所で、到底我々の工夫し得る所ではないが、唯、生命をかけての戰場では誰でも日本人になり切れるといふ先輩達の體驗と、生命をかけて一事に精進する瞬間には、本來の面目躍如として開け來るといふ先覺の敎示とから、我々國民が日本人になり切るといふ途は案外、手近な所にあるのではないかといふ氣がする。これは言つて見れば餘りに平凡で、讀者は馬鹿にされたやうに思ふかも知れぬが結局、人々が自己の現在の職務に、これこそ眞劍に打ち込むことである。そこから日本人への還元が始まる。これはやらうと思へば誰にでも機會は與へられ、しかも國家はこの職務への精進を、他の理由からも要請して已まぬ所である。

この平凡な職務への精進が、皇軍と足並を揃へて物的のみならず、心的にも、米英を打倒する本當の力になるならば、一般人に對する修養會とか思想善導講座とかの行き方にも、相當の方向變換が企圖されてよいのではあるまいか。勿論これは日本人に對する指導に關してゞある。

文學士 增谷文雄著（最新刊）
新撰 佛教辭典
A6判五二八頁 價二・五〇送・〇八
國民常識としての佛敎辭典にして必携の寶典。
增谷文雄著 生命の意義 價一・五〇送・〇八
同著 菜根譚講義 價一・三〇送・一二
同著 佛敎思想物語 價一・二〇送・一二
佛敎哲學概論 岡部俊著 價一・七〇送・一五
宗敎思想史 W・Kライト著 價二・〇〇送・一五
老子眼藏 伊福部隆彥著 價二・五〇送・一〇
同文館
東京小石川水道橋
振替東京一三五番

大串兎代夫著
國家學研究 新刊
A5二五二頁上製 價二・八〇送料三六
佐藤通次著 皇道哲學 重版出來・價四・五〇送料四四
田中晃著 生哲學 重版出來・價三・二〇送料三六
山際靖著 美學 重版出來・價三・二〇送料三六
青木誠四郎著 青年心理學 文部省推薦・價三・二〇送三六
朝倉書店
東京神田一ツ橋二ノ五
振替東京八六七三番

中島悅次著
大東亞神話
天地開闢說を主とし、羽衣說話を從として東亞共榮圈內各地の神話を擧げ、共榮の根本理念を闡明した名著。
B六判三〇〇頁 クロース裝上製 價二・五〇 送一二

武藤貞一著
世界の將來
大好評を得、重版大增刷出來。
今後の世界はどう變るか。斯界の權威者武藤先生が熱筆を揮ひ、蘊蓄を披瀝し「この豫測が外れたら卽座に筆を折る」との自信滿々たる會心の著書。
B六判二八〇頁 價一・八〇 送一二

佐藤四朗著
兵隊と其の兄
藤井・中村陸軍中將、安積先生題字
笠原陸軍少將、宮田・杉田博士序文
諸將星名士激賞の書。戰線と銃後を結ぶ肉親愛の美しさ。躍進日本の原動力たる大和魂武士道の權化とも言ふべき、この兄弟の活躍の姿こそ、戰時下國民の龜鑑である。
B六判二〇〇頁 價一・五〇 送一二

ヒユー・エス・ジヨンソン著
朝野諄織田英共譯
地獄への參戰
—アメリカの錯覺—
ルーズヴエルト一派の對日戰謀略を曝露し、辛辣に批難攻擊し、就中對日戰の理據なきを叫ぶ。
B六判二二〇頁 價一・五〇 送一二

東京麴町富士見町
統正社
（御註文は最寄書店又は滿配會社へお願ひします）

特輯 國民勤勞奉公制度

勤勞奉公制の理念と内容

半田敏治

來年度から國民勤勞奉公制が國民一般の義務として施行せられるやうになり、既に之に關する要綱も發表されて居り、また今回の全聯に於ける總務長官の施政方針の中にも重要な第二期建設の事業として擧げられて居るが、極めて重要な事柄であり、又各機關各方面の理解と協力とがなければ到底成功が期待出來ないのであるから、玆に國民勤勞奉公制の根本理念及び内容について述べてみたい。

この勤奉制は既に現在の國兵法が制定される當時に總服役法といふ形で一度提案せられ、然も或る程度具體化して居つたのである。即ち兵役法と並行して兵役に服さない壯丁を色色な國家建設の諸事業に服役せしめる、そして更にその服役が終つた後に於ても、尙ほ引續き若干年間義務を負はせて必要に應じ召集して國家の爲に働かせるといふ樣な案が考へられて居つたのであるが、その當時の雰圍氣としては時期尙早であるといふことで片附けられて物にならなかつた。ところがそれから三、四年經つか經たないうちに今日急速にその實施を必要とするやうになり、來年から實施されることになつて近く法律も出るはずである。何が斯くの如く、急速に、從來は時期尙早として顧られなかつたこの制度を具體化するやうに促進したか。國家自體の條件としては殆ど變つてゐない。三、四年前時期尙早であつたものが今日之を實施するのが適當であるやうに、國家の凡ての狀態が變つて來て居るかといふとさういふ風にはなつて居らないと考へられる、それならば何がこれを急速に推進したか。一言にして言へば國内外の客觀的諸情勢の急激なる變化が然らしめたのである。即ち直接の動機としては從來北支から十分入つて居つた勞工が中々入らなくなつた。勞工の所要員數を充たすことが出來ない、一方に於ては大東亞戰爭の勃發に伴つて增産や色々な建設事業が必要とされる、それに伴つて相當大きな勞力が絶對に必要である、かういふ國際情勢の變化から來るところの客觀的諸情勢が、どうしても組織的に大規模に勞働力を供出して其要求を充たし得る制度を確立しなければならぬといふことになつて來たところに、急速に勤勞奉公制度の實現を必要とする原因を持つて居るのである。即ち直接の動機としては最も今日困難とされて居つた勞力問題を組織的に、根本的に解決しやうといふ意圖に發してゐることは間違ひないのであるが、然しながらそれは決して其の全部ではない。これは唯一つの動機に過ぎないのであつて、この制度を確立せんとする根本理念はもつと深く且高いところにあるわけである。それならばその根本理念は何處にあるか、それは滿洲建國の精神そのものから出て來るのである。

今日滿洲國の建國精神は識者の間には相當徹底して來ては居るが、端的に、建國の目標は何處にあるかと質問すると中中急に答が出來ないのが少くない。然し之は建國宣言を始め幾多の文獻に明示せられてゐる所であつて、何等の疑念を插む餘地もないのである。即ち滿洲國をして世界新秩序の模範たらしめ、大東亞共榮圈の典型たらしむるにあるのである。これが滿洲國建設の目標である。それならば世界秩序の模範として東亞共榮圈の典型としての滿洲國は如何なる内容を要求されるか、それは高度國防國家體制、この一語で盡されて居る。高度國防國家體制を整備しさへすればそれが直ちに大東亞共榮圈の典型になり、世界新秩序の模型になるのである。然らばその高度國防國家體制といふもの、内容は何うか、といふと、これは精神的と物質的との二つの方面から說明され得ると思ふ。

高度國防國家體制といふものゝ持つ内容についてまづ第一

に考へられることは、この國家の精神的内容即ち國を擧げて建國精神に統一され、そこに在住する凡ての民族が、その目的の下に協和團結して鐵のごとき固き結束を保つこと、これが精神的内容である。物質的内容としては、近代戰の特徴が科學技術の戰であり、また一大消耗戰であるが故に、この科學技術の戰を戰ひ抜き、消耗戰に於て最後の勝利を得るためには、どうしてもこれに應するだけの物的準備を整へ、それに相應しい内容を具備してゐなければならぬ。これには軍事上作戰上から來る要求もあれば、政治經濟上からする要求もあり産業交通といつた方面からの諸要求もあり、其他社會萬般の方面からする所の諸要求も考へられるのであつて、それら一切の諸要求を充足し得るやうな物的諸準備といふものを整へることが要求されるわけである。その一切を包含するところのものが物的内容として考へられるわけである。

この二つの方面の體制が完備されるところに、はじめて高度國防國家體制は出來上るのである。そこで從來滿洲國の立前としては、この精神的方面を主として擔任し來つて居るのが協和會、精神的物質的兩方面を如何に調節、按配して其の國家建設の目的を達成するかといふ所謂政策の問題を擔任するのがこれが政府の任務であり、之に基いて物的方面の諸問題の實際的解決に當る執行機關が即ち特殊會社なのである。

さういふ機構で以て今日まで進んで來て居るわけである。

建國十周年を迎へ、更めて四千三百萬の民衆のうちにどの程度に建國精神が滲透し徹底してゐるか、又その精神に基て國民的鍛鍊、訓練或は鍊成が行はれて居るかといふことを反省して見ると、これは年月の短い關係も無論あるが、蓋し思ひ半ばに過ぎるものがある。滿洲國の國土に在住する箇々の人間としての意識は持つてゐても、宏遠なる理想によつて打ち樹てられたこの國の建國精神を把握し、國民としての自覺を持つて居る民衆は極めて寥々たるものである。これを第一建設事業として徹底的に國民層に滲透せしめ國民を鍊成しなければならぬ、ところがこの面を擔任する協和會運動は人民に對し、義務として强制するといふ様な遣り方でないために、目下の程度に於ては周知の程度にしか發展し得ないでゐるがこれはどうしてももつと强制的にでも、鍛鍊し、訓練するといふことが刻下の急務となり來つてゐるのである。大東亞戰爭に直面して、しかもその戰爭が百年戰爭に移行しつゝある今日に於ては、最も急務中の急務として考へられる理であつて國民鍊成が一つの大きな課題になつて來て居る。第二期建設事業として當然登場して來るわけである。かうした要求が

自然に現はれて來る一面に於て、更に一つの要求が浮び上つて來る。それは先刻述べたやうな色々な物的諸建設事業を行つて、國家の諸要請を充足するための勞働力の組織化、勞働力の組織的供出が必要になつて來るわけである。それによつて諸建設事業が進められるのである。

この二つのものを、一石二鳥の形に於て成し遂げやうといふのが勤勞奉公制度である。

勤勞奉公制度の實施によつて、全國民は軍隊に入つて兵役義務に服するか、或は勤勞奉公隊に入つてその訓練を受けつつ國家の建設事業に從事するか、この兩者何れかを義務的にやらなければならぬことになり、これは滿洲國肇つて以來の劃期的な制度である。嫌でも應でも國民は三年間を通じて十二箇月間、一年の平均にすると四箇月間宛勤勞奉公の義務に服する、その間に建國精神を教へられ、協和會の何たるかも教へられる、勤勞そのものゝ根本の理念も叩き込まれる、しかも之れが尊い勤勞の汗を通して行はれる、かくして急速に國民の精神的教養が高まつて來る、これが軌道に乘れば〇〇萬人宛の人間が、年々歲々これによつて訓練せられて社會に送出されて行く、五年後からは諸建設事業に使用し得るところの勞力は少くも〇〇萬人と見積られる、この大量の勞力が組織的に供出される、しかもそれは精神的、肉體的に、また大規模に組織的に訓練を經た人間であるが故に、その能率は從來の苦力に比較して數倍する。從來の考へ方による勞働力に比較するならばこれは〇萬人にも、〇〇〇萬人にも匹適するかも知れない。さういふ指導鍊成の遣り方を國家的に打ち樹てゝ行かうといふのである。これが五年先、十年先或は三十年先となつて來ると國民の素質が漸次變つて來る。しかも勤勞奉公隊の立前が鄉土を基礎にして編成する様になつて居るから、大隊長、中隊長、小隊長等の幹部には鄉土の先輩がこれに當る。鄉土の青年はその下に統率されて建設事業に從事し、それを通じて訓練を受ける。元來勤勞奉公隊の本質は勤勞軍であるから、奉公隊に編入されて訓練を受けた青年の保持するその隊の秩序は、これが解散せられ鄉土に歸れば直ちに社會秩序になる、即ち社會の軍隊的な組織化が急速に行はれる。滿洲の社會は此の制度の實施を通じて非常な速度を以て變つて來る、新しい社會秩序が逐次完成されることになる。これは滿洲國建國の第二期の建設事業として最も重大な事業であると考へられる。即ち、滿洲事變以來今日までの滿洲の建國事業は主として政治・經濟・産業・交通・軍事等國家の上部構造の新秩序の建設即ち滿洲自體にとつて一つの政

治的革新であつた軍閥を打倒してそこへ新しい秩序の政治體系を整へ、それによつて實際政治の運用が行はれた。これが今日までの滿洲の建設の實際の道程である。言ひ換へれば頭の方だけは造り替へられたが、胴體以下は依然舊いものであつたといふのが今日の滿洲の實體であるといふことも出來る。卽ち滿洲に於ける政治的革新は出來た、だがそれに副ふやうな社會の根本的革新をやらない限りに於ては、滿洲國といふものはちぐはぐなものになつて來る。それでは本當の建國精神の十二分の發揮は期待が出來ない、その社會的な革新、社會的な立直しをやるのが協和會の一つの重大な使命である。舊い觀念、封建的な考へ方に基いて、或はその傳統の下に生きて居る社會を漸次革新して、そして新しい理念の下に行はれる政治活動と組織とにタイアップした社會の組織と情勢を作り上げて行かなければならぬ。これが主として協和會に課せられた使命で、協和會も多年努力し來つてゐる所である。それが今日勤勞奉公制度の實施によつて急速にその實効が擧げられて行くことになるわけである。政治的革新から社會の根本的革新に移行進展して始めて建國精神の意圖するごとき國家建設の目標に到達し得るのである。卽ちまづ理想國家の形體が整へられて、それに相應しい社會の組織が出來上る。此の兩者が相俟つて勞働力の供出にせよ、國民の鍊成組織にせよ、始めて全國的規模の下に、組織的に統制的に行はれ得る。其の訓練せられ、結集せられた勞働力を以て國家は色々な建設事業を行ふ。斯くて國家の精神的內容も物的內容も漸次昂揚され高度國防國家體制が完備され、建國目標が到達される。かういふ順序になるわけである。

斯くの如き滿洲國建國の目標を達成せんがための唯一の方法として勤勞奉公制が採用されたわけである。これによつて國民が鍊成され國家興隆の原動力を培ひ、凡ゆる建設事業が遂行され、滿洲國自體の精神的內容は卽ち敬神忠誠、協和團結の實踐により昂揚せられ、絢爛たる物質文明の華が勤勞增產の實踐によつて、そこにさつと咲き出でるのである。これは直ちに周圍の國々の羨望の的になり、大東亞共榮圈の典型になり、周圍の國々の者が習はふとする目標になつて來るのである。今日でも我が國は既にその域に足を踏込んでは居るが、未だ國民自體の明確なる意識に上つてゐない丈なのである。例へば滿洲國から北支・中支・南支等に派遣せられる滿系の人々は皆從來の考へ方から拔け切れず新事態の實際に確信をもち得ないで却つて傳統的な卑屈な考へ方を持つて居る、卽ち大體滿洲といふのは北支の植民地に過ぎない、文化も遙か

果に拘らず、次から次へと米國の戰力は補給されて居る。千九百四十四年暮には完全に物的威力により日本を壓倒するだけの武力を完備して、そして攻勢に轉ずるとルーズヴェルト大統領が呼號して居ることは隱れもない事實である。それからソヴェートロシアは何うか、獨逸軍によつて相當の打擊を受けては居るが、スターリン政權が崩壞して帝制ロシアと同じ過程を辿るものとは考へられない。結局獨逸軍はレニングラード・モスクワ・アストラハンの線を以て戰略的攻勢の終末點として恐らく停止すべく、それ以上に進出することは殆ど困難である。從つてそれより更に進出しやうとすればナポレオンの二の舞を演ぜねばならない。大體に於て獨逸の軍事的威力の及ぶ限界はさういつたことになるだらうと思ふ。さうなつて來るとソヴェートロシアが獨逸に對して、差し當り戰勢の挽回を斷念し、復仇を後日に期するといふ決心をしさへすれば、後方に下り、安全な地帶に入つて、そして銳意復舊と建設に、專念するならば、二十年、三十年後には元通りのものになる。極東に於ても假に日ソ戰爭が始つたとしても、交通機關、交通網等の革命的發展を見ない限り日本軍の威力もバイカル湖以西には餘り遠くは及ばない。深入りすれば矢張り同じやうに危險である。從つてウラル以東から概ねバイカル湖以西の地區、この間はソ聯邦にとつては獨逸軍の威力も日本軍の威力も及ばないといふ絕對安全な地域である。しかもソ聯にとつてスターリンの統制力、偉大な獨裁力は、この地域に於ける國家秩序を微動だもさせないだけの實力を未だに持つて居る。勿論、戰力特に軍事生產能力に於て獨逸に對して頽勢を挽回するだけの力は今日持つてゐないが、また日本に對しても積極的に攻勢をとるといふ意圖も力もないことは事實であるが、その地域に於ける國內治安を維持し、極力國家の再建を行ひつゝ虎視眈々として隙さへあらば直ちに獨逸に對しても日本に對しても、その背後を衝くぞといふ態勢を示す實力と地理的優勢とは依然持つて居るのである。若しスターリンとヒトラーとの完全な了解によつて獨ソの單獨講和が行はれるといふことになつて來ると、もはやロシアは戰爭遂行といふことに懸念することなくして專ら國力の充實、建設方面に全力を擧げて邁進することが出來る。帝制ロシアの革命後、あゝいふ慘澹たる狀態になり乍ら、そのロシアを二十年內外を以て今日のやうな強力な一軍國として造りあげたスターリン政權の力といふものは、今日同じくウラル山一帶の重工業資源と、クヅネツツ地帶の厖大な資源を結びつけ、これを組織化して行けば、三十年後には立派な戰前のロシアに

倍するやうな一大軍國が出現する。そしてそれが全力を擧げて支那に出て來る。かういふことになつて來ると大東亞共榮圈の建設は非常な窮境に陷らなければならぬことになつて來る。又大西洋方面に於ては米國と英國とが合體して北米大陸に作戰の本據を据ゑる。今まで全世界の海面に分散されて居た全艦隊を北米大陸に集結する。歐羅巴に於ける第二戰線の結成が殆ど不可能に近い今日の情勢に於て、この方面では守勢を取り、主力を太平洋に集結して、この方面に於て攻勢作戰を執り、日本を壓倒せんとするルーズヴエルトの企圖は略ぼ明かである。英米の殘存艦隊を合せれば二百萬噸近くの艦隊になつて來る。海上輸送力としては兩方合せて尙ほ二千五百萬トンはあると見られて居る。日本に數倍する海上輸送力を以て金と物とに飽かして生産力擴充を次から次へと行つて日本を壓倒しやうとかゝつてゐる。彼等の狙ふところは濠洲を據點として固め、此處から大東亞共榮圈の建設を叩き潰して行かうとするのだ。それと相呼應する爲に重慶政權の存在は彼等にとつて絶對に必要だ。重慶政權は大東亞共榮圈の獅子身中の蟲として殘存して居る、米國が攻勢を取つて來る、ソヴエートが攻勢を取つて來た場合、內からこれに呼應するのが絶對に必要だ。內外呼應して日本の大東亞共榮圈の建設を片つ端から打ち壞して行くといふことになれば、これは世界新秩序の建設にとつても、大東亞共榮圈の建設にとつても重大事となつて來る。さういふ可能性とでも言ふべきものが未だ色々今日殘つて居る。しかも日本としては、今まで狹い地域に兵力を結集して敵の虛を衝き打擊を與へ得たところの有利な作戰的地位が、急速な戰果の擴大に伴つて兵力の分散を餘儀なくされた。今度は向ふが日本の兵力の分散の虛を衝いて頽勢の挽回を圖らうとする。勿論、皇軍の護は微動だもするものでなく、常に機先を制して敵を壓倒してゐるから、何等心配はいらない、かういふ大勢になつて來ると段々困難の度が加はることは一應、覺悟しなければならない。從つて一日も早く大東亞共榮圈といふ堅りした基盤を作りあげて置かなければならぬ。それには全支那を眞の友として摑んで行かない限りは、大東亞共榮圈の建設は出來ない。その支那を大東亞共榮圈建設のよき協力者として摑むには、滿洲自體に於てその範を示し、成る程滿洲經營に關する日本の誠意も明らかになつた。滿洲のやうな國になるのならば吾々も幸福だ。日本と提携し協力することが個人的にも、國家的にも幸福だ。かういふことを支那人が如實に感ずる樣な事實を示さなければならぬ。それでなければ隨いて來ない。隨いて來なければ大東亞戰爭の完遂は相當困難になる。それを隨いて來させるやうな滿洲に築き上げる力、この力を勤勞奉公制度に期待しやうといふのが根本の理念であり、根本の精神である。さういふ思想、精神の下に行はれるのであるから滿洲國の第二期建設事業としては最も重要な意義を持つものである。從つて勤勞奉公制といふものは、滿洲建國といふものに對して龍を描いて瞳を入れたやうなものだ。こゝにこの制度の非常な重大な意義があるのである。

また國民錬成或は國民組織化、一言にして言へば協和會運動といふ面から見るならば、會運動は漸次下部に滲透して行きつゝあるとは言ふものゝ、遺憾ながらその實情は未だ周知の程度にしか至つてゐない。これを全國的に組織的な方法によつて大いに推進しやうといふのが勤勞奉公制を義務制にした一の理由である。これによつてはじめて眞の國民即ち協和會の中堅會員たるべき人材が年々計畫的に、組織的に養成されて行く。協和運動はこれに續いて急速に普遍化し民衆の間に滲透して行く。それと同時にそれを基礎として新しい社會秩序がそこに建設される。その勞働力、從來と比較にならないやうな能率を持つた建設力が年々計畫的に供出されて、次から次へと重要な事業が建設されて行く。即ち滿洲の建國はこの制度を採用し、この制度を實施することによつてはじめて滿洲建國に畫龍點睛を爲し得る。さういふ理念を以てこの勤勞奉公制度に臨んで居るわけである。

次に勤勞奉公制度の內容についてこれを述べれば、第一は義務である。數へ年二十一歲になつた男子で兵役に服さないものは凡てこの義務に服せしめることになつて居る。そのうちに免除されるのもあり、猶餘されるものも多少ある。不具癈疾者、精神に異常のあるもの、身體が弱く勤勞に堪へないものは當然免除される。家庭の事情で假令三月でも四月でも本人が家庭を離れたのでは、家族が路頭に迷ふといつた實情にあるものもこれから免除することになつて居る。

條件附で免除するものは例へば外國に行つて居るとか、現に重要な職務に服して居つて手が離せない、或は學校に行つて居る、といふものは其事由が止む迄免除されるわけである。それ以外のものは凡てこの勤勞奉公の義務に服せしめる。

それなら何ういふ風にして義務者を選定するかと言ふと、來年度からは國兵法に基く壯丁檢査の際に、同じ檢査場內に勤勞奉公關係の係員が出張して壯丁檢査によつて國兵に取られないもので、しかも體格其他の諸條件が備はり、勤勞奉公に服せしめ得るものを銓衡して、そこで採否を決めて行くと

いふ様にし度いと考へて居る。即ち壯丁檢査場に行くと身長を計り體重を量り、胸圍や眼を見、また色々な身元を調べる、最後に徴兵官が居つて選兵をする。斯くて最後的に合格者の名簿を作るといふ様になつて居るが、勤勞奉公係の係員はその次に位置して勤勞奉公隊員の徴集事務を執行しつゝ義務者の採否を決定して行く。お前は適格者だ、お前は免除してやる、お前は當分免除すると裁決するといつたやうになるだらうと思ふ。兵役義務の決定と相關聯して行はれて行くわけである。

義務者の數は現在何の位あるか、と言ふと大體本年度の國兵檢査に於ける壯丁數は約〇〇〇萬である。これはもつと居るのではないかと思はれるが、現在の民籍整備の程度では大體〇〇〇萬で、日本あたりの例によれば總人口の〇分の〇位が大體その壯丁數となつて居るから、〇〇萬内外居なければならないと推定されるが〇〇〇萬位しか受檢して居ない。このうちで國兵に取られるものが、〇萬乃至〇萬といつたところ、あとの〇〇〇萬内外が國民勤勞奉公の義務者になる。そのうちから更に免除者を控除すると大體〇〇萬といふ數字になる。民籍が整備されるに從つて、また人口の增加するに從つてこの數字は增すとも減ることはまづないと考へられる。〇〇萬が〇〇〇萬に、〇〇〇萬が〇〇萬になることは當然あり得ること、期待される。差し當つては大體義務者の數を〇〇萬と考へて居る。

それからこの義務者は何ういふ形で勤勞奉公をするか、その内容について述べると、數へ年二十一歳から二十二歳、二十三歳この三年間義務を負ふ。その間を通じて十二箇月以内勤勞奉公の義務に服する。戰時または事變の場合には義務年限、服從期間も各々一箇年以内これを延長することが出來る。即ち戰時、事變の場合には二十四歳になり、十二箇月以内を二十四箇月以内ということにすることを得るわけである。それならば平時その十二箇月の服役期間を何ういふ風に服役するかといふことは、如何なる建設事業を何れの土地に於て何ういふ方法によつてやるかによつて決るわけである。當分の間は義務者は一箇年概ね四箇月宛これに服役するといふ最も簡單な形で出發することになるだらう。それが或は五箇月になり、或は三箇月になるといふこともあり得るかと思ふが、大體四箇月内外を一年間に服役する。そして三年かゝつて義務を果す、かういふことになつて居る。段々軌道に乘つて運用方法も整つて來る。と、もつと複雜な運用が行はれることになると思ふ。例へば國防道路の建設に當らせてセメントの

工事迄この部隊にやらせるといふ様なことになつて來ると、セメントを練りセメントを凝固せしめるところの技術といふものは相當にかゝる。そこで漸く熟練した隊員をまた新しいものと替へてゐては仕事の能率があがらないから、かういふ場合には十二箇月ぶつ續けて、服役させるといふ様な事も起らないとは限らない。また石炭の採掘にしても、勤勞奉公隊員は當分の間成るべくさういふ仕事には從事せしめない方針であるが、戰時又は國家の緊急要請によりその必要が起つた場合には一部その部隊をこれに向けなければならぬことも有り得ると思はれる。此場合なども矢張り十二箇月間連續服せしめた方が仕事の能率の上からも非常によいことになる。斯かる場合には一年間で義務を果してしまふといふことになる譯である。併し實施の當初に於ては當分、一年平均四箇月宛位といふことで行く心算りである。民間に於ける運動としての勤勞奉仕或は農村援助といふ様な、義務制以外の團體活動との關係も適當に調節、按配を考慮しなければならぬと考へて居る。

次に勤勞奉公隊の服する事業即ち何ういふ事業が勤勞奉公隊の隊活動の對象となるかと云ふと、國家的な諸建設事業が第一に考へられるわけである。次は鄉土的なもの、公共的なもの、それから個人的なものでも、その事業の性質によつてはこれもその對象となり得るわけである。勤勞奉公制度の本質から言へば國家的な諸建設事業に先づ振向けられることは無論當然のことであるが、併しながら今日の段階に於ける滿洲國民一般の心理なり或は國民性なり或は現實の各鄉土の實情なりから判斷すれば、自分等の子弟が勤勞奉公隊の義務者として服役する、そしてそれが何等自分の鄉土の利益なり、建設なりに目に見える様仕事をやらないで、どこか他處へ連れて行かれて奉仕させられた、かういふことでは勤勞奉公制といふものに對する國民の關心がなくなり、遂には之を忌避するといふ様なことにならぬとも限らない。それ故當分の中は寧ろ一般の關心を高め、勤勞奉公の趣旨の理解、徹底に重きを置いて、成るべく鄉土の近くに於て鄉土の建設事業に從事せしめて、目の前に其の效果を見せてやることが、有利だと考へられる、自然相當の部隊が鄉土的な諸建設事業に振向けられることにならうと思ふ。

然し乍ら原則としては勤勞奉公隊は先づ次の様な事業に振向けられるのが當然である。例へば國防建設諸事業であるとか、即ち軍の直轄事業或は政府の直轄事業、滿鐵の諸事業の中で、國防的に重大な意義を持つて居る事業、それから鐵道

道路等の交通網の建設整備といつた事業が次に考へられる。また滿洲に於ては治水・利水・植林といつた主として水によるところの災害を除去して國利民福を增進する樣な諸事業にも當然振り向けられる。それから土地の開發、重工業資源の開發農産物の增產等にも向けられると思ふ。また災害が起つた場合復舊援護のためにも向けられる、その他民生部大臣が必要と認めた事業に使ひ得るやうになつて居る。

次は隊の編成であるが、此制度が完成した曉には年に〇〇萬人宛の適格者が徵集せられる結果每年平均〇〇萬人といふ多數の青年が服役することになる。これを計畫的に然も輕快に運用して行かうとすればどうしても軍隊的な組織をとらざるを得ない。從て勤勞奉公隊は勢ひ勤勞軍或は建設軍としての本質を持たざるを得ない樣になつて來るわけである。軍隊的な組織になると統帥權が確立し、上から下への命令系統が確然と立つてゐなければならぬ。國家の適齡者たる全青年を動員して編成せられた勤勞奉公隊であるから、しかもそれは上から下迄、血の通つた固き團結であることが要求されるので、上には國務總理大臣を名譽總裁、協和會の中央本部長と民生部大臣を名譽副總裁として戴き、その下に總司令を置いて全國の勤勞奉公隊を指揮統率せしめる。これは中央にあつて勤勞奉公制を運營して行く行政官廳の長、卽ち國民勤勞奉公局長を以て之に當てる豫定である。

各省に於ては省長、次長をその省の勤勞奉公隊の司令、副司令に又市縣旗に於てはその市縣旗の市縣旗長、副市縣長または旗の參事官を夫々當該市縣旗の司令、副司令に任命されるはずである。

隊の編成に方りては、出來るだけ市縣旗の行政區劃を尊重して之に從つて區分するといふ立前になつて居る。これは鄕土的な一切の關係や團結力なり、精神的融和なりを共儘隊の中に移し植ゑて、隊をして情愛の通つた鞏固なる組織たらしめ、それと同時に隊の精神なり、隊の秩序なりをまた鄕土に移し植ゑて、新なる社會秩序を構成するといふ美點があるのである。隊の編成は大隊・中隊・小隊・分隊に區分し、年次別每に隊を編成することになつてゐる。完成した曉に於て市縣旗全體の隊編成を行ふ必要がある場合には、總隊を設けて先任大隊長を以て編隊長に任ずることになつて居る。

これらの隊の中の最も基本的な單位を中隊として、これが精神的團結の中核體となり、或は隊編成の單位ともなり、隊活動の單位ともなり、一切の單位を中隊に置き、大きなところは大隊を編成してその上に更に總隊を設けて統轄して行く。

勤員は何ういふ風に行はれるか、これは如何なる事業が何處にあつて、何時頃どの位の部隊を必要とするか、それが決つて動員の配置が決つて來る。この配置を決めるために事業體との交涉がまづ必要である。その主なるものは軍部・交通部・興農部・滿鐵或は重工業方面の特殊會社といつたものが考へられる。成るべく早い時期にこの事業體との折衝をしてどこそこに何ういふだれだけの事業がある。それにはどれだけの經費と人員が必要であるといふことが判るから、こちらの方でも果してそれらの事業が奉公隊として引請けるのに適當であるかといふことを檢討して決定する。勤勞奉公隊の運用は大體自給自足を立前にして居る。自分で稼いで自分で賄つて、そして建設をやつて行くといふのが立前である。それ故餘り著しい赤字になることは困る。國家がこの事業は勤勞奉公隊にどうしてもやらせなければならぬ、と考へた場合には其赤字は國家が補塡してでもやらせるといふことになるだらう。さうでない限りは勤勞奉公隊自體で收支相償ふ樣にやつて行かなければならぬ。だから一應どれ位の經費を要するか、それが採算はとれるかどうかを檢討して、引請くべきかどうかを決定しなければならぬ。事業が決まつたなら次はそれにはどこの隊を配置するといふことを決める順序になる。その

文體雜記

小林英夫著

B6判四四〇頁　定價　三・〇〇　送料　・二〇

言語學界の新銳たる著者が、新聞、雜誌に發表せる論文、書評、隨筆等何れも言語の問題を扱ひ、特に作家の文體の研究及その方法と實踐は、注目すべきもの。味讀を切望する。

福澤諭吉

川邊眞藏著

B6判三三四頁　定價　一・八〇　送料　・二〇

國權擴張論者、東洋政略論者、海軍擴張論者としての思想的事績を檢討し、現在の日本の思想的關連を解明したもの。彼の偉大なる人格、氣魄、巨大な足蹟等を知るに絕好の良書。

國文學評傳の書

各冊B6判・約三〇〇頁・以下續刊

清少納言　關みさを著　二・〇〇　・一六

河村秀根　阿部秋生著　二・〇〇　・一六

香川景樹　實方　清著　二・〇〇　・一六

小林一茶　伊藤正雄著　二・五〇　・一六

顯照・寂蓮　久曾神昇著　二・五〇　・一六

三省堂　東京神保町　振替東京五五五一三

事業體との交渉は主として中央が當り協力すべき事業の決定及之に對する國民勤勞奉公隊の配分は民生部大臣が行ふのである。然し事業の種類にあつてはこれを省でやらなければならぬ場合もあるので、斯様な場合には民生部大臣は前項の權限の一部を省長又は新京特別市長に委任することが出來る様になつて居る。又市縣旗でやらなければならぬ場合もあるだらうと考へられる。卽ち將來全國の市縣旗に亙り年々〇〇萬人の青年が勤員される様になつた場合、中央で契約する事業體だけでこれを消化し得るかは疑問である。また事業によつてはこれを省に委し或は市縣旗に委せる方がより適切に運用されるといふ事業も澤山ある。例へば濱江省の如きは十年計畫で省の繼續事業として防水開發工事をやつて居る。これには相當の勞働力を必要とする。その建設資金も省自體で地方債を募集して準備して居る。さういふ場合には立派な奉公隊を配分する事業たり得る。こんな場合は省に委せる方が最も有利である。また各市縣旗にも治水事業・植林事業・開拓事業といつた市縣旗そのものゝ事業もある。態々他所から勞働者を入れてやらせ、自分の方の隊員を外へ出すといつたことは最も拙いやり方なので、さういふところは市縣旗自體がその自己の市縣旗の勤勞奉公隊員を使つて事業の經營をやるといふこともあり得てよいわけで、さういつたことによつてこの厖大な奉公隊がうまく消化されて行く。

しかし當初の間これが軌道に乘る迄は大體中央に於て事業體と契約して行くことになるが、それと同時に考へなければならぬ事は、餘り廣い範圍にこれを動かさないやうにすることである。例へば南滿の隊員を北滿に持つて行くとか、熱何の奥へ持つて行くとかいふやり方はやらない方針で、成るべくその省から動員された奉公隊員は、出來る丈けその省の範圍内でこれを消化して行く筈である。此制度が完成して全部勤員することになれば日支事變前の〇〇の常備軍の〇倍近くの大きな勢力になつて來る。それを各地に輸送することになると交通上相當の輻湊を來し、交通障礙も豫想される。それがために軍事輸送や、一般の交通關係を著しく阻害するやうなことになつて來るから、大體動かさない立前で行く豫定である。しかし時局によつてはこれを遠くへ持つて行かなければならぬ場合も起り得ることは無論覺悟して居る。

次は隊員の待遇である。奉公隊員の衣食住は勿論醫療等も凡て隊の負擔で支辨し、なほその外に若干の手當を支給す、又召集中死亡したものに對しては奉公隊の方で弔慰金を出す、そのうちの食糧は一日平均一キロと見て物動關係の豫算に組

んで居る。それは普通一般勞働者の食糧としては十分豐富な食量である。それから衣服、これは服裝の統一が精神的統一に及ぼす影響の極めて重大であることを考慮して制式を決定する計畫である。唯今日に於ては服地も不足して居るし、一切の服裝を全部整へるといふことは到底不可能である。大體上つ張り程度のものに止める。この上つ張り程度の上衣とズボンを各一著、半ブボン程度の猿又二著、袖なしのシヤツ二枚、これ丈けのものを三年間を通じて支給する。そしてそれを三年間著てまだ著れるやうであつたならば本人に支給する、さうすれば二年でも三年でも大切に使つて保存に努めるやうにするだらう。大體働く時は暖かい時が多いので成るべく裸體で働かせる。それは保健上から言つてもよい。

次に保健衞生關係がある。藥品・衞生材料等を蒐集獲得するのに相當の困難を伴ふ。大體一箇大隊の衞生機關としては醫官一、衞生長、衞生員二名を以て構成することにして居る。又各中隊には衞生員を大體二名乃至一名を配屬する。これは隊員の中から選拔して、事前に訓練を施し置き隊が動員された時に配屬する。來年度本動員約〇萬人としても所要衞生員は〇〇名に上る。將來、完全に動員されることになると數〇名になり、それを年々養成して行かなければならぬのであるから仲々容易ではないのであるが、保健衞生上極めて大切な事柄なので漸次、施設も陣容も整へて養成訓練に遺憾のない様にし度いと思つてゐる。

當分の間は治安部病院や市縣旗病院等の協力を得て不敢取必要な人員丈けを養成訓練する豫定である。斯くの如くにして年々看護要員を養成して行くと、急速に民間に於ける衞生思想の普及が組織的に行はれる結果、滿洲の地方衞生狀態は急速によくなつて來る。凡ての點に於てこの制度の實施は、滿洲の社會の改革に大きな動きをなすことになつて來ると思ふのである。

今述べたやうに、一面から見ると勤勞奉公制の實施は全國的規模の下に國民を鍊成するのであるから、眞の國民卽ち協和會員の養成訓練は、勤勞奉公隊を通じて急速に行はれることになるわけである。

從つてこの制度の實施は新しい重大責務を協和會に負荷したことになるのであつて、此意味から言つても、國民勤勞奉公隊が鄕土的な編成をとることに重大な意義があるわけである。鄕土出身の小隊長なり中隊長なりが、その鄕土の隊員を把握して行き、隊員の一人々々を隊長が責任を以て指導し、監督して行くことが奉公隊の團結を情愛の通つた鞏固なものた

らしめ如何なる誘惑や攪亂工作に對しても最も有力に對抗し得る力となり得るわけである。さういふ關係であるから精神的訓練なり、或は思想的啓蒙運動なりを常にやる必要があり、嚴正な隊の規律訓練といふものがどうしても必要である。從てその統制に違反したものに對しては、軍隊が特別の懲罰令により峻嚴に取締つて居ると同じやうに、特別の懲罰令を規定する必要がある。普通の青年であれば犯罪を構成しないものが勤勞奉公隊員であるが故に、重大な犯罪になるといふことがあり得る。命令に反抗した、或は上官隊長を侮辱した、これは普通の社會に於ては一つの喧嘩位の制裁で濟むが、隊に於ては重きに處分しなければならぬといふことになる。しかしこれによつて威嚇して行ふといふのでは決してなくて、これは傳家の寶刀として成るべく拔かないで濟むなら拔かないで濟ます樣に指導する。これこの制度の一大目的が國民錬成にあり、その精神を指導强化して行くところに本旨があるからである。しかし萬一の場合に備へるために是非傳家の寶刀は持つて居る必要がある。それでこれを制定するのである。

義務を完了したものについては、色々な國家的社會的優遇の方法を講ずる心算でゐる。例へば官公吏とか、協和會の會務職員とかになる者に對しては、出來る丈け考慮するとか、或は他の特殊會社等に就職する者にはその義務を遂行せぬものに對して常に優先的に取扱つてやるとか、或はまた褒賞規定を設けて善行したもの、勤勉なもの、奇篤な行爲のあつたものに對してはどん〳〵これを積極的に表彰するといつたことも、懲罰方法と同時に考へて居る。

然も此等表彰の結果は凡て服裝の上にも表はす樣にして或は善行章を附ける、皆勤章を附ける、階級を表すところの表識もするといふ風に考へて居る。そしてその服裝が若いものの憧れとなり、その服裝をすることが國民の誇りであるといふ雰圍氣にまで持つて行きたいといふ希望を持つて居る。最もこの優遇方法も結局凡ての青年が服役義務を果すことになるのであるから、實は優先權はあつてもなくつても同じやうなものになるかも知れないが、特別表彰に關しては何等かの具體的な表彰方法を考へなければならぬと思つて居る。今のところは義務に服さない青年が相當數あり得るわけだから、當分はさういつたことで進めて行きたいと思ふ。相當の効果はあるわけである。また勤勞奉公隊員は四六時中招集されてゐるものではなく、一定の時期に動員するのであるが、假令隊が動員されてゐない場合にも勤勞奉公に對する義務は常住不斷にあるわけであるから、各人の心構へは其處になければならぬのである。從つて服裝の如き動員時以外に於ても名譽の象徴として著用しても差支ないことにし度いと考へてゐる。勤勞奉公制度を育成し實施して行く爲に必要なる行政的事務を執行する機關を設けなければならぬ。中央に於ては民生部の外局として、假稱であるが國民勤勞奉公局といふ官廳が設けられる、これが所屬についても色々議論があるのだが、又更に一層根本的な問題としては政府に於てこれを行ふか、協和會が行ふかといふ問題もあり得るのである。勤勞奉公制度の實施が國民の錬成といふことを第一義にして居るのであるから、本來は協和會がやるのが至當ではないかといふことは一應理論的には正しいと言へるのである。然しながら一面に於てこれは國民に新たな義務を課して、それを權力を背景にして施行して行かう、かういつた面があるのと、この制度を民衆の間に普及徹底せしめるためには、國家の現段階に於ては相當の困難や障礙も豫想されるので、之が軌道に乘るまでは政府に於てやつた方が適當ではないか、然し乍ら政府丈けの力でも出來るものではない、兩者が緊密に連絡協力してやらなければならぬ。そこで政府に特別の機構を設けて一元的に强力にこれが實施を圖ると共に、協和會はこれに對して協力するといふことに決められたわけである。之が或る年限が經つて、三年、五年の後に軌道に乘つたなら、その曉には法令による權力行使といふ樣な面は之を政府に殘して、他の大部分即ち動員・編成・運用・訓練といふ面は大體に於てこれを協和會に移讓する樣なことになるのではないかと考へられる。政府、協和會兩者の首腦部間の了解も大體さうなつてゐると聞いてゐる。そこで政府の機構として一應やつて行くことになるが、次ぎにはこれを總務廳の外局とするか、民生部の外局とするかといふ樣な問題も當然起り得るわけである。本制度が國全體、國民全體に對して、また第二期建設事業のうちでも最も重要な地位を占めてゐるといふ樣な點からして、總務廳の外局とするといふことは當然考へられ得ることと思ふ。

抑も、勤勞奉公制が急速に實施される樣になつた直接の動機が、始めに述べたやうに勞力の供出と重要な關係を持つて居るので、この勞務の所管をしてゐる民生部に持つて行つて、國の勞務問題と考慮勘案し乍ら、勤勞奉公隊の運用を考へて行くことが、現狀に於ては最もよいのではないかといふことで、結局民生部の外局と決つたわけである。實際問題としては、此の採られた機構が最も適當であらうと思ふ。

省に於ては勞務關係國兵民籍等の關係科を整理統合して、勤勞奉公制を取扱ふ機能を採り入れた新しい科が設けられ

るか、從來の科の中に股程度のものを設けるか、その何れか二つの方法によつて本制度實施に伴ふ、新しい情勢に卽應して行かうといふことになつて居る。

市縣旗に於ては、大體股程度のものを科の中に設けて新しい制度を實施して行く機關に充てやうといふ事になつて居る大きな縣に於ては科が設けられるところがあるかも知れないこれは極めて少ないと思ふ。唯奉天市は勞務關係から言つても極めて重要な地位を占めて居るので科よりも大きな機關を必要とするのではないかと考へられ、之により從來の勞務と勤勞奉公隊關係の仕事を處理して行かうといふわけである。

次は經費だが、勤勞奉公制實施に伴ふ色々な所管設備費、人件費等は勿論一般會計として國家が負擔し新設育成に當る。事業に要する經費、これは大體勤勞奉公隊に協力を求める事業體で負擔するといふことになつて居る。これがために公別會計を設置してその運用に當つて行く豫定である。大體今までざつと當つて見たところでは所管設備費を含めて經常費は中央地方を通じて約一千萬圓位必要ではないかと考へられ、それから特別會計としては來年度、再來年度位迄は赤字が出る様であるが、第三年度位から漸次黑字になり、五年度位になると極めて大ざつぱな計算ではあるが、大體七百萬圓である。そして其動員地域を本動員地域と準動員地域とに分けて、實施に都合の良い様に致したのである。

本動員地域といふのは、大體化から言へば濱江省・吉林省・四平省・奉天省・安東省・錦州省・それに新京特別市、卽ち六省、一特別市で人口の最も稠密なところを本動員地區として、まづこれらの地區から實施する、それ以外の國境省であるとか、國境の背後省であるとかいふものを準動員地域として各市縣旗毎に省或は市縣旗の事業に動員して訓練をし、第二年度からは地域も逐次本動員地域に入れるやうして行く筈である。本動員地域では本體〇〇〇〇人位の適格者がゐる。ところが農安、扶餘といつたペストの發生地域として指定される地域を除くと約〇〇〇〇人位になる。そのうちで更に壯丁檢査が終つてから行方不明になるとか、病氣とかその他の事故のために出ることの出來ないものを大體五分と見積つて〇萬人といふ數字を決定した。

本動員と準動員とはどこが違ふかと言ふと、本動員は國が奉公隊員を動員して事業を行ふ。從て隊員の食糧・被服・裝具その他國で面倒を見てやる。準動員に於ては一部國が見てやる場合もあり得るが、大體に於て省或は市縣旗が自給自足でやつて行くのを立前として居る。從つて服裝なども揃はないので、その黑字になる様である。その黑字によつて隊員の服裝を整備したり、工具を整備したり、或は衞生設備を漸次完備して行つたり、移轉宿舍を施設したり、要するに勤勞奉公隊育成に必要な諸費用は皆これから支出するといふ計畫である。

それならば來年度は何うするかといふことだが、前述したやうに勤勞奉公隊の義務者が大體〇〇萬人ゐるわけである。現在では未だそれを錬成して行くところの設備も出來てゐないし、指導する人間も養成されてゐない。かういふ關係で來年度は全部といふ譯には到底行かないので、大體〇〇萬人といふことに一應豫定してゐる。此の數はどこから出て來るかと言ふと壯丁檢査の際體格の甲乙の者を選定したわけである。

しかしこの〇〇萬人をこなして行くのに僅か一年位の準備と國家の現狀では中々困難である。それに必要な幹部を養成し、職員も整備しなければならぬが、中々豫定通り著々進み兼ねる點も少くない。しかも重要な事業であるし、第一步の踏出しで躓くといふと後に影響するところが大であるから出來る丈け大事をとつて進まなければならぬが、又一方一朝有事の際のことを考へると其數は可能な範圍に於て出來るだけ多い方が好いといふことにもなるので、夫等を考慮勘案して〇〇萬（本動員〇萬、準動員〇萬）といふ數を一應決定したのかもしれない。然し其他に於ては大體本動員地域のやり方と大差はないのであるから、準動員でも無論、服役期間は之を義務を果したものと認める。

將來動員數を如何に決定して行くかは、來年度の實績に鑑み、國內外の情勢を考へてきめ度いと思つてゐるが、單に動員可能數丈けを考へて見れば十年度は本動員、準動員地區合せて〇〇萬人、十一年度はこれに〇〇萬人位が加はつて來るから〇〇〇萬人、十二年度は新に〇〇萬人加はるから、〇〇〇萬人位になる。十三年度になると十年度の〇〇萬人が義務終了になつて十三年度の適格者が新に〇〇萬が加はるから〇〇〇萬となり、十四年度になると十一年度の〇〇萬人を解除して〇〇萬人を加へ〇〇萬になる。それから以降は毎年〇〇萬人宛加はるから〇〇萬人の勞働力がづうつと持續されて行くことになる。可能數としてはかういふ數字を考へて居る。始めから〇〇萬人の隊員は確保出來ないので、五箇年計畫位で進まなければ仲々容易には軌道に乘せることは出來ないと考へられる。さういふやうになるべく速かに一般體制を整備しなければならぬ現實的要求と、一步一步健實な步みを進めて行き度いといふ希望とがあるので、それ等を睨合せながら實績を十分檢討しつゝこれを完備して參り度いと考へて居る。

勤勞奉公制度の國民的基礎

大森峯雄

一、滿洲青年の東亞的任務

一、國兵制度と勤奉制度

抑々勤勞奉公制度は康德六年我國の國兵制度が審議された當時、人民總服役制度の內容として兵役制度と公役制度との二本建に於て研究審議されたと言ふ因緣を有つてゐる。

從つて、公役制度は人民總服役主義の精神に基いて兵役に服せざる青年は、他の公共の義務に服せしむると言ふ趣旨に出たものにして、それが、當時、十數回に亙る審議を經ても、關係者の意見の一致を見るに至らず、遂に、時期尙早と言ふことによつて、兵役制度とは一應切離されて實現を見るに至らなかつたものである。

爾來今日迄約二年間、本問題は一應の素案の決定を見ながらも放置せられてゐたものを、其後支那事變の長期化、就中大東亞戰の勃發に伴ふ國際情勢の急變に遭ひ經濟的、政治的、國防的な國家要請に基き、再び重大なる戰時體制確立の任務を荷つて、重大國策として策定を見るに至つたものである。曾つての公役制度は名も新に勤勞奉公制となつて現はれたのである。

二、建國十周年と第二建國

公役制度が勤奉制度としての再出發の理由には我國の勞働事情の轉換が重大なる影響を與へてゐることを看過してはならぬと言はれてゐる。

我國勞務政策は國防國家體制の確立のための國防施設竝産業建設の諸事業が急テンポを以て勞働需要の激增を要請して來た反面、玆、一、兩年來、從來に於ける、勞働力の對支依存主義を脫却して自給自足の體制確立へ轉換せざるを得ない狀況となり、それに應じて諸施策の大轉換を餘儀なくせられるに至つた。

從つて本制度がかゝる勞働力の自給自足體制確立の重大方策として多大の關心が拂はれてゐることも亦、不得已ことであらう。

だが本制度の根本精神をして「滿洲國人民ヲ大東亞共榮圈建設ノ戰士トシテ適當ナル國民ニ鍊成スルト共ニ共ノ樞軸的據點タル國家ニ相應スル勞務動員體制ヲ確立シテ國家ノ必要トスル諸建設事業ヲ完行スルニアリ」とするならば、右の如き理由を以て滿足は出來ない。

玆に、東亞建設戰、就中國防建設に於ける我國青年の果すべき役割が明確に認識されねばならぬ。

滿洲建國十周年と言ふ慶祝の年は、奇しくも我國建國史に重大なる轉換を齎らさんとしてゐる。我國に於ける諸建設は出發點に於て戰火の裡に施策せられ、進行途上に於て支那事變と世界戰爭とに影響されつゝ、民生建設と國防建設との跛行に腦みつゝ、王道主義的道義國家の創建と言ふ激刺たる理想の下に近代營利主義體制是正の先驅として、產みの親たる日本の國內革新運動に對する原動力でさへあつた躍進過程は支那事變の勃發を界として、建國諸施策の重點を愈々國防建設に集中せざるを得ない事情の下に置かれて來たし、その事情は愈々熾烈化する情勢下にある。

世界戰爭は愈々長期戰化の傾向を顯著にとりつゝあり、近代戰爭としての特徵、卽ち「戰ひつゝ、一面建設」の樣相を現はして來た。

玆に更めて國防建設と民生建設との一致が考へられねばならなくなつた。何故ならば今次の世界戰爭に勝利するものは「戰ひつゝより大なる次期戰鬪力を培養」し得るものにあり國家の戰ひは箇々人の戰ひでもあり、國防力の源泉は國民箇々の「生活の仕方」に在る。之れを高度國防國家の建設と謂ふ。

我滿洲國は東亞共榮圈確立の國防基地として、日本を指導者とする東亞共同防衞の不可分關係に立ち、王道主義國家の建設は、先づ國防國家建設の試煉を經、國防建設を遂行しつつ若き國家としての民生建設を完遂する用意を持たねばならなくなつた。

右の如き高度國防國家の建設を決意せんとする所に、第二建國の偉大なる轉換の意義を探ぐることが出來るのである。

三、東亞建設戰と我國青年の任務

國兵の實施は日滿共同防衞の大義に基く人的國防建設の第

一著手であり、勤労奉公制の實施はその中核をなすものである。東亞の國防建設の觀點よりすれば、勤労奉公制は、實に國兵制の上を往くものですらある。卽ち「戰ふ東亞」の國防軍の中核は日本皇軍であり、それを以て指導者日本に課せられた責務、日本青年に課せられた任務なりとすれば、我國民に課せられた責務は、北邊の鎭護として親邦日本が安じて戰ひ得る戰鬪力の培養に邁進する建設軍でなければならぬ。其處に我國青年に課せられた東亞的任務が發見せらるるのである。日本の人的資源には限りがある。從つて東亞の防衞、東亞の建設に於て、各國民は夫々の任務を分有し、日本を指導者とする東亞共同防衞の下に、長期に亙る東亞建設戰の完遂の爲に、相協力して偉大なる防衞力と建設力の發揮に邁進する不可避的時代に來てゐるのである。

茲に於て勤労奉公制は我國青年に課せられた東亞的任務を最も端的に示すものであり、斯く認識することによつて、勤労奉公制が我國に於ける人的國防建設の精華であり、從つて亦、東亞建設戰に於ける人的資源の合理的配分が見られるのである。

勤奉制創設要綱の方針に於て「帝國人民ノ一大義務タル兵役ノ義務ニ照應シテ義務的國民勤労奉公制ヲ創設シ……」とあり、國民勤労奉公制度を實施して然るべしとの信號を揭げたのは心强い次第である」(十二月二日社說)

勤労奉公制の實施は、協和會運動、就中、青年運動と緊密なる關係を有ち、その將來の發展に各種の問題を投げかけてゐる。更に飜つて考へて見ると、今日の勤奉制が實施せらるるに至つた國民的實踐として、今日迄の勤労奉仕運動の實蹟が與つて大きい力をなしてゐることを看過してはならぬ。

二、我國の勤労奉仕運動は、協和會運動として實行せられたものであるが、勤労奉仕の運動が協和運動として、且つ、全國的運動として最初にとり擧げられたのは、康德六年からである。勿論それ以前に於ても各地方、地方に於ては小規模ながら、各種の奉仕活動は行はれてはゐたが。

勤労奉仕の全國的運動の劃期的方針となつた協和會に於ける康德六年度の「國民勤労奉仕運動」の方針を見ると「新國民性ノ練成竝ニ國家生産力ノ擴充ニ資スル目的ヲ以テ勤労奉仕運動ヲ會運動ノ實踐トシテ展開シ將來之ヲ制度化シ奉公隊員及協和青年團員ノ勤労奉仕ヲ本運動ノ樞軸トナス。」

更に運動の發展段階としては、漸進主義をとつて、民心の歸趨、社會狀態及土地の特殊事情等により其の指向すべき運動の重點は、相當差異あり、且つ、複雜多岐に亙ることが考慮されたのであつたが、大體次の如き三段階に分けて指導せんとしたのである。

1 第一期

イ 本期間ハ啓蒙訓練期トシ國民ノ所有階層ヲ對象トシ青少年層ノ實踐ヲ中心トシ全國民ノ關心ヲ高ムル如クス。

ロ 實施作業ハ先ヅ日常生活部面ノ卑近ナルモノヨリ實施シ全國的ナルモノトシテハ建國廟竝ニ宮廷御造營奉仕綠化竝馬糧獻納運動等ノ如キモノトス。

ハ 指導ノ內容ニ付テハ精神的要素ノ充實ニ重點ヲ置ク。

ニ 本運動ヲ全關的規模ニ於テ組織的ニ行フ爲先ヅ指導ノ養成訓練ヲ本期間ニ於テ行フ。

2 第二期

イ 本期間ハ本運動ノ組織的展開期トシ國民ノ中堅層ニ重點ヲ置キ先ヅ市街地ヨリ實施ス。

ロ 實施作業ハ先ヅ市街地ニ於ケル神社、忠靈塔、記念碑ノ造苑及公共施設ノ建設修築等ヲ行フノ外從來ノ賦役的事業ニ付其ノ觀念ヲ是正シ之ヲ奉仕觀念ニ轉換セシメ進ンテ公有未利用地及共同使用地ノ開墾等ニ及ブモノトス

ハ 指導ノ內容ハ精神的要素ノ擴充ヲ考慮スルモノトス。

ニ 地方ニ於ケル指導者竝ニ幹部ノ養成訓練ヲ目標トシテ地方奉仕訓練所ノ設立ヲ圖ル。

3 第三期

イ 本運動ヲ制度化シ奉公隊員及協和青年團員ノ勤労奉仕ヲ本運動ノ樞軸トナス。

ロ 實施作業ハ國有未利用地ノ開發、道路改良事業、一般土

るが、本制度は、實に「親邦日本國民の一大義務たる兵役の義務」に照應するものにして、かゝる意味に於て、勤奉制は我國青年に課せられた、國兵制に優る、最大の義務であることを認識すべきである。

從つて本制度をして、ただ單なる勞働對策に墮せしめず、第二建國運動の推進として青年の一大鍊成運動であり、東亞建設戰に於ける勤労軍隊たらしむる如く、國家、國民の關心と努力とを祈念してやまない。

國は異なるが、ナチス政權によつて採り上げられた獨逸の勞働奉仕運動が、從來の獨逸に於ける失敗せるこの種の運動の跡を承けて、今日の盛觀を呈するに至つた原因は、實に、ヒツトラーが從來の勞働奉仕運動の持つ經濟的要素のみに滿足せず、青年の世界觀教育運動として、亦、民族復興運動としての偉大なる意義をこの中に認めたことによるのである。

二、勤労奉公制の先驅的實踐

一、「協和青年團こそは國民勤労奉公制の基盤組織であり、協和青年團、更に遡つて協和少年團といふ健全なる基底なくしては國民勤労奉公の圓滑なる運營は到底期し難いが、主として本年度に於ける協和青年團の勤労奉公作業の實績に於

木事業植林事業及土地改良事業等ノ公益事業ノ義務奉仕

ハ國民奉仕實踐機關ヲ整備シ協和青年團及奉公隊トノ有機的關係ヲ確立ス。

右によつて見ると、今日の勤勞奉公制度の精神とその制度化の見透は、既に、この時に明に豫定せられてゐたことがわかる。併し、そこで考へられてゐる制度化と言ふことは、單純なる法的根據による行政的運營のみを考へてゐたのではない。そのことは、その後の實踐の事實が、最も雄辯に、この間の消息を物語つてゐる。

三、第一期は、康德六年、七年の二箇年に亙るもので、當初の計畫の如く、實際の活動狀況も、啓蒙訓練期としての實績を擧げたのである。

第二期に該當する時期は、概ね康德八年、九年の頃である。併し第二期的活動の先驅をなすものは既に康德七年の初期に現はれてゐる。即ち、東南肅清工作に於ける、吉林、通化兩省の數千の青年の組織的大量動員である。彼等青年が果した任務は肅清工作に伴ふ地方農家の手不足を補ふ爲の農作物の刈入援助及討伐部隊の物資輸送等である。

試みに、康德八年度に於ける協和青少年團の勤勞奉仕の實績を見ると第一表の如くである。

（第一表）協和青少年團勤勞奉仕實績（康德八年）

種別 ＼ 期間延人員	期間 五日以內	一〇日以內	一一日以上	計	延人員
軍事協力	九五	六四	三一	一九〇	八六〇、五五三人
農產增產	七八	三四	二二	一三四	六五一、二六八
鑛產增產	二	四	八	一四	二四五、二四七
道路建設	九二	三〇	二二	一四四	四一九、六七八
土地開發	六	五	三	一四	四七、〇一七
其他	七五	三三	一三	一二一	三七四、〇六六
總計	三四八	一七〇	九九	六一七	二、六〇五、八六三

右の調査は全體の調査ではなく、實績はそれ以上に上るものと思はれるが、總延人員二百六十萬中、軍事協力三三%農業增產二五%、道路建設一五%となり、軍事協力が第一位を占むることは昨年度の特殊事情にもよるが、戰時體制の强化を示すものである。

更に勤勞奉仕の形態の發展を窺ふ爲に動員規模に付て右の調査より一表を作つて見ると、第二表の如く五百名以上、動員の件數とその%は、軍事一七五件、中三三件、農產一二一件中三一件、道路一三五件中二一件、動員數の%は、軍事七七%、農產六〇%、道路六四%となり、相當規模の大なる動員がなされてゐることが判り、之れが基礎となる事前の準備、動員並編成計畫、奉仕期間中の指導等につき、檢討を加へて見れば、可成の組織的大量動員の發展が見られる。

（第二表）動員規模調查表

種別	總件數	動員數	五〇〇名以上の件數	同上動員數	三欄に對五欄の%
軍事協力	一七五	一二〇、三〇二	三三	九二、六二五	77%
農產增產	一二四	一〇六、九四三	三一	六四、三七六	60
鑛產增產	一五五	五二、三三三	二一	三八、三六七	73
道路建設	一三五	四八、八八一	二一	三一、二〇〇	64
土地開發	一五	六、一五一	三	三、九九八	65
其他	一三三	四一、五一七	一六	二五、一八六	61
計	六九五	三七六、一二七	一〇七	二九一、六七三	85

之等の奉仕が全國各地に於いて、多少の相違はあるが、大體の趨勢であると言ふことを併せ考慮する時、僅か、青少年團活動の部野のみによつて見ても、既に、第二期の前年に於て計畫の如く全國的に基礎の確立がなされつゝあつたことが判る。

康德九年度に這入り、愈々、その規模は大きく作業內容は鐵道建設、自動車道路の建設、增產協と言つたものに集中せられ作業期は長期となり、動員數は增加して來てゐる。本年四月より六月にかけて吉林、濱江兩省の青年團員及奉公隊員を動員して實施せられた一大建設工事に於ては、動員數一萬二千作業期間二箇月半乃至三箇月、而も、兩省共各縣別の作業が省實踐本部に統制實施せられてゐた。このことは康德八年度には見られなかつた組織的動員の發展である。同じことが、今年五月末より實施せられた奉天省內自動車道路の建設工事に於ても見られる。四市六縣の動員數を累計すると四千二百八十名、概ね、二箇月以上、期間中眞夏の熱氣と大洪水に襲はれつゝも、略々世界に誇る優秀自動車道路完成の基礎を築いたのである。その他或は牛莊の築堤工事・石炭增產・食糧增產等に數々の實績を擧げてゐる。青少年團中央統監部のみの本年度の動員計畫を見ても、延總人員一千萬人の多數に上つてゐる。

斯くの如く第二期の特徵は、組織的大量動員による「本運動の全國的基礎確立」の時期として、運動の對象も「國民の中堅層卽ち青年に重點」を置き、地域も廣く「市街地より農村地區」に移り、作業種目も「神社、忠靈塔、記念碑の御造苑より漸次、軍事的施設・道路構築・共同用地の開招又は增

産協力」等多分に産業的軍事的色彩を濃厚にして來てゐる。

四、康德八、九年度に於ける右の如き勤勞奉仕活動の發展は協和會運動としての勤勞奉仕運動が勤勞奉仕の制度化の基礎、卽ち、第三期への飛躍を著々と實行の上に於て準備をしてゐたことを物語るものである。

右の事實は來年度より實施の勤奉制の先驅的實踐として驚異的實績を擧げ、勤奉制實施の可能性を實踐的に證明して來た許りでなく勤勞奉公隊の基盤組織をなす協和青年團組織の存在とその必要性を痛感せしめてゐるのである。

勤勞奉仕は、よし、法的義務に基く勤勞奉仕であつても、國民勤員の一形態であることには何等變りはない。して見れば、限られた指導力で箇々の國民を、ばらばらに摑むことが個人を集團化した組織體によつ摑むことより、より効果的合理的であることは、當然すぎる程自明の理である。國民に對する國家の義務は國民箇々人に對する法の發動であるとしても、之れを受けて國民が實踐する方法には工夫があつて然るべきである。國民の國家的能率を最高度に發揮する爲に作られたものが國民組織であり、協和會組織である。

勤勞奉公隊員の奉仕出動、奉仕作業、奉仕解除後の指導等を十分圓滑ならしむる爲には、基盤組織たる青年團の勤員常備體制を確立して置くことを最も肝要とする。

日本皇軍の强さは統帥權の確立と下級幹部の優秀なことにあると謂ふ。國民組織の指導中核の確立も組織體の指導精神と構成員の人的繫りによる所甚大である、玆に日常不斷隊員に接觸する下級幹部の影響が重大なる要素として考へられるのである。從つて奉公隊の下級幹部は基盤組織たる青年團の勤員常備體制の中心問題として考慮せられ、青年團・勤奉隊と一貫したる影響力が最も望ましいと言ふことになる。玆に於いて勤奉隊自體の國民的基礎は協和青年團の組織なりその活動によつて間然する所のないことを知ることが出來る。

三、勤勞奉仕と知識層の文化運動

一、從來の勞働觀念の是正

由來滿洲では勞働に從事するものは極めて賤しきものとされて來た。これは長期に亙る對北支勞働依存主義と低賃銀を以て勞働力確保に狎れた安逸の結果として、國民各層に一樣に勞働蔑視觀念を根强く抱懷せしむるに至つたことにもよるのであらう、勞働に從事するものを苦力と蔑視し、遂には勞働嫌惡の弊風さへも釀成するに至つてゐる。

卑しき勞働を國民の義務として、而も向上と希望に燃えて

ゐる純眞なる青年に課すると言ふ勤勞奉公制度の順調なる發展の爲には、何んと言つても、國の指導者、更に廣く、知識層の率先參加を特に必要とする理がある。

勤勞奉公義務猶豫者の中に、「官公吏にしてその職を贖うし得ざる者」と言ふ一項があるが、この項に該當するものは、大部分、學校教職員及警察官であり、學生に就ては別途の扱をなすことになつてゐる。之れに對し勤奉制審議委員會その他に於て「官公吏の如き國民の師表となるべきものは率先して本義務に服し、身を以て國民指導に當るべきであり、更に進んでは、本制度の實施により本義務を果さないものは原則として官公吏に採用せざる如くすべきである」と相當各方面から異論が出たと聞く、法的義務による參加にはその職責上自ら限度があらうが、玆に、廣く知識層の協和會運動として勤勞奉仕に積極的に參加せしむる問題が提起せられて來る。

二、勤奉隊の推進力と知識層

「組織體」の活動には必ず推進勢力が必要である。勤勞奉公制度の狙ひとする「國民皆勞の精神に則り、國民の勤勞奉公による勞働軍隊を完備し、之を動員し、編成し、裝備し、訓練し、運用し以て滿洲國人民を大東亞共榮圈建設の戰士として適當なる國民に鍊成」（平田參事官「國民勤勞奉公制度の根本精神」）せんとすることは、一體、誰が、如何なる場所に於て行はんとするのであるか。これは言ふ迄もなく勤勞作業自體に於て卽ち勤勞作業の每日の生活そのものを通じて行はんとして居り、亦、しかくして行はるべきものである。從つて每日の生活全般の正しき指導によつて所期せらるるものである。玆に知識層の積極的參加、集團的協力活動のない勤勞奉仕は苦力勞働に墮する危險を多分に持つて來るのである。

然らば知識層の參加の舞臺はと言へば、廣汎なる內容を持つ文化的啓蒙的活動である。病に呻吟する青年に、兄として先輩としての愛情を以て醫藥を與へ、勞働に疲れたる青年に魂の慰安を與へて明日の勞働に振ひたたしめ、苦しき勞働の中に國家建設の希望に燃えたゝしむるのは、知識青年の活動である。

四月動員に於いて、吉林省某縣勤勞奉仕隊の實に、細やかな體驗であるが、稔り豐かな啓蒙的文化活動を展開して隊員は勿論、部落民からも好感を以て迎へられてゐる事實を見聞して勤奉運動の將來に大なる希望を抱いたのである。

嚴格なる規律生活の每日を、國家的奉仕作業を通じて、思慮深き指導の下に、純眞なる青年は古き勞働觀を脫却して、新しき國家觀念と東亞の建設に荷へる自己の使命とを每日の

作業實踐、生活實踐の上に體得して行くのである。奉仕作業生活のかくの如き各部野に於ける、よき指導は幹部の率先垂範と知識層の集團的協力活動に俟つものが、最も大なるものがある。

勤奉隊の基盤組成は青年團組織であり、勤奉隊活動の推進力は知識層の精極的協力活動である。古來國民運動の先驅をなすものは知識層の實踐活動であつた。

知識層がそれ自體の文化活動に滿足する限りに於ては、それは尙、曾つての自由主義時代の自己滿足の生活を脫却し切れない古き體制である。知識人は思想を喰ひ、文化を味つて彼等の社會生活を營んでゐるのであるが、彼等のかゝる生活の糧を實踐の中、就中國家的廣汎なる實踐の中に發見し、その中に於て成長さすのでなければ、知識人は最早、棲息出來なくなつて來てゐることを知らねばならぬ。興亞精神の體得と謂ひ、民族協和理論の確立と謂ひ知識人が古き殼を破つて、今日國家が最も切實に要求してゐるもの、社會が最も切實に要求してゐる實踐部野に於いて、自己を強く正しく成長さすのでなければ、到底、之等の問題は解決されないであらう。我國に於いて、今日尙、よりよき獨自の文化の創造され得ない理由も恐らく、かゝる所にあるのでもあらう。

我國の如く、社會的發達の尙幼稚なる段階に於いては、知識層の持つ國家的役割は特に大なるものがあり、殊に支那・滿洲の從來の社會に於いて彼等の果した役割が特異なものであつた歷史に鑑みる時、特別の考慮を拂ふ必要があらう。

勤勞奉公制度の廣汎、且つ急速なる實施を意圖するに於いては、知識層の廣汎なる積極的協力活動を待望してやまない。それはまた、協和會の知識層に對する工作の一進歩であるのだ。

全滿各地に漸次擡頭しつゝある青年自興運動は、日系青年の自覺運動であるが、かゝる自覺せる日系青年の實踐的活動は、實に勤奉隊活動の如きものゝ中に求め、身を以て他民族の先達的道標となる如く指導すべきではあるまいか。日系青年としての自覺も修養も他民族の先達的位置に、親しく、その身を置くことによつて、より信念づけられ、より向上せしめるものである。青年自興運動の正しき發展の爲に、新たなる實踐的指導方針の確立を要望してやまぬものがある。

したがつて勤勞奉公隊推進力の源泉を、知識層の本制度に對する集團的協力活動の中に發見すべきことを痛感するのである。

四、勤奉隊と鄕土防衞力の培養

一、大東亞戰の完結は支那事變の解決によることは識者の同じく認める所である。この東亞の癌をなす支那問題の中心は、漸次重慶政權より共產收權の勢力の擴大に移行しつゝある。之れ等共產勢力擴大の一つとして新四軍の更生問題が關心を惹きつゝある。

支那事變第五年目の昭和十六年一月、湖南の原野を凄慘な相剋の血によつて彩り、一世を聳動せしめて抗日支那の表面から姿を消した新四軍の其の後の行方は各方面注目の的であつた。その殲滅と肅淸の嵐の前に潰體に沉淪した新四軍が再起の祕法として選んだものは、實に民衆自衞隊の組織であつた。

「然らばかゝる民衆自衞隊を新四軍は如何にして組織して行つたか、我々はこの點を見逃すことは出來ない。新四軍のみでなく、中共全體の基本原則として、近來住民皆勞、住民皆兵の方針をとつてゐる。住民皆勞とは、中共が或る地區を占據して組織工作を開始するや、その地區內に住んでゐる民衆を悉く生產部門に動員し、黨軍の力量の源泉たらしめるのである。それを同時にこれ等生產部門に動員した民衆に適宜政

最新刊

法制局參事官 山崎丹照著

内閣制度の研究

A五判四六四頁 價三・五〇 〒二〇

翼贊政治の中樞たる內閣制度の刷新と強化とが叫ばれてゐる時本書は多年「歷代內閣制度」の研究家として知られた著者によつて初めて發表された時局下貴重なる文獻である。

重版好評

馬場恒吾著 **國と人物** 價一・八〇 〒一五

山浦貫一著 **近衞時代の人物** 價一・七〇 〒一五

岩淵辰雄著 **重臣論** 價一・八〇 〒一五

岩淵辰雄著 **屑屋政談** 價二・〇〇 〒一五

叢書 濟經 畫計 綜合

企畫院第六部長 柴田彌一郎著 **交通政策論** B六判三七〇頁 價二・三〇 〒一二〇

戰時下に於る交通輸送力の重大さは今更らいふまでもない凡ゆる交通の全般に亘つて詳述したものが本書なのだ。

厚生省職業局總務課長 佐伯敏男著 **勞務配置論** B六判四九〇頁 價三・〇〇 〒二〇

勞務の總動員法とその配置との實際化に就て簡明適切なる解說を與へた產業人必讀の書がこれである。

高山書院 東京市神田區小川町二ノ一〇 振替東京八三八九三

治訓練を施して、漸次軍事力の培養に努力する。これが國民皆兵の方策である」かゝる自衞隊は十八歳以上の青年を中心として四十五歳迄のものが參加してゐる。生産と自衞と思想訓練とを巧妙に結びつけて、民衆獲得をやつてゐる彼等の遣口を他山の石として檢討すると共に、勤奉制の實施の成果をして我國國民の國土防衞力の强化に轉換發展せしむべき可能性と必要性を痛感するのである。

「勤勞奉公制度は……正に第二の建國とも稱し得べき重大意義を有するものにして、實に滿洲建國に於ける畫龍點睛の制度たり」(平田參事官訓示)と言はるゝ本制度の成果をして國民生活の身近に於て發揮し、貢獻せしめ得る方法は本制度によつて作り出さるる年々五十萬、六十萬の訓練を經たる鄉土青年の集團的力を活用して鄉土自衞力を建設することを以て良策とする。

斯くの如き自衞力の建設は、地方農村に於ける從來の自衞力の改編、革新となり、高度防衞即ち國民防衞力の造成ともなる。他面、今日地方自衞力は國家組織の最末端に於いて行政と不可分關係にあり、從つて、亦、行政の刷新、强化ともなる。斯くして爾餘の經濟生活、文化生活の建設と相俟ち鄉土建設に重大なる寄與をなすことが出來るのである。

鼓に於て、國家建設は鄉土建設ともなり、鄉土建設は國民建設に內容づけられて行くことが出來る。第二建設期の指標として部落共同體の育成强化が非常な關心を以て再檢討されつゝあるが、本制度の實施により部落に造成せらるゝ青年の新しい集團的力は、共同體の育成に重大なる役割を果すことは今日より見ても明瞭である。それは先づ共同體自衞力の刷新强化に於いて。

將來年々〇〇萬、〇〇萬の訓練を經たる青年の街村配置は右の如く鄉土建設に於ける自衞力の建設、廣く言へば、村落の社會生活の各部門に於ける人的要素の充實となり、鄉土建設の一大推進力となることが出來るのであるが、半面、これが指導の適正を缺くならば、各種の問題を惹起し、村落に新なる負擔を增すことにもなる。斯くては本制度に對する國民の期待は裏切られ、本制度は國家組織の最末端に於いて從つて、廣汎なる國民的基礎を喪失することゝなる。

勤勞奉公制度の圓滑なる實施と、その成果の適正なる活用によつて、村落に於ける新しき自衞力建設と、經濟建設、文化建設の促進に、青年の逞しい情熱が發揮せらるゝごとく、適切なる方策と指導の加へられんことを念願して筆を擱くことにする。

興村方策への唱道

田中宋太郎

(一)

今次の世界大戰爭は何人もその終熄する時を豫測する事が出來ぬ。それは百年戰爭と言はれてゐるが、かくの如き深刻なる戰爭は歷史に未だ見ないところである。今日迄の戰爭は少し旗色が惡くなると、敗者は領土を割讓し、賠償金を出し勝者も割合寬大に、所謂媾和を結んで片附いてゐたのであるが、英米露も日獨伊も今度の大戰爭の敗北が何を意味するかをあまりに深刻に意識してゐる。敵味方の戰爭に對する覺悟の深刻さは勿論その戰爭の規模も前古未曾有である。

從つて我々としては、北門の守りを固うするは勿論、大東亞共榮圈に於ける食糧基地としての大責務を果さむがために目前の急に應ずる事は勿論、磐石の如き搖がざる基礎を作り、此の大戰爭の終局の勝利を準備する事が肝要である。

國家の强固さは國を組成する單位である各戶々々の構成員の國家意識の强さによるのである。然るに滿洲國の此の方面の現狀はどうであるか？殘念ながら舊軍閥時代の觀念からあまり離脫してゐないのである。下部機構は屯子の線に於て國家の現實の要請と必ずしも一致せず、溢るゝが如き國民の內的の力、國家意識を生み出す爲にはどうしても下部機構即ち屯より各戶々々に至る所を充實强化しなければならぬ。それは長期戰が眞に深刻なる未曾有の樣相を以て戰はれつゝある時に最深刻に注意されねばならぬ重大問題であると考へる。

又滿洲國が、大東亞共榮圈に於ける食糧基地としての重大

なる役割を持つことは今更云ふまでもない。然るに下部組織即ち村、屯より各戸々々に至る線が十分整はず、中堅層である農民の國家意識に基く強力なる支持を得てゐないために調査の數字が信頼出來ず、暗中摸索し、計畫と實際の數字が食ひちがひ、未だ所期の成果を全幅的に擧げ得ないことは遺憾の極みである。

増産蒐荷と省縣の役人が一戸々々をせきたて、督促し、合作社の職員が全縣をあげて奔命に疲るゝが如き狀態から一日も早く脫却せねばならぬ。

切迫する國際情勢に追ひ立てらるゝ樣な氣持でゐる狼狽者短見者流には、或は此の明日がはかられぬ國際環境の下に、村造りとは何事であるかといふものがあるかも知れぬ。然しながら此の明日をはかられぬ國際情勢の下にあつて落ちついて眞の力を養ふものこそは終局の勝利者である。戰鬪闌なる時に當り敵前に悠々と故障せる機關銃の分解掃除を行ひ、十米の前面に近接し來たれる敵を邀撃し全滅せしむる餘裕あるものこそ日本兵ではないか！滿洲建國以來風雲急なる中に十年の歳月は流星の如く流れ去つた。關東軍の庇護の年月を空しくおくるべきではないのである。世界大戰爭の眞唯中、明日を知らぬ國際情勢の眞唯中に行はれる村造り、農村の建設の意義の深刻さは、敵前に故障せる機關銃の分解掃除を行ひ得るものゝみがよく理解し得るところである。

二宮先生は曾て谷田部細川侯が大番頭を命ぜられ大阪の城を守るについて一半の費用を登阪の費にあて、一半を村造りにあてんとした時、細川藩仕法の擔當者中村勸農衞に對しかくの如きは京都禁裏守護の大任を忽にし、君侯を非義に陷らしむる故即刻仕法を疊んで登阪に全力を傾注せよ、村の立直しの如きは我が道を行へば何時でも掌に指すが如く容易であると諭してゐられるが、今日の自興村運動は國家的農村の建設が目途であり、世界大戰爭を勝ちぬくため國防力を培養し、大東亞共榮圈に於ける食糧基地としての滿洲國の責務を完遂せむためのものであつて、短見者流や近視眼者の臆測してゐる如き左樣に悠長なユートピア建設の遊戲ではないのである

二宮先生は櫻町の難村の復興を引き受け、怠惰にして無頼の農民を最篤實忠誠なる農民と化し、八百石の產米の荒廢地を約束の十年間に二千石以上の產米地へ復興したのである。

即ち十年にして農民の精神を作興し、二倍以上の增產を行ふたのである。櫻町丈ではなく二宮先生は早くて五年、普通十年で至るところの村を立派に作り上げてゐる。先生の直接間接に手をかけた村は六百五箇村に及んでゐる。

滿洲の街村二千二百八十五、農家の戸數は五百萬戸にすぎないのである。恒河の砂は數へる事は出來ぬかも知れぬが滿洲の村や農家は數へられる數である。私は今切實に感じてゐる。即ち幾萬の官吏、特殊會社員を擁する我が滿洲國が十年二十年の後、此の數へられる村や農家をして從來の如き國家への無關心、不感症さを清算せしめ、自らすゝんで政府の計畫に即應協力して增產を行ひ、督促されずともすゝんで出荷するが如く導くことを得ないならば、それは我々の怠惰と無能の然らしむる所以であることを自覺せねばならぬ。こゝに於て私は、二宮先生の敎、即ち報德道を理解しその仕法を知り、北海道の下部機構建設過程を審に探究するの機會を得て滿洲の興村もこの報德道の普遍徹底によつて、その目的を達成し得るといふ確信に到達することが出來たのである。

(二)

北海道は我が滿洲建設について最もよきモデルをつくつてくれてゐる。

北海道は昭和六・七・九・十の四年間にわたり、兇荒に襲はれた。此の兇荒は北海道の農民に逞しき精神と組織を與へてくれたのである。此の兇荒は北海道にとり天の惠みの兇荒と言つて差支へないであらう。即ち昭和六年の兇荒に際會するや、北海道產業組合聯合會を中心とする北海道の農業諸團體は一齊に立上り、農民の組織化に著手した。即ち第一に個人の借入を嚴禁して連帶無限責任の保證組合を作り、之を借主として返債は誰へでも要求せられる事とした。是れ北海道農村協同體が他に見る事の出來ぬ位の立派なものとなつた出發點である。眞に連帶無限責任の保證といふ事は、個人主義に育てられたる環境下にあつては普通の場合中々容易でないのであつて、天地開闢の初めに戻り、素裸になつた農民にして初めて出來得る事である。眞に此の機會をつかんで村協同體育成の出發點としたことについて、北海道指導者の聰明を稱へざるを得ない。かくてその組合の作付計畫を出さしめたのであるが、それは各人の生產出荷內譯表の外に總括表をつけて連判の上提出せしめた。而して連帶なるが故に各人何れもお互に生產計畫に口を入れ、從つてその計畫は何れも堅實にして誤りなきものとなつた。かくて生產物を信用對象とし、生產についての共同連帶責任として共同出荷契約書を提出せしめ、是れを基準として共同信用により、而して各人の借入金は人心の安定が第一なる事を理解するが故に、利子を同等としてその者の名義の貯金で受入れて安心させ、限度を

きめ、保證組合長の承認あればどし〳〵出す事とし、而も掛け賣りをやめて現金買ひとして物を賣つたのである。即ち實質的には物をわたす事になつたのであつて、購買、販賣の事業は自ら發展するに至つたのである。

而して昭和七年農事實行組合法制化されると共に、道廳、北聯、道農會等あげて農村下部組織に全力を傾注する事となつたが、此の間に於て注目すべき事は積極的に青年をつかんだ事である。即ち昭和十六年に至り初めて青年を毎年五・六百名、農閑期に中央にあつめて農村協同體の中核として養成する一方、全道二十八箇所に地方連絡委員會を設け、一委員會、五・六箇村擔當とし、一町村に二名位の連絡員を置き地方地方で事實上村をつかんでゐる中堅青年十名—十二名をあつめ、一泊二泊程度の講習會を盛んに開催した。而してその講習科目は次の如くである。

(1) 簿記
(2) 經濟事情—產業組合事業報告書の批判力養成
(3) 經濟建設—產業組合經營論
(4) 町村同志組織の運營論

此の四綱目を見ると、農村協同體育成のため苦心せる北海道指導者の眼光の鋭さを見る事が出來る。即ち簿記は農家經營の鏡であり、之なくしては農家躍進の道を見出す事は出來ぬ。產業組合事業報告書の批判力の養成は即ち農村協同體育成の中核たるべき產業組合組織の堅實なる發展を庶幾するために、青年をして產業組合の內容を理解せしめて老人達の良い加減の組合經營から組合を擁護せしめんとするものであり又產業組合經營論は更に積極的に組合經營の實力を養成せしめんとするものであり、町村同志組織の運營論に至つては、町村協同體の組織運營が如何に產業組合中堅青年の手に俟つところ多きかの自覺によるものである。

かくて青年が產業組合の中樞指導權を把握するやう導いたが故に、末端組織は自ら活發なる活動を開始するに至つた。而してかくの如くして養成せられたる青年は一萬一千餘、今や此等中堅青年の聯盟は發展的に解消せられ、壯年聯盟として新體制運動の中核的役割を果しつゝある。組織體育成のため青年に重點を置いたが、又一方主體的條件昂揚のため指導者村民の全部にわたり色々の講習會を開いてゐる。

(1) 農事實行組合指導者講習會
之は主として町村農會技術員講習會で三・四日—五・六日
(2) 農事實行組合幹部講習會
道廳助成して道農會、郡農會主催の下に札幌の農事試驗場

或は支場で開催する實行組合の社會部長などをあつめ、二日位寢泊りの講習會である。

(3) 全村講習會

一日は戶主、一日は主婦、一日は男女青年といふ風にやる主體は町村役場、產業組合、町村農會である。

かくの如き方法で今や實行組合の組織は全道二百九十箇町村に約七千出來上つてゐる。此の實行組合は產業組合に參加はしてゐるが何れの團體のものでもなく、何れの團體のものでもある。庶務部・農事部・經濟部・社會部・家族部といふ如きものをおき、家族部には主婦係、青年係といふものがある。十戶乃至二十戶の實行組合が大部分で書記をおかず、一人一役主義を徹底してゐる。三十戶—六十戶のところには書記をおいてゐるが之は極めて少い。

而してかくの如き組織と共に、一方には報德道が已に北海道の嚴然たる指導精神となつてゐる。これは昭和十二年北海道經濟部長として着任せる遠山信一郎氏の功績である。遠山氏は昭和六年靜岡縣地方課長として同縣土方村を報德仕法によつて更生せしめて以來、富山縣學務部長、埼玉縣經濟部長として至るところに報德を指導精神として縣民を指導し、代議士、縣會議長、その他縣內最高級指導者にして報德の講習を受くるもの二百名、富山の如きに於ては新聞記者團迄も報德の講習を受くに至る有樣で、昭和十六年には九年の水害罹災にも拘らず罹災民の復興氣分存外に盛に、轉禍爲福の道を步みつゝあるのは一に報德思想の普及によるものとして、その功績が畏くも上聞に達せられてゐる程である。かくの如き狀態で遠山氏が北海道に着任するや直ちに北海道廳報德振興會を組織する一方、道の最高級指導者をして橫濱の報德講習會を受けしむるに至つた。例へば今日は全國に聞えたる農民の指導者、代議士黑澤西藏氏を六度も足を自宅に運んで橫濱の講習を受けん事を慫慂し、遂に黑澤氏をして報德道の最熱心なる指導者たらしめたるを初めとし、前北聯會長小林篤一氏全道町村長會長吉田寬一氏、元道會副議長、町村長會副會長安達利三郎氏、代議士深澤吉平氏、町村長、北聯、興農會社、道農會の幹部等で橫濱或は掛川の正式講習を受けたもの之亦三百名の多數に上り、道農會の大黑柱であつた小森技師、ジヤガ芋の親である宮澤技師等も講習を受け、興農公社、北聯、北海道工民道場など何れも報德により指導せられ、結社の數は八百に垂んとし、今や北海道の指導精神として搖ぎなき基礎に立つてゐる。

北海道は今や營農を確立し、組織を確立し、指導精神を確

立し、物心共に安定して永安の大道を歩みつゝある。從つて戰時農業生産擴充期成會を組織して戰時の食糧增産をはかつてゐるが、之が美事に組織的に行はれつゝある。何となれば天地人三才の德に報いんとする報德の精神は組織的活動に於て、營農に於て農民をして全力を傾けしめてゐるからである。分散家屋體系の困難も、天惠地德の薄きも北海道の農民の報德精神の前には問題とならぬのである。下部組織が確立してゐるが故に戰時生産計畫の要求も唯農會の指導の下に長期輪作を組みかへればよろしいのである。かくの如きが北海道の現狀である。「急がば廻れ」我々は增産蒐荷に對し、打ち手を成るべく農民に煩瑣なりと感ぜしめぬ方策をとりつゝすゝむと共に、かくの如く机上の計畫が直ちに實際なりとして些かの狂ひもなく安心出來る樣、敏速に村造りを行ひ、一日も早く農民指導精神と下部組織を確立すべく全力を傾注する必要がある。我々は已に營農につき北海道を學びつゝある。指導精神と組織についても更に注意を傾けて北海道に學ぶところがなければならぬ。

（三）

建國前の滿洲の統治者は常に農民から奪つて來た。農民の實である馬を奪ふ馬賊の成り上りが滿洲の統治者となり、農民を搾取したのであるから、農民が國家に對して尻を向け、無關心となり、別箇の社會を形成したのも當然である。

支那の主權者にしてよく與へたるものは、古堯舜ありしのみであらう。滿洲にあつては從來が奪はれ、搾取されて來たが故に與ふるところなくとも、官吏が自ら正しく身を持し、權力を正しく行使し、人民をして安らかに生活をおくらしむるのみでも、農民はその德を謳歌するのである。

我々が滿洲の興村に成功しようと思へば、先づ我々が馬賊の支配者と逆の道をゆくつもりでさへゐれば間違ひないのである。卽ち身を正しく持し、權力を正しく行使し、更に今一歩すゝんで彼等にあたふるところあれば必ず成功するであらう。

身を正しく持し、權力を正しく行使するとは何であるか？

農村に入りて農民に一飯一碗と雖も迷惑をかけるが如き行爲をなさぬことである。權力を濫用して彼等を苦しめるが如き事なきは勿論、安買ひするが如きことあつてはならぬ。白麵の配給品が一割二割行方不明になる事が當然のことであつてはならぬ。農民の食糧運搬の現場で收賄が行はれ、又は商人の弱點を押へて收賄が行はれるが如きことが假初にも看過せられることがあつてはならぬ。

滿洲建國十年以來、舊軍閥時代の痕跡は至る所に殘つてゐる。之を淸算し、屯子の線を國家意識に富む中堅農民によつて堅め、明朗闊達なる農村國恩に感謝し、求むることなくとも進んで國家へ奉仕する農村を建設して文字通り國礎を磐石の安きに置くことは出來ないであらうか。

之がためには第一に指導者自らの眞劍なる奉公の觀念、軍人と同じく國家のために眞に身を捧ぐるの觀念を養成することである。それがためには二宮先生の敎へ、此の日本精神具現化の世界的大道を唱道し、一方個人主義、功利主義を絕滅し、道德と經濟を一致せしむる實行の哲學、仕法を以て指導者を養成することである。

先づ高級の指導者に眞劍に國事を憂ふるの心あつて、否眞劍に國事を憂いての躬行示範あつて初めて下僚の心正しく、農民の尊敬をかち得るに至るであらう。指導者層に報德の敎化を徹底し、然る後監察と人事の徹底を併せ行ひ、指導者層の指導を精銳ならしむること、是れが農村建設に當り第一に著手すべきことである。

次に今日迄國家に無關心である農民、その中堅分子を敎育する事である。政府は本年全國三千二百八十五の街村の中から七十六の村を選んだ。而して此の自興村は各省に概ね一つづゝ設置されてゐる實驗村を中核として推進されるものである。實驗村の指導者達は農業がわかり、行政經濟の知識ある鍊達の人々で、之に滿系の助手をつけてゐるが、右に該當する人が見出されなければ當該者の實驗村は干與しない方針の下に人物中心にすゝんで來た。此ねらひは成功しつゝある。然しながら是等の人々の觀念も各自己の狹き見識の範圍、我流の範圍を出でないので、近く長期の報德の講習會に參加せしめ、以て此等の人々の指導精神に統一あらしめ、此等指導者一代きりの實驗村たらしめざるやう、永安長久の村を建設せしむ

冨山房 新刊
東京神田神保町 振替東京五〇一

花巻病院長 醫學博士 佐藤隆房著
宮澤賢治
價四・八〇 送料三〇錢 A5二八〇頁 寫眞版五〇面
輝く天稟を詩文に託し、その全生命を郷土農民の指導に捧げた宮澤賢治の物語である。彼の知友佐藤博士が『賢治さん』の稱呼で綴つた多彩な天才の思出の記。

大東亞戰爭畫
全十二面原色刷 價十八圓 送四五
堂本印象畫塾 東丘社 共同制作
大東亞戰爭の赫々たる戰果は、近代兵器と逞しい攻擊精神の綜合した力によることに感激し、堂本畫塾一同が一丸となつて『共同制作』の新構想になる十二大作の、精巧なる原色刷である。

ることとなるであらう。特に來年は恐らく自興村指導員達を實驗村へあつめ、更に一年村造りの技術を修得せしむる見込であるから尚一層實驗村指導員の修錬が必要である。現在、中央農事訓練所及び省の勸農模範場に於て養成せられつゝある自興村の指導員達は、青少年統監部の手によつて推薦せられたる各村三名宛の二十歳より三十歳位迄の青年である。それは滿洲國の未來が一に青少年の肩にかゝつて存する確信の實行である。本年は國策の理解と農業についての簡單なる二三の新しき技術の修得に重點を置いて訓練しつゝあるが、明年は實驗村の指導者の下に於て村造りの實際を習得する事となるであらう。而して明年は、自興村に於ては多分村民の最もよく通過する地域に圃場が設けらゝることとなるべく、明後年指導者達の歸村後は三名の指導員が此の圃場の經營者となり村の篤農、古老、有力者等を相談役とし、青少年團を動員して耕作することとなるであらう。抑々農業は山邊川邊といふ如く、一村の中と雖もその成績異り、又年によりて氣候により異なるものである。從來政府は縣、村を通じて直接農家各戸に新しき技術、種子などを與へてゐたが、その結果、政府の責任にあらざる場合と雖も政府の責任として農民の不信を買はねばならない時があつた。然しながら若し此の圃場が設けらるゝに至らば縱令不成功に終つても、農民の非難を蒙むるが如き事はなくなるであらう。何となれば、農民個人の圃場に非るが故に個人の懷を傷めざるのみならず、村内篤農、古老、有力者等と相談の上青少年團を動員し、衆人環視の中に行はれるから不成功の場合は更にその原因を確めて翌年更に試みることとなり、良い加減の非難の言葉が跡をたつからである。況んや成功の曉にはすゝめずとも農民側より求むるに至るであらう。即ち又、此の圃場こそはその試作の成功、不成功に拘らず農民の研究創造の精神を啓培し、此の無盡藏の大地の寶庫をひらく鍵となり、滿洲農民の智慧の泉となるであらう。抑々農業は農民の基礎である。農業への理解なくして農村の指導を行はむとする事は眞に木に緣つて魚を求むると同樣である。

自興村の指導員達は將來村を背負つて立つものであり、農民の生活の全般について、の指導者たるべきものであるが、先づ農業について十分農民の尊敬を受くるものたらねばならぬ。勿論一・二年の訓練によつて指導者たる事が出來るとは考へられぬが、政府の授くるところのものは新しき技術であり、一つでも二つでも此の圃場を通じてその技術が農民に傳へらるゝならば、此等の青年は年齒若くとも農民より尊敬せ

られるに至り、年月と共に政府と農民の間に立つて、村内の中堅農民を率ゐて國家へ協力せしむるに至る有力なる楯杆となるに至るであらう。農事を通じての尊敬、それは村の全生活面に至るための最肝要なる前提條件であり、默々として圃場に勤勉に働き、村民の尊敬を先づかち得る事こそ自興村指導員の歸村後第一著手のところである。

(四)

齋藤高行の「報德外記」は二宮先生の語を錄し、「天津日嗣は皇化宜しく四夷を蓋ふべし」と言ひ、「東隣柿を施し、西隣德に酬ひ、二家輯睦して永安を得る」の道を以て國際外交に及ぼし「分外を讓つて以て恩を海外に推すは實に天下の長計、仁政焉より大なるはなし」と述べ、「嗚呼、侯伯窮を免れ守備修り、兵氣振ひ倉庫滿ち、仁澤海外に洽く、施して海外に及ばば則ち赫々たる神州萬國と峙し、終古富嶽の安きを得べし、是れ報德の及ぶところ我道の終也」と結んでゐる。此の八紘爲宇の大精神は一片の形容詞に止まつてはならない。自家の興復、小田原藩家老服部家の興復の成功につゝいて一家を廢し、萬家を興すの決心を以て野州櫻町の難村の興復に成功、烏山、谷田部、茂木、中村等の諸侯の依頼を受け村造りを行

紀元二千六百年奉祝會編纂
（會長 公爵 近衞文麿閣下）
各B六判 價一・五〇 〒一五〇

肇國の御精神
皇國思想の本源
日本精神の顯現

內省に由つて自身の空隙を完封する事こそ敵を壓倒し去る根本原則である。長き歷史を有する民族の強みは內省の角度と面を豐富に藏する點にある。本叢書の企圖する處も、皇國史を堀り下げて、純日本的なる理念の構成を發見するにある。自らを護り敵を斃す傳家の寶刀的權威書
—主要執筆者—山田孝雄・辻善之助・宮地直一・吉田熊次・河野省三・五十嵐力・高原貞雄・新明正道・西田直二郎・竹越與三郎・藤澤親雄 其他（順不同）

文學博士 紀年正美 著

臣民の道通義

A5判 價二・五〇 〒二〇

文部省制定「臣民の道」の本旨に則り、古今文獻の確實なる例證に徵し、從來の訓詁解釋を離れて直ちに神髓把握に突入する。

文學博士 植木直一郎 著

古事記現代考

A5判 價六・五〇 〒四〇

古事記を日本人の常識となさんが爲めに——著者畢世の心頭に徹する念願をこの一書に刻す。血は水よりも濃し、義は泰山よりも重し、何人も讀むべし文は平易、辭は簡直、意は雄大。

東京市京橋區西紺屋町七丁目
振替東京三〇〇〇〇番
皇國青年教育協會

ひ、最後には幕命を受けて日光御神領八十九箇村の復興に當り、一生を通じ、六百五箇村の村立直しを手にかけたが、遂に廟堂に立つの機會なく沒し去つた大指導者、日本開闢以來恐らくは卓拔せる大哲人、大政治家の確信に滿てる實行的な國家經綸、世界政策の叫びである。

顧みるに滿洲建國は此の二宮先生の理想の實行そのものでばないか！報德を言はずして報德の道が行はれてゐるのである。日本は滿洲をロシヤの侵略より救ひ、軍閥の壓制を打倒し、國を焦土と化するも辭せざるの決心を以て全世界を相手としてその建國を擁護したのである。それは寔に偉大なる推讓であつた。此の日本の推讓に對し滿蒙の民族の指導者がその恩に感じ、協力したのが滿洲建國ではなかつたか！

寔に二宮先生の道を踏む滿洲建國に、村造りが叫ばれたのも當然とはいへ面白きことである。我々は此の意義深き滿洲建設の先覺者達の合言葉である村造りを死語に終らしめてはならぬ。今や時局の重大さは我々にひし〳〵と迫り來る。

私は堅く信ずる。此度の大戰爭の終局の勝利は今後十年二十年の歲月を我々が如何に戰つて行くかにかゝつて存すると、滿洲國にあつては屯子を中心に村屯より各戶々々に至る線を整理し、農村を、農民を各滿ちあふれる力によつて國家へ奉仕する村、農民へ育てあげ、國礎を磐石の安きにおき、北邊の關門たる役割を果すと共に增產も運荷も圓滑に行はれ、大東亞共榮圈に於ける食糧基礎としての大責務を完遂する樣導かねばならぬ。

滿洲興村の大運動は力强くその道程に上つた。

苟も職を官に奉じ、或は特殊會社の事業に從事するものは滿洲興村の事業の深刻なる意義を理解しなければならぬ。親邦の力强き同盟軍の庇護の下に偷安の夢を貪り、十年の歲月を無爲に過してはならないのである。（康德九年十月一五日鐵嶺縣遼海屯農家に於て稿了）

追記

此の稿了するに當つて別府鐵嶺縣副縣長より自興村の名を奉仕村又は報德村の如き名稱に變更するの要ありとの熱烈なる意見に接した。蓋し滿洲農村育成の方向は自由主義時代に稱へられたユーピトアの村造りに非ず、報德の觀念に徹し、國家へ奉仕する農村建設にあることは前述の如し。名は體をあらはし、農民の心理方向を決定する重大なるものである。然るに自興村といふ時、農民の心理方向は此の農村建設の終局方向へ向けられず、兎もすれば個人主義的に理解され易いが故にその終局目的たる報德奉仕を名とし、その內容を實際的指導において自興にすべし。との論である。大いに傾聽すべきものであると考へらる。大方の意見を仰ぐと共に、名稱のみならず自興村問題について各方面より積極的意見が提出せられる事を希望してやまぬ、蓋し村造りの問題は、一・二の人々、一・二の機關の問題にあらず國家の大問題であつて、すべての人々、すべての機關の協力によつてのみ初めて可能となるからである。

秋色濃鏡泊湖畔

上田三樽

芒野や眼つむれば奈良のおん使

祝詞澄み四方の紅葉耀へり

この水力夜長の邑を明るくす

牡丹江熔岩（ラバ）のはざまに澄みて迅（ト）し

臺地なす熔岩（ラバ）草原や吾亦紅

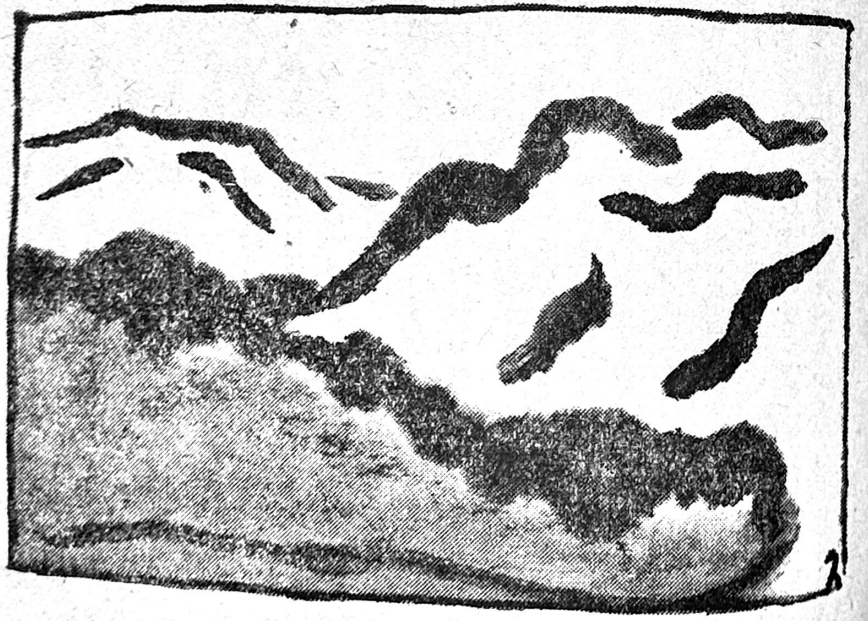
紅葉山低し湖水を狹ばむれど

狹き湖秋の光をかへすのみ

紅葉散る吊水橋や鯉上る

楊柳の島浮べたり秋の水

薄紅葉金色の水鐘鼓と



滿洲溫泉瞥見

西田彰一

日本はアイスランドやニュージーランドと同じやうに世界に於ける有名な溫泉國であつて、其數の多いことに於て恐らく世界に冠たるものがある。斯く天然に豐富な溫泉に惠まれた日本國民は其潔癖を助長され、古來から沐浴の習慣が頗る旺盛であるのは一面首肯できることである。然るに一度朝鮮海峽を渡つて朝鮮へ入ると其數の著しく減じてゐることを知るのであるが、更に滿洲にこれを見ると其廣大な面積に較べて極めて其數の少ないのが寫知される。斯る現象はいつたい何に起因するものであらうか。これは一に日本と滿洲の地質學的大きな差異に因るものと考へられる。滿洲はその風土、氣候が日本と異るやうに、或はそれ以上に地體構造に於て日本と異つてゐる。この地體構造の相違が一方鑛產資源の特異性にも反映されて居るのである。今玆に少しまはりくどい話になるが、地體構造に就いて一言してみやう。地體構造の上から地學者は世界を大體三つに分けてゐる(一)は楯狀地と言はれるものであり、主として花崗岩とか片麻岩、その他極めて古い岩石より成つてゐるところで硬化せる安定地塊である。早く言へば最も地盤安定なる土地である、二は弧狀地と稱へられるもので第三紀以前の造山運動の盛であつた、主として古生代の水成岩が廣く分布し、楯狀地の外側にあつて皺曲竝びに變動地體が弓なりに外へ向つて張り出して居る處から斯く呼ばれてゐる(三)は比較的新しい時代即ち第三紀以後の造山運動の最も激烈であつた地で蝶帶地と呼ばれるものである。ところで日本、朝鮮、滿洲が夫如何なる地域に屬するかを考へて見るに日本は元より標式的の(三)の地域である。大陸の緣に位し地盤の最も動く場所である。殊に第三紀以來の火山活動の激甚な地方で「太平洋を環る火の帶」と稱せられる火山、地震帶に當つてゐる。アンデス・ロッキー・日本群島のフェスツーン・南洋諸島・ヒマラヤ・アルプスはすべて第三紀の火山活動と地變に基いて新しく構成せられた地帶である。特に我が日本群島は第三紀中葉よりの激甚な地殼變動の後を承けて火山活動は洪積世より現今に至る迄旺盛を極め、その結果到る處に花ならで紅の火を噴く數多の新

鮮な火山の山々を觀き、こゝに特色ある火山國日本、溫泉國日本を現出してゐる。志賀重昂氏はこの日本の風景的特徵に最も早く著目してゐて、かの「日本風景論」を見ると日本の風景と朝鮮・支那の風景を論じ「想ふ火山岩たる元と地皮の皺縮せる際熱氣を揮霍し、餘慾激して爆然外に噴き來たり、噴き來たる溶岩の外氣に觸れて收縮せしもの、故に其狀や榲牙重々複裂くるが如く蚓くるに似、或は斧鑿せる柱に似、譎奇變動且狀すべからず、日本表土の五分の一實に此岩に成るとせば景物の警拔秀俊なる固より知るべきのみ。蓋し朝鮮の如き、多くは原始紀大古紀の地質に係り火山岩たる少々、支那の如き……」と特に「日本には火山岩の多々なる事」を最も重要なエレメントとして強調し地學的の眼孔を以て日本と大陸の風光を洞觀してゐる。日本から朝鮮・滿洲へ來ると第三紀以後の新しい火山活動は極めて稀であつたらしい。即ち第三紀中葉以後の火山活動は朝鮮及び大陸方面には少なかつたやうである。朝鮮は概して(二)の地域と認むべきであらうし、滿洲は朝鮮の延長であり(二)に屬すと云ふべきであるが一方寧古及びコロンバイル方面でアンガラ楯狀地に接してゐる。即ち滿洲は概して(二)に屬するが(三)には緣が遠くして(一)に緣の近い地域と云ふべきであらう。要するに換言すれば滿洲は日本に較べ極めて地盤の安定した土地であつて古生代末の海侵(この海侵は奉吉線朗城附近の石灰岩を沈積した)を最後として從來大陸のまま現在に至つてゐるのである。言はば「大陸」と云ふ語は地質學的に考へて初めて意味のある言葉である。從つて地盤の弱點の多いと考へられる環太平洋地帶の一部をなす日本群島などに比し著しく火山や地震や溫泉が少ないのは容易に領かれる現象である。次に溫泉の成因を考へて見ると全世界を通じて溫泉の殆んど全部は火成岩に關係が有るものと考へられるが、これを更に直接火山に關係ある種と然らざる種とに二大別して考へるのが至當のやうである。即ち前者は火山活動の後期現象たる溫泉であり、後者は迸入或は迸出したる火成岩に關係がある溫泉である。火山地方に溫泉の生出する事は最も普通であつて世界到るところにその類例が甚だ多い。特に前に述べたやうに日本の如く第三紀以後の地質時代に於て火山活動の激甚だつたのみならず、現在尙多數活火山又は休眠火山或は死火山を有する國に於ては隨處にこれを見、恐らく全溫泉の七割以上は前者に包括されるものであらう。溫泉が迸入又は迸出した火成岩に關係のある場合前者に次いで廣く分布してゐる。これは火成岩の迸出入は認められるが未だ所謂火山としての活動を現出した實證を缺いだ地方に存する溫泉であつて、火山に直接關係のある溫泉が全く第三紀以後の新しい地質時代であるのに反して第三紀以前の岩漿迸發に係はるものが大部分を占めてゐる。この場合溫泉は主としてその根元が花崗岩類・粉岩類・斑岩類等の所謂半深成岩と言はれるものや、その他火山岩類に關係をもつてゐるのが普通であるが朝鮮・滿洲に於ける溫泉の大部分は溫泉の成因的分類上之に屬するものである。從つて滿洲の溫泉は一般にそのオルデネートする岩石の地質時代は古く、主として迸入岩に關係し、その時代の古い結果は概ね溫泉が低く、又火山作用に直接及び間接に關係を有して居らない種類を以て代表されてをるが故に、日本內地に見られるやうに各種各

態の溫泉に乏しく、多くはアルカリ性單純泉又は鹽類泉に含まれるものでその噴出力に於ても亦活力を缺いでゐるものが多い。從來滿洲國內で溫泉として其の所在の明かなものは三〇箇所餘であるが、これらの中大部分は第三紀以前の迸入岩に關係をもつてゐるやうに考へられ、更に斯のやうな岩石の迸入した地質時代を推察して見ると中生代のジユラ紀から白堊紀（此の時代は略北票、阜新、鶴岡炭田などの石炭層の堆積した時代と考へれば當らずとも遠からずである）に亘つて迸入した火成岩に根元が關係をもつものと思はれる。嚴密な意味に於ける眞の泉熱を供給した岩石は容易に斷定出來ないが一、二の例をとつて見ると滿洲で最も著名な五龍背湯崗子・興城・熊岳城などの溫泉は何れも中生代に迸入したと推測される火成岩に關係を有してゐるやうである。この岩漿迸發の餘波が今日まで辛うじて持續せられて來て斯る種類の溫泉を生出してゐるのであるが、實際吾々がかうした溫泉地を訪れて見ると、日本內地の溫泉鄕に較べてその景觀のいかに異つてゐるかを看取することが出來る。即ち日本の多くの溫泉地は形態の複雜で多様性に富み、之に依據する植物景觀の布置と相俟つて宇大類を見ない火山風景を造り擧げてゐるのが普通である。特に日本の火山に特有と言つて宜いのは裾野の優美な景色で加ふるにかうした山腹や麓には多くの溫泉が湧きあふれてゐる。吾々には溫泉とかうした火山風景は餘りにも親しみ慣らされた景觀である。然るに一度滿洲の溫泉地へ眼を轉じて見ると湯崗子・熊岳城・興城などその多くは漠とした沖積乃至洪積原であつて、變化に乏しい單調さである。かうした平地と彼方の緩やかな丘陵加ふるに遙かに峻峯高崖がその山腹を蔽ふ綠樹と山上の岩石の色彩とが映發し僅かにその單調を破つてゐるあたり、一面日本內地には見出すことの出來ない大陸的な豐かな擴りをもつてゐる。そしてこのやうな山塊も殆んど測り知れぬ遠い地質時代に生成された水成岩や古い花崗岩類よりなつて居り、日本の溫泉地方に多い火山形態とは全くその山姿を異にし、地殼の歷史の古さを物語つて居る。斯る地形的要素を考へると溫泉の湧出など思ひもよらぬことで、吾々のやうな地質學を專攻する者にとつても一寸初めは不可解に思はれるほどである。しかしかうした地域の岩石を詳細に觀察して見ると諸處に古い岩層を貫く迸入岩の多いことが窺はれる。そして多くの場合平地に於ては斯る岩石が砂・礫などのやうな新期堆積物によつて厚く覆はれその痕跡を隱蔽されてゐるのが常である。例へば興城溫泉を例にとるならば原生代と思はれる珪岩・粘板岩の累層を貫いて來る岩脈狀の花崗斑岩が諸處に露はれてをり、恐らくかうした迸入岩に溫泉の根元が關係してくるやうに推察される。そして意外にもかつての地質時代には斯る迸入岩によつて示されるかなり激甚な火山活動の存したことを窺い知るのである。通化省の撫松・濛江縣境に湯眼溫泉といふのがあるが、この溫泉の湧出箇所と地質との關係を注意して見ると、附近の岩石は石英斑岩と之を貫く之と同質の鑛物成分を有する花崗斑岩の岩脈よりなつてゐる。そして溫泉はこの岩脈の裂罅から湧出してゐる。勿論岩脈そのものを以て溫泉の供給源と考へることは出來ないが、少なくとも花崗斑岩・石英斑岩等の酸性火成岩を生成した岩漿の固結の末期の現象として溫泉を湧出し、その場

合に岩脈が溫泉を誘導する一種の輸送管の作用をなしてゐるものと推定されるのである。五龍背溫泉ではその地域は主として花崗岩よりなつてをるが、之を多數の綠色岩脈が貫いてゐる。そして主要溫泉脈は之等岩脈の幅湊せる箇所に相當してをる。以上述べ來つたやうに滿洲の溫泉は火成岩に關係あるものであつて、且つ普通世間に親しまれてゐる大部分の溫泉は中生代に於ける諸種の迸入岩などをもたらす岩漿迸發の餘波が今日まで持續され、かうした溫泉を生出してゐるものと推測されるのである。更に地史學的に斯る迸發の時期を吟味して見ると、ジユラ紀から白堊紀に亘つて極めて激甚に行はれた火山活動に係はさものと考へられる。只茲に注意しなければならないことは、五六連池火山溫泉や白頭火山溫泉群のやうに第三紀末乃至第四紀の比較的新しい火山活動に伴ふ溫泉であつて、地質時代の上から分類すると日本內地に最も多い溫泉の種類に包括されるものも存することである。從つて溫泉も高く白頭山火山溫泉群中には八〇度に達するもので活力の可なりあるものが今度の科學技術聯合部會の長白山學術調査團によつて報ぜられてゐる。即ち滿洲溫泉に斯る一、二の例を除いてはジユラ紀から白堊紀に至る火成岩に成因的關係を有してゐるものが多いやうに想像され、この點朝鮮の溫泉に類似性を示してゐる。只朝鮮の溫泉は白堊紀末に至つて甚激に行はれた火山活動に伴ふ迸入岩に關係があるものと言はれてゐるので、滿洲のものはこの時期より少し古い地質時代の迸入に因るものであらうと推察される。總括的に通覽すると滿洲の溫泉の大部分は日本內地に見られるやうな溫泉に較べ地質時代の著しく古い火山活動に伴ふ岩漿迸發に係はるもので、朝鮮のものには酷似性があるが時代的に少し早い時期の迸入岩に關係をもつて來るやうに推測される。從つて日本內地のやうに最近の火山活動の直接影響と認められる多種多様な溫泉とはその趣を異にし、溫度の如きも沸騰點に達する如き高溫度のものが無く五〇度から六〇度程度のものである。化學成分に於てもその溶解物の濃厚なものが極めて少なく一リツトル中の固形物總量僅かに二瓦以下を混在するに過ぎない。何れも無色透明で、日本內地の各處によくある特殊の强烈な臭氣あるもの、酸鹹苦澁あるもの、著しく溷濁したものなどの諸現象を呈するものは滿洲の溫泉中には殆んど認めることが出來ない。かうしたことも旣述のやうにその成因を地質學的に考へて見れば自ら領かれることである。滿洲の地史をひもどいて見ると地質時代に於て中生代の頃が最も火山活動並びに地殼變動の激しかつた時代で、日本內地の第三紀中葉以後の火山活動の激甚なることに比すれば時代的に著しい差が認められるのである。或學者は火山帶や造山帶は大陸からその周邊に大洋へ向つて波動的に移り變つてゐると說いてゐる。このやうに溫泉をもたらす根元に就いても兩者に甚だしい差異が存するのである。これで滿洲に於ける地質學上からの若干の考察を述べて見たつもりであるが、近來厚生運動の騷しく言はれるに及び滿洲の如く僅少な溫泉を更に開發するには何うしても科學的基礎を要するもので、斯る見地から地球物理學的方法に依つて溫泉の探査の試みられつゝあることは悅びに堪へない。一般民衆にとつても溫泉のやうな自然見象にも常に科學する敎養が望しいものである。（筆者は大陸科學院地質調査所副研究官）

十二月八日の倫理

遲鏡誠

西歐に於ける勢力均衡による制覇の角逐と新大陸發見に始まる植民地爭奪とが綯ひ合はされて編み出された近世までの世界史の中には東亞といふ獨立自存の世界はなかつた。世界の歷史が近世に入つて以來「黃禍論」とか「西洋の沒落」とか「東亞の興起」とかに言はれるやうに東洋はもう西洋にとつては單なる植地的存在ではなくなつて來た。併し世界史が現代に這入るに及んで世界はもう「黃禍論」とか「西洋の沒落」とか「東亞の興起」とか言ふやうな對立的な相對的なものでもなくなつて來てゐる。それは西洋中心的に考へて行くならば今は確かに西洋の沒落であらう。又、東洋を中心にして考へて行くならばそれも確かに東亞の興起であり、東亞の黎明が將に來たらんとしてゐる時であり、否、現に來つゝある時である。併し唯このやうに現象的に或ひは相對的に物を考へて行く時、所謂支那の春秋戰國時代の「勝者王侯、敗者賊」といふ風に勝つた者、興起した者は笑ひ、敗けた者、沒落した者は泣くといふ一勝ち誇つた者は勝利の歡喜を享樂し、そして如何にその勝利を永遠無窮に續けることに浮身をやつし、沒落者は如何に糊塗してその苟延殘喘とした餘命をつなぐに汲々としてゐる。そして本當の意味に於ての勝利は何を意味するか、勝ち負けは本質的に人類にとつて如何なる示唆があり如何なる價値があるかといふやうなことは勝者敗者共に忘れられがちのやうである。

一方に於ては一般的に言へば、戰時下に於ける列國のジヤーナリストは一見罪のやうに見える戰爭の合理性を各々自國の國民に如何に納得させるかに苦心してゐる。彼等ジヤーナリストの言ふことは根據がないではない。確かに今まで數千年來の人類史は現代の我々の目前に戰爭史、人類鬪爭史として繰り擴げられてゐる。又人間には生れつき鬪爭の本能を持つといふことも否めない心理學的事實である。又「倉廩足而知禮儀」といふことも非常に人心の機微に觸れ又經國濟民の要諦である。併しそ

れだから人類には戰爭が必然的なものである。人類は相戰はねばならぬと何時もかういふ安價な戰爭肯定論、哲學のない理論は恐らくこの人類世界を何時までも血で血を洗ふ世界に化するであらう。かういふ戰爭肯定論を言ひふらして相戰つてゐる人類自身を恐らく神はどこかの隅つこで笑つてゐるであらう。

かういふ歷史觀、世界觀からして、一見非常に自然的人間をして納得せしめるやうな所謂「個人主義」とか「自由主義」とか「最大多數の最大幸福」とか「社會契約說」とかゞ安々と發生して來るのである。併し本當の意味に於ての世界の平和、人類の幸福は決してかういふ歷史觀、世界觀の上には成り立たないであらう。

私は未熟ではあるが何時もこの世界は常に或るロゴスによつて動かされ、ロゴスに向つて進んでゐると思ふ。そしてこのロゴスに向つて進んでゐる過程の中に一種のデモニッシュな作用として—人の好むと好まざるとに拘はらず—戰爭が時々起ると解釋してゐる。そして戰爭はいくらこれを肯定しても「よりよきものを生まんがため正義と主張するため」の止むを得ざる最後の非常手段以上に肯定することが出來ない。そして聖戰の意味はこゝにあると思ふ。

だから單なる持てる國と持たざる國との間の戰爭は人類にとつて淺ましいものである。かういふ觀點より戰爭を見る限り慾望が人類を離れぬ以上これも亦世界の平和、人類の幸福は實現せぬであらう。

やはり世界史にはロゴスがあると思ふ。それが我が東亞に於ては、日本の明治維新以來、日淸戰爭、日露戰爭、滿洲事變、日支事變、そして大東亞戰爭といふ風に戰爭の倫理性が着實に進展して來たのである。さういふ感覺が生々と我々の身近に迫りつゝあるのである。

併し振り返つて見るに近世までの世界歷史は歐羅巴の歷史であつた。卽ち歐羅巴的「世界」であり歐羅巴といふ特殊的統一圈に代表された世界であつた。東洋なんかは事實上彼等の植民地又は半植民地であるか或ひは植民地たるべきものと見做されたものであり「世界」は歐羅巴諸國とその勢力範圍であつた。

だが世界史の進展に隨ひ現代の世界に於ては如何なる個別國家も最早單なる邊疆卽ち周邊的存在として偸安しつゝその植民化を俟つことを許されなくなり、開かれた世界のうちへいはば裸のまゝ投げ出されて世界內存在としての實存を戰ひ取るか滅びるかせねばならなくなつた。だから現代に於ては「東洋史」とか「西洋史」とかいふものも一つの單に閉ざされた歷史系として顯にされた其等は、今では恰も大海原に注ぎつゝある河流の如きものとなつた。その時文化や思想はもとより宗教すらも在來の封鎖性を否定されて新に開かれた世界のうちへ脫體せねばならなくなつた。言葉を換へて言へばそれは世界は本來的な意味に於て眞に世界として開かれた世界として世界の地平の上に次第に強い現實性を以つて開かれて來つゝあることを意味するのである。これは世界史のロゴス發展である。

今まで(近世まで)の世界は覇權の爭奪といふ形での征服的に支配し

支配されて來た。近世からは諸國の（ヨーロッパ的國家）の間のバランス・オヴ・パワー即ち勢力均衡の上に世界の表面的な平和を支へて來た。併し世界史が現代に至つてはその所謂今まで世界平和の原理であつたところの勢力均衡は最早原理として成立たなくなり、それを脫却し一歩前進して「新秩序建設」といふことに轉じつゝあるといふ事實に我々は注目しなければならぬ。これは世界史の一つの驚くべき飛躍であり目覺ましき前進である。そしてこの世界史が飛躍し前進してこの世界が眞に世界として開かれる動きの出發點は實に今までの世界—歐羅巴的世界—の中で唯一の非歐羅巴的強國としての日本が毅然決然として擡頭したことにあるのである。それの端的な表現は即ち疊には國際聯盟の脫退であり次には昭和十六年十二月八日の未明、ヨーロッパの代表的勢力たる英米に對する一擊である。その一擊が我々に世界史的轉換の直感を與へてくれたのである。

十二月八日は我々にとつては單なる感銘には止まらない。單なる感銘としては餘りに認識不足である。日本は明治維新以來、東洋の正義を混沌とし自分自身の中に含み疊から實現しやうとして實現し得なかつた東亞新秩序を今やそれは世界新秩序實現の先驅として力的關聯に立脚しつつ感々それが世界史的現實として我々の眼前に呈示して來たのである。それは來るべき時が遂に來たといふだけのことである。それは我々に感銘と感ぜしめるといふよりは寧ろ一種の無言の緊張として感ぜられるのである。厚大なる世界史が遂に我々の意識、自覺の中に倫理的にロゴス的に發展して來たのである。

併しこの場合現實的には日本の實力が最初に我々の目につく。如何にも世界史の現實は過去に於ても現代に於ても力的關聯なしには考へられぬ、一時は弱肉强食といふ事實も有り得る。今のやうな世界の全面に張り渡された力的關聯の中に自主的に自らの存在を護るために所謂「高度國防國家」の體制の必要はそこから必然的に生じて來るのである。この傾向は形式的には國家の—殊に指導的位置にある國家の自己防衞の延長であり、その權力圈の擴張である。そしてもしこの側面だけを抽象して見ればそれは單なる權力意欲の發露としか考へられぬかも知れない。

併し我々はかういふ力的關聯の底に却つて世界的なロゴス潛行が見られないであらうか。否この世界的なロゴスが力的關聯なしには果して現實的に考へることが出來るであらうか。

若しさういふ世界的な倫理性が見られないならば東亞の新秩序とか東亞共榮圈とかは單なる空語であり、權力意欲の僞善的假面に過ぎないであらう。併し乍ら東亞新秩序、東亞共榮圈の理念が東亞の植民地化の拒否、東亞が世界の水平に現はれ進んで世界の新秩序の運動に參畫する意圖を含む限りそれは世界に向つて提出された正義の要求といふ意味を拔きにしては考へられぬ。我々は東亞新秩序の運動が國家防衞であると同時に正義の要求である點にこそ始めてその運動に對する熱意の源を見出し得るのである。若しその運動が單なる權力意欲の現れに止まるならばそれは自己を納得させる力も永く自他を衷心より動かす力もない。固より支配されて來た。近世からは諸國の（ヨーロッパ的國家）の間のバランス・オヴ・パワー即ち勢力均衡の上に世界の表面的な平和を支へて來た。併し世界史が現代に至つてはその所謂今まで世界平和の原理であつたところの勢力均衡は最早原理として成立たなくなり、それを脫却し一歩前進して「新秩序建設」といふことに轉じつゝあるといふ事實に我々は注目しなければならぬ。これは世界史の一つの驚くべき飛躍であり目覺ましき前進である。そしてこの世界史が飛躍し前進してこの世界が眞に世界として開かれる動きの出發點は實に今までの世界—歐羅巴的世界—の中で唯一の非歐羅巴的強國としての日本が毅然決然として擡頭したことにあるのである。それの端的な表現は即ち疊には國際聯盟の脫退であり次には昭和十六年十二月八日の未明、ヨーロッパの代表的勢力たる英米に對する一擊である。その一擊が我々に世界史的轉換の直感を與へてくれたのである。

十二月八日は我々にとつては單なる感銘には止まらない。單なる感銘としては餘りに認識不足である。日本は明治維新以來、東洋の正義を混沌とし自分自身の中に含み疊から實現しやうとして實現し得なかつた東亞新秩序を今やそれは世界新秩序實現の先驅として力的關聯に立脚しつつ感々それが世界史的現實として我々の眼前に呈示して來たのである。それは來るべき時が遂に來たといふだけのことである。それは我々に感銘と感ぜしめるといふよりは寧ろ一種の無言の緊張として感ぜられるのである。厚大なる世界史が遂に我々の意識、自覺の中に倫理的にロゴス的に發展して來たのである。

併しこの場合現實的には日本の實力が最初に我々の目につく。如何にも世界史の現實は過去に於ても現代に於ても力的關聯なしには考へられぬ、一時は弱肉强食といふ事實も有り得る。今のやうな世界の全面に張り渡された力的關聯の中に自主的に自らの存在を護るために所謂「高度國防國家」の體制の必要はそこから必然的に生じて來るのである。この傾向は形式的には國家の—殊に指導的位置にある國家の自己防衞の延長であり、その權力圈の擴張である。そしてもしこの側面だけを抽象して見ればそれは單なる權力意欲の發露としか考へられぬかも知れない。

併し我々はかういふ力的關聯の底に却つて世界的なロゴス潛行が見られないであらうか。否この世界的なロゴスが力的關聯なしには果して現實的に考へることが出來るであらうか。

若しさういふ世界的な倫理性が見られないならば東亞の新秩序とか東亞共榮圈とかは單なる空語であり、權力意欲の僞善的假面に過ぎないであらう。併し乍ら東亞新秩序、東亞共榮圈の理念が東亞の植民地化の拒否、東亞が世界の水平に現はれ進んで世界の新秩序の運動に參畫する意圖を含む限りそれは世界に向つて提出された正義の要求といふ意味を拔きにしては考へられぬ。我々は東亞新秩序の運動が國家防衞であると同時に正義の要求である點にこそ始めてその運動に對する熱意の源を見出し得るのである。若しその運動が單なる權力意欲の現れに止まるならばそれは自己を納得させる力も永く自他を衷心より動かす力もない。固より

りその運動は世界の力的關聯の上に生起したものであり、その運動の實踐も權力の領域に足をつけざるを得ない。併し眞の實踐とはかゝる權力關聯の現實に立脚しつゝ然もそれを單なる權力關係終らしめず、その中に正義の理念を實現せしめ、それを理性的な倫理的秩序に化するものでなければならぬ。又單なる勢力關係も決して永續きはしない。正義は常に强者の道德でなければならぬ。

斯くの如く何時でも世界史を動かして行くものはランケの言葉を藉りて言へば即ちモラリッシュ・エネルギー、道義的生命力であると思ふ。かういふ力が今の新秩序建設期の政治的原理になると思ふのである。

吾人の記憶に亦新たなるフランスの敗戰も我々が既に「フランス敗れたり」の中で窺知し得るやうに、その敗戰の根本原因、敗戰の原因として最後に殘るものはやはり道義的生命力の缺乏、フランス國民が健全な新鮮な倫理感を失つたことであることは明かな事實である。我々はかゝる有爲轉變の時代相の中にも嚴として世界史のロゴスの嚴肅なる聲を聞き得るのである。

然らばかゝる世界史的立場より見たる新たなる世界觀の下に、如何にしてかゝる道義的生命を强靱にし健全で而も新鮮な倫理感を植ゑ附けることが出來るか、といふことは當然、最初に國家としての廣い意味に於ての國家教育の問題、國民陶冶の問題である。ヘルバルトではないがこれは教育の至上目的であり、根本原理であると思ふ。我々は教育問題についても改めてかうい立場より廣く見、深く思索し著實に實踐することが必要になつて來るのではないかと思ふ。

これについて序でに思ひ出されることは大東亞戰爭下に創刊された東亞教育協會の編輯になる月刊雜誌「興亞教育」の創刊號をこの前讀んで感じたことである。その中にある諸大家の集まる「興亞教育座談會」を一讀するに、中には勿論非常に傾聽するに値ひする意見があるが、中にまだ今のやうな道義性に立つ東亞新秩序を建設して行く途上に於てかういふ性質の座談會の中にまだ斯くの如く低調で時代錯誤的な物の考へ方が讀み取られるといふことは吾人の非常に遺憾とするところである。（興亞教育創刊號六十七頁澤瀉氏の談）少くとも、それは日本自身の行動に對して誤解を招き易い缺點を免れることは出來ない。

これに反して我々の看過してはならないことは、否我々の注目を惹いてゐるのは、大東亞戰爭勃發以來、日本の知識人が代表的言論機關に於て東亞の道義性を明確に意識し世界史のロゴスを自覺する目覺しき擡頭である。思想又は世界觀といふやうなことは我々にとつては戰爭と同じ

純潔を護るは近代人の志向……であり、また、如何に速く不純から脫却し得るかが、切實な要望であればこそ、本劑の特つ効果と使命が果される譯です。
二四錠入
一治淋内服藥一
ギーユ・サイド

く、香戰爭より以上に一つの重大事であるからである。

左にその一端を掲げば

○「世界史的立場と日本」（座談會）（中央公論新年號）
○「民族論の新方向」西谷啓治
○「東亞民族の問題」高田保馬
○「東亞民族の世界的使命」小松堅太郎（以上日本評論二月號）
○「新しき人間の形成」西谷啓治（改造四月號）
○「大東亞建設の倫理性と歷史性」（座談會）（中央公論四月號）
○「歷史の推進力と道義的生命力」高山岩男（中央公論十月號）
○「國防國家の倫理」黑田覺（中央公論十月號）
○「新しき倫理の創造」座談會（日本論十月號）

などの如くである。

これは銃後に於ける日本の知識人の目覺しき活動の一斑であるが、これよりももつと我々を感動せしめるものは前線の皇軍が檜林彈雨の下、兵馬倥傯の間に寸暇を利用して「華陰」を讀み「源氏物語」を講義し、「正法眼藏隨聞記」を讀み「歎異抄」を讀み、內村鑑三氏の「後世への最大遺物」を讀み、エツケルマンの「ゲエテとの對話」を讀み、クラウゼヴイツツの「戰爭論」を讀み「キエルケゴール」を讀み「ニーチエ」を讀み、澁石の「心」「門」「行人」などを貪る如く讀むことである。

生死の網を潛つてゐる緊張した造次顚沛の環境の下にも彼等は又も或るロゴヤをひたむきに求める姿が我々の眼前に躍動してゐるではないか。歷史的世界の底のロゴスの響きが多年の混沌を通して今や明々白々に建設の先端的實踐者の意識の中に自覺されてゐるではないか。何といふ強味であらう。

勿論我が滿洲國は以上論じて來た東亞の倫理性に根ざしての自覺的に意識的に建設された道義的國家であることは今更言ふ必要はない。只それが單に國是とするだけでなく特にこの複合民族の國家に於て西洋的な利害關係といふやうな結合以上に出なければならない。そのためには複合民族間に確乎とした倫理的秩序を確立しなければならぬ。例へば建國精神の一つである民族協和をとつて見ても、建國より今まで異民族間に於て確かに幾多の美談義擧を見聞して少なからず我々を感激せしめてもゐるし、又、我々に民族協和の可能性を實證的に示されてゐるが、併し反面に建國十年にして未だに民族協和そのものに對する認識、見解の間にもまだ獨善的な自己滿足より來る相違を認めざるを得ない現狀にあることはどうしたことかと思はせられるものである。それが下行して民族間にまだ〳〵非倫理的なデグザグを見聞しないでもない。

滿洲國は我が東亞の傑作であると同時に、これはまた今までの歐羅巴的世界にとつては一つの問題作である。今後は日本の道義的指導力によつて我が滿洲國を通じて世界に向つて世界史の倫理性をもつと〳〵實現して行かなければならないと思ふ。

そして我が滿洲國はこの倫理性以外にその建國の意義と存在の價値を見出し得ないであらう。

世界石油戰の一端を衝く

伊藤硯郎

ドイツ軍の進擊目標はモスコーでもない。レニングラードでもない。コーカサスであることは、すでに、萬人の見るところであつた。コーカサスには石油がある。美人がゐることは別であるが。

石油の話になると、大抵すぐに、產油量や消費量の統計表が出てくる。元來さういふ統計は、それらの數字とその變化から過去の情勢を知り、現在を推量して將來を考へ、それでもつて計畫を立てるところに價値があるので、それは平時ならば大體の見當はつくけれども、世界が二つに分れて戰つてゐる現在では、正確な數字の入手が困難であるといふことゝ情勢の變化が極めて烈しいといふことなどからして、たとへ昨年度の數字があつても、明年の計畫はおろか、本年の情勢もなかなか推定ができないのである。

石油の消費量を、戰時に平時の二、三倍としても、二倍か三倍かは大へんな違ひであるし、又實際には四倍にも五倍にもなつてゐるかも知れない。大體の見當はつくとしても、それも大體の大體位になつてしまつて、こまかい數字は意味もなく、役にも立たないので、大ざつぱな數字をあげながら、話をすゝめたいと思ふ。

昨年度の世界の石油產出高を三億噸とつかむのが現在の常識になつてゐるが、本年はどうであらうか。すでに昨年度でも、米國以外の諸國は減產になつてゐたのであるから、まだ南方油田が復興最中で、ドイツがコーカサスに軍を入れた現在では、なほ〳〵世界の六〇%以上を產出する北米合衆國、或は北米南米を合すれば世界の七五%以上を制してゐる諸國が、どんなに增產にがんばつても、やはり減產はまぬかれまいと思

はれる。しかもその米國も戰爭の影響で減産してゐる樣であるから、全世界としては勿論一割以上は減産になる筈である。

戰爭で石油の消費量はぐん〳〵增加するに反して、生産は減つてゐるが、それを桁違ひに大きい米國などを計算に入れて心配してゐたのでは話にならぬので、敵が困るのは思ふつぼで、要は樞軸國側が支配し、手に入れることの出來る石油がいくらあるか、それで戰爭がまかなつて行けるかどうかを考へなければならないのである。

ドイツの現在一箇年の石油消費量を、ざつと一千萬𥫱と見積つて、全歐洲の生産高八百萬𥫱を全部もつてきても足りるわけがない。これに空襲下にあつても尙增産されようとさへしてゐる人造石油三百萬𥫱を加へれば、どうにか追ひつくとしても、消費は增す一方で、生産は減じたのでは、勢のおもむくところ、コーカサスの三千萬𥫱にならうとする石油に鉾がむかざるを得ないのである。

大東亞共榮圈内の、戰前の石油生産高は、北樺太の百萬𥫱を除いて、南方諸島の九百萬𥫱、ビルマの百萬𥫱を加へて、合計一千萬𥫱。平時のこゝの消費量一千萬𥫱。この數字ならばどうにかやれるとしても、戰爭遂行中の現在、これでやるかやらぬかは別としても、足りるか足りないかは火を睹るよりも瞭かである。石炭液化の研究に從事してゐて、その困難さに、時には、石炭液化よりはボルネオへ、と弱音をはいた事も無いではないが、大東亞諸國全體を考へる時、まだ〳〵とても樂觀も弱音も言つてはをれないのである。

近頃燃料問題をめぐつての記事が多く見受けられる。結構なことである。しかし大ざつぱな數字だけで燃料問題が片づくとは誰も思つてもゐない。一寸考へても、破壞された油井や精油所の修理復興、その輸送。それ〳〵の專門家に信頼はするとしても、容易な仕事ではない。又一方その數字も、量と質とをにらみあはして考へなければ價値がないのは、滿洲に石炭がいくら埋藏されてゐるといつても、實際には不足してゐるのは事實で、又特に製鐵用炭が欲しいのも事實であるといふ例からもわかると思ふ。

自動車用の燃料は勿論、航空機用の高級揮發油や潤滑油、或は艦船用のヂーゼル油等が、果して東亞共榮圈内の一千萬𥫱の中から十分にまかなへるであらうか。油はあつても、欲しい油がなかつたなら何にもならぬではないか。

これにはまづ石油の質を檢討してみなければならぬのであるが、この材料がまたなか〳〵手に入らない現狀であるので、さし當りのない一九三八年オックスホード版の石油科學(ザ・サイエンス・オブ・ペトロレアム全四卷)を參考にして、最近新聞紙上に戰況情報の中に出てくる地方の石油について解說して見たいと思ふ。

石油とは何ぞやと開きなほられると、一寸誰でも返答が出來ないと思ふ。これを「いし油」と讀んでみても、「いしたん」程の味も出ないが、とにかく石油とは石油のことであるといつておく。石油は種々の炭化水素化合物の混合物で、その化學的成分から、便宜上原油をパラフイン基原油とナフテン基原油と、この中間の混合基原油の三つにわける。勿論これは嚴密なものではないが、パラフイン基原油は、その名の如くパラフイン炭化水素が多く、蒸餾殘溜物には石蠟が多量である。米國のペンシルバニア州、カナダ等のがこれに屬する。ナフテン基原油はナフテン炭化水素が多く、蒸餾殘溜物にはアスファルト狀のものが多いのでアスファルト基原油ともいはれる。日本・バクー・カリフオルニア等のがこれである。又東部ボルネオ産のものゝ樣に、ベンゾール系の芳香族炭化水素を多量に含んでゐるものを芳香族原油といふこともある。

原油を蒸餾して、例へば航空機用揮發油として攝氏一五〇度までの溜分が何%、自動車用に二二〇度までのが何%と計算されても、その揮發油の質によつて原油の評價もちがつてくるし、又硫黄などの有害物があつて、精製に手數がかゝるかどうかも評價に關係がある。尙ナフテン基揮發油はパラフイン基揮發油よりも比重が大きいから、或る揮發油の比重が同じといつても、パラフイン基の方は沸點が高いところまで含んでゐることになる。

これだけの前置をして、獨ソ戰の山、コーカサスの油田をしらべてみる。

バクー油田

コーカサス否ソ聯の油田中の王樣はカスピ海の西南岸アプシエロン半島のバクーである。年産二千四百萬𥫱、埋藏量ざつと十億𥫱。ナフテン基原油として有名であるが、地域により、層によつては、パラフイン基のもある。

硫黄分は少く、〇・三%を出ない。攝氏一〇〇度以下の溜分は比較的少い。揮發油はすべてナフテン基で、二〇〇度までの溜分で、六五%のナフテン族、二五%のパラフイン族、八%の芳香族といつた樣な性狀である。これを航空用揮發として一五〇度までにすると、芳香族がずつと減つて二%、パラフイン族が四五%となり、オクタン價に低い樣に見えるが、實際には比較的高く、七〇から八〇を示してゐる。これは、このパラフイン族の中に、オクタン價の高い所謂イソ・パラ

フインが多い爲である。三〇〇度までの溜分の燈油には芳香族が增し、オクタン價は三〇—四五。

つけたりに、バクーの西二百粁にナフタラン油田がある。といつても大したものではなく、一日二、三屯といふ貧弱なものであるが、この油は、リユーマチス・坐骨神經痛・濕疹・發疹の皮膚病から、婦人病・火傷・丹毒によろし、と効能書がならべてある。比重は〇・九五で重く、揮發分は無く、硫黄少く、放射能も低く、まづ何が効くのかは明かでない様である。

グローズヌイ油田

北コーカサス、バクーに次ぐ油田である。年產四百萬屯、埋藏量十億屯か。

新舊兩油田があり、新油田の方は石蠟分が五%近くあり、舊油田の方は大體石蠟分が少いが、層が深くなると石蠟分を增してゐる。石蠟分の少いものゝ方が揮發油分が多く、二〇〇度までの溜分は二三—三〇%である。揮發油は、バクーのよりは芳香族が多いと同時に、パラフイン族も增してゐる。オクタン價はバクーのより低く、一五〇度以下の溜分で、五八位である。これは正パラフイン族が多いためで、このイソと正との比はグローズヌイで〇・六七對一で、バクーのでは一・三五對一である。

のと大體同量のパラフイン族を含有するが、バクーのよりオクタン價が低く、一五〇度以下の溜分のもので、六〇である。イソ・パラフインと正パラフインとの比はグローズヌイのより更に低くなつて、〇・四七對一である。燈油のオクタン價は三一で、丁度バクーとグローズヌイとの間にある。以上の三大油田がコーカサスの主要油田であるが、コーカサスが戰場になつてゐる現在、この他のソ聯の油田の中で最も重要視されてゐるのはウラル・エムバ油田である。

エムバ油田

カスピ海の東北岸、ウラル川とエムバ川の流域、五百粁に延びてゐる埋藏量二十億屯といふ大油田である。一九三七年にはまだ產油七十萬屯であつたが、將來を期待されてゐた。

こゝの油は最近までは揮發分が少いと思はれてゐたが、新しい油田では、揮發分三五%、燈油分一九%のものがある。揮發油の成分は、ソ聯石油中で一番芳香族が少く、ナフテン族が多く、オクタン價は七〇—八〇に及ぶものがあり、燈油分でも五七のオクタン價を持つのがある。

エムバ油田の北方、ウラル山脈の西側に、ウフアの近く、ベルムの近く、ペチヨラ川の源の地方等に油田が存在してゐる。これも現在の情勢ではソ聯にとつて大切である。この油は硫黄分多く、アスファルト分も石蠟分も多い。揮發油の含量は大體二一—二六%であるが、その化學成分は產地によつて大分相違して、芳香族が實に四六%で、パラフイン族が三〇%のもあれば、又芳香族が四%しかなく、パラフイン族が六六%といふのもある。

この他、ソ聯には北樺太の他に、カスピ海の東南岸トルコメニアン地方、中央アジアのコーカンドの近くのフエルガナ地方等にも油田があり、又油徵を示してゐるのが所々にあつて、將來はどう發展するかわからぬが、目下のところではコーカサスに比すべくもない。問題はコーカサスと同時にイラ

治淋內服藥
ヂユーサイド
二四錠入
大陸感染！
こぢらせてはダメ！
發賣元 株式會社 滿洲柳韓公司
大連 柳韓洋行

シとイラクである。

イラン

北はトルコとの國境から南ペルシヤ灣に到る廣範圍の油田である。年産一千萬㎘。

混合基原油で、硫黄が一%あり、又硫化水素の多い瓦斯を多量に溶しこんでゐる。三〇%の揮發油と一五%の燈油を得られる。揮發油中には一〇%の芳香族があり、燈油中には一七%ある。又これら中には硫黄化合物を多量に含むから精製を十分にしなければならぬ。揮發油のオクタン價に低く、五二位であるが、輕油のセタン價は高い。

イランの南ペルシヤ灣にバーレン諸島がある。年産百萬㎘混合基油で、硫黄分が二%、揮發油分は三〇%、オクタン價四二である。

イラク

年産四百萬㎘。メソポタミア油田の中心地キルククを發して、シリア、トランスジョルダンを貫通して地中海に達する送油管が一九三四年に完成して、歐洲に販路を得た。混合基原油で、硫黄分が多く、二%ある。揮發油分三五%、燈油分一五%で、揮發油分には硫黄分が多いから精製を要するのはイランのと同樣である。揮發油は芳香族が少く、オクタン價は低く、五〇位で、輕油はヂーゼル油として良好である。

印度洋を東へまはれば、いよ〳〵大東亞共榮圈にはいる。

ビルマ

印度とビルマを合して百三十萬㎘といつても、印度は、インダス川の上流パンジヤブ地方と、ブラマプトラ流域のアッサム地方とに油田を持つてゐても、大したことはなく、結局はイラワヂ流域のビルマ油田が主である。

この油田の最大のものはエナンヤンで、これに次ぐのが、この北のシング、更に北のエナンヤト等である。混合基原油で、硫黄分は少い。揮發油分一八%、燈油分三二%、航空機揮發油のオクタン價七七、自動車用のが六九、といつた樣な品質である。

南方諸島の油田

これについては、すでに建設の記事と共に、種々の詳報があるので、こゝではざつと特徴を拾つてみる。

大體に油が輕く、セラム島の硫黄分が二%あるの他は、一般に硫黄分が少いから、精油もらくで、航空機油としても都合がよい。スマトラでは、南部から北部にゆく程油が輕くなり、アチエー原油では揮發油と燈油合して七〇%以上にもなるのがあるのは有名である。

前にも述べた樣に東部ボルネオ原油には芳香族が多く、三九%にもなり、ナフテン族三五%、パラフイン族二六%を含んでゐる。この芳香族化合物中にトルエンが多いので、これから爆藥として所謂T・N・T（トリ・ニトロ・トルエン）をつくるために、獨佛英等の諸國から需要が多かつた。ボルネオでも、タラカンのものはバリクパパンのより多少芳香族が少くなり、三二%になる。さらに北の方へいつてミリ原油では芳香族は一〇%以下になつて、ナフテンが非常に多くなる。

ジヤワの原油は一般にナフテン族が多く、スラバヤのは五〇%になり、バクー原油に似てゐるさうである。

最後に、各地の原油からどの位の揮發油がとれるか、一括してみる。スマトラ原油で七—六〇%、ジヤワで一三—二二%、東部ボルネオで二〇—三五%、北部ボルネオで二一—四四%、セラムで七%。燈油と輕油を合したもの〻收量は、スマトラで一〇—二五%、ジヤワで五七—五〇%、東部ボルネオで四五%、北部ボルネオで三二—二五%、セラムで三八%といふ樣な工合である。

これは表にした方が見易いけれども、表は見るにはいゝが讀むのには厄介なので、書き流してみたのである。又數字は大小を具體的に示すには都合がいゝが、これを讀んで大小の觀念を得るのにはそれ相當の知識を必要とするのではあるがそれかといつて、數字を言葉で表はすのは大へんなことなので、自然と數字で說明する樣になつた。とにかく、讀みづらい數字の羅列もこのあたりで切りあげようと思ふ。

以上あげた石油産地の他には、米大陸と歐洲を除いては、エヂプトとサウヂアラビヤに少しばかり出るが大したものではない。

濠洲にも油徴はあるが、産出といふところまではいつてゐないから、賴るのは米國である。

ドイツがどこまでいつて冬ごもりにはいるか。ソ聯がどこまでコーカサスを守るか、新油田による增産がどこまで出來るか。日本海軍の印度洋の活躍と、北アフリカ戰線とをにらみあはして、イラン・イラクの石油を英國が果してどの程度にまで利用出來るか。アメリカの石油をこちらへ持つて來ることは出來ないにしても、敵側にもそれを利用或は活用出來ない樣にするのは不可能なことであらうか。

問題はいくらもあらうが、現在吾々の第一の關心事は南方油田の復舊と開發である。そしてそれは着々と進んでゐるにちがひない。はるかに感謝と聲援を送つて筆を擱く。

崩れゆく米英國群家

軍擴に狂奔する米國

戰時體制へ移行

米國が名實共に交戰國となつたのは言ふ迄もなく日米開戰以來のことであるが、米國は開戰前久しい以前から、對英援助其他によつて、實質的には頗る積極的な交戰國的役割を演じてゐたのである。從つてルーズヴエルトが云つた如く、米國は「戰ひつゝ戰爭に入つた」のであり、昨年十二月八日、日米兩國間に戰端が開かれる前から或る程度の戰時體制は整備されつゝあつた。

しかしながら我國を始め樞軸側諸國に於けるがごとく、國家總力戰的見地から、國家機能のあらゆる部門に亙つて、戰時體制が整備されてゐたのに比較すれば、米國のそれは全く比較にならない。開戰後、一時米國が全國的に非常な混亂に陷つたのは、この間の事情を雄辯に物語るものであるが、しかしこの混亂も時を經るにしたがつて漸次解消し、米國は次第々々に戰前のそれとは意味の異なつた戰時體制に移つて行つた。

米の軍擴工作

米國の戰時體制への移行は、政治、經濟、社會のあらゆる分野に於て頗る顯著だつた。光の街といはれたニューヨークのブロードウエイなどが眞暗になつてしまつたり、米國の文明を代表する自動車が、タイヤやガソリンの制限で街頭から姿を消してしまつたりした米國の戰時風景のうちにも、我々は平時から戰時へ移行した米國の姿を見たのであるが、然しなんと云つても米國の戰時體制への移行の主動力をなしたのは、厖大な米國の軍擴工作であり、これに伴ふ國內經濟の再編成だつた。

ルーズヴエルトは開戰直後、本年一月の議會に於て、米國軍擴の當面の目標として飛行機六萬機、戰車四萬五千臺、商船八百萬噸等々を本年末までに完成する計畫を發表した。これ等の數字が如何に大袈裟なものであるかは、例へば開戰當時の米國の飛行機年產能力が二萬臺餘り商船のそれが百萬噸そこ〳〵であつたことによつても窺はれよう。

豫算の數字も亦厖大な額に達してゐる。一九四二年度（自一九四一年七月至四二年六月）軍事豫算は百九十四億一千萬弗であつたものが四三年度分としては一擧五百二十七億八千六百萬弗が計上され、更に四月に至つてはこの數字は六百七十億弗に改訂された。然しこの豫算は單なるめやすに過ぎず、實際に支出される戰費はこの豫算數字を遙かに突破してゐる。即ち本年一月頃には、一箇月の戰費約二十億弗と推定さ

れてゐたものが、五月には三十五億弗となり、更に最近米財務長官の言明した所によると、現在米國が費消しつゝある戰費は月六十億弗、即ち一日平均二億弗となり、米國の戰費が年一千億弗に達するのも遠い將來のことではあるまいと豫想された。

米陸軍の本格的擴充工作は一九四〇年九月の徵兵法實施を以て開始されたが、その兵力は昨年十二月當時に於ても百六十萬乃至百八十萬と稱されるに過ぎなかつた。これが先づ本年末までに三百六十萬の大陸軍建設の目標が樹てられ續いて四百五十萬計畫に改められ、最近ではゆくゆく一千萬の大陸軍とする目標がたてられてゐる。米國の軍備で、諸列强に比し最も見劣りするのは陸軍である。從つて陸軍の擴充が米軍擴工作の主眼となつた。本年六月現在に於て、一九四〇年六月以降計上乃至提案された軍事關係豫算總額千九百九十七億弗のうち、陸軍關係費が千二百三十二億弗に達してゐることのみでも、右を明らかに物語つてゐる。

米海軍は開戰前から所謂兩洋艦隊の完成を目指す厖大な建艦計畫を進めてゐたが、開戰後のこの計畫は更に大規模なものとなつた。建艦計畫の詳細內容は、開戰以前から發表してゐないので、その的確なことは不明だが、當局の言明に徵しても、現在進行中の建艦計畫が、現有艦隊勢力を數倍にまで擴大せんとしてゐることは略想像し得る。日米開戰後、眞珠灣空襲をはじめとして、日本海軍航空部隊の擧げた赫々たる戰果によつて、米國に於ても今更のごとく、海戰に於ける空軍勢力、延いて航空母艦の重要性が再認識されるにいたり、新建艦計畫ではその最重點が航母の建造におかれ、厖大な航母建艦計畫が進められると共に、急場の間に合せに、建造中の他艦種の改造ならびに商船の母艦改裝等も非常に大きな規模の下で行はれてゐるやうだ。

物資不足とインフレ

かゝる厖大な軍擴工作、巨額な戰費の支出が米國の經濟に廣汎且深刻な影響を與へたことは勿論である。そしてこれは具體的には、民需產業の軍需產業への轉換、各種の物資不足、延いて物價騰貴竝に惡性インフレの脅威等々となつて現はれて來た。

民需から軍需への轉換に就いて、本年三月末米商務省の報告によると、一九四一年に於ては米國の全生產額は金額にして一千百五十億弗と推定され、このうち軍需生產と見らるべきものは僅かに百三十億弗に過ぎなかつた。然るに、米國の企圖する軍需生產を達成せんが爲には、一九四三年會計年度に於ては、全生產額を千三百二十億弗に增加させると共に、民需は逆に千億弗見當から八百億弗へ減少させなければならぬ計算であつた。軍擴工作に益々拍車がかけられ、戰費亦飛躍的に增大した現在では、この軍需增產、民需減產の現象は愈々顯著になつて來たであらうことが想像されるのである。

開戰後間もなく、鐵、銅、アルミニューム其他の金屬製品には禁止的にも近い廣汎な民需制限が實施された。この他羊毛製品などを含めて民需の制限されたものは實に非常な廣汎圍に及んでゐる。これ等のうちには米國自體としては

決して不足しない物資を原料としたものが多數含まれてゐるのだが、いづれも民需を犧牲とした軍需物資の爲である。かくて從來の民需產業は相次で、軍需產業へ轉換して行つた。世界一の規模を誇る米國の自動車工業も擧げて航空機工業に轉じたのである。米國の物資不足はこれを三つの範疇に分けることが出來よう。第一は前述の軍需優先、民需犧牲によつて生じた物資不足である。第二は米國內に於て產せず、しかも國外からの供給も杜絶した絕對的な不足物資である。これにはゴム・錫・生糸・キニーネ等が擧げられる。第三は輸送手段の不足によつて生じたもので、米國東部諸州に於けるガソリン不足などはこの例である。これ等の物資不足が米國の軍需生產其他に與へる影響は相當甚大なものがある。

民需制限、物資不足と關聯して、米國の戰時經濟に深刻な脅威を與へてゐるのはインフレ問題である。戰費は非常な勢で增大してゆく。しかもその大部分は赤字で賄はなければならない。一方軍需景氣で國民所得も增加し、本年度は米國としても未曾有の一千億弗を突破するものと推定され、これに伴ひ本年の民間購買力が民需供給力を超える額は百七十億弗に達するだらうと豫想された。こゝへもつて來て民需制限であり、物資不足なのである。インフレに進む條件は悉く頭を揃へてゐると云つていゝ。

米政府當局がインフレ防止策として採つたのは先づ增稅による國民購買力の抑制である。昨年以來相次ぐ大增稅が行はれたが、現在も米議會には三十餘億弗の稅收を目標とする「勝利稅」法案、六十億弗の增稅案等が上程されてゐる。次は物價の抑制政策で、本年五月には、三月の最高價格を標準とする諸物價の釘附けが行はれた。然しこれだけでは滔々たる物價騰貴、インフレ激化の大勢を抑止し得ず、遂に今回インフレ抑制法の制定となり、廣汎な權限を有する經濟安定局の新設を見るに至つた。

輿論の動向

開戰以來米國の輿論は少く共表面的には、米國の樞軸國に對する戰爭を是認し、ルーズヴエルトの戰爭政策を支持してゐる。戰前大いに活躍した孤立主義者、平和論者も殆んど全く影をひそめ、大部分は轉向してしまつた。彼のサンドバーグの如きも、開戰と共に轉向を聲明して今では航空機製造工業方面で重大な役を買つて出てゐる。ギャラップ輿論研究所の調査によれば、ルーズヴエルトの戰爭政策を支持するもの開戰前には七割二分だつたものが、本年五月現在では七割八分と增加してゐるのである。

米國政府が輿論政策で最も頭を惱ましてゐる問題は、米國民に眞劍味の足りない點である。比島が日本軍に占領されようとも、米海軍が東亞水域で敗戰に次ぐ敗戰を重ねようとも、米本土だけはまだ〳〵大丈夫だといふ觀念は一般米國民の頭からは依然として去り難く、歐洲戰局に於ける聯合軍の窮境も、對岸の火災視する傾向が今尙強いのである。

この眞劍味の足りないといふことは、米國の如き經濟的にも、地理的にも惠まれてゐる大國が、戰爭に負けるやうなことは決してあり得ないといふ妄想から出發したものであるが、それだけに米國の窮境が今一段と惡化すれば、これは容易に敗北主義、反戰主義に轉ずる可能性を藏してゐる。

前記のギャラップ研究所が蒐集した今次大戰を如何に名附けるべきかといふ答にも、米國民の戰爭を茶化してゐる氣分を物語つたものが見受けられた。例へば「おせつかひ戰爭」「きちがひ戰爭」「ルーズヴエルトの戰爭」「ギヤングの戰爭」「大殺戮戰爭」等々がこれである。政府當局が頻りに今次戰爭の重大性、米國の直面してゐる危機を說いて、國民士氣の鼓舞に狂奔してゐるのは當然だが、かゝる米國民の戰爭意識は、米國の持つ最大弱點の一つとして擧げ得るであらう。

土壇場に喘ぐ英國

（坂口恭平）

對日政策の基調

米國が日本の實力を過少評價したことが、結局、日米戰を誘發せしめる重大な要因の一つとなつた。同樣の認識不足は英國の場合にも行はれ、前東京駐在英國海軍武官の如きは、開戰二箇月前にロンドンに歸朝したとき、ある午餐會の席上で、支那事變までに四年有餘を經た日本に、米英を相手に廻す戰意、戰力はないと放言して、英國の對日認識及び政策を重大な誤診に陷らしめてゐる。

勿論、英國は日本との戰爭を決して欲してはゐなかつたであらう。ロンドン外交界の消息通の一致した意見としては、英國はドイツと開戰以來、なるべく早く米國を參戰せしめる一方、日本はできるだけ局外中立に置かうといふのがその外交政策の基調をなしてゐたと言はれる。少くともこの根本方針は、一昨年九月の日獨伊三國軍事同盟條約締結の頃まではつきりしてゐた。しかしこの頃から英國外務省の態度は、たとへ英國が日本に對し融和政策で臨んでも馬鹿にされるだけで、英國が一歩後退すれば日本は一歩進んで來る、どうせ結果は同じことになるのだから、寧ろ强く出た方がよい、といふ風な考が强くなつて來た。

昨年七月、米英が資金凍結を斷行して、事實上、日本に對し宣戰したとき、この樣な措置が遂には最惡の場面を誘致するかも知れぬとは豫想しながらも、英國はやはり內心まさかと見縊つてゐたのである。

從つて日米交涉に對しては殆んど拱手傍觀、凡てをルーズヴエルトに一任してゐた形であつた。

それだけに日本遂に開戰の報は英國に深甚の衝撃を與へ、しかも劈頭プリンス・オヴ・ウエールズとレパルスの二戰艦を一瞬に喪失したことは、外交上及び軍事上、共に英國政府の致命的失敗と云ふの外なく、チヤーチルも愕然色を失つたのは無理もなかつた。

ぐらつき出した自信

その後、東亞戰局における英軍は、マレー、ジヤワ、ビルマ各地に於て敗戰に次ぐ敗戰を重ね、百年の歷史を有つ英帝國主義の重要基地は

片つ端しから失はれて、濠洲も今は本國鎭むに足らずと專ら米國に依存し、インドは周知の通り蜂の巢をつゝいた樣な擾亂を重ね、今や數世紀の世界支配を誇る大英帝國も秋風落莫の感を深くしてゐる。

最近には東部戰線に於けるソ聯の危機切迫に際し、所謂第二戰線設定に關する切實なスターリンの要請に對しても、英國は一向に反應を示す氣配もない。

一體、米英聯合軍がドイツ占領下の歐洲に上陸して、第二戰線を開設するのには、どれ位の兵力を要するものであるか。英國の軍事專門家は、若し聯合軍が本格的に第二戰線を開くとなれば、やはり三十箇師や四十箇師は必要とすると見做してゐるが、單に一時的にドイツを牽制する程度のものであれば、せいぜい五、六箇師團もあれば可能と見てゐるらしい。

英國では一箇師團の全裝兵員を輸送するには、五千トン級の船舶約四十隻(約二十萬トン)を必要とするといふことになつてゐるから、假に三十箇師團を送るとすれば六千萬トンを必要とする譯で、第二戰線の實現上、一番の障碍となつてゐるのは、やはり船舶問題であるが、しかし五箇師團程度のものならば、これは決して不能ではなく、ソ聯側が「勇氣と決斷の問題だ」と齒がゆがるのも、あながち無理はない。

それにも拘らず、英國が未だに躊躇逡巡してゐる所以は、畢竟自信がないのであつて、ノールウエー、ギリシア出兵の前轍を再び繰り返すまいと自重してゐるのであらうが、特に大東亞戰勃發以來、英國の立場は急激に惡化し、さしも傲岸な英國民の自信も、漸くぐらつき出したかの觀がある。

英國の連戰連敗は、必ずしも今に始つたことではなく、ダンケルクの敗走以來、最近の北阿戰況に至るまで、殆んど負け續けであるが、しかも尙ほ「英國はいくら連敗しても最後の一戰には必ず勝つ」といふのが從來彼等の常套句であつた。この大英帝國が負ける等とは全く考へられないといふのが、彼等の根强い自信だつたのである。

それが最近には新聞、雜誌等の論調に見ても、この樣な調子では、或は英國は亡びるかも知れない、といふ深刻な不安を英國人が持ち始めた氣配が明かに察知され、言論機關は屢々、英國政府及び國民のひとり勝手な自己陶醉について、その危險を指摘し警告を發してゐるのが注目される。

船舶問題

然らば英國の抗戰持續力は、果してどの程度に現在衰微してゐるであらうか。これは矢張り相當愼重な檢討を要する問題で、一口に「英國の沒落」を言ふは易いが、少し仔細に英國の現狀を觀察するとき、我々も亦、徒らに安易な自己陶醉は決して許されないことを發見するであらう。

島國英國が現在當面する最大の難關は、何と言つても海上輸送問題である。英國船舶の損失は昨年六月以降、發表禁止となり、正確な數字は判明すべくもないが、開戰以來今年五月迄に擊沈された米英聯合國の一千トン以上の船舶は、大體一千二百萬トンと推定され、英國にとつては今や前大戰に於ける一九一七年度の最大危機に匹敵すると言はれてゐる。

また英國の造船界は、大戰以來商船竝に軍艦の改裝、修理に忙殺され、その造船能力の半をこの方に振り向けねばならぬため、新造船は甚しく阻害され、激化する船舶擊沈の補充に非常な困難を感じてゐる。

しかし乍ら英國はそれでもまだ今年五月末現在、一千トン以上の船舶約一千七百萬トンを有して居り、內三百萬トンは軍用に徵用、二百萬トンは植民地竝に自治領の使用に提供してゐると云はれるから、結局なほ一千二百萬トン餘りを保有してゐる譯である。

尤も專門家の見解によれば、この內護送船團等による能率低下を約六百萬トンと見積らねばならぬから、結局現在の輸送力は平時の六百萬トン見當にしか當らないことになる。この六百萬トンの船舶かどれ位の貨物を輸送し得るかといふと、大西洋を大體一年五往復すると見て、一箇年の輸送能力は約四千萬トン見當といふのが、專門家の推定である。

ところが駐米大使ハリファックスは最近、米國に於て「英國は戰爭資材竝に食糧品を一箇年約三千萬トン乃至四千萬トン輸入せねばならぬ」と述べてゐる。卽ちこれによつて見れば、現在の輸送狀況は大體、英國の生存保持に最少限度の必要量を供給し得てゐるのであつて、ドイツ海空軍の目覺ましい活躍の結果、情勢は日一日惡化の一路を辿つてゐるとは云へ、まだまだ通商破壞戰のみを以てしては、兜を脫がせることが困難だと見なければなるまい。

英の持久力

この外一般の國民生活も、特に日本の開戰以來たしかに船舶不足と原料物資の缺乏で一段と窮窟になつて來てはゐるが、三百年の繁榮と搾取により蓄積した富と工業生產力とは、さう一朝一夕にして衰微するものではない。

食糧品で英國が自給し得るものは馬鈴薯と牛乳位のもので、平時は食糧の大半を國外からの輸入に仰ぎ、現在でもこの事情に變りはない。農務省は開戰と同時に「勝利のために耕せ」といふ標語を掲げて、公園の芝生や空地を利用し耕地面積の擴大に努めて來た結果、戰前の八百萬エーカーが今日では一千四百萬エーカーになつてゐるが、何分農村の勞力不足が最大の惱みで、女や小學兒童まで動員しても追つかない。

從つて最近では一流ホテルでも、萎びたオレンヂが食卓に出ると客が驚聲をあげる有樣で、玉葱は殆んど貴重品に等しく、パンも四月からは黑パンに變つた。

今年度の石炭飢饉はますます激化し、議會や言論機關は頻りに政府の無爲無策を攻擊してゐるが、十月に入つて早くも北歐の冬が訪れても、今年はストーヴも焚けないで震へてゐるらしい。

しかし一九四〇年九月に始つて、東部戰線の展開まで執拗に續いた、あの獨空軍のロンドン爆擊に對し、英國人が示した愚鈍に近いまでの不屈なねばり、ナポレオンを相手に歐洲大陸から完全に封鎖され乍ら、十數年も持ちこたへた彼等の持久力に對しては、我々も亦しつかりと腰を据ゑて、恐れず、侮らず、戰ひ拔く決意を固めねばなるまい。

殊に英國も對獨開戰當初とは異り、今では生きるか死ぬか、食ふか食はれるかの戰爭だとの自覺を明確にするに至り、この點、米國が未だに國民に對して、戰爭目的の設定に惱んでゐるのとは事情が違つて來てゐる。

チャーチルの戰爭指導に對しては、幾多の不滿が國民の間に潜んではゐるが、彼に代るべき人材の貧困のため、衆目の一致する後繼者が見當らず、結局かけがへのない指導者として國民の支持を受けてゐるといふのが、眞相であらう。

孤立する濠洲

（大庭欣一）

二月十九日、わが海鷲が濠洲北岸の要衝ポートダーヴインに對して初空襲を行つたとき、首相カーチンは宿痾の胃病で入院の身にも拘らず、ラヂオを通じて全國に呼びかけ「濠洲は遂に現實の戰爭を體驗するに至つた、全國民は凡てのものを國家のために捧げるべき秋である。この余の言葉の中には何物も隱されてはゐない。政府は諸君に對し眞實を語つた。諸君も濠洲人として衷心からこれを受け取られたい」と悲痛な聲明を發した。

遠く英本國と離隔し、人口僅か六百六十萬、しかも國内には間斷なき政爭の惱みを有つ濠洲政府の眞に迫つた悲鳴である。

太平洋の孤兒

「太平洋の孤兒」濠洲は、米英聯合國にとり西南太平洋に殘された唯一最後の據點として、不安と希望の雙方をいま一身に象徴してゐる。

從來、英國政府の對日政策がとかく行き過ぎ勝ちとなる毎に、常にこれを側面から牽制して出來る限りの「融和政策」を主張して來たのは日本の存在を最も身近かに感じてゐる濠洲であつて、一九四〇年夏における英國のビルマ道路再開の如き對日「讓歩」は、濠洲政府の强硬な主張が然らしめたのであつた。

それだけに大東亞戰爭の勃發により、最も直接的な不安を感じてゐるのは濠洲であり、去る

米國にすがる

英國がマレー・ジャワ・ビルマの前進基地を失つた今日、濠洲がたゞ一つの賴みの綱としてゐるのは英本國ではなく、米國である。

米國としても最近は、その所謂太平洋攻勢計畫における唯一の足場として、濠洲の存在を重要視し、多數の陸・空軍部隊をこゝに遣征せしめて反攻の機を窺つてゐる。しかし乍ら開戰當初における米國の態度は、濠洲援助に關して必ずしもそれ程の熱意を示さず、當時は主として濠洲側から米國に對し、米濠聯携の必要を歎願した形であつた。

たとへばニューヨーク・タイムスの有名な軍事記者として知られるハンソン・ボールドウインの如きも、三月末の同紙上に「濠洲と戰爭」と題する一文を掲げ、大局的見地よりすれば濠洲の戰略的重要性は取るに足りないとしてその放棄論を說き、大要次の樣に述べたのである。

マッカーサーが比島から濠洲に移駐せしめられて、濠洲を對日反抗の基地たらしめんと聲明して以來、米國民の注意はこの方面に奪

ひ去られて、大西洋に於けるより重大な危險を忘れやうとすらしてゐる。しかし冷靜に大局的作戰の現實を考慮する時、濠洲は濠洲人以外の聯合國民にとつて、戰略的重要地點とは言ひ難い。一歩を讓つて太平洋作戰の範圍内で考へて見ても、米國から遙か七千哩の彼方にある濠洲の役割は主要なものではない。聯合國にとり、濠洲一國が失はれた所で全般の戰爭に負けたことにはならない。

この樣な意見は、當時の米國政府首腦部にも支配的であつたため、狼狽した濠洲政府は同じく見捨てられかけた重慶政權と共に、米國の利己的な冷淡さに抗議するやら哀願するやら、百方手を盡して世界戰局に於ける濠洲の重要性を宣傳これ努めたものである。

その効あつてか否か、或は緒戰の痛撃に一時度を失つた米國が、漸く心の平靜を幾分とり返したせゐであらうか、最近に於ては寧ろ積極的に、米濠聯携の重要性を强調するのは米國側となり、今では却つて濠洲側が逆にたぢ〳〵の形で、少からず有難迷惑がつてゐる徴候すら窺はれる。

濠洲遠征米兵の軍規風紀、士氣低調はすでに周知の事實で、最初は血の道を上げて米兵を歡迎した濠洲國民も、餘りに鼻もちならぬ亂行ぶりには呆れ果てゝゐるらしい。しかも米國が濠洲に對して力瘤を入れる心底には、將來、英本國の戰列脫落を見越してこれに代り、英の遺産を繼承せんとする野望が潜んでゐることを想へば、濠洲國民も餘り心中穩かではないに違ひない。それにも拘らず、現下の情勢では、米國に對し全面的に依存するの外ないところに濠洲の現實がある譯である。

あくなき政爭

一方、濠洲の國内情勢を見るに、現勢働黨内閣と野黨たる統一濠洲黨及び統一地方黨の紛爭は久しいものである。後者は英獨戰勃發當時以來、聯立内閣の樹立を主張し來つたが、カーチンは飽くまで勞働黨單一内閣に固執し、大東亞戰爭の直前、彼が永年の望みを達して組閣してからも、これを押し通してゐるため、野黨は機會ある毎にカーチンの政策を攻撃しつゞけ、引いては濠洲の軍事行動まで難詰するといつた有樣で、明日の運命も判らぬ切迫した戰時下に、尚ほ醜い政爭を暴露してゐる。さてこそポートダーヴイン初空襲當時、前記のやうな訴へを放逸した譯であつたが、情勢は一向に改善された跡も見えず、憤激したカーチンは去る八月十六日、空襲下のブリスベーンに於ける演說で

「濠洲人の中には攻撃がまさに開始されんとする軍機密を知つてゐて、殊更にこれをわめき立てる人間がゐる。余はソロモン島攻撃計畫が事前に敵側に知悉されてゐたと信ぜざるを得ない。野黨の首腦部が祖國を裏切る樣な利敵行爲を敢てしたことに對し、余は糾彈する」

とまで極言して、反對黨に食つてかゝつてゐる。九月に入つて召集された議會でも、政府提出豫算をめぐつて、相當な紛爭が展開されたが、殊に明年度は總選擧を控へてゐるために、この傾向は一段とはげしくなりつゝある模樣である。

缺乏する人と物資

濠洲はまた多聞に洩れず、甚しい物資缺乏と

人的資源の不足に直面してゐる。何分、あの廣大な領土に、東京市にも足りない人間が住んでゐるのであるから、兵力及び勞働力の不足は察するに餘りがある。殊に濠洲はこれまで、農業牧畜等を主とした平和產業を主とし、戰時工業に對する準備は英獨戰以來のにわか仕立てで殆んど取るに足らず、しかも働き盛りの青年は、所謂「アンザック」部隊としてギリシア、北阿マレーに轉戰し、至るところで散々に叩きつけられて仕舞つた。最近には米英にならつて、頻りに婦人、子供をも動員し、勞働力不足を補はうと苦心してゐるが、この惱みは簡單には解決されない。

また平和產業の軍事工業への急激な切り替への結果、僅かな人口でありながら、食糧品・衣料・ゴムその他日常生活必需品の不足も甚しいものがある。小麥を筆頭とする農產物や、世界一の羊毛の生產地として知られた濠洲が、今や食糧や衣服に不足を來しはじめたといふのは、蓋し皮肉な現象である。

このため最近には衣料切符制も行はれ、ゴム製品にも割當制が實施されてゐるが、英本國と同樣、闇取引と泥棒の數が著しく增大し、殊に給與のべら棒によい米國兵が多數入りこんで以來は、彼等が金に糸目をつけず高價な買ひ物をするので、非常な物價昂騰を來してゐる。政府は闇取引に對し、個人は最低一年の體刑、會社には最低一千ポンドの罰金を課し、嚴罰方針で臨んでゐるが、それでも益々惡化する一方だと云はれてゐる。

內憂外患、身近かに迫る「孤兒」の惱みは深刻である。

（津久井治雄）

蹶起する印度

激化する反英騷擾

去る八月八日、ボンベイで開かれた國民會議派全印大會が、英國政治勢力の印度撤退要求を可決し、これに對していよ〳〵對印大彈壓の肚をきめた英國が、ガンヂー・ネール・アザツド等會議派指導者の一齊檢擧を斷行するや、英國百年の壓政に喘いでゐたインド民衆は、卽日反英暴動に出るに至り、燎原の猛火の迅速さを以つて全インドに擴がつた。

最初のうち、この暴動も民衆の一時的興奮の所產であり、苛酷を極める英國の彈壓の前には、日ならずして鎭壓されはしないかとも考へられてゐたが、事實はこれ等一切の豫想を裏切つて騷擾は日を經るにつれ深刻化しつゝあるやうである。

インドの喪失はいふまでもなく、大英帝國の沒落を意味する。既に東亞において米英勢力が全面的な敗退を餘儀なくされた今日、インドこそは濠洲と共に殘された英國最後の對日抗戰の據點であり、最大の兵器廠でもある。それだけに、英國、米國、ひいては重慶の惱みも深く、行詰れるインド問題の解決こそ彼等の最も深刻な關心事の一つである。

民族獨立運動の前途は、これを繞る客觀情勢の發展とともに、その民族自體の內部における動向によつて決せられる。殊に、從來とかく戰線の不統一を叫ばれ、インドは未だ一箇の民族を形成してゐないとの批評さへ下されたインドの場合、さうである。

會議派と回教徒聯盟

インド民族運動の華は、全印國民會議派である。一八八五年創立以來、幾多の盛衰を嘗めつつも、獨立と自由獲得のために對英抗爭の一路を辿りつゞけてきた會議派はインド各階層の上に根强い地盤を有してゐるが、インド四億の民の中、二億六千萬人がヒンヅー教徒である以上彼等を最大の據り所としてゐることは明かである。

會議派と對抗するものに全印回教徒聯盟がある。元來、ヒンヅー教徒と回教徒は、宗教儀禮の相違によつて相當深刻な對立を續けてきた。近年に至つては政治的・社會的・經濟的事情も加はり、兩者の溝はます〳〵深まつていつたが、これは「分割統治」を特徴とする英國の對印政策に絕好の條件を與へ、凡ゆる手段を通じて兩者の對立が煽動されてきたせゐでもある。殊に、國民會議派の擡頭を牽制せんとする英國は、ジンナーを總裁とする回教徒聯盟に「少數民族保護」の美名をもつて、會議派との紛爭を支援し、インド獨立運動の不統一を畫策し來つた。

回教徒聯盟の提唱するところは、所謂パキスタン計畫と稱せられるもので、インドをヒンヅー教徒と回教徒の兩國家に分割せんとするものである。しかし乍らインドそれ自體の獨立達成なくして、回教徒インド國の樹立は不可能であり、こゝに彼等の矛盾があり、彼等をして勢ひ日和見的態度を採らせる理由が存してゐる。

今回の暴動勃發に當つても、ジンナーは「會議派の自治政府卽時樹立要求は、回教徒の要求するパキスタンを排除するもので、回教徒はこれを承認することは出來ない」と、飽く迄も會議派に對する反對態度を表明してゐる。

しかし彼は又「英國は第一次歐洲大戰におけるインド回教徒の貢獻を想ふべきである。若し英國がインドの獨立とパキスタン計畫を承認しない場合、回教徒聯盟は新たなる方途に出るであらう」と英國に對しても强硬な一矢を放つてゐる。

けれども、インドの情勢が緊迫を告げてゐる現在、洞ヶ峠をきめてゐるジンナーの態度には回教徒自身の中にも非常な不滿があり、九月四日の回教徒聯盟機關紙でさへ、ジンナーの態度を難詰し「聯盟に須らく從來の態度を淸算し、政廳を支持するが、さもなくば進んで會議派と提携すべきである」と述べてゐる。

又、同聯盟中の巨頭、ベンゴール州首相フクもジンナーの態度に不滿の意を表し、急進的回教徒と共に「進步的全印黨」を樹立して、會議派との提携を叫んでゐるし、元マドラス州首相ラジャゴバラチヤリアーの印回兩教徒妥協の奔走も注目されてゐる。これ等は回教徒の時代に對する新しい覺醒を意味するものであり、ジンナーとしても、この際何等かの態度變更を示さなければ、時勢の潮流に逆行するの誹を免れないであらう。

その他の諸黨派

回教徒聯盟の動きとともに、ヒンヅー・マハサバ黨の動向も注目に値する。この純ヒンヅー教徒の團體は、回教徒聯盟とは對蹠的存在であるが、一九一七年以來、インド國民解放のために獨自の途を進んできた。

八月三十一日、マハサバ運用委員會はニューデリーにおいて、英國はインドの獨立を即時承認すること、英國はインド國民政府樹立を認めこれに全權を移譲すべきこと、他三項を決議すると共に、總督に對し會議派要人との獄中會見を要求したが、いづれも英側の容れるところではなかつた。

一方、マハサバ總裁代理ムケルジー等指導者の全部はバンジヤブ州、聯合州各地に遊説してインド國内における輿論の喚起につとめるとともに、印回兩教徒及び各政黨指導者との接觸に當り、英印問題の打開に奔走してゐる。

勿論マハサバの諸種の動きを動機づけてゐるもの丶一つは、この際政黨としてインド國内におけるイニシヤテイヴを獲得せんとの希望でもあり、それだけに、英國かこれを利用せんとする可能性も多いが、インドの獨立達成といふ線から逸脱する傾向は全然見受けられない。若し假にマハサバがインド獨立の犧牲に於て、英國との妥協を計るならば、それはインド民衆からの遊離を示すものであり、彼等の望む政治指導權獲得の希望は、根柢から崩されることゝなるからである。

國民會議派から分離して、可成り堅固な地歩を占めてゐるインド自由聯盟は、暫し鳴りを靜めてゐたが、九月十六日總裁サプルーは、無所屬代表として有名なジヤヤカールと共に、共同聲明書を發表し

一、事態が險惡化した現在において吾人は國民會議派、回教徒聯盟、マハサバその他の協力により速かにインド國民政府樹立に努力すべきである。これがためには外部よりの壓迫に抗する意志を明かにしなければならない。

一、各派は監禁中の會議派領袖の釋放に努力を傾倒すべきである。

との態度を表明して、これ亦インド獨立獲得の旗幟を鮮明にしてゐる。

以上の代表的諸政黨の他に、憚悍を極めた西北國境地方の回教徒の集團カクサール黨及びインド共産黨の勢力もあり、これ等は必ずしも會議派と行動を一にするものではないが、反英獨立といふ一點に於て共同戰線を張り、相當大きい役割を演じてゐることも見逃せない。

この樣にインドは凡ゆる矛盾と對立とを包藏しつゝも、ともかく反英獨立獲得といふ共同目標に向つて前進しつゝある。インドにおける内部の分裂のみを見て、その統一を見失ふものは群盲象を探るものである。

インドのこの統一を規定するものは、やはりインド民衆の心底に横はる民族意識である。インド國民會議派の華々しい活動といひ、その他諸派の獨立運動といひ、畢竟インド民衆の統一された民族意識の反映に他ならない。愚昧と稱せられる民衆こそ、獨立運動の原動力である。そして、この民衆は今や永年の英帝國主義に對し勇敢に闘つてゐる。何人もこの潮流に逆行することは許されないのである。

かうしたインドの歩む途を眺めるとき、その獨立運動の前途を徒らに悲觀する必要は決してない。

（久富　進）

華中雜記

松井武州

三週間の旅程が三ケ月あまりにのびると、思ひもよらぬことが氣にかゝつてくる。あたりまへの噺といつてしまへば、あたりまへのことだが、それにしても質札の期限までが心懸りになつてくるのは、まことに思ひもよらぬ感じである。

發つ前夜、大同大街を歩いてゐると、新聞社に勤めてゐる親友に遭つた。上海へ本を仕入に行つてくるのだ、といふと、悪いことはいはぬから協和服をぬいで行け、國防色はみんなテロからやられてゐる、と忠告してくれた。そんなことから訣別の宴を二人してはつたのだが、今にして思ふと、出張旅費を親切でかしに彼から飲まれた氣配が多分にある。勘定をすませると、一圓札が一枚のこつた。もつとも、旅費といつても、天津・南京經由の陸路だから、どのみち山海關では十圓以上兌換してくれない。山海關までの雜用を含めて十五圓もあれば用はたりるといふわけで、旅合羽のつもりで著てゐたスプリング・コオトを入質して發つたのだが、ウール地のそのコオトをいまさら十五圓ばかりで流してしまふのは、さすがに未練な氣にもなる。長旅に疲れた頭で、こんな未練まで心にかけてゐると、佗しい氣がした。百日あまり起居したホテルの部屋に坐つて、小汚ない虹口の不揃ひきはまる屋並を瞰してゐると、いつさう佗しさが胸にくる感じである。旅愁といへば、すこしはセンチメンタルで、美しい語感もあるが、所詮はこの種の氣持であるかもしれない。

○

もつとも、流質の憂は憂として、コオトは持參しない方がよかつた。コオトのかはりに薄いセーターを著込んで行つたのだが、南京に著いてみると、もう夏の粧である。下關から新街口までバスにのつてゆく間に入替り、立替りのりこんでくる姑娘たちが、みんな浴衣地の支那服をきてゐた。牡丹の大

輪がある。落雁があるかと思ふと、夕浪千鳥がある。日本の生活文化が、彈痕のあらはな南京の街々でもうこのやうに滲みこみ、芽をふいてゐるのかと思ふと、藍染の浴衣の色が目にしみた。日本人のやうにうるんだ瞳の姑娘が源氏模様もあざやかにのりこんできたときなど、むしろうす氣味わるくなつたほどである。

それはそれとして、新京を發つ朝、寢模様とはいへ、セーターを著込んできたのは、どうもよけいな深慮であつた。夏服ながらも襟元のつまつた協和服である。蒸暑くつてしかたがない。書類をいれた生鞄に洗面道具をつめこんだゞけの輕裝である。バスからをりてセーターをぬぎ、仕方がないので汗臭いそのセーターを左腋にかゝへたまゝ、殺風景でだゝつぴろい北中山路を宿まであるいていつた。

早泊りの一風呂をあびて、一服してゐると、浴衣地の姑娘服が妙に目に泛んでしようがない。ノモンハン事件の際、〇〇廟の近くで、振袖姿の蒙口娘が包から走出してきて乳酒を接待してくれたことがあつたが、そのときは場合が場合なので、あつさり驚き、感激しただけであつた。それとこれとは大いに異つた感慨である。なんとなく割切れない浴衣地である。宿帳を持つてきた女中にきいてみると、上海では姑娘どころか外人までがワンピイスに仕立てきてゐるといふ。

「半年で、そんなに上海は日本びいきになつたのかい。たいしたもんだ。」

「なんで、日本びいきなもんですか。安うて手輕るなちゆうだけのことですわ。南京よりも、上海やと一反あたり、一圓がた安いんですへ。なんいふたて、上海は浴衣の生産地やから。」

「生産地ですか。」

「安いいふだけのはなしです。」

がつかりした。便利といふ意味で背廣が日本化したやうに安價といふだけの噺らしい。日本生活文化の滲透などと氣をまはしてみたゞけに、浴衣姑娘から輕く平手打をくつた感じである。惡い氣もしないが、がつかりした。

〇

協和服に素晴しい香水をつけて變幻自在といふのが、南京外交筋で噂する滿洲國大使館關屋參事官閣下の面影である。滿洲國の外交官が協和服を用ふるのは、きはめて自然であると思はれるのに、南京や上海では必しもさうではないらしい。ユーモラスで、ぬけめがなくて、なんとなく押が太い感じなのださうである。香水はがらでないが、私も亦、協和服で押し

とほすつもりになつた。型といひ、暗綠色といひ、萬事あかるくつて、開放的な夏の中支で、協和服はひどく目立つた。行きずりに中國人たちが一應は目にとめる。この異樣な服が滿洲國の服だと知らぬ者はゐるかもしれぬが、東三省の服だなどと思ふ中國人はゐないだらう。たゞ、めつぱう暑苦しい服であるが、暑苦しいくらゐは、シヤツをとり、素肌のうへから著て、我慢してあるいた。

答禮使節、張總理は南京でお迎へした。なにかひどくいそいでゐて、私はガソリン車を全速力でとばしてゐたのだが、中山路を横切らうとすると、もう歡迎者が堵列してゐて、交通止になつてゐた。私も車からおりてお迎へした。日盛で、汗が額ににじんで困つたが、それでも一行が協和服に身を正してとほりすぎたときは、思はず、これある哉、といふ氣がした。案外、清麗な服だとも思つた。だからといふわけでもあるまいが、堵列をといた學童達が私の協和服をみつけるや否や、手に手に五色の紙旗をふりながら、車ぐるみとりかこんでしまつたのには往生した。滿洲國人々々々と連呼しながら、元氣のよいのなど車窓へ黃色い紙旗をつゝこんでくる始末である。急用の時間は氣がかりであつたが、この不憫の大歡迎に私は私の協和服とともに甘んじて立往生をした。車窓の右も左も、目もはるかに中山路の大街がうねりながら、まつすぐにのびてゐた。それが目に痛いほど黃色い滿洲國旗で埋めつくされてゐるのである。私は上等兵當時のやうに嚴肅な顏つきになつて、擧手の禮をしながら、車を徐行させた滿洲人とも、東洋人ともいはないで、學童の群は滿洲國人と連呼してゐるのである。車が速力を增したあとでも、私の耳に、クオ、ときこえた支那語の國といふ字の發音が熱つぽくこびりついてはなれなかつた。クオ、クオ、とつぶやいてみると、いきなり涙がにじんできさうな熱つぽさであつた。

〇

歡迎をしてもらつて惡口をいふのは、どうも齒切がよくないが、言次といふこともある。堵列してゐた學童群の服裝がまち〳〵なのには驚いた。まち〳〵はよいとしても、そのまちまちの服裝が、どれもこれもどこかでみたやうな型であるヒツトラアユーゲント風がある。アメリカのボーイスカウトがある、さうかと思ふと勞農ロシヤ式ではないかと思はれる職工服みたいな女學生一群もゐた。事變後僅かに四箇年、忙しくつて手が廻りかねてゐるのだらうが、もうすこしどうにか統一できぬものだらうか、と思つた。勿論、いろ〳〵な企

圖のもとに、各國の資本で設立された學校が多いといふことだから、服裝がまちまちなのも不思議ではないが、一方では、浴衣地の姑娘服の例もある。

蔣介石の偉らさは新生活運動にある杯と教へてくれた人がゐる。その新生活がこんな風に區々まち〳〵な制服になつて表現されてゐるのは、どうかと思はれる。職工服をきせられて教育された女學生が、卒業したとたんに、浴衣地の支那服を著るといふのでは、なによりもまづ本人のけじめがつくまい。

○

初夏盛夏晩夏過ぎたる旅路哉

過ぎてみれば句にもなるのだらうが、上海三箇月の暑さには心がつかれた。蒸暑いのである。漢口の暑さにくらべればまだしもといふ人がゐたが、漢口などには行つたこともないし、そんな蒸暑い街なら行かうとも思はない。毎晩、十二時はをろか、二時すぎまでねつかれぬのには辟易した。勿論、クツション附の寢臺などには花莫蓙をしいたところでねてはゐられない。絨毯をめくつて、床の上に素裸でころがるのである。翌朝、めをさますと、床の上がべつとりと、軀の恰好だけ鹽がふいてゐた。汗疹ができた。子供みたいにシツカロールを軀中にぬつて仕事にでかけたが、かゆくつて困つた。大切な取引の最中にかゆくなつて、幾度か業を煮やしかけたこともある。

もつとも、私だけではないとみえて、靜安寺路のホールに遊びに行つたら、あらはな兩腕に白く粉をふかせたダンサアがゐた。上海は國際都市だけあつて一應は萬事洗煉されてゐるところだから、いまさら毒々しい肌化粧でもあるまいと見當をつけて、その藥は效くか、と尋ねなら、藥ぢやない、と叱られた。タルカム・パウダアといふ汗止だそうである。タルクは滑石だから汗も止るだらうが、肌の滑りもよくなる理窟である。叱られた意味がすこしわかつた。早速、色氣半分で霞飛路筋の洋品店を探してあるいたら、六種類もある。ムーンライトなどと涼しさうな名のついたのがあつた。蓋をとつて、かいでみたら寢香水のやうな安つぽい臭がした。名といひ、臭といひ、どうも餘じみた旅人の汗疹止にはふさはしくないが、最近結婚した友人の土産に一鑵買ひもとめてかへつてきた。ところが、此頃きいたのだが、このタルカム・パウダアたるや滑石粉などとは眞赤な讒で、その實、ぢやがいもの粉ださうである。どうも後の祭でしかたはないが、來年の夏になつたら、遠廻しに效力の程を友人夫妻に聽いてみよ

うと思つてゐる。

○

暑い故か、タアバンをまいた女たちが街々にあふれてゐる。租界の中で私がもつとも愛好し、散歩した愚園路や、霞飛路を外人の女たちが、色とりどりのをまいて流れてゐた。街路樹が濃く茂つてゐるので、赤や、黃のタアバンをまいた女たちの頭が、まるで點描派の繪のやうに派手にみえた。虹口では日本の女たちが純白のをまいて歩いてゐた。暑苦しい、ごみごみした北四川路や吳淞路で、わづかに目をやすませてくれる涼しげな色であつた。どういふわけか、姑娘たちは殆んどまいてゐない。

タアバンといつても私が勝手につけた名前で、印度人がまいてゐる本物のタアバンではない。頭のまはりを一まきか、二まきする程度のものだから、鉢卷といつた方が、むしろとほりがよい恰好である。腦天はさらけだしてあるし、帽子と異つて廂などないから、炎天の下は嘸や髮がむれるだらう、などと思つて聽いてみたら、案外涼しいのださうである。さういへば、さうかもしれない。

ともあれ、傍から眺めると確に涼しさうである。斷髮やらパーマネントが肩や首のまはりでもぢやついてゐるのよりはあの鉢卷風で、キリリツと頸筋をゆはへあげてゐる恰好の方が、だいいち時世向な感じである。うしろからみると、急いで追越してみたくなるほど美しい。魅力がある、といふわけだらう。

元來、鉢卷には魅力があるのかもしれない。今は昔の噺になつてしまつたが、魚河岸のあんちやんが、豆絞かなんかをキリキリとねぢりながら、ぐいと向鉢卷にしめあげる呼吸などたしかに市場の醒風を一掃するにたりる意氣であつた。しかし、もうなんといつても時代おくれの型にすぎなくなつてゐる。なにしろ防水ゴム引の鳥打帽のあみだかぶりといふ時世である。いつたい男の鉢卷は既にどれもこれもが時代おくれのやうに思はれる。強いてやれば、變に氣負つて、衒ひ氣味になるところが、ハワイ空襲のニュース映畫で水兵が白鉢卷をしてゐたが、あれだけは、ぴつたりしてゐた。

英美擊滅大會といふ映畫會を租界の一流館で催してゐた。三日間大入滿員の盛況で、中國人が、このやうに興味を有つてゐようとは誰も想像しなかつたさうである。私もついでに見たのだが、現代科學の粹をつくした航空母艦上で、輕快でスマートな作業衣に身をかためた水兵たちが、頭だけ古めか

しい白鉢巻をしてゐたのが、ひどく不調和に思はれたが、同時に親てゐてこれほどぴつたり感じられた情景もない。感激してしまつた。魅入られるといふのは、あのやうな情景であらう。もつとも、あの水兵たちがあの恰好で、上海の街を歩いたとしたら、これはまたみられた圖柄ではあるまい。男の鉢巻は滅多な場合にするものではない、などと思つた。小學校の運動會で女兒たちが鉢巻を源平にしめわけて緊張した面持で入場してくる光景もよい。不意に涙ぐましくなりさうな光景だが、女兒たちにすれば運動會の勝負はすでにハワイ襲撃の水兵たちに通じる一途な心懐をたゝへてゐる故であらう。胸をつかれる美しさである。

もちろん上海の街々をながれてゐる女たちの胸をつかれる體の鉢巻ではない。きはめてのどかな、裝飾の美しさである。といつて衒ひも、見榮も感じられぬあたりは、まことに酷暑百二十度の清涼劑である。横からみても、前からみても、結目がないのが、涼しさうにみえる原因かもしれない。ともあれ人眞似好きの上海姑娘たちの間に、この安價で單純で、美しい夏粧が流行しないのはどうも氣にかゝることである。

○

寸暇をぬすんでは租界の中の映畫館にはひりこんでゐた。冷房裝置の工合が快いからである。虹口の日本人經營の映畫館も冷房裝置がしてあつたが、なにぶんにも入場料が倍額なので、納涼場には不向である。汗ををさめて一息ついて、それからあとは煙草をくゆらさうと、居眠りを愉もうと、勝手自由である。

もつとも、生地のアメリカ映畫ゆゑ、居眠りするのには好奇心がありすぎた。ところが、日本語のサブタイトルもなにもない正眞正銘の生地物だから、會話はほとんどわからないちつとも面白くなかつた。會話を除いたトーキーなど考へてみると、面白からうはずもないが、變なことにはキツスする前後になるとほのかに意味がわかつてくるのである。十數年間英語を習ひ、英書を讀みながら、トーキーを觀て、キツスの情景だけがはつきりのみこめたなどといふのは、流石に慚愧至極であるが、今にして上海三箇月間に觀た幾多のアメリカ映畫をふりかへつてひつくるめてみると、どうもキツスばかりしてみせる映畫であり、各種各態のキツスの場面をつなぎ合せたのがアメリカ映畫のストオリイといふ印象が強くくる觀衆の八、九割はいつも中國人の青年男女であつたが、私が交際した三十數人の中國人の英語の能力から推しても、私以

上にトーキーの會話を聽きわける連中はどれだけもゐないだらう。その證據には、私が笑ふときに、笑ふ中國人は相當ゐたが、外人が、ぷツ、とふきだすときに、笑ふ連中はほとんどゐなかつた。

なにしろ若い女の水著姿の寫眞を一頁插入するかしないかで雜誌の賣行が三、四割がた違つてくるといふ連中である。アメリカ製のキツス映畫の人氣のある所以も亦。

そんな矢先に、父ありき、といふ日本映畫が租界に進出する噂をきいた。中國人の名士を集めて、日本の現代映畫文化の最高峰を觀賞させよう、といふ魂膽らしかつた。新京で見損つた名畫なので、虹口の日本人經營の封切館に觀に行つたもちろん、キツスの場面を期待したわけではなかつたが、はじめから終りまで饅暮しの父になる主人公が不精髭をはやして、ぐづ〳〵子供と話ばかりするのには退屈した。退屈はしたが、最後までひつぱられてしまつた。いくらぐづ〳〵した會話でも日本語だつたからであらう。そして最後にその父が老いて死んでしまふのである。なんとかして主人公の父が死にでもしなければけぢめのつきさうにない映畫であつたがこれを觀賞させられる中國人の名士も面の皮である。もつとも、この企ては沙汰やみになつたさうである。具眼の士がゐたとみえる。元來、一年間に一本か、二本しか生產能力のない最高峰映畫で他國に進出しやうなどといふ考方が消極的で且つ圖々しすぎるのだが、といつていまさらキツス映畫も困る。また難しき哉である。これと前後して、中國映畫の超特作といふ、上海製マダム・バタフライが封切されてゐた。これも亦、大いに日華親善やら、日華文化交流をめざしたつもりなのだらうが、どうも主題からして有難くない。

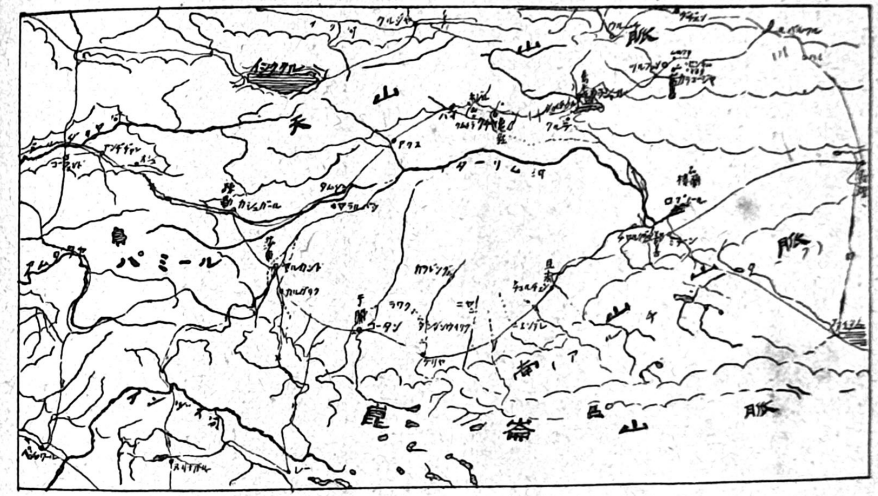
同文同種とか、同甘共苦などロでは言ひ得ても、なか〳〵呼吸が合ひにくいものである。合ひかねる呼吸をなんとかして合せようとする惱みは、南京でも、上海でも、雜誌の中にも、銀幕の上にも感じとられた。ふとしたことから親しくなつた洋畫家の陳抱一氏が離滬の前晩私へ別れの言葉として、こんなことをいつてくれた。

「松井さん、私達は相當つらい時代につらいことを體驗してゐます。しかし、春になつたら花が咲くのだし、秋になつたら實のるのですから。」

そんなことをいひながら、彼は彼の母堂の手製といふ三十餘年を經たバラの花片入りの銘茶を悠揚たる手つきで御馳走してくれた。在滬三箇月間、私が心からのんびり愉しめたつた一度のひとときであつた。

★中央アジア探檢術學の話

柿沼介



大アジア横斷鐵道の計畫によつて、新たに世人の視聽を惹いてゐる中央アジアは、三千年の昔から十數世紀に亙り、東西兩洋の初期文明の交流といふ世界文化史上最も重要な役目を演じた地域であつた。しかも、これら古代文明の遺蹟や遺品が、氣候の乾燥が幸ひして、今なほ原形のまゝ保存されてゐることが前世紀末から今世紀初頭の發掘によつて明かにされて以來、露・英・獨・佛等の各國は數次の學術探檢隊を派遣してこれら古代文化の遺物獲得を競つたのであつた。

中央アジアは、世界の屋根と呼ばるゝパミール高原を中心に、重疊の山岳、不毛の漠地相連なる地域であるが、就中新疆地方は、北は天山山脈、南は崑崙山脈、南山山脈を界とする東西千五百哩、南北五百哩に亙る茫々たる荒地で、僅かに周邊の山麓地方に數條のオアシス(綠地)が點綴してゐるに過ぎない。古代の東西交通路はかゝる漠地を貫いて、大凡三條通じてゐた。その最も北方に位置するものは

甘肅省蘭州から敦煌・哈密(ハミ)・吐魯番(トルファン)・烏魯木齊(ウルムチ)・伊犂(イリ)等天山山脈の北側、所謂天山北路を貫いてイシック湖に出づるものであり、他の二條は共に天山山脈の南側、即ち天山南路にあり、それぞれ北道・南道の名を以て呼ばれてゐた。即ち、北道は敦煌より樓蘭を經て天山山脈の南麓に出で庫車(クシャ)・喀什噶爾(カシュガル)を通過してサマルカンド或はタシュケントに出で、南道は敦煌より南山山脈、崑崙山脈の北麓に添ひ和闐(ホータン)・葉爾羌(ヤルカンド)を經てオクサス河流域に到つたのである。これら交通路は路とは名のみの沙丘の連續せる不毛の荒地で、旅するものは、十月二十日全く人影を見ず、連日砂嵐に吹きまくられ、碎石の間を往くといふ難行を續けねばならなかつた。今から約千五百年の昔、東晉の高僧法顯が長安を發跡し天山北路を通過して葱嶺に入り天竺に到つたときの紀行に「上飛鳥なく下走獸なし、遍望極目、度るところを求むれば則ち擬するところなし、唯死人の枯骨を以て標識となすのみ」とあるのを見ても、當時の行旅の苦難が思ひやらるるのである。これら困難な旅行にも拘らず、西曆前六七世紀から、中世海路による交通が盛んとなるまでの十數世紀間はこの交通路が東西接觸の唯一の經路であつた。支那の史書には張騫・班超の遠征・求法僧法顯・玄奘の歷遊、降つて中世の耶律楚材・長春眞人・常德の西遊を傳へ、また、西洋にもカルピニー・ルブルック・マルコポーロなどの紀行が見られるが、これら史上に名の擧げられた人々に止まらず、無數の賈人がこの交通路を往來し彼我物資の貿易に從事し、以て支那文物の西漸、イラン文化の東漸を招致したのである。この當時の東西文化の交流についてはラウヘルの「シノ、イラニカ」や石田幹之助氏の「長安の春」などに詳述されてゐるが、支那の隋唐時代はイラン文化全盛の時代といはれ、宗教・繪畫・彫刻・建築・工藝・音樂・舞踊・遊戲の各部門は固より、衣食住の方面に於ても、廣くイラン文化の感化が見られたのであつて、かの有名な李白の「五陵年少金市東、銀鞍白馬度春風、落花踏盡遊何處、唉入胡姬酒肆中」といふ詩にも見らるる如く、當時既に酒店には綠眼、白皙のイラン系西域人が居て客を接待したと云はれてゐる。

かくの如く、中央アジアは中世紀まで東西兩洋を繫ぐ唯一の交通路であつたが、葡萄牙人が東印度航路發見の結果印度より南支那に至る海路が急激に開發せらるるに及び、中亞の交通は漸次に衰ふるに至り、その世界文化史上の意義を失ふに至つた。然るに、十九世紀に入り、露西亞は南

方に向つて國力の發展を企圖し中央アジアに目を注ぐに至り、之に對し英國は印度よりその勢力の北進を圖り、こゝに英露兩國が中亞を活動の舞臺として對抗すべき機運を生じ來つた。卽ち、露西亞は西伯利探檢の歩を進めてアルタイ・パミールを越えて南進し新疆の探査を始め出したのに對し、英國も印度よりカラコーラムを越えて北進し來り兩國の探檢家がこの地域を舞臺として入り亂れて活動を開始し、次で獨逸・瑞典等の探檢家もこれに加はるに至つたのである。これら多數の探檢家のうちで、露西亞の主動となり、且つその成果の最も著しかつたのはプルジエワルスキーであつた。彼は前後四回に亙り蒙古・新疆・西藏地方の探檢を行つてゐる。その第一回は一八七〇—七三年に聖彼得堡地理學會の委囑により行はれたものでキヤフタよりゴビ沙漠を横り張家口に出で、オルドスを經て北京に入り北京より青海を經て揚子江水源地域に出で、西藏のラサに赴かんとしたが準備不足のために引返し、再び青海よりゴビ沙漠を横り、ウルグに歸著した。この報告書は「蒙古及びタングート地域」と題する二大冊で、この邦譯は「蒙古と青海」と題し刊行されてゐる。第二回探檢は一八七六—七八年に行はれた。クルヂヤより天山を越え、クリム河に沿つてロプノールに赴き、南方アルチンターグ山脈を發見した。この報告書は「クルヂヤより天山を越えロプノールへ」と題するものである。第三回探檢は一八七九—八〇年に行はれラサに赴くのがその目的であつた。準噶爾(ジュンガル)より哈密(ハミ)を經て南山山脈を越え西藏に入り、ラサの手前百七十哩の部落に到達したが、ラサ入國は許されず目的を果し得ずして引返し青海より黄河水源地域を踏査しキフタに出た。この報告書は「ザイサンより哈密を經て西藏へ」と題するものである。第四回探檢は一八八三—八五年に行はれた。北蒙古より黄河上流地方を經て西藏に入つたが、西行を阻まれたので轉じて新疆に入りロプノールよりタクラ・マカン沙漠を北に向つて横り、天山山脈を越えてイシック湖に到達した。イシック湖畔のカラコールで、彼は第五回探檢の準備をしてゐたが一八八八年に急逝した。この偉大な探檢家を記念して、カラコールは翌年からプルジエワルスクと改稱した。プルジエワルスキーの事業は、彼の死後も、後繼者たるピエツオフ・カズロフ・ボグダノヴイチ等により繼續せられ、引續きその成果を擧げてゐる。

十九世紀より今世紀にかけて中央アジア探檢史上最も輝やかしい名の一は瑞典のスウエン、ヘデインである。彼の

五回に亙る探檢の結果は、從來世界地圖上最も空白であるとせられてゐた中央アジアに幾多の新らしい書入をなすに至つた。彼の第一次の探檢は一八九四—九五年に亙るものでパミールより新疆に入り、西部タクラ・マカン沙漠を横斷してロプノールに到達し、ロプノールの移動に關する詳細な調査を行ひ、更に北部西藏に入り、揚子江河源より青海を通過して北京に入つた。この旅行記は「アジアを通過して」と題する二卷千三百頁の大冊で、別に學術報告は「中央アジア旅行の地理學上の成果」と題し公刊されてゐる。第二次の探檢は一八九九—一九〇二年行れた。この旅行はタリム盆地と西藏の踏査が目的で、喀什噶爾(カシュガル)からロプノールに赴き、この附近一帶の盆地を調査中、圖らずも西曆三世紀から四世紀に繁榮した樓蘭の古址を發見しここから多數の古文書を發掘した。彼は更に西藏に入り巡禮者に扮裝してラサに入らんとしたが、監視者のために阻止せられ、引返し喀什噶爾より露西亞を通過して歸國した。この旅行記が、「アジアの心臟に」の二冊で、學術報告が「中央アジア旅行の科學的成果」本文六卷地圖二卷の巨冊であり、別に樓蘭の發掘品について獨逸の支那學者コンラツドの研究報告が出てゐる。第三次の探檢は西藏に關するもので、從來の地圖上に何等記載のなかつた山脈を發見して、之を「トランス、ヒマラヤ」と命名した。その旅行記も同じ名を附して刊行し、別に「南部西藏、一九〇六—八年の旅行に於ける發見」と題する厖大な學術報告をも公刊してゐる。以上三回の探檢の結果、ヘデインが中央アジアの地理學に齎した功績は劃期的と稱すべく、その全部の報告書は本文五千頁、地圖七百六十五枚に及んでゐる。その後、歐洲大戰の勃發などにより、彼の探檢は一時中止されたが、一九二七年に至り新たに大規模な探檢が計畫された。然るに、當時支那に於ては國家主義が强調せられ外人の支那境地に於ける探檢を容易に許可しなかつたので、支那側と協同して探檢を行ふこととなり「西北科學考査團」が組織せらるるに至つた。この團員には瑞典・支那・獨逸・丁抹の學者を集め、一九二七年北京を出發、蒙古のアラシヤン・黑城を經て新疆に入り、哈密より吐魯番・迪化一帶を探査し、翌年末ヘデインは一應北京に引返へしたが、考査團の調査は一九三三年まで繼續された。この探檢の旅行記が「ゴビ沙漠を越えて」と題するもので、その學術報告は地理・地質・動植物等學科別に出刊される豫定で、その一部は既に刊行されてゐる。一九三三年にヘデインは更に支那政府の要人に新疆に

通ずる自動車道路建設の必要を說き、その調査のため國民政府の委囑を受けて新疆に入つたが、當時新疆は馬仲英の率ゆる回教軍と省政府軍との爭亂の最中にあつたので、豫定通りの調査を遂げることが出來ず一九三五年に引返へすに至つた。彼はこの旅行記を「大馬の逃亡」「絹街道」「動く湖」の三部作として公刊してゐる。ヘディンは現在八十歲に近い高齡で故國のストックホルムにその老境を送つてゐるが、一九四〇年第七十五回の誕辰を迎へたのを機會に、半生を貫く探檢生活の總決算の意味で中央アジア地圖の集成に著手したと報ぜられてゐる。

ヘディンが中央アジアの地理學に齎した貢獻に匹敵すべき成果を考古學に齎したものは英國のスタインである。中央アジアの流沙の底に古代文明の遺蹟や遺品が保有されてゐることはヘディンの樓蘭の發掘や、一八九八年のクレメンツの吐魯番附近の發掘などにより旣に學者間に知られてゐたのであるが、この無盡の寶庫を大規模に發掘して學界を驚嘆せしめたのはスタインであつた。スタインの中央アジアの探檢は三回に及んでゐる。その第一回は一九〇〇―一年で、和闐その他南道各地の遺址を發掘し、西域文化の研究上貴重な資料を多數獲得した。彼はこの第一回探檢の概要を一九〇二年のハンブルヒの萬國東洋學者大會で發表し、列席者を驚駭せしめたが、これが動機となつて、「中亞及び極東の歷史的・地理的・考古學的・人類學的研究の國際協力機關」の設立を見るに至つた。この探檢の旅行記は「和闐埋沒古址」と題し、またその明細報告は「古和闐」二卷として公刊されてゐる。第二回の探檢は一九〇六―八年に行はれた。その踏査地域は前回の地域より更に甘肅の西端敦煌に延び、敦煌附近の靈場千佛洞に於て無慮數千典の古寫經古畫を獲得した。敦煌は古くより西域交通の要地として知られてゐた。その附近の蘇勒河に沿つた岩壁に數百の岩窟寺院が掘鑿せられ、洞窟の內部は唐、五代の壁畫・佛像を以て飾られてゐたのであるが、これら佛洞中の一に密室を設けて、そのうちには當時の戰亂の慘禍を避けるため多數の古寫經・古文書・古畫を隱匿してゐたのであつた。スタインは偶然の機會からこの事實を聞知し、これを保管してゐる道士を籠絡して、こゝに收藏せられてゐた數千卷の古寫經や古文書繪畫類を馬蹄銀數枚を以て獲得し廿九箱に收めて之を本國に送致したのである。この旅行は、彼の三回の探檢中で最も收穫の多かつたもので「カタイ沙漠の古址」と題する旅行記のうちに、この千佛洞遺物獲得

の徑路が詳しく語られてゐる。またその明細報告「セリンディア」は本文三卷、圖錄一卷、地圖一卷あり、重なる獲得品の圖版並に說明が收められてゐる。第三回探檢は一九一三―六年に行はれ、前二回の踏査地域の外に、內蒙古や吐魯番を初め北道各地の發掘を行ひ、更に露領パミール及びアフガニスタンをも跋涉して地理調査を行つた。この明細報告は「內陸アジア」本文二卷圖錄一卷地圖一卷として刊行されてゐる。彼は一九三〇年に至り、第四回探檢を企てたが、支那官憲の許可を得るを得ず、米國・日本を經て哈密に至つたが、そこから引返しを餘儀なくされた。スタインの探檢は、上述の如く、それぞれ明細な報告書と旅行記が刊行されてゐるが、その外に、千佛洞で得た佛畫に就ては「千佛」と題する圖錄が刊行されて居り、また別に前後三回の踏査とその成果を纏めた一般的な讀物として「古代中央アジア路址」が刊行されて居る。この後者は「中央アジア踏査記」と題し邦譯されてゐるが、スタインの探檢事業を概觀するにはこの書によるのが便利である。

獨逸の中央アジア探檢はスタインの第一回探檢報告に刺戟されて敢行されたもので、前後四回に亙つて行はれた。その第一回探檢は一九〇二―三年のグリューンヴエデルを主班とするもので、主として吐魯番・庫車附近の發掘を試みた。グリューンヴェデルは佛敎美術學者として有名な人で、猶一行には蒙古佛敎史の研究家フートが加つてゐた。その探檢の學術報告はグリューンヴェデルの「イデイクト・シヤリの考古學的研究報告」で、別に「イディクト、シヤリ及附近發掘志」が刊行されてゐる。イディクト、シヤリは吐魯番附近の古址の名稱である。第二回探檢は一九〇四―五年に行はれ、ル、コツクが主班となつた。ル、コツクは考古學者で且つ土耳古語學者であるが、彼は

最新刊

支那中世佛敎の展開

東京文理科大學敎授 文學博士 有高巖 先生序
東京高等師範學校敎授 文學士 山崎宏 先生著

A5判布裝 價金拾貳圓 〒四五

君が心血を濺げる本論著は後漢佛敎より筆を起して六朝隋唐に及び支那佛敎の最盛時を網羅し民族の信仰狀態、其國策、文化に對する重大なる關繫、社會經濟方面に於ける佛敎勢力の顯現を詳細敍述したことは誠に時宜得た計畫であり歡迎せられることは豫測に難くない。「有高博士序文より」

東京神田神保町三 清水書院

吐魯番附近の古都高昌の遺址を大規模に發掘して多數の立派な壁畫や古文書類を獲得した。この報告はル、コックの「高昌」に發表せられてゐる。第三回は第二回に引續きグリューンヴェデルが主班となり、その初期はル、コックもこれに參加してゐた。主として庫車・吐魯番・喀剌沙爾等を探査し、この回も多くの發掘品を携へて歸國した。この報告はグリューンヴェデルの「中亞に於ける佛敎古祠堂」及び「古庫車」の大著として公にされてゐる。第四回探檢は一九一三—四年にル、コックが主班となり、庫車、ラマルバシ地方の發掘を行ひ、こゝにも多數の壁畫や彫刻を獲得した。この報告は「中亞に於ける後期古代樣佛敎藝術」六冊として刊行されてゐる。ル、コックは、上述の學術報告の外に、一般的な讀物として「東トルキスタンに於ける希臘的痕跡」「東トルキスタンの土地と住民」を刊行してゐるが、これには探檢の苦心談や發掘壁畫の說明などが記されてあつて、甚だ興味の深い書物である。その前者のうちに敦煌發見につき次のやうな挿話を傳へてゐる。一九〇六年の八月ル、コックが第二回探檢を一先づ終へて哈密に滯在中に、獨逸本國からの電報を受取つた。それはグリューンヴェデルが探檢隊に加はるから、十月十五日までに喀什噶爾に行つて氏を迎へるやうにとの命令であつた。ル、コックはこの電報を受取つて一寸當惑した。それは數日前に逢つた敦煌を通過して來たといふ商人の話に、敦煌の近傍の千佛洞の石室から多數の佛像や經典が發見された。佛像は蒙古の王樣に獻ぜられたが經卷は誰にも讀めぬものが多く、そのまゝに室に密閉して僧侶が保管してゐる、今すぐ行けばそれらの經典は僧侶から買取ることが出來るであらうとのことであつたル、コックはこれ迄幾度か土民達の話を信じて無駄足をさせられた苦い經驗があるので、多少躊躇はしたが、あまり耳寄りな話なので、兎も角敦煌へ出掛けるつもりでゐた。哈密から敦煌へは十七日間の旅程である。敦煌へ行つて果して十月中旬迄に喀什噶爾に行きグリューンヴェデルを迎へることが出來るであらうか。敦煌へは行つて見たくはあり本國からの命令は果さねばならず、ル、コックは當惑の結果、運を天に任せることとし、一枚の銀貨を取出し、表がむけば敦煌行、裏がむけば喀什噶爾に行きグリ行ときめて、之を投げた。銀貨は裏がむいた。ル、コックは敦煌行を斷念して喀什噶爾に向つた。豫定の通り喀什噶爾に著いても肝腎のグリューンヴェデルは、途中故障のため、十二月初旬まで到著しなかつた。ル、コックが銀貨を

投げたとき、若し表が向いてゐたらどうなつたであらう。或はスタインやペリオが獲得した敦煌の遺品はル、コックが先に手に入れ得たかも知れない。今、大英博物館や國民圖書館に收められてゐるこれらの貴重な資料は伯林に持ち去られ、之を見るため年々倫敦や巴里に集る東洋學者達は伯林に向ふことになつてゐたかも知れない。この話を讀んで、私は學問にも運不運があることを思はせられた。

さて、佛蘭西でも、英、獨の中亞探檢の輝やかしい成果に刺戟されて中央アジア探檢隊を派遣することゝなり河內の極東學院の敎授であつたペリオを起用して之を主宰せしむることゝなつた。ペリオは當時三十歲に滿たぬ青年であつたが漢文は勿論、中亞諸國語にも通じた東洋學者であつたので立派にその任務を遂行した。彼は一九〇六年巴里を出發、露領トルキタンより新疆に入り、スタインとは反對に庫車・烏魯木齊・吐魯番と北道各地の發掘を續けた。丁度彼が烏魯木齊に滯在中にスタインの千佛洞石室發見の報を耳にしたが、彼は遺芳のなほ殘されてあることを信じてあせらずに、スタインよりは約半年遲れて敦煌に著いた。果して彼の豫想通り、石室にはなほ古寫經が山のやうに積まれてあつた。スタインは漢文が讀めなかつたのでこの方面のものが手を觸れずに殘されてあつた。ペリオはそれらのうちから內容の優秀なもののみ約五千點を選び出し、一卷の値にも價しない程の僅少な代價を道士に與へて之を獲得することに成功した。彼はこの收獲品の一部を、歸途北京に立寄つて、支那の學者達に示し羨望と焦慮の念に堪へざらしめた。これが動機となり、支那では貴重な資料の國外流出を防止する運動が起り、千佛洞に殘された古寫經類は全部支那に運ばれ京師圖書館に收められることゝなつた。しかし、支那のことであるから、その運搬の途中にも少なからぬ數が失はれた。スタインは第三回の探檢で附近の住民から敦煌の古寫經約九百點を獲て居る。ペリオのこの探檢の報告はまだ公にされてゐない、たゞ、彼の編纂になる「千佛洞壁畫集」により大體の事情を窺知することが出來る。

かく英・獨・伊の各國がそれ〳〵中央アジアに探檢隊を派してゐるのに對し、日本では、大谷光瑞師が私費を投じて探檢隊を組織し新疆の踏査に從つたので、この國際的な探檢事業から仲間はづれにされるのを僅かに遁れ得たのであつた。かのスタインが第一回探檢の成果を發表した一九〇二年に、大谷光瑞師はまだ二十七歲の青年で倫敦に留學

中であつたが、このアジアに埋れた珍寶を、徒らに西人の持ち去るに任せてわが國人がこれを傍觀して居るに堪へずとし、學業の中途のまゝ、自ら門下數名を率ゐて、西伯利亞を經て新疆に入り探檢に從つたのである。その途中、師自らは門跡の訃報に接し、印度を經て鄕國したが、一行中の渡邊哲信・堀賢雄の兩師は猶新疆に留まり主として和闐・庫車附近を探査した。更に第二回探檢として明治四十一年（一九〇八）から翌年に亙り橘瑞超・野村榮三郎の兩氏が吐魯番・庫車地方を踏査した。第三回探檢は明治四十三年（一九一〇）から大正三年（一九一四）に亙り行はれ、タリーム盆地の北方を踏査して敦煌に至り、敦煌では數百卷の古寫經を獲得した。この三回に亙る探檢による將來品は現在京城博物館・旅順博物館に保管せられ、その一部は「西域考古圖譜」と題する圖錄により示されて居る。また、その旅行記は「新西域記」と題する厖大な巨冊として昭和十二年に刊行せられ、別に橘瑞超師の旅行記が「中亞探檢」と題し刊行されてゐる。

以上は十九世紀末より二十世紀初頭に於て歐洲諸國が競つて行つた中央アジア學術探檢の團體としての主なものを列擧したのであるが、この外、個人でこの地域を探査し、その旅行記を公にしてゐるものは猶多數あり、近年刊行のもののうちにも、現今重慶政府の顧問となつてゐるラチモアや、永く支那領事を勤めてゐたテイクマンの旅行記の如きそのうちで出色なものであるが、今一々これについて述べてゐる餘裕がない。これら探檢者は險惡な氣候や荒涼たる風土などの物的困難を克服せねば、外に屢々土民の反抗を警戒せねばならぬ情況にあつた。事實、土民のために虐殺された探檢者も二三に止まらなかつた。これにつき、ル・コツクは、その旅行記のうちに、彼が壯年時代に修得した醫術を利用し、土民を手なづけるために醫療を施してやり探檢事業を容易ならしめたことを語つてゐる。彼が一日の發掘作業を了へて宿舍に歸ると、その前庭には每日四、五十人の老若の土民が彼の治療を乞ふために待ち受けてゐる。彼は、晝間の疲勞にも拘らず、彼等土民の患者に一々適當な處置を施してやり、夜に入ることが多かつた。しかし、このために彼はどの地でも住民の信望を得て、發掘を妨害されるやうなことはなかつたといふことである。外國傳道に從事する宣敎師が醫術を習得して傳道に便ずるといふ話は聞いたが、探檢に從ふ學者にもこの心遣ひがあつたのである。

かゝる探檢者の苦心を經て招來せられた資料は、それ〲本國の博物館や、圖書館に保管せられ、專門學者の研究に資してゐるのであるが、一方、これら實地踏査により得られた、地理學上の成果も亦頗る重要であつて、最近世上の問題となつてゐる大アジア横斷鐵道の企畫の如きも、ヘデインやスタインの精細な探檢報告があつて始めて可能であつたと云ふことが出來やう。ヘデインが第七十五回の誕辰を迎へたのを機會に、彼の半生の探檢生活の總決算として中央アジア地圖の集成を企圖してゐることは既に述べたが、この地圖は彼自身の探檢により作成した地圖以外にスタイン外二三氏の地圖をも參照集成したもので、その一部たる吐魯番地方圖が本年一月の「ピーターマン地理學通報」に發表されてゐる。これによれば、その記載の正確詳細なる點に於て、圖式の鮮麗なる點に於て、從來の如何なる地圖にも優つたもので、これが完成を待望せらるゝのであるが、現在は時局の關係上その進行狀況を知悉し得ないのは遺憾である。

中央アジアは古代東西文明交流の地域として、世界文化史上意義あるのみならず、今日、政治上にも經濟上にも益々その重要性を加へつゝあるのであるから、この地域に於ける從來の學術探檢の成果は十分に之を利用する必要があると信じ、こゝにその概要を述べた次第である。

滿洲建國記 三部作
鎧田研一著
第二部
王道の門
新刊出來
價・貳圓 送料拾五錢
第一部「奉天城」に引續いて、滿洲建國の表裏、經緯を詳細に描ける長篇小說で本篇は特に幾多の重要人物が登場する。曰く芳澤大使、南次郎大將、駒井德三、臧式毅、多門師團長、土肥原大將、杉山元大將等々、殊に多門師團が我に數倍する敵の中央を突破する作戰の狀況等は興味津々たるものがある。
――〔第一部〕――
小說 奉天城
增版出來
價・貳圓 送料十五錢
東京牛込 新潮社

滿洲文學概觀

富田壽

本年度滿洲文學界の批判を書けといふ依頼を受けた。日頃多忙に追はれて、文學界の動きに十分な注意を拂ふ暇もなく、況してこれを總括批判するといふことは、到底その任でないので固く辭退したが、編輯の都合上是非にとの依頼により、敢て引受けることにした。

紙數と期日の關係上、箇々の作家活動竝に作品について細述する餘裕がなく、極めて概觀的な記述に了るであらうことを、豫めお斷りしたい。尚ほ、康德九年度といつても今はまだ十月の半をすぎたばかりであり、嚴密には年度全般の展望は出來ないといふこと、滿系文學については、筆者不案内であるため、深くは觸れ得ないこと、そして日系文學の記錄についても、筆者の調査もれもあると思はれるし、その結果或は見當違ひの觀察を下さんとも計り難く、讀者の了解を得たいと思ふ。

さて、順序として作品及評論壇の狀態を見るに、本年度滿洲文學の狀態は、低調、沈滯、無氣力等、總じて不振であつたといふのが、一般の定評であつた。そして、事實この數年來の狀態に比較して、今年ほど文學活動が全般的に不活潑に見えた年はなかつた。特に注目をひく傑出した作品もあまり見當らず、評論壇また格別新鮮味ある問題を提供せず、全般的に低調であつたことは否み難い。

然しながら、一方これを量的に見るならば必ずしも不振であつたとばかりも言へない。本文を書くに當つて、筆者の調べた手許の資料のみによつて見ても、發表された作品の數は、小說、戲曲に於ては、作家の民族別にこれを見るに、

日系作家六九篇(うち戲曲二篇)、滿系作家四五篇、白露系作家 三篇、合計一一七篇となつて居り、發表機關の數は日系雜誌一七、同新聞二、滿系雜誌三、同新聞三、合計二五となつてゐる。そして、評論(文學を主としたるもの)については日系五一篇、滿系一八篇、合計六九篇、となつて居り、尚ほこれに筆者の調査もれのもの及滿洲外に於ける發表作品等を加へるとすれば、恐らく創作一五〇篇以上、評論八〇篇にも達するものと想像せられるのであつて、發表機關の減少した今日の狀態としては、その活動は寧ろ意外に旺盛であつたとも見られるのである。

では、そのやうに相當數による作品が書かれ、數多くの評論が發表せられたにも拘らず、低調、無氣力な印象を殘したのは何故か。結局は優れた作品、評論に乏しかつた結果と見るより外はないのであるが、作家、評論家の活動不振の原因についての詮索はあと廻しとして、本年度文學活動の特徴について、一應觀察して見たい。

○

先づ作品活動に於て目立つた現象は、地方在住の作家乃至は地方出身(變な言ひ方であるが、地方から都市に移つた作家といふ意味)の、比較的若い人達が活躍し、從來主として活動し多少名を知られた作家達が、あまり書かなかつたことが一つ、そして多少とも讀みごたへある作品と云へば、主として前述の新人(滿洲の文學界での經歷が淺いといふ意味で一應かういふ呼び方を許して頂く)達によつて書かれ、幾分の新風を感じさせたのに對して、從來の作家達の作品が、概ね低調であつたことがあげられる。

更に作品の特色としては、新人達の作品の多くが、所謂現地に取材した作品、例へば開拓地、國境警備、農村等を扱つたものによつて占められてゐたことが指摘される。これは、前述した通り、それらの作家が地方在住乃至は地方出身の作家である結果であつて、將來滿洲文學の一つの地歩がさういふ地方的な特色ある文學によつて占められ、やがて滿洲文學の獨自性の一分野をなすものと豫想されるのである。

それらの作家の作品のうち、筆者の感銘に殘つたものをあげて見ると、「春泥」(菅忠行氏—北窗)、「燃える町」(百瀨宏氏—藝文)、「馬」(加藤秀造氏—藝文)、「縣城」(神戸偉氏—藝文)、「或る軍醫の手記」(仁木良介氏—藝文)、「アパートの親分」(小林實氏—藝文)等であつた。このうち、「或る軍醫の手記」は滿洲を描いた作品ではないが、題名通り戰地に

於ける軍醫の體驗を描いた手記小說であつて、構想、手腕共に優れた戰爭文學として、深い感銘を受けた。尙ほ「馬」「縣城」及「鵝越分隊」(中村秀男氏戲曲—臺文)「觀光東亞」に連載好評であつた「開拓農民」(小林實氏)等も、本年度の作品中記錄さるべき作品であらう。

○

新しく登場した作家の作品は、大體以上の如くであつて特に傑出した作品は乏しかつたとは云へ、沈滯がちな文學界に一脈の新鮮味を加へたことは認めらるべきものと思ふ。

次に舊來の作家の活動狀態は、一般に不振ではあつたが一部の作家はやはりそれぞれに精進をはげみ、幾つかの見るべき作品を殘してゐる。試みに手許の資料によつて、本年度二作以上の作品を發表した作家を擧げて見ると、高木恭造、北村謙次郎、日向伸夫、楳本捨三、牛島春子、竹內正一、北尾陽三、麻川透の諸氏であつて、高木氏の三作、以下諸氏は何れも二作となつてゐる。然し從來の記錄より見れば、作品の數は減少し、やはり活動不振であつたことが如實に現はれてゐる。筆者の讀んだ範圍では、高木恭造氏の「晩年」、上野凌嶂氏の「嫩江祭」などが、印象に殘る作品であつた。

尙ほ今年度は、月評極めて不振で、どういふ作品が問題となつたかよく分らないが、一、二の寸評から窺つたところによると、福家富士夫氏の「版畫」、秋原勝二氏の「河や山」、牛島春子氏の「女」、木畑卯一氏の「丘の子供たち」、高木恭造氏の「任地」、昌埜ふみ氏の「白塔」等注目をひいた作品のやうであつた。

以上の外に、地元作家の短篇としては、「新潮」の「風俗國家街」(竹內正一氏)、「中央公論」の「福壽草」(牛島春子氏)等があつたが、內地雜誌への地元作家の進出が、昨年ほど華々しくなかつたのは、大東亞戰爭勃發後に於ける、內地雜誌界の、滿洲に對する關心の薄らいだ一つの現れでもあらうか。「風俗國家街」は讀んでゐないが、「福壽草」は、作品としての緊密感に不足があり、作者の意圖を十分に生かし切れなかつた點に稍不滿が感じられた。

短篇作品について、まだ記述を要する問題もあるが、この位にして新聞小說に移る。

○

地元作家の新聞小說執筆は、これも昨年度に比較すれば數に於て減少し、「滿洲新聞」の懸賞小說「曉の滿洲」(尾田幸夫氏)、同じく「建國列傳」(山田清三郎氏)、「哈爾濱日日新

聞」の「白い庭」(北尾陽三氏)の三つを得たのみであつた。このうち「建國列傳」を小說の部類に加へることは、異論もあるであらうが、史實を取扱つて小說的手法を用ひた點、やはり一箇の記錄小說と見て差支ないと思ふ。「白い庭」は、まだ世評をきく機會がないが、部分的に讀んだ筆者の感想を言へば、新聞小說として板につきすぎてゐる點、却つてうま味に乏しいといふ印象をうけた。「曉の滿洲」は、その點最初から通俗を對象として書かれた作品であり、文學的な成果に期待をもつのは無理であるが、筋の變化の割に單調であるといふのが、一般の評であつた。

尙ほ新聞小說と云へば、本年度地元各新聞では、建國十周年を記念する意味からであらう、滿洲或は大陸に因んだ小說や讀物を連載した。小說では、菊池寬氏「滿鐵外史」についで、滿洲新聞では「曉の滿洲」、滿洲日日新聞では、林房雄氏の「青年の國」、木村莊十氏の「奔流」、讀物としては滿日の「後藤新平」「滿洲風土記」等があつた。

次に評論壇に於ては、先にのべた如く日系側のみでも、五十篇以上の、文學に關した論評がなされ、數に於ては決して不振といふほどではなかつたが、新な問題を提供し、或はこれを捉へて究明するといふ熱情的な論評は殆ど見當らず、從つて作品活動を刺戟し、啓發するといふことも望まれなかつた。試みに、本年度文學關係の評論六九篇(日滿系)を分類して見るに、時評に關するもの二二、文學一般に關するもの二七、時局に關するもの二〇となつてゐる。もとよりこれは嚴密な分類ではないが、大體本年度評論壇の動向を察知出來ると思ふ。

卽ち、時評に關するものが比較的少く、時局に關するものが多數によつたことは、一つの特殊現象である。また文學一般を論じたものにしても、從來の如く文學のみを對象とせず、文化一般の中に文學を取上げて論ずるといふ行き方の論評が多かつたのは、時局柄當然とは云へ、注目すべき現象であつた。

尙ほ、本年度評論壇に於て、主として活躍したのは、青木實、山田清三郎、上野市三郎、大內隆雄、宮井一郎の諸氏であつた。

○

以上で、大體作品竝評論壇について一瞥したが、こゝでその一樣的な不振の原因について、若干の考察が必要であらう。主なる原因としては、

一、新聞學藝欄の減頁

二、諸雜誌の廢刊乃至文藝欄の廢止
三、內地雜誌への地元作家の進出の減少
四、月評の著しい不振

等があげられる。

しかし、これらは、何れも外在的な原因であつて、更に作家にとつて重要な原因は、大東亞戰爭を契機として、文學者自身に內在した一種の混迷にあつたことが指摘される。

このことについて、金杉一郎氏が「觀光東亞」の「文藝」欄に、次の如くのべてゐる。

「大東亞戰爭勃發以來、日本文壇に於ても特に顯著に現れたところの一種の混迷狀態は、日本史上未曾有の大戰に際會し、文學者はいかに生き、いかに書くべきかの懊惱と反省である。例へば最近「愛國」と題した中山義秀氏の小文に於て次の如く述べてゐる。『幾千萬の生命が、護國の鬼と化しつゝあるやうな現代において、國を愛する熱意と、文學に奉仕する精神とは、兩立しない』『現代を純粹に生きるには、愛國の至情に徹するよりほかない。さう考へたら私の心は、とみに明るく淸々しくなるやうな氣がした』『ともあれ私は非情な文學精神に、奉仕する情に堪へられなくなつてきてゐる』

はかういふ想ひは純粹に生きる作家ほど、つまり文學に奉仕し、文學のみに生きる作家態度を持した人ほど勁いのであらうと思はれる。多かれ少かれ滿洲の作家たちも、今日まで書き、たまた今後書くべく構想してゐるものについて、反省、或ひは逡巡しないものはなかつたであらう。

この問題については、自分には意見もあるが、細述する餘白がない。たゞ作家をして作品活動を澁滯せしめてゐる一因として擧げておくにとどめる。」——

以上金杉氏の記述の中で、「文學のみに生きる」といふ作家態度については筆者もまた意見もあるが、ともかく、今

滿洲文學概觀

日我々はこの重大時局に筆をもつて奉仕するといふ以前に先づ何よりも最も正しき國民として、國家に奉仕するといふ一念を、しつかりとにぎらなければならないことを、痛切に感じるものである。

○

次に、本年度文學發表機關について見るに、新聞學藝欄は、一般に紙面が狹くなつた割合には、從來より著しく質が低下したとは思へないが、總じて企畫、編輯共に尙ほ一段の努力が望ましく眺められた。

最も努力のあとの見えるのは哈日であり、昨年の報告文學の募集に次で、今春の各省別短篇小說の募集、其他滿洲文學の實際に卽した編輯振りであつた。滿洲新聞は、現地通信的なもの、短評、作家論等に努力を示し、滿日は、文學關係に對しては最も消極的であつて、文學の立場からは殆ど批判の對象とはならなかつた。大連日日は、手近に新聞がないため滅多に讀む機會がないが、作家論、時評等によつて、哈日につぎかなり文學に力を注いでゐたやうであつた。

雜誌にあつては、政府の藝文指導要綱に基いて誕生した「藝文」が、當然とは云へ、最も多くの紙面を作品發表に提供した。たゞ同誌には、評論に期待したほどのものが見られなかつたのは遺憾である。その他の雜誌にしては、「新天

地」、「北窗」、「觀光東亞」、「斷層」、「女性滿洲」等が比較的廣い紙面を文學のために割いたが、從來滿洲文學のために盡して來た「滿洲浪曼」、「滿洲行政」、「滿蒙評論」、「滿洲公論」、「作文」等が相次で廢刊したことは惜しまれた。

最後に、本年度の出版と、文學者の動員その他について略記し、この稿を終りたいと思ふ。

本年度に於ける作家活動の不振は、くりかへし述べた通りであるが、作品の不振にひきかへ、作品集の今年ほど多數刊行されたことは近來稀であつた。そしてまた、文學者の街頭進出、動員、奉仕、或は文學的事業等が、これまでになく旺んであつたことも記錄せらるべきであらう。

主なる文學書の出版。——

「地平線を行く」哈日現地報告文學集　淺見淵編輯　東京赤塚書房。「春聯」北村謙次郎著　東京新潮社。「奉天城附近」高木恭造著　奉天作文社。「復活祭」竹內正一著　大連滿鐵社員會。「滿洲浪曼叢書」北村謙次郎編　新京大學書房。「部落の民」青木實著　奉天鐵道總局愛路課。「開拓祭」小林實著　新京滿洲事情案內所。「滿鐵開拓義勇隊訓練所生徒作品集」奉天鐵道總局開拓課。「蘭花香る國」奉天北風書房。「滿洲短篇小說集」田邊尚雄編　新京滿洲有斐閣。「阿片戰爭」棵本捨三著　新京藝文社。「十億一體」島崎曙海著　大連女性滿洲社。「擊滅詩集」滿洲詩人諸家合著　大連女性滿洲社。「滿洲國各民族創作選集」東京創元社

尙ほ年內に出版を豫想されるものとしては安井一郎氏の評論集、竹內正一氏の長篇小說「哈爾濱入城」北村謙次郎氏の「或る環境」等がある。

○

作家の動員、奉仕その他。——

關東軍戰車隊演習見學（山田清三郎氏、大內隆雄氏、宮川靖氏、坂井艷司氏）產業報道隊に參加（鈴木啓佐吉氏、神戶悌氏）。興亞國民動員大會參觀（宮川靖氏、望月百合子氏、劉漢氏）。開拓報道隊に參加（山田清三郎氏、小林實氏。）開拓地見學（日向伸夫氏、高木恭造氏。）第一回滿洲詩人會賞受賞　古川賢一郎氏。建國十周年記念事業　滿華文藝交驩（滿洲文藝家協會員作品八篇を「中國文藝」に華北作家協會員作品八篇を「新滿洲」に交驩揭載。バイコフ翁文學生活四十年祝賀會を擧行。大東亞文學者大會に、バイコフ、山田清三郎、古丁、爵青四氏渡日出席

國民生活と世帶の構成

市川仁平

國民生活の確保のために、從來とても久しく消費節約とか特定物資の使用禁止乃至製造禁止とか一般的な或ひは特定的な趣向手段に依つて國民生活の內容を規制することは、國策の要請として國民に課せられて來たのではあるが、物資不足が深刻化するに伴ひ、かゝる抽象的な政策のみでは效果を期待することが屆一層と困難となるのである。勿論生活現象を詳細に調査分析し、科學的な最低限生活を基調とする消費の低減策を講ずることの必要なることは認められるけれども、かゝる消極的な生活政策は持久體制としては決して相應しいものではない。眞の意味の生活合理化とも異なるものである。從つて國民生活に於ける衣食住の問題は、從來の生活內容を規制する諸政策を十分に併用して更に積極的見地より解決せ

一

物資不足の現象は戰爭の長期持久化によつて、將來避くべからざる一般的現象となるものと推斷するとき、物資不足の直接の或ひは間接の表現たる諸問題、換言すれば、生活必需品配給問題は勿論のこと、住宅問題なり交通問題なり國民の消費生活部面に於いて解決を要する諸問題が重要課題として登場するは必然である。今や、國民生活に於ける衣食住の問題こそ、戰時經濟の運營と表裏する問題として、多面的視角より研究せられ、しかも綜合的に解決せらるべきであり、正に國民生活の持久體制を確立すべき時期に直面してゐるといふべきである。

られねばならない。何故といふに消費生活の壓縮は直ちに生産生活に影響を及ぼすものであるから、生産の增強のために且又人口の增強のために積極的生活政策が要請せられるのである。

如上の意味の積極的生活政策とは、單に生活內容を規制することではなくして、國民生活に於ける主體に發展の地步を付與する如き政策を意味するであらう。國民生活の主體は世帶である。國民生活に於ける主體が、常識的にも家族乃至世帶とされてゐることも見逃せない事實である。筆者も亦、滿洲族乃至世帶に關する調査研究が多くの社會問題研究家の課題の生活現象を例證として多少とも世帶の占める地位に言及しの結果を報告することは强ち徒爾ではないであらう。

二

吾々は滿洲都市に於ける日本人生活問題の縮圖を一應新京生活に見ることが出來るであらう。新京の住宅難竝に交通難の深刻性は依然として懸案のまゝ殘されて居り、搗てゝ最近は生活必需品の配給問題も惹起せられて居る。勿論これ等の問題は新京のみに限られた問題ではなく、現下滿洲も日本も共通な生活問題であり、戰時下國民の等しく耐へ忍ばねばならぬ當然の問題ではあるが、問題處理に當つては常に所謂「乏しきを愛へず均しからざるを愛ふ」といふ國民生活心理が强く作用して居ることを閑却すべきではあるまい。卽ち生活問題は何よりも全國民的立場より公正に對處せられねばならない。公正とは、畢竟國民生活の主體たる世帶に對する公正を意味するものと理解する以外にはないであらう。かゝる理解に基き、最近の配給制を例證とするに、配給物資の數量品質、彈力性に關する明確な認識を必要とすることは異論なきところであるが、同時に配給の對象たる國民生活に關する正しき認識を必要とすることを痛感させられるのである。生活必需品には彈力性乏しきため物資の不足が絕對的であれ相對的であれ表面化する場合は國民生活の基調に動搖を與へるところ至大であるから、世帶を中心に考へるとき從來の配給制に就いても、果して公正なる配給方法なりや否や十分檢討の餘地を存するものと思はれる。從來一般的に配給割當數量を査定する場合、一應年齡別の人口一人當り消費量を算定基準とすることは當然であるが、現實の配給に當つては配給の對象は個人ではなくして世帶を單位として行はれてゐるのである。個人を對象として樹立せられたる政策が現實に於いて世帶を對象として實行に移されるとき、消費單位の問題と關聯して、割當數量の違算、物資の浪費と不足、配給の不公平等不測の齟齬を招來することは免れぬであらう。かく世帶を對象とせる配給制に就いてさへも、兎角配給不圓滑の問題を生ずるのであるから、個人を對象とせる配給制の弊害は縷說を要しない。總じて生活必需品の配給制は速かに世帶中心に編成せらるべきを急務と信ずるのである。住宅問題に於いても單なる人口の增加率に基準を置くことなく、世帶の育成を目標とする大局的見地より立案せる住宅計畫が望ましいのである。交通問題に就ても同樣の關係が在る。

要するに現實的意味に於て、世帶は國民生活の主體であり、現社會生活の核心的存在である。凡ての國民生活問題の出發點は世帶に在るのであり、同時にその歸著點も世帶に在るものと推斷し得るであらう。從つて世帶の人員別、年齡別、男女別構成を分析し、世帶の現實のあるがまゝの姿を把握することは普遍的なる國民生活の安定政策を樹立するために絕對に肝要なるものと斷言出來る。生活の主體たる世帶の實態に適應するところの配給政策なり住宅政策なりを確立することが急務であり、國民生活を安定せしめる所以であるのである。

三

かくて國民生活に於ける主體の重要性に著想し、滿洲諸都市に殺到せる日本人人口の增加と關聯して都市の發展樣相を考察する場合大體滿洲都市には二類型を區別することが出來ると思ふ。第一類型は舊滿鐵附屬地にして建國以前より日本人の大陸發展の據點として、既成の都市機構を形成せる既成都市と、第二類型は建國以後全く新しく都市機構を構築せる建設都市とである。新京は如上の第一類型と第二類型の兩性質を包攝する都市と見るべきもので、長春時代の既成都市機構とこれに接續乃至近接して急速に構築せられたる新設都市機構とを全市域とするものである。既成都市機構はその人口吸收力に於いて特有の彈力性を持つものであるが、これに反して新設都市機構は特定の規格と計畫のもとに構築せられたものだけに人口吸收力に餘裕がないのである。從つて新京に於ける人口增加と人口の所屬する世帶の構成とは地區を異にすることによつて著しき差異を示すものと想像するに難くない。

緩說するまでもなく、新興國の要求する人口は生産年齡階

級にある人口なるため、この生産年齢階級に於ける男女の中には大量の獨身者を包含するのみでなく、日本に於いては標準世帶所屬員なりしも渡滿に際して單身赴任し、過渡的な一人世帶を形成するものも相當數に及び、就中急激に發展せる新京の如き都市に於いては住宅難が直接生活を脅威せるため未だに、獨身者にして結婚不可能なるもの、單身者にして家族を招致し難きもの多數存在せることは都市生活の一特質と看做し得るのである。且つ新京に集中せる日本人人口の主要部分は官吏竝に會社員たる俸給生活者層にして、政府機構竝に産業機構の整備過程に於いては轉勤轉職等の機會も頗る多く、從つて人口移動率も極端に高かつたのも當然のことであるが、人口移動率が世帶の構成に多くの特質を與へた事實も看過出來ないのである。剩へ移動率が頗る高率なるため、屆出手續も從前とかく遲滯し勝ちにて調査も萬全を期し難く、ために常に一定數の幽靈人口をも包含するものと推斷し得るしかも人口は消費生活を離れて存在すること不可能なるためかゝる統計外の幽靈人口とても現實の國民生活に於いては何等かの形に於いて、世帶構成人員として參加するため、統計人口を對象とする諸政策が往々にして現實の生活と齟齬する場合を生ずるのである。

既成都市機構は、アパート・下宿屋・中小商工業の經營を內包し、上述の定著性の稀薄な大量の增加人口を吸收し、長年の住宅難によつて居住密度は想像以上に高率であるため、此處に居住する人口の所屬する世帶は特殊世帶と普通世帶の錯綜せる頗る複雜な不規則性のものにて實態把握も亦困難である。統計外の幽靈人口の本據も主として既成都市機構であり此の幽靈人口のみでなく、生活必需品の割當量が減少するにつれて飼犬飼猫までが太郎玉子なる呼稱のもとに世帶構成消費人口として參加する異例さへ發生するのである。兎に角既成都市機構の世帶の實態調査は頗る困難である。

然るに新設都市機構下の一定の住宅地區は徐々と整備せられ、且つこの地區に居住する世帶は殆ど凡て官吏竝に會社員を主とする給料生活者世帶であり、最近では定著性の點でも安定してゐるのである。故にこの地區の世帶調査によれば、ある程度まで、新京に於ける世帶の標準型の發見に資するは勿論、延いて配給問題、住宅問題等國民生活の確保の上にある種の示唆を與へるものと思ふのである。この意味で筆者は康德八年十二月末基準にて新京の新設都市機構下の某代表的住宅地區の官舍竝に社宅を對象として、合計九二七世帶に就いて構成狀態の調査を行つたのである。先づ最初にその人員

別調査の結果を示せば左の如くである。

新京〇〇〇地區官舍、社宅に於ける構成人員別世帶竝に所屬人口

(康德八年十二月末日現在)

構成人員別	官舍 世帶	官舍 人口	社宅 世帶	社宅 人口	官舍社宅合計 世帶	官舍社宅合計 人口	世帶比率	人口比率
一人世帶	六	六	一	一	七	七	二	一
二人世帶	四七	九四	一〇	二〇	五七	一一四	六六	五六
三人世帶	八七	二六一	二九	八五七	一一六	三四八	一三五	一三五
四人世帶	七六	三〇四	四二	一六八	一一八	四七二	一九六	一八三
五人世帶	七	三八五	一二	五六〇	一九	九四五	二〇三	二三七
六人世帶	三三	一三三	六四	二五四	九七	三八七	四〇六	三九五
七人世帶	三〇	二一〇	二八	一九六	五八	四〇六	六三	四〇三
八人世帶	九	七二	一七	一三六	二六	二〇八	二八	二〇三
九人世帶	二	一八	四	三六	六	五四	一	一四
十人世帶	〇	〇	三	三〇	三	三〇	〇	〇
二人世帶	一	三	一	二	二	三	二	二
合計	三六七	一、六七四	五四〇	二、三五五	九一七	三、九七九	一、〇〇〇	一、〇〇〇

「世帶總數九二七世帶、所屬人口總數三、九七九人に對する調査表より讀み得ることは、先づ一世帶平均人員が四・二九人なることである。この平均人員は日本都市に於ける一世帶平均人員四・六一人(昭和五年國勢調査)に比して〇・三二人の開きあるに過ぎず、世帶の標準化を示すものと見るべきであらう。尙筆者が、三年以前康德六年一月現在、官吏層約一千世帶を對象としてなせる調査當時は、一世帶平均人員三・一九人なりしことを記憶するが、當時と比較し定著世帶が健全なる擴大化を遂げつゝある證左である。次に右の新京の調査を昭和五年國勢調査に於ける日本都市の構成人員別世帶に所屬する世帶竝に入口の比率と對照して、最も多數を占める世帶と最も多數の人口の所屬する世帶に分類し、これを順位に列擧すると左表を得る。

世帶種別順位に關する新京と日本都市比較

順位	最も多數な世帶 新京 世帶比率	日本 世帶比率	最多數人口の所屬する世帶 新京 人口比率	日本 人口比率
第一位	三人世帶 一三三	二人世帶 一八二	五人世帶 二七	五人世帶 一五
第二位	五人世帶 二〇三	四人世帶 一六七	四人世帶 一八五	四人世帶 一四五
第三位	四人世帶 一九六	一人世帶 一四六	六人世帶 一五五	三人世帶 一二八
第四位	二人世帶 一四三	三人世帶 一二三	三人世帶 一四三	二人世帶 一〇二
第五位	六人世帶 一三五	六人世帶 一〇五	七人世帶 一〇三	七人世帶 一〇二

第六位	七人世世	六三	七人世帶	七四	二人世帶	六六	八人世帶	八二
第七位	八人世帶	二八	一人世帶	六二	八人世帶	五三	十一人以上	七八
第八位	一人世帶	七	八人世帶	四七	九人世帶	一四	二人世帶	六四
第九位	九人世帶	六	十人世帶	二八	十人世帶	八	九人世帶	五五
第十位	十人世帶	三	十一人以上	二六	十一人以上	六	十人世帶	三八
第十一位	十一人以上	二	十人世帶	一八	一人世帶	二	一人世帶	一三

一、最多數世帶に就いて見れば、第一順位にある世帶は新京も日本都市と同樣三人世帶で夫婦に子供一人といふ小世帶が案外に多きことを知り得る。新京に於ける第二順位は五人世帶、第三順位は四人世帶にして、日本都市に於ける第二順位四人世帶、第三順位二人世帶と對照して却つて新京が日本都市より世帶構成人員の多い結果を示してゐるのは興味ある事實である。世帶比率に就いて見れば、新京に於いては第三順位までの世帶比率は合計六割二分一厘にて總世帶の半數以上に當る。これに對し日本都市では第三順位までの世帶の約半數に達するに過ぎない。概觀して、日本都市の生活態樣は傳統的にも複雜なるため、各種世帶の占める比率は夫々に近似し、特に高率なる世帶は少なく、各種世帶が平均して配置せられてゐるが、新京に於いては第五順位までは日本都市の世帶比率に比較して著しく高い比率を示してゐることは、被調査世帶數の過小なることにも因るであらうが、生活の傳統淺く移入人口の世帶構成としての標準を示すものとも推斷せられ、又世帶純化の樣相とも見做し得るのではなからうか、いづれにせよ最多數世帶の順位は新京に於いては三人世帶、五人世帶、四人世帶、二人世帶、六人世帶の順序であり、恐らくこの世帶別序列は興安大路以南の新住宅地區の世帶の標準を示唆するものであらう。これを日本都市と比較するとき世帶の順位竝に比率に於いて多少の相違はあるけれども、新京も生活機構の安定、人口の定著によつて、その世帶構成は日本都市の樣相に著しく近似しつゝあるものと推斷し得る。

二、最多數人口の所屬する世帶に就いて云へば、第一順位より第五順位まで新京も日本都市と同樣に五人世帶、四人世帶六人世帶、三人世帶、七人世帶の順位に於いて全く符合せることは興味ある事象と云はなければならない。新京の人口の八割五分までは此等の五世帶に所屬するのである。日本都市に於いても人口の半數以上は此等の五世帶に所屬してゐる。新京は既に建設段階を通過せるため、徐々と變則な世帶型體より脫して、世帶の標準化に向ひつゝあることが窺知される。

（國民生活と世帶の構成）

以上に於いて世帶竝に人口に關する概觀的素描を終るが、更に進んで世帶種別に所屬人口の年齢別男女別構成を見ることは、消費單位の問題、人口政策の立場等より最重要事であるに拘らず、かゝる分析は從來等閑視せられた憾がある。筆者は上述の調査對象九二七世帶を官舍竝に社宅に分類して世帶種別による年齢別男女別の構成を調査し、最後に兩者を綜合して以下の三表を得た。

官舍構成人員別世帶の世帶竝に所屬人口年齢別男女別調査

世帶種別		一人世帶	二人世帶	三人世帶	四人世帶	五人世帶	六人世帶	七人世帶	八人世帶	九人世帶	十人世帶	十一人世帶	合計
世帶數		六	四七	八七	七六	七七	五三	三〇	九	二	〇	一	三八七
一乃至一〇	男	〇	〇	二四	五三	五七	五一	二八	一五	二	〇	五	三三四
	女	〇	〇	一九	四三	六一	六〇	四八	一七	三	〇	一	二五二
一一乃至二〇	男	〇	〇	四	一九	三五	一三	二〇	五	四	〇	一	一一二
	女	〇	四	一七	九	二九	四四	二七	一四	四	〇	三	一五二
二一乃至三〇	男	五	一八	二四	二〇	一九	七	九	〇	一	〇	〇	一一三
	女	〇	一三	六四	五一	五三	二八	一九	二	〇	〇	〇	二四八
三一乃至四〇	男	一	二五	五五	五一	五三	二四	一七	三	〇	〇	〇	二二九
	女	〇	六	二一	三一	三五	三三	一九	九	一	〇	一	一五五
四一乃至五〇	男	〇	六	九	三一	一六	三	三	六	一	〇	一	七六
	女	〇	一	三	三	九	七	五	〇	一	〇	〇	二九
五一以上	男	〇	一	六	三	九	六	三	〇	一	〇	〇	二九
	女	〇	一	五	九	一〇	八	三	一	〇	〇	〇	三七
合計	男	六	五〇	一三三	一五八	一八九	一三三	八九	二九	九	〇	七	八〇二
	女	〇	四四	一二九	一四六	一九六	一七九	一二一	四三	九	〇	五	八七二
	計	六	九四	二六二	三〇四	三八五	三一三	二一〇	七二	一八	〇	一三	一,六七四

社宅構成人員別世帯の世帯並に所屬人口年齢別男女別調査

世帯種別	世帯數	一乃至一〇 男	一乃至一〇 女	一一乃至二〇 男	一一乃至二〇 女	二一乃至三〇 男	二一乃至三〇 女	三一乃至四〇 男	三一乃至四〇 女	四一乃至五〇 男	四一乃至五〇 女	五一以上 男	五一以上 女	合計 男	合計 女	合計 計
一人世帯	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	一	〇	〇	〇	〇	〇	一	〇	一
二人世帯	八五	〇	一	〇	四	二九	六〇	四五	四	六	七	三	一	八三	七七	一七〇
三人世帯	一二九	三八	四六	八	八	四九	九一	六九	二九	八	一	五	五	一七七	一八〇	三八七
四人世帯	一〇六	七七	五六	二四	一八	三四	七六	六三	三八	一八	七	六	七	二二二	二〇二	四二四
五人世帯	一一三	一〇七	七五	三三	五一	三五	八四	七二	四〇	二一	一四	八	二一	二七五	二六五	五六五
六人世帯	六四	五八	六八	四四	四六	二〇	三五	三三	三三	二〇	九	四	一五	一七九	二〇五	三八四
七人世帯	二八	二八	四七	一五	二五	八	一一	一八	三三	一一	三	三	四	八三	一一三	一九六
八人世帯	一七	二八	三	一九	一七	五	五	一〇	一五	九	三	一	二	七二	六四	一三六
九人世帯	四	六	八	六	五	一	一	一	二	三	二	〇	一	一七	一九	三六
十人世帯	三	三	二	六	五	〇	四	二	二	一	一	二	二	一四	一六	三〇
十一人以上	一	一	二	〇	一	一	二	三	一	〇	〇	〇	〇	五	六	一一
合計	五五一	三四六	三一七	一五五	一八〇	一八二	三六九	三二六	一九六	九七	四七	三二	五八	一、一三八	一、一七七	二、三〇五

官舍社宅世帶綜合調査

世帯種別	世帯數	一乃至一〇 男	一乃至一〇 女	一一乃至二〇 男	一一乃至二〇 女	二一乃至三〇 男	二一乃至三〇 女	三一乃至四〇 男	三一乃至四〇 女	四一乃至五〇 男	四一乃至五〇 女	五一以上 男	五一以上 女	合計 男	合計 女	合計 計
一人世帯	七	〇	〇	〇	〇	五	〇	二	〇	〇	〇	〇	〇	七	〇	七
二人世帯	一三二	〇	一	〇	八	四七	九二	七〇	一〇	三	八	四	二	一三三	一三一	二六四
三人世帯	二〇六	六二	六五	三一	二五	八三	一五五	一二四	五〇	一七	四	二	一〇	三〇九	三〇九	六一八
四人世帯	一八二	一二九	九九	四三	二七	五四	一三七	一二四	六九	三一	一〇	九	一六	三八〇	三四八	七二八
五人世帯	一八九	一六四	一三六	六八	八〇	五四	一二六	一二四	七五	三七	三二	一七	三一	四六四	四八一	九四五
六人世帯	一一六	一〇九	一二八	六七	七〇	二七	八三	六七	六四	三三	一六	一〇	三三	三三三	三八四	六九六
七人世帯	五八	五六	九五	三五	五三	一七	三〇	三五	四三	三三	八	六	七	一七三	二三四	四〇六
八人世帯	二六	四三	三九	二四	三	五	七	一三	二四	一五	三	一	三	一〇一	一〇七	二〇八
九人世帯	六	八	二	一〇	九	二	一	一	三	四	三	一	一	二六	二八	五四
十人世帯	三	三	二	六	五	〇	四	二	二	一	一	二	二	一四	一六	三〇
十一人以上	二	六	三	一	四	一	二	三	二	一	〇	〇	〇	一三	一一	二三
合計	九二七	五八〇	五七九	二六六	三一二	二九五	六一七	五五五	三五二	一七三	七六	六一	九五	一、九三〇	二、〇四九	三、九七九

綜合調査表より年齢別男女構成比率を算定して表示すれば左の如くである。

世帯別年齢別男女構成割合

世帯種別	世帯數	一乃至一〇	一一乃至二〇	二一乃至三〇	三一乃至四〇	四一乃至五〇	五一以上	平均
一人世帯	七	—	—	—	—	—	—	—
二人世帯	一三二	—	—	五一	三四〇	一五〇	二〇〇	一〇一
三人世帯	二〇六	九五	四八	五三	二四八	四三五	一二〇	一〇〇
四人世帯	一八二	一三〇	一五九	四三	一六五	三一〇	五六	一〇九
五人世帯	一八九	一二〇	八五	三九	一六五	一六〇	五四	九六
六人世帯	一二六	八五	七四	四三	一〇四	二〇〇	四三	八一
七人世帯	五八	五八	六七	五六	八三	二八七	八五	七三
八人世帯	二六	一一〇	七六	七〇	五四	五〇〇	三三	九四
九人世帯	六	七三	一一	二〇〇	三三	一三三	一〇〇	九二
十人世帯	三	一五〇	二〇	—	一〇〇	一〇〇	一〇〇	八七
十一人以上	二	二〇〇	二五	五〇	一五〇	—	—	一〇九
平均	九二七	一〇〇	八〇	四七	一五八	三二七	六四	九二

(女百に付男)

綜合結果による世帶別男女構成は四人世帶、十一人世帶、二人世帶に於て男子超過を見るのみにて、三人世帶は男女同數其の他の世帶は女子超過であり、總平均に於いて女百に付男九二の女子超過である。併し傾向としては略均衡狀態にあるものと認められ、特に憂慮する程の不均衡はない。之に對し世帶別年齡別の男女構成を見ると著しき男女構成の不均衡を見るのである。卽ち一歲代に於ては世帶種別により或ひは男子超過或ひは女子超過にて多樣ではあるが、平均にて全く均衡の狀態にある。十歲代、二十歲代に於ては著しく女子超の現象を呈し、殊に二十歲代は平均女百に付男僅かに四七といふ女子超過である。十歲代、二十歲代の女子超過は一二の例外を除き各世帶の共通現象である。その原因としては、この年代は女子にとつての最效率的な生產活動期なるため多數の未婚女子を包含してゐるものと推測することが出來る。從つてこの年齡階級の女子は近き將來に於いて現在所屬する世帶より獨立して新しき世帶を構成すべき人員なることは明かである。

他方生產年齡階級の男子獨身者は、同居人として普通世帶の所屬員となるものよりも獨身寮、アパート、下宿屋等の居住者として特殊世帶に所屬するものの方が多きものと推測せられる。從つて普通世帶の男女別構成に於ては女子の壓倒的超過を見るのではなからうか。之に對し三十歲代、四十歲代に於ては傾向が逆轉して一二の例外を除き各世帶とも著しく男子超過にて、平均に於いては三十歲代女百に付男一五八、四十歲代女百に付男二二七といふ著しき男子超過の現象を呈してゐる。五十一歲以上の年代に於いては再び女百に付男六四といふ女子超過に變化してゐる。

概觀して一歲代に於いて男女構成比率を同じくして居ることは出生の自然的性質を明示するものに外ならないが、十歲代及二十歲代に於ける著しき女子超過と三十歲代及四十歲代に於ける著しき男子超過との興味深き對照は明かに新京に居住する世帶が未だ何等の傳統を持たざる生產年齡階級世帶にのみ限定せられるといふ社會的性質を端的に例證するものと考へられる。

年齡階級別に所屬總人口の構成比率を算定するに、一歲代二割九分强、十歲代一割五分强、二十歲代二割二分强、三十歲代二割二分强、四十歲代六分强、五十一歲以上三分强にして、年齡構成は一歲代を基底とするとき理想型と見られる所謂ピラミツド型ではなく、十歲代が縮小し二十歲代、三十歲代が膨脹せる異常型を示してゐる。世帶の過渡的性質の表現と

推斷出來る。

日本都市に於ける世帶別の年齡別男女別構成に關しては未だ一般的調査資料が發表せられて居ないため、筆者のなせる如上の新京に於ける世帶別の年齡別世女別調査の結果を日本都市の狀況と比較對照することは出來ないが、世帶別の世帶構成比率或ひは人口構成比率のみに關しては前述の如く、ある種の符合を見出すことが出來、尠くとも近似せる樣相を發見するのである。しかし世帶の年齡別世女別構成に關しては、年齡別男女比率の不均衡、年齡別人口構成の異常性等より判斷して、調査對象九二七世帶の中には相當多數の未發達世帶を內包してゐるものと推斷することが出來るのである。

四

筆者は新京の當面せる生活問題に關聯して世帶に關する認識を昂める必要に言及し、併せて新京の某代表的住宅地區に於ける官吏層竝に會社員層の世帶調査の結果を詳細に報告したのである。何分にも個人でなせる調査なるため調査對象は僅かに九二七世帶に限られたのではあるが、上揭の諸表のみからでも吾々は世帶の實態に關する種々なる示唆と問題とを讀みとり得るものと信ずるのである。國民生活に於て世帶の占むる地位が重要であり、世帶育成の方策が眞の意味の生活政策なりとすれば、斷片的な調査より直ちに一般論をなすことは頗る危險ではあるが、筆者が調査によつて受けたる印象より類推することを暫く許すとすれば、新京興安大路以南の新住宅地區に於ける世帶の構成は、恐らく大體に於いて上述の調査結果と類似せる樣相を呈するであらう。しかし新京俸給生活者の世帶構成は日本都市の標準に照し、よし形式的に類似することがあらうとも、實質的には著しき差異あるを免れざることを牢記すべきである。

換言すれば、總じて滿洲都市の世帶は發展擴大の過程にあるのであつて、滿洲國の人口政策は、かゝる未發達な世帶を育成することを基調として展開せらるべきを認識しなければならない。

滿洲國の人口政策は、生產力擴充を至上命令と見る限り、日本人人口の移入政策と、移入人口の定著增强政策との兩側面に對する配慮を要するは當然であり、兩人口政策の基調は、國民生活の安定に求むる以外に道はない。世帶を對象とする政策、別言すれば所謂家庭政策の革新が要請せられる程度は、日本都市に於ける如き、生活基盤を持たざる滿洲都市生活に於いて、特に强く切なるものがあるのである。

南方作戰と原住民族

語る人

A 大佐
B 大佐
C 大佐
D 中佐
E 少佐
F 少佐

記者　一寸御挨拶を申上げます。今夕は御多忙中にも拘はらず御出席下さいまして厚く御禮を申上げます。昨年十二月八日、東亞解放の火蓋を切られてからも一年の月日を經ようとして居ります。この間我が忠勇武烈の陸海空の將兵達の擧げて參りました戰果は未だ世界戰史に類を見ない偉大なものであります。併し今や戰ひは長期戰に入らうとして居ります、我々日本人はこの聖戰完遂の爲に身を砂に碎いても飽迄も戰ひ遂げなければならぬと思ふのであります。廻り來る十二月八日を迎へるに當り、幸ひ南方の第一線に身を以つて奮戰されました皆さん方に御出席願ひまして、尊い御體驗のお話を承りまして、これを我が「銃後國民に皆さん方の御苦心の跡を知つて頂き、さうして益々銃後の固めを強く致しまして、この聖戰完遂の爲めに貢したいと思ふのであります。甚だ粗辭で恐縮でありますが……。

尙今晩のお話の進行はA大佐殿にお願ひ致したいと思ひます。どうか宜しくお願ひ致します。

暴かれた人道主義

A大佐　申す迄もありませんが、お集りの皆樣は大東亞戰爭に於いて南方共榮圈の各方面に參戰されて赫々たる戰歷をお持ちの方ばかりであります。この參戰によつて親しく見聞し、體驗された事柄で、特に最初に、ABCD諸國の植民地政策と云ふもの、實態はどう云ふものであつたか、又それが如何に原住民に影響を與へたか、その影響が如何に今度の戰爭に現はれたかと云ふことを御體驗を通してお話を願ひたいと思つて居ります。突込んでお話をして頂きたいと思ひます。

先づフイリッピンに行かれたF少佐如何ですか。

F少佐　米國は原住民に對して如何なる植民政策を取つたか、又彼等の人道主義と云ふものの實態はどう云ふものであつたかと云ふことですが、結局アメリカのフイリッピンの原住民に對しての政策は、一見喜ぶ樣にして、而も良く檢討して見ると非常に狡いやり方でありまし

た。土民がアメリカのやり方を喜んで居る樣に し向けて、而もその實質はあくなき搾取によつて充されて居ると云つた樣なやり方であつた樣に思ふ。

一例を取つて見れば自動車でありますが、アメリカの自動車を何處迄もフイリッピンに賣込もうと云ふ政策の爲めに、原住民の手によつて挽く民衆的な乘物カルマタ——滿洲の馬車の樣なものである——などに對してはうんと高い稅金をかける、原住民にしてもカルマタがよいのであるが、自動車が安く月賦で入手出來るとか、又一部原住民の流行を追ふ心理なども捉へてどんどん自動車を賣込み、きれいな洋服を着て贅澤をすることを覺えさせる。又自動車を賣込むのに對してカルマタには稅金をかける以外に、仲々その許可をしない。又バスの樣に一般民衆のためになる乘物などには高い稅金をかける。さうして良い自動車に乘せて喜ばす樣に見せて、その實は搾取の對象として苦しめて居ると云ふ拔け目のないやり方などその一例でありますが……

A大佐　ジャワは如何ですか。

D中佐　今フイリッピンのお話がありましたが、フイリッピンとジャワと比べて見て面白い對象が考へられると思ふ。それはつまりアメリカとオランダとの植民政策の相違とでも結論すべきものと思ひました。

フイリッピンは只今述べられた感じでありましたが、我々が作戰をしまして概してフイリッピン人と云ふのは我々を白眼視して居つたのですが、これに對してジャワの人間は何と云ふか內地で秋季演習をやつて居る樣な感じで、沿道致る所日本語になほすと「萬歲」と云ふ奴を以つて迎へて呉れて居りました。簞食壺漿と云ふか、我々に對して椰子の實を持つて迎へて呉れた。原住民の我々に對する態度がフイリッピンの場合とまるで違つて居りましたが、段々日がたつにつれ落着いてよく觀察して見ると、これまでにアメリカがどれだけフイリッピンに對して貢獻したか、オランダがジャワに對してどれだけ貢獻したかと云ふことを考へて見ると凡てが反對の樣に思はれる。

ジャワの內容をよく考へて見ると、オランダがジャワの開發なり產業なり文化と云ふ方面に貢獻したことは偉大なものであると思ひます。

道路に例を取つて見ましても、あれだけの立派な道路、ジャワ全土に山頂に到る迄立派な道路を開通して居る、殊に水利に到りましてはこれはオランダのお得意でありますが、實に我々がびつくりする樣な水利をとにかくやつて居ります。耕して山頂に到ると云ふ所ジャワこそそれであります。それ程水利をよくやつて居りま す。又その他の開發事業についても、あれだけの物產を開發して居ると云ふことを見ましても、實に偉大なものと思ひます。これに比べてアメリカの開發はジャワと比べものにならない程度が低いのでありますが、原住民に對する懷柔策と云ふものに到りましては、今のお話の樣に兎に角フイリッピン人は一口に言へばすつかりアメリカナイズされて居り、インドネシア人は我々が行けば「萬歲萬歲」で歡迎し、敗殘兵が出て來れば竹槍で殺すと云ふ樣に反感を持つて居る。これがアメリカとオランダの植民政策のやり方の非常に差のある所でないかと云ふ樣に深く感じた次第であります。

顧られぬ原住民底

A大佐　ジャワでそれだけ開發をやり乍ら原住民が非常に反感を持つて居つた原因は何處にありませうか。

D中佐　オランダはジャワそのものに對しては非常に貢獻して居りますが、それがインドネシヤ人個人に對して何等の利益を與へて居ないと云ふことです。それだけ開發して廣く大きく搾取して個人的には惠みを與へて居ない。アメリカは個人的に贅澤を敎へ、彼等の生活を安逸にする樣に導いたが、オランダは個人的に彼等の生活を向上させなかつた。唯開發によつて

自分等の利益を占め樣と云ふ所が差ではないかと思ひます。

A大佐　アメリカは原住民に對して精神的には向上させなかつたが、物質的には恩惠を與へた。オランダはジヤワに對して自分の富強を致す爲めの政策に對しては到れり盡せりの政策をやつたが、原住民の精神的物質的向上と云ふことに對しては何にも致さなかつた。ジヤワの經營と云ふことは畢竟自分を富まさんが爲めのことであつた。それが結局あれだけの開發をさせたに拘らず、原住民が竹槍筵旗で反抗した理由だと云ふことになりますね。

D中佐　これはアメリカとオランダの國情の差と云ふか、アメリカと云ふ國は自分の國で生産したものをフイリツピンに賣込んで利益を得る、オランダはジヤワで得た物を自國に持つて歸ると云ふ所に根本の差があると思ひます。

A大佐　アメリカはフイリツピンを消費地として居り、オランダはジヤワを生産地として居る所に相違があるわけですね。

D中佐　さう云ふ所が根本的に違ふと思ひます。

儲ける爲めの福祉施設

A大佐　スマトラは如何でありましたか。

C大佐　あれも關頭でありますから、同じ關係でありますね。一例を醫事衞生について見ると、非常に人口が稀薄である、土地は非常に廣い、それでその廣い範圍に亙つて居る所に醫療を普及をすると云ふことが非常に問題であります、それをとにかく相當の組織でもつてやつて居るのです。それから又御承知の樣にオランダは農業國でありまして、色々の農産物が出來るのであります。それから石油の採取會社、斯う云ふ一つの會社には非常に大きな組織でやつて居る。斯うした産業には澤山の苦力を使つて居るので、病院も持つて居ります。それで衞生の方は先づ概してよく行つて居ると言へるのでありますが、それを些細に點檢して見ると今の大産業會社が病院を開くと云ふことは、生産の爲めに止むなき必要であつて、苦力が病氣になると困るのでソロバン勘定から出て居る衞生施設でありまして、地方の醫事衞生と云ふものも一つは住民に對する民心を掌握するために必要な所から出て居るもので、概して豫防衞生の方は大變によくやつて居るが、治療になつて來ると、例へば澤山のオランダの醫者が居るけれども、一般の連中の診察などは駈け出しの代診程度のものに診察せしめて、オランダ人の醫者はインドネシヤ人などに對しては熟心に見ない、勿論僅かな例外もあるけれども、さう云つた樣な現象がある。我々が行つてオランダ人は一度監禁したけれども、必要な方面、殊に技術方面で醫者は當分の間オランダ人を働かせなければならぬと云ふ所から、元の病院に歸らせてやつたのです。さう云ふ際に或所では、代診で働いて居つた樣な連中が、オランダ人の先生は來ないでも良いと云ふ樣なことを言ふ。段々聞いて見ると、病院の管理はして居るけれども、實際の診察などはやらないと云ふことの爲めに、オランダ人の醫者は來ないでもよいのだと云ふ樣なことで却つて反對の運動をすると云ふ者も出て來た樣な狀態でした。

又アチエ州に居るアチエ族は獨立心が強いのですが、慓悍と云ふか、獰猛性がある、非常に勇しい種族でありますが、蘭印の中でも最後迄オランダに對して武力抵抗をして居つた。我軍が作戰した時でも現に蘭國に對し抵抗して居つたのです。そんな關係もあるけれども、其の地方にオランダの醫者がやれない、然らば誰が行つて「無醫村」を治療するかと云ふことになつたが、原住民の醫者を欲する者が居らないと云ふことで、實はこの點あまり反感が高い爲めに我々が作戰する時に都合がよかつたが、後で建設的に治めて行くのに困つたと云ふ事實もあるのです。それですから、形の上では大變良くやつて居るが原住民に對する醫療とか言ふ最後の人間個人に對することになつて來ると大變冷淡なものでした。我々の眼から見るともつと〳〵親切でなければならぬと思ふ所があるのです。

都會は大體衞生的に大變よく開發して居るので病氣も少いのですが、村落の方に行くと云ふと施設がそれだけ出來て居ないし、住民の衞生思想も非常に低いと云ふ所から年中傳染病がある。チフス、マラリヤ。マラリヤは南方では一番大きな病氣ですが、斯う云ふ病氣と云ふものが都會に比し大變なものです。

所で都會の衞生施設もよく見ると仲々面白いと云ふよりは狡い、例へば水洗便所ですけれども、淨化せずに河に流す、河下には回教徒がアンデーと云つて少くとも日に二三度は沐浴してメッカを拜む爲に水に浸つて居る。これはなる程一方から考へればそれでも悪いことはないが住民達は便は河の中でやつて流すから必ずしもこれを取つてオランダのヤリ方は甚だ原住民に對して亂暴であるとは言ひ切れないがそれで濟して居るのを、我々が行つて見ると如何にも可哀想だし、町の眞中の川で便をやつて居ると云ふことは、衞生的に見てこれは將來もう少し斯うした方面を改善してやらなければならぬと思ひました。かう云ふ所が隨分あります。併しながらこれは關印に限らないことで、マレーも通りましたが、凡て醫事衞生と云ふものが南洋開發には非常に大きな意味を持つて居るのです。事業をやらうとすると、從業者の保健が考へられなければならぬ。マラリヤなどによつても勞働者が非常な損害を蒙むるのです。何處の國でも南洋經營開發する時には醫事衞生には非常な施設をして居る。その點が蘭印に限らず、イギリスに於いても同樣やつて居りました。

徹底した愚民政策

A大佐　衞生の話が出ましたが、オランダのやり方でオランダ人自身に對する衞生施設と原住民に對する衞生施設の違ひがありましたか。

C大佐　病院を開いてもその機械なり施設と云つた技術的な方面はオランダの醫者が大いにやつて治療もその方面を受持つて居りオランダ人の患者は普通に見て居るが、原住民に對しては代診程度の者にやらして居る。斯う云ふ事實が各所にある。それとオランダ人の醫者が高い月給を取つて、適當にやつて居ると云ふのが多いです。ですから、其處の原住民に取つて見れば、殊に病院に働いて居る者に取つて見ればオランダ人の醫者なんて無用の者だと云ふ樣な感しがする。併し病院を管理する能力はオランダの醫者でないと出來ない樣です。我々が見るとこの點が物足りない。

B大佐　例へば水道の施設ですが、これはオランダ人の水道の施設であつて一般民衆の爲のものではない、又水洗便所などもオランダ人の生活の爲にやるので、その處理が如何にならうと蘭人の關する所ではないと云ふ譯ですね。

C大佐　さう云ふ點が非常にあるのであります。固より水道も原住民も使へる樣にはなつては居りますが、普及して居らない、オランダ人の住んで居つた家に入れば立派なものであります。あゝ云ふ所に住んで居れば、健康にも良いですし、我々もさう云ふ家に入つて見ましたが、堂々としたものです。それに引替へて原住民の生活は慘めなもので、彼等に本當に原住民を愛する氣持があるならば一視同仁で大いにやらなければならぬのであるが、さう云ふ點は見ることが出來ない。

これは一般の教育などとも同樣に關係のあることでありますが、官吏はとにかく作るけれども、何の彼のと云つて學問を普及せしめないで一般に愚民政策が取上げられて居る。それがオランダの政策です。又各人種の習慣なども昔ながらのものをなるだけ持續せしめ、人種感を强く持たせて、お互ひの人種の間の横の連絡、團結をさせない樣にやつて居るのです。さう云ふ方針で彼等を統御して居ります。又彼等の生活を向上せしめ、文化の恩惠に浴せしめると云つたことをやらないで、つまり人間としての向

上發展をさして行くと云ふのではなくて、何時迄も低級な者にして、現狀維持にして文句を言はない愚民にして治めて行かうと云ふ態度は實にはつきりしたものです。

生かすべからず殺すべからず

B大佐　その點はオランダの政治機構がさう云ふ風になつて居ります。オランダの關印の統治の根本は、原住民は「生かすべからず、殺すべからずとの方針です。殺しちやいかぬが、生かしてもいかぬ、要するに死なぬ限りの最低限度の生活を出來る程度のものを與へると云ふ組織なんです。それが根本でありますが、只今文化政策のお話もあつたのですが、要するにオランダの政治は、——あすこの公用語はマレー語ですが官吏の登用試驗の最も重大な資格はマレー語の試驗が通るか否かである。マレー語の出來ない者は官吏になれない。中等學校も殆どなく、又あつても學校に行ける樣な金を與へない。又その反面に於いてはオランダはあゝ云ふ國ですから、英米がなくてはオランダは一日も存命出來ないから、官吏に對しては英語を勉強させる。マレー語は資格です。英語の試驗を通つた者には何割增してやると云ふ樣に、英獨語をやつて居る。原住民に對しては小學校で十分であると云ふことで、それ以上の教育をなるべく與へない樣にして居る。又マレー語では難しい學問は出來つこない。現に少し難しい話の通譯は持て餘して居る、言葉がないのですから——ですから難しい學問は出來ない。それはサルタンだとか、金持はヨーロッパにも行ける樣になつて居りますが、一般の者はさう云ふ金を持てない。又その反面に於いて産業方面に於いては殺すべからず生かすべからずをやつて居ります。五千何百萬の人口で、人口密度三五〇です、滿洲は一〇倍の密度、奉天が三五人ですから、滿洲の一〇倍の密度、奉天が一五〇人と云ふから、それの倍以上です。そして農業の盛んな所で、五・六百米の山の頂上迄水田があると云ふ樣に作つて居る。而も巧くやれば三遍取れる、それにも拘らず米が足りないと云ふ、これは何故かと云ふと、米で足りない所は椰子で補ふと云ふ樣な方法を取り、後の耕作面積は全部砂糖を作る。商品農産物として砂糖を作り米は最少限に止めると云つた政策を取つて居ります。又オランダの政府當局では、オランダ人に對する政治と原住民に對する政治を別々にやつて居ります。原住民に對しては原住民出身の警察官が居つて、それにやらして居ります。それに對してはその上に居る州の理事官が村長・縣長に對して督勵をして居る。さうしてオランダ人は直接人民と接しない。さうして上に居つて指揮をするのであります。

二等のない電車

向ふの乘り物には一等と三等と四等があつて二等がない。オランダ人は一等で、原住民は三等四等に乘つて居ります。電車が三臺か四臺續いて居り、その中に一等が一臺附いて居る譯です。政治するのも今の電車の樣に、オランダ人の役人が原住民の役人に命令をすると云ふ樣にやつて居ります。今度戰爭の後直ちにバタビヤで二等に變へたのですが、非常に評判がよいのです。結局生活は、「働けど働けど我が暮し樂にならざり」で、併しさう云ふ中でもアチエ族の前後四十年に亙つた反抗などにも色々考へさせられますが、要するに三百年の間、徹底的な壓政を受けて、非常な強力な武力に依る壓服に終始したのであります。搾れるだけ搾つたものらしいです。現在でも原住民は日給三十錢位で生活は十分出來る程度の低いものですが、一日六、七錢あれば濟むらしいですね。

記者　原住民の職業は主に農業ですか。

B大佐　上に上がらうたつて上に上れないのですから、農業で濟む譯です。官吏の登用試驗があつても、試驗が難しくて入れない。通らないのです。

記者　結局奴隷ですね。

B大佐　民族性を尊重すると云ふ意味でなく習慣を尊重して、裸で踊らうと何をやらうと「やれ〳〵」と言つて居ります。原住民はオランダ人は神樣に近い優秀な民族であると云ふ樣に考へさして居ります。オランダ人にはとても寄り附けない樣な政策を取つて居ります。直接原住民に對して手を出さないのも、お高く止つて居るための手段ですね。我々が向ふに行つて原住民に心易くやると、非常に歡迎はして呉れますが、或る場合など却つて向ふから忠告する位です。それは餘り親しくされるのは將來の爲にどうかと思はれると云ふことをサルタンなどが言つて來る。私共が餘り彼等に接觸するとサルタンの立場が困るらしい。我々が原住民と握手してやると、彼等にとつては嘗つてオランダ人からさう云ふ眞似もされたことがなかつたから非常な驚きですね。一例を極く卑近な例で申上げますと、向ふでも歡迎會で演藝をやつて呉れる。その踊りをやつた後で、よくやつて呉れたと云ふことで、酒の一杯も飲めと云ふことになるのですが、そんなことは彼等には夢にも思はなかつたことです。非常な感激をすると共に、一面友達と云ふ樣に考へる樣になつて來るのですがそれはよい結果とは思ふが、彼等の社會では非常に階級制度が固く守られて居り、サルタンなどは畏い話ですが、私共が御上に對し奉ると同じ樣な程度であつて、さうしたサルタンと我々との位置などを考へると、餘り原住民と我々が接觸することが、サルタンから見ると古い階級觀念の崩壞を恐れる氣持から氣になるのではないかと思ひます。

サルタンと原住民の關係は、家の中でも、サルタンの前では立つて歩けない位です。ひざまづいた儘用つて拜むのです。そして又オランダ政府も一つの政策としてこの階級制を固守する樣努力して居ります。

記者　從來のその樣な階級制度の所に行つて日本の偉い軍人さんが行つて親しくしてやれば大いに喜びませうね。

B大佐　非常に高いものであつた他民族（殊にオランダ人に對して）に對して持つて居つたものを一切捨てゝ、我々に接したその感激は大したものですね。

F少佐　つけ上ると云ふことを一部では心配して居る樣です。オランダ人を我々が押へると、現住民が我々の兄弟が來たと云ふことで、今迄押へ附けられて居つたのが、解放されるのですから、今言つた樣な傾向はないとも限らないですね。これは將來の植民政策とか民族政策として餘程考へなければならぬと思ひます。

A大佐　非常な壓力の加つた直後の眞空狀態になつたと云ふ狀況ですね。非常な反動があることは豫め豫想しなければならぬ。

C大佐　今度は彼等の教育を一生懸命にやつてやれば能力があるのですから、もつと政治的に獨立の出來る樣な、立派な民族に仕上げ、我々東亞民族が大同團結が出來るのだと云ふ自覺を持たせる樣に育てなければならぬと思ふが現在は非常な轉換期ですね。

囮になつた蔣介石軍

A大佐　ビルマは如何でしたか。

E少佐　戰爭だけやりましたが、餘りさう云ふ面にはタッチしませんでした。一般にビルマの原住民は我々に對して親しみを持つて居つたのですが、日本軍に對しては實際涙の出る位の親切を盡して呉れた例も少くありません。先刻は椰子の實のお話しが出ましたが、鷄を持つて來て呉れたり、面白い位食べ物を持つて來る。又あすこは水の得がたい所で（マンダレーとラングーンの中間あたり）非常に弱つたです。それは高原地帶で恰度滿洲蒙古の少し奥に入つた所と同じ感じを持つて居るが、その地方の氣候も似て居りますし、風俗なども坊主の非常に多い土地で、黄色の衣を來て居りますが、さう云ふ連中が坊主も一般原住民もどん〳〵瓶に水を入れて持つて來るのです。ラングーンから北上するに從ひ蔣介石軍が戰線に顏を出す樣になつ

たのですが、之は御承知の通り世界一軍紀の立つてない軍隊なので、婦人は凌辱するは、掠奪はするはで住民の非常な反感を受けたのですが、我軍の猛攻に會つて支へ切れず雪崩をうつて敗走するとなると御得意の焦土戰術で到る所の都市村落生必物資に放火し無慘に破壞して逃げたので原住民の憤激は爆發して到る處に小栗栖の長兵衞ならぬ敗殘兵狩が行はれたものです。原住民は氣概のある民族でしたし槍は持つて居りますし、又蒙古刀によく似た日本刀の先を切つた樣な武器も持つて居りますが、さう云ふ武器でやつつけた敗殘兵の死體を、先頭の部隊の行く前に道端に並べて、「我々が殺したのだ」と云ふ態度で昂然として待つて居りました。さう云ふ方法で我々を歡迎しました。我々が見ただけでも部落々々の入口には必ず二〇名三〇名の死骸がありましたからビルマ全土に亙つてはどれ位あつたか一寸見當がつきません。私も色々な戰爭に參加しましたが、今迄嘗てあゝ云ふことを經驗したことはありませんでした。

A大佐　英軍に對しては如何でしたか。

E少佐　英軍は逸早く戰場から姿を消したので顏も合さず又話も餘り聞きませんでした。併し色々な話を綜合して見ると、戰鬪にあたつて先頭には決して立たなかつたですね。私はビルマの會戰以後參加しましたが、私共の部隊は眞中でありましたが、敵の部隊には戰車も可成り加はつては居りましたが、主力は支那軍でありました。英軍はどんどん逃げる、支那軍はその後から我々に追はれ乍ら逃げる譯です。始めは英軍も少しは居つた樣ですが、殆ど出ませんでした。

A大佐　英軍は始めは出て來たが、後は重慶軍を第一線に出して自分の防盾として居つた譯ですね。

E少佐　さう云ふ恰好でやつて居りました。マレーなどでは相當英軍もやるべき所ではやつたのではないかと思ひますが……。ビルマでは顏を出して居りません。私共の左の前方は英軍が主體でありましたが、私共の正面はビルマ軍が主體で英軍の戰車が少し入つただけであつたさうですが、遭遇しませんでした。

秘密警察の網

A大佐　そこで、フイリッピンにしましてもオランダにしましても英國にしましても少い本國人で非常に澤山な植民地の原住民を押へて居つた譯ですが、今の樣な色々な政策で、原住民を愚にし、或は誤魔化すと共に、その反面に於いて叛亂を防止すると云ふ點に於ては相當神經を使つて居ると思ひますが、何かさう云ふ點について、若しくはさうした政治技術についてお考へがありましたら……

B大佐　ジヤワにはありましたね。例の秘密警察が活躍して居りましたね。之は警視總監直系、總督直屬の秘密警察が各人種別にあります。

D中佐　これは日本人係り、これはインドネシヤ人係りと云ふ樣な秘密警察が非常によく出來て居る。それで結局少數の白人種で多數の原住民を押へて居つたのであります。その例にこんなのがあります。フイリッピンでバタンに轉戰しまして、バタン攻撃をやつた時に、俘虜を捕へて來て色々聞いて見る、「お前らはそんなに怕いのならば何故逃げて來ないのか」と聞いたのであります。さう云ふことについて色々聞いた。それはとにかく二〇〇名、三〇〇名と云ふフイリッピン人の軍隊に對して白人の一人の將校が居つたら怕くてよう逃げない。アメリカの將校は唯一人でも自分達の周圍には目に見えぬ監視の眼が光つて居るのだ。アメリカ人に睨まれて居るんだと云ふことで、蛇に睨まれた蛙の如く震へ上つて居る。原住民と云ふものを根本的に、原住民對白人と云ふものを差別で押へつけて本當に去勢された狀態にあつた。とにかく一人の將校が居れば逃げられないのですから大したものだと思つたが、さう云ふ風に原住民に思はせる迄に至る歷史的な壓政を考へざるを得なかつたですね。

B大佐　ジヤワでもさう云ふ樣なことがありました。ジヤワでは警視總監以下全部オランダ人です、あとは特高科は全部オランダ人、その他に土人係りの巡査が居つてそれが市街警察と野外警察で二つに分かれて居りますが、とにかく二つになつて居るのであります。今迄はオランダ人が居つて司令して居つたが、今はオランダ人が居ないので、巡査の處令全く及ばない、原住民仲間では處令が及ぶのですが、一度びオランダの中に行くと云ふとオランダ人の妻君連中に「コラ」とでも言はれ樣ものならば震へ上つて逃げて來る。オランダ人の女、子供でも側に寄つたら震へる位の卑屈感を持つて居つたのであります。絶對の無抵抗主義でありました。これは急にどうだと云ふことは出來ないが、三百年間の傳統であると思ひますね。これは威力を急に附け樣と思つても簡單に出來ないものです。

A大佐　マレーでは如何でありましたか。

C大佐　マレーあたりでもスマトラで斯う云ふことを聞きました。あすこのある司令部での警察の話ですが、署長に原住民を使つてオランダ人を捕へて來いと云つたが、仲々捕へて來ない。その男が又慾がある、どの位の月給を與れるかと云ふのです、オランダ人を捕へて來いと云ふのにお金をどれ位與れるかと云つたと云ふことでありますが、それでも「金が欲しければこれをやらう」と云つて刀を見せたら、潮く逃れて來たと云ふ例がありました。

混血を喜んだ比島人

F少佐　先程お話がありました樣に、アメリカの將校が一人で三百名の兵隊を震へ上らせると云ふことは、政策が上手であつたとも思ひますが、フイリッピン人と云ふものが、アメリカ人に對して絶對に偉いものだと云ふ樣に、神樣の樣に思ひ込んで居る。その一例としてフイリッピンの女が、混血兒を生むことを非常に名譽にして居ります。混血兒は純粹のフイリッピン人よりも一段高い人種であると思つても居るし、言つても居る。その位に民族的にも去勢されて居る。自分達は駄目だ、アメリカ人は偉いのだと云ふことになつて居るものですから、叛亂と云ふ樣なことも實は思ひも寄らないことらしい。

B大佐　八割位混血兒ですから、本當のオランダ人と云ふのはオランダから直接來た僅かな數であつて、後は殆ど混血兒です。

D中佐　お前のお祖父さんお祖母さんお父さんお母さんはと聞くと、私のお祖父さんはオランダ人、お祖母さんは印度人で、お母さんは支那人でお父さんは混血兒である」と云ふ樣なことをよく聞くのであります。非常に血が混つて居ります。

A大佐　貞操觀念とか民族の純潔性と云ふことはその點、非常に等閑に附されて居りますね。

B大佐　オランダ人は毛唐だからさう云ふものですよ。

D中佐　我々の貞操觀念とまるで觀念が違ふ男女が交はると云ふことは貞操の中に入らない樣に一妙な表現だが一考へて居るらしい。私は妙なことに出合ひましたが、オランダの海軍大佐の家が私の家の三軒位先にある。それは主人が戰さに出て居る、奥さん一人居る。子供も居ない樣でしたが、何かの機會に通譯に引張られて話をしに行つたですが、何のことはない敵國人を歡待これ努めるのです。到頭終ひには「泊つて行きなさい」と云ふ譯です。實に洒々したものです。段々聞いて見ると、主人が一週間十日間旅行すると、その家内にも寂しい想ひをさす、その間にその細君が己れが寂しさを慰める方法を取ると云ふことは當然である。適當にやると云ふことはお互ひに認め合つて居る、そんなのが彼等の一般道德律なんですよ。

B大佐　混血兒の方が就職などもよくして居る。又オランダ人がヨーロッパから來るのは殆ど家族連れでなく、一人者が非常に多いのですそれで何所やらの「妻」的なものを持たなければならぬ。さう云ふ役人が現地で子供を設けると云ふことは自然の現象なんですね。

F少佐　フイリンピン人に限らないかも知れないが、お嫁に行く前は非常に堅い樣であるが、行つて終ふとルーズになる。これはアメリカ人の風習を習つたのではないかと思ひますね。

前線に出ない白人兵

A大佐　話を返して——それだけ原住民に對してあの手この手で臨んで居つたが、軍隊内ではどうでしたか。白人軍と原住民軍との差別と云ふものはありませんでしたか。

F少佐　俘虜だけのことについて見ると、引續いてこれは何處の戰線でも新聞記事になつて居りましたが、第一線の方面には土人軍を立たせ、自分達は後ろに居ると云ふことは、バタン作戰の時でも同樣でありまして、最後にバタンが陷ちて、土兵が出て來た時に、そのフイリッピンの俘虜が痩せ衰へて昂奮して歩くことも出來ないと云ふ所迄行つて居る。所がアメリカの軍隊はどうかと云ふと、實に堂々たる體格をして行軍しても平氣である。體力から言つても脂切つて居つて、第一線は反對に日に一遍お粥を食つて繼詰を十人で分けると云ふ樣な狀態でありました。さう云ふ風に土民は苦しい目に遭つて居ります。

A大佐　次に戰爭の話をすこし。

D中佐　フイリッピン作戰の初期は白人がやつて來た。初めに戰車が來た、十五臺位が上陸點に向つて進擊して來た。此方は三臺しかなかつた。三臺と十五臺で戰爭をしたが、これは幸ひ非常に巧く行きまして、敵の俘虜も取つたが、一番初めの俘虜はアメリカ人の中尉でありました。戰さの初めには何と云ふか、本當にやるつもりで來た。機甲部隊が一番先に來て、その次に騎兵旅團が來、野戰師團が後に來た。アグノ河を挾んで敵と對峙したが、その時に敵の聯隊參謀を俘虜にした、これは白人でした。その當時迄は相當本氣でやつて來た。それから段段突き崩して行くと、原住民が出て來ました。我々がバタンに轉戰しましてしばらくしまして非常に頑強に抵抗を受けたことがありました。その時に道路の脇に電柱があつて、フイリッピンの兵が後手に縛られて苦しんで居る。その横を見ると死んで居る。段々調べて見ると三〇メートル位の間隔をおいて皆後手に縛れて土人の兵が死んで居る。これは寫眞にも撮つて置きましたが非常な慘酷な狀態なんです。どう云ふ譯かと思つて考へて見たが、今によく解らないのですが、第一線を脅かす爲か、或は原住民の兵の逃亡する奴を防止する爲めにみせしめのためにやつたのか眞意はよく解らないが、現實にさう云ふ慘酷な場面が現はれて居つたのです。それはバタンの口迄行く前です。

A大佐　ジヤワでは如何でした。

E大佐　ジヤワではさう云ふことはありませんでした。戰闘意志が全然なかつたのですね。

戰意のないオランダ人

D中佐　我々がジヤワに上つた時に斯う云ふことを言つて居つた。戰さをしたのはオランダの政府と軍である。これが戰さをしたので、一般オランダ市民は戰さをして居ない。だから我々に對して自由を與へて呉れ、初めはこんな勝手なことを言ふと此方は憤慨したものだが、これが肚からの叫びなんです。オランダの市民の本當の氣持で、さう云ふ風に考へて居るのです。

B大佐　バタビヤに非常に立派なホテルがある。そのホテルは今兵站旅館になつて居るが、三月五日に占領して、その翌日そのホテルは閉鎖をして居りませんから、洒々として彼等は平氣で飯を食ひに行く、女子供を連れて飯を食ひに來ると云ふ樣に、戰爭とオランダ人の一般市民との關係は、この事で明瞭で、我々日本人の氣持ではとても考へられないことです。

D中佐　オランダ人で金モールをつけたのがやつて來て、鐵道の管理官でしたが「鐵道を運轉しても宜しうございませうか」とお伺ひに來たのです。まるで之で戰さをやつて居るのかと思ふ位で驚いたりあきれたりでした。全く一般

的に見ると本當に戰闘意志がなくて、軍隊が命令したから戰さをしたと云ふ樣な工合ですね。

C大佐　スマトラでも同樣でした。軍隊は逃げたが、殘つたものは安心し切つて居つた。悪びれもしないし、今迄の衞生局長が衞生局の業務を熟心に遂行して居る。非常に積極的にやつて居る。さう云ふ點が如何なる觀念か私共には解らないが、斯う云ふことを言つて居つた。「逃げる時には軍隊は半年經つたらオランダ軍が來るから」と云ふことを住民に言つて行つたので、これを盲信して色々な文官官吏なども半信半疑になつて居るかも知れないと思ふ位に、實に洒洒して居る。住民も亦それを半信半疑に思つて居る。日本人に從つても果して良いものかどうかと考へて居る連中も少くないと思ひます。

B大佐　オランダ人の俘虜でも必ず英米が來ると云ふことを信じ切つて居る。默つて今はやつて居れば良いのだと云ふことを平氣で言つて居る。蘭印は英國に取られたことがあつた。ナポレオン戰爭の時に一遍英國に占領された、そして暫く英國の統治下にあつたのを、オランダが又取返した、英國に營つて取られた時も取返したのだから、今度でも英米が來て取返して元のオランダになると云ふことを信じて居りますね。確かに相當の連中でもさう云ふ風に他力信心で考へて居ります。

D中佐　唯一の例外を私は見ました。オランダ人の中にも骨のある奴もあると私は思つたのですが、或る州知事を捕へたのですが、その時に、「お前達は先づ日本の天皇陛下に忠誠を誓へ」と言つた。それは我々に對して誠意ある態度を示して來た者には必ずその誓をせしめて居るのでありますが、その官吏は「我々はオランダ女王から命ぜられた官吏である。官吏として日本の天皇陛下に忠誠を誓ふことは出來ない」と云ふことをはつきり言つた。それで次ぎには、「それならば日本軍の使用人として今迄お前がやつて來た仕事をやれ」と言つたら「暫く考へさして呉れ」と言ふのです。「お前は若し日本人の使用人としてやつて行けるならばこの腕章をつけろ」と言つて腕章(日の丸の書いた)を渡した。所が「この腕章はお返しする、我々は飽く迄もオランダの官吏であつて日本軍の使用人であると云ふことは出來ない」と云つて頑強につつばつて居りました。

多少は骨のあつた英軍

B大佐　全體的に多少でも骨のあるのは英國ですね。濠洲軍、米軍各々一萬人以上使つて居りましたが、英國軍の司令官、米軍の少將以上を捕へて訊問したのです。師團司令部の中に置いたのですが、米國の連中は「もう仕樣がない」と云ふことで、相當具體的な話をしたが濠洲軍に屬する英人の三四人はどうしても一言も言はなかつた。どうしても言はない。「我々も軍人である、日本軍の將校は斯う云ふ場合にさう云ふことを言ふか」と言つて一週間位頑張つたが、言はなかつた。さう云ふ點から言つて米國軍は相當向ふ見ずにやつては來るが、觀念したらあつさりやる。その點は英國にしぶとい所がある樣に思ひますね。とにかく頑張つて何としても言はなかつた。一言も言はなかつた。

D中佐　傳統の名譽心がある樣ですね。

E少佐　私の友人の話で、マレーの時にもさう云ふ事があつたさうです。英軍の少佐だつたさうですが、情報を提供しろと云ふことに對して「俺は祖國に對して盡すべき事を盡して降服したのだから、やるだけのことはやつたから他人からとやかく言はれることはない」と云ふことで一時は强硬に抵抗したが、暫くして相當の話をしたと云ふことですが、中身は矢張り本物であるとは言へない。その傳統も好い加減當にならないものに沒落しかけて居るやうですね。

B大佐　それに比べるとオランダの軍隊などは戰爭をする氣持がないですね。商賈人ですね軍司令官、蘭印陸軍大臣などと云ふのが、大抵此方の言ふことは何でも數へて呉れる。防衞計畫、作戰計畫を圖まで書いて喋つて呉れる。まる

で戰爭をすると云ふ氣がなかつたのです。又あの樣な贅澤なと云ふか、とにかく生活を樂しむのにどう云ふ方面から考へても不足不十分の點のない樣に、如何なる方面からでも生活を樂しむ樣な工合に出來て居り、一生生活を樂しんで暮せる樣に出來て居るのだから、下手に戰爭でもしたら元も子もなくなると云ふ氣持で滿ちて居りますね。

原住民の好意に泣いた話

A大佐　原住民が本國に對してはど偉い意地惡と云ふか反抗行動をやつたが、日本軍に對しては非常な歡迎をしたと云ふことの例について一つづゝお話して頂けませんか。

F少佐　サンペルランドに病院がありました其處の病院長が日本軍の將兵が第一線を前進中某將校が負傷して倒れて居つた時に收容して呉れた。その時にはアメリカ軍が居る時で、手許に隱まつて呉れたと云ふ例があります。その病院長は仲々日本に加擔して居りまして、私共のサンペルランドに入つた時も親切にやつて呉れました。又反面に於いてアメリカ軍と云ふのは先程俘虜について話もありましたが、原住民に對して殆ど面倒を見てやらなかつたと見えて、それが隨分反感を持たれて居りました。或時支那の子供を連れた姑娘がやつて來てとぼ〳〵して居るので、危いから司令部で隱まつて置かうと云つて保護をして置いた。お前何處へ居つたかと云ふとマリベスに居つた、どうして來たか何處に行かうと思つて來たかと聞くと、コレヒドールに逃げ樣と思つて我先に爭つて船に乘つたが奴さん達は原住民と共にアメリカの兵隊にボートの上からつき落されて終つたらしいのです。その女の夫と云ふのがアメリカ人です。夫は船に乘つてコレヒドールに渡つたが、女は支那人なるが故に突落され、鞭で叩かれて生き別れになつたと云ふことで、住民に對しては事毎にアメリカ軍は非常に不親切なことをやつて居りました。フイリツピン人はアメリカ人が絶對的偉いと思つて居るものですから、アメリカ人に對して叛逆をしたと云ふことは氣がつきませんでしたが、それにしても全面的な非人道的な統治をやつて居つたと言へませう。

D中佐　日本人だと云ふことで非常に好意を持たれた例ですが、私が第一線に連絡に行つた時に、一人で自動車で行つた所が、原住民が黑だかりで「あつちだ〳〵」と言つて教へて呉れるので、敵が居るかと思つて行動を變へ樣と色々な手を考へた所よく聞いて見ると此方の部隊が「あつちに行つた」と云ふことを教へて呉れたので、もう少しの所で、飛んだ間違ひをやる所でした。又我々の方は空軍が協力して呉れましたが、その空軍の人達が戰鬪で犧牲になつた際に、ちやんと日本軍の飛行機の落ちた時は遺骨を埋めたり、死體の場合には落ちた所に死體を收容して土葬をして呉れて懇へて來ます。その時には詳しくその狀況を教へ、又「こんな字が書いてあつた」と云ふ樣に證據物件を取つて置いて呉れる。之には原住民に對して、感謝の氣持で涙が溢れるほど有難いと思つたですね。

C大佐　スマトラ、マレー、何れにしてもとにかく敵地で戰爭をして居るとは思はれなかつた。「萬歲々々」と云つた調子で、自轉車が今度は活動したが、進軍する途中などで自轉車がこはれたりすると、直ぐその邊から持つて來て提供して呉れると云ふ樣なことをして來て居りました。その點は非常に作戰上助かつた。私シンガポールの陷落した翌日に自動車に乘つて入つたのですが、道路の曲る所で停車をした所が、その邊にイギリスの俘虜が一杯ウロ〳〵して居つて、停つて居る車の中に窓から黑い手を何本も出して握手を求める。全く當惑した。俘虜から握手を求めるのですから……。その位何だか連中も熱狂して居つた。その前方に障礙物がありましたが、それを直ぐ取除けて呉れると云ふ樣なことをやる。スマトラに上陸した時もさうでありましたが、自轉車に乘つて追擊し樣とするとつた所で襲擊する、其處に土人が自轉車の空氣入れポンプを持つて廻つて歩く、空氣の拔けて居る奴は直して呉れる。非常に嬉しかつたですね。到る處でさうして歡迎されるのですから全く敵地で戰爭をして居るとはどうしても思へないのです。積極的に敵をやつつけた例は、アチエ族が非常なもので、日本軍が上陸すると云ふことが判つたので、オランダ軍が逃げ出す所を追擊して、豫ての仇はこの時であると云ふので可成りやつて居る。逃げ遲れてジヤングルに入つた奴は日本軍に出す、それを報告する、あの方面では非常に助かりました。さう云ふ例は枚擧に遑ありません。

憧れと信賴と

B大佐　私共の方もさう云ふことですが、日本に對する激しい憧れを持つて居つて、日本が來さへすればオランダと違つて同種の人種が來るから必ずよくなると云ふ憧れを持つて居る。それからジヤワでは豫言者が戰爭前に豫言をやつたらしいのです。要するに、日本と云ふ譯ではないが、オランダ人以外の何物かゞ來て占領をする、占領されて次に玉蜀黍の花が咲いて實がなる時にはインドネシヤの時代が來ると云ふ豫言があつたのです。とにかく日本が來たら良くなる、我々の時代が來ると云ふ希望を持つて憧れて居つた。獨立するとかしないとか別としてこれで我々の時代が來たと云ふ憧れと希望が非常に多い樣です。

D中佐　歡迎の話のついでに、全面的な歡迎の話がありますそれはジヤワ作戰が終つて、一箇月位しまして、ジヤワの東に小スンダ列島―バレー、フロレス、スンバー其處のずつと東のスンバと云ふ島から、王樣の使者がジヤワ迄出て來たのです。使者の話を聞くと、彼等は四十日間小さな船で漂流してやつて來た。王樣の弟他に三人でやつて來て、「日本軍がジヤワに上陸したと云ふ話をラヂオで知ると同時に、其處の王樣は日の丸の旗を出した。所が其處にオランダ軍が居つて一八名しか居なかつたらしいがそのオランダ軍が直ぐ日の丸の旗を引降した。降した所が王樣の軍隊がオランダの軍隊を監禁して終つた。監禁してあるから日本の軍隊よ早く來て呉れ」と言ふ譯なんです。決死の士を募つて四十日間海を漂つて使者を寄越したのである。所が今度は又別の島から又やつて來た。恰度その頃は海軍との話合ひで、チモール、ジヤワを取り、小スンダだけが穴が開いた樣になつて居るから掃除を仕樣と云ふことで、戰定作戰をやつた。やつて見ると矢張りその通りの實情だつたらしい。とにかく我々の來るのを色々な意味で期待して居つたと云ふ樣に思はれる。

A大佐　强烈に對して感情を潛め乍らも、中に燃える心はどうにも出來なかつたと云ふことですね。元寇の時に對馬の住民が三人か四人して決死の覺悟で博多にかけつけて、蒙古襲來を告げたと云ふことにも似て居りますね。

ヒヤリとした話

A大佐　最後に一つヒヤリとした話と實に愉快だつたと云ふ話を……。

D中佐　ヒヤツとしたお話をしませう。ジヤワに上陸した時です。我々は發動艇に乘りまして上陸したのですが、前の方を見ると云ふと、とにかく飛行機が十二臺水の上を敏が飛んで居る樣に飛んで居る。それが上陸する發動艇に向つて掃射するのです。發動艇はと見ると殆ど身動き出來ない程兵隊が詰つて居る。それを空から戰鬪機で掃射をする。それが赤トンボが飛ぶ樣に入れ替り飛んで來る。こちらは艇の上で手が出せない、一彈も放たず一太刀も酬ゆることが出來ない內に沈められるかと思ふと無念腹立たしやで、ヒヤリ以上でしたね。友軍機の來るのが十五分位遲れたのです。所が後で解つたことですが、飛行場に歸つた敵機はたつた一機であとは銃砲と機關銃で十一機擊墜した譯です。

B大佐　戰爭の方はさう云ふ風に皆さんがやつて呉れて居るから私共の方は何にも苦勞はし

なかつた。輸送の際にある上陸地點で、豫定よりも時間が早く上陸したのです、それが船を降りた後端に敵彈がやつて來た。天祐ですね、時間が少し早やかつたゝめに、船から降りて前進し始めてからその直後に砲撃が始つた。私は船橋に上つて見て居つたですが——私は上陸成功の第一報を出さなければならぬものでありますから陸で成功の報せがあつたら直ぐと云ふことでありましたから、椅子に坐るか坐らない中にとにかく上の方で何かひどくがん〳〵いふ音が聞える。あゝがん〳〵言はせる仕事がない筈だがと思つて不審に思つた位大きな音なんです。船の奴まごまごして下手なことをやつて居るなと思つて甲板に上つたら梯子が變なんですね。前も後も四、五〇と云ふ照明彈が燃えて居りそれが照明して居り、それに向つて砲撃をやつて居る最中です。船の前後に盛んに水煙りが上る然し幸と大したことはなくてよかつたですが、ヒヤリとしたことゝ云つては其後聞いたり見たりしたのですが、防諜ですね。向ふで見たのですが、對日作戰準備の判斷一と云ふものを敵の軍司令部で發行して、上陸作戰などを實に詳しく解說して居る。日本の上陸作戰に對する「須知」と云ふものを作つて日本軍の上陸作戰に關する寫眞迄載つて居る。日本の將校に見せても知らない樣なことを詳しく寫眞入りで出して居つた。日本軍がやつた上陸作戰の演習の寫眞などどうして撮つたものかすつかり出て居る。日本の將校が知らない位のことまで入つて居る。防諜と云ふことはとにかく重要なことで、これに裏をかゝれることが最もヒヤリとしますね。

C大佐　非常に向ふの砲撃が正確であると云ふことが新聞にも出て居りましたが、敵の彈の狙ひがよいから五〇メートル離れたら大丈夫であると私共言つたものですが、あの水道渡河する船の所に良く來るのです。その彈の間を巧みに縫ふ樣に動くのですが、船が着く、出る、そこに來るのです。そこを此方も幾敏にやる譯です。船から上らうとすると其處へ意地悪くやつて來たので、慌てゝ飛び降りたその際に私も一緒に船に飛び降りた。所が飛び降りた拍子に頭の上に全彈がやつて來たと思つて頭を抱へたら、それは次に飛降りた人間だつた(笑聲)これなども一應はヒヤリとした話ですね。

無敵海軍のお手際

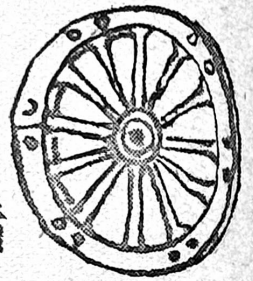
B大佐　海軍のお手際の鮮かなこと。恐らく距離なんか私共には全然見當がつかないが、四五千米で擊ち合つて居つた。二〇糎級の大砲で四・五千米で擊合つて居るから直接照準なんです。小さい船から目標指示の彈を擊つ、赤い彈でヘラ〳〵と飛んで來る、それを見當に擊つのです。向ふは探照燈を使はなかつた。照明彈でやつた。日本は探照燈でやつて居つた。これは命がけですね。とにかく驅逐艦の小さい奴と向ふは一萬トン級です。照明すると云ふと齊射をする、二回目に殆ど全部命中です。二回目で一萬トン級が沈んで終ふのですよ。「射撃も今の樣になる位に訓練しなければならぬ」と云つて居りました。それがバタン沖の海戰の時です。二隻位大きな奴が居つたが、二齊射で沈んで終つた。六門づゝですから十二發で一萬トンが沈んで終つた。魚雷も一緒だと思ひますが……。とにかく二回射つて全然海の上から無くなるんだから、その正確さは全く神技ですね。

D中佐　私も海戰を見物さして貰つたが、これほど愉快—と云つては失禮ですが—なものはないですね。併し此方に當らないから愉快なんですよ。(笑聲)併し又此方がやられると云ふ樣な氣がちつともしないですね。何のことはない「萬歲々々」と手を叩いて居るのです。何時此方がやられるか判らない位置にありながらも、「勝つた〳〵」と喜ぶんです。とにかく陸も海も寧もこの氣持だから勝つんだらうし、又强いんですよ。

(一同高らかに笑聲しばらくつゞく)

記者　どうも長い時間色々と有難うございました。

全聯傍聽



牛島春子

私は康德九年度協和會全國聯合協議會の第四日目の數時間を、正確に云ふと、午前十一時から午後四時までの四時間を傍聽することが出來た。第四日目を選んだのは、この日上程される議案が、農村に關する問題であつたことが私の心を惹いたからであるけれども、それにしても九日の間晝夜の別なく行はれた嚴肅な協議會のうち、僅か或日の四時間だけを傍聽してその感想を書かうとするなど、大變出すぎた事だと思ふ。內心ためらふものがあるけれど、約束してしまつたので、本當にまとまりのない一場の印象記丈を書かせて貰はうと思ふ。

此の日は日曜であつたせゐか、私以外には婦人の傍聽者は一人もなかつたけれど、坐席は大體一杯であつた。兩側の大窓から明るい柔らかな光が射しこみ、もやもやとうす青い煙草のけむが光の中に立ち迷つてゐる。肘をついてゐるもの、腕拱みをしてゐるもの、兩股を廣げて首をかゝげてゐる者、雛壇も協議員席も思ひ思ひの姿勢で場內の空氣は和やかそのものに感じられた。

二年ばかり前一度傍聽したことがあつたので、大體協議會の雰圍氣といふものは判つてゐるつもりであつたけれど今日來てみると、やはりあの何處かのんびりしたやうな和やかさがすこし意外で、不思議に感ぜられるのであつた。と云つて會議がだらけてゐるのではない、まさにその反對なのである。私は先日ラジオの中繼で、大政翼贊會の中央協力會議といふものを聞いた。戰へる國民の言葉としても話す人々の聲は眞摯で熱情に溢れ、ある時はまるで血を吐くやうに悲痛にさへ聞かれた。聞いてゐる者が息が詰り、うかつに膝もくづせぬ氣がした。私は別にそれと對照的に取りあげる譯ではないけれど、あの眞劍で嚴肅な會議が、全聯特有の何處か間のびのしたやうな和やかな外貌を帶び

てゐることを考へてみずにはをれない。新聞記事的に云へば、それこそ民族協和の醸しだす、家族的雰圍氣だと謂ふことになるであらう。その依つて來る所が、案外一つ一つ通譯がつくのでその間、どつちかゞ手持無沙汰な顏でゐるせゐだとしても、面白い効果だと思ふのである。ともあれあとで聞く所によると、四日目のこの日が開會以來はじめて議場内に活氣の漲つた日であるといふことであつた。

この日の議案は「農産物增産並ニ農村振興ニ關スル件」で興農部の諮問議案として「農業增産促進ニ關スル件」が一括上程された。私が隅の坐席に腰を下した時は、丁度間島省代表の發言が終つて、開拓部會山崎評議員が立たれた所であつた。山崎協議員は立ちあがりざま諮問議案は問題が不明瞭で解剖の必要あり、と云ひ、中南滿開拓地に比べて北滿開拓地は生産的に不安定な狀態にあること、北方農業の第一の要件は謂ゆる優良種でない、發芽力の旺盛で確實な種子が必要であり、そのためには國立の義倉による種子貯藏が望まれること、第二に耕作期間の短かい北滿では播種期が重大であるけれど、勞力不足のため時期が遲れがちであること、第三に集團部落は耕地に遠いため、朝晩作物を見ながら働きたい農民の心情から、現實が乖離してゐることは單に精神上の影響ばかりではないこと、第四に機械といふ意味合でなく質的に優れた農具、その修理機關の整備が必要であり、第五に日滿農系を通じて本當に北滿農法を知つてゐるものがゐないので、すみやかに優秀な技術指導員が望まれる、其他病蟲害に對する、又濕地の排水に對する對策など、實に盛澤山で、最後に農業の戰時體制を要望されて腰をおろされた。農村に關心を持つとは云へ、それは只滿洲の國民の八割が農民であるといふ事から來たゞけで、その實私は農村に對しては何を知つてゐる譯でもない。殊に開拓地の問題は、白狀するとそれよりもつと冷淡であつたかもしれない。それは一つは機會に惠まれなかつたのと、隣まがりの私らしく、例へ本當の苦衷は多く知られてゐないとは云へ、開拓地の問題はジアナリスチックな意味でも數多い內外の旅行者達の間に取りあげられて來てゐるので、さうした人達にまかせて置いてもよいといつた氣持が手傳つてゐたからでもある。私は妙な褊狹さから滿洲在來の農民に一身の身びいきを感じてゐたのだ。けれど、山崎協議員が、第一次開拓團彌榮村の團長さんであるといふことを知ると、私はなるべく早く今までの氣持を淸算せねばならぬ事に氣づいたのであつた。滿洲の土に結び附けら

れてゐるといふ運命には、日滿鮮系の區別がある筈はない。いや、開拓地の人々の、他國の土に化そうとする悲願は、とても派手なジアナリズムのおよびもつくものではないと、私はおくれ馳せながら考へつくことが出來た。

鮮系と云へば、次の濱江省代表は鮮系の人であつた。大變雄辯な李協議員は、或地方で四五日の播種期に農產物の蒐荷に來て、事實上種子が取りあげられようとする、政府は蒐荷督勵のために相當の豫算を組んでゐるやうだが、何故に增產のためにそれだけの努力を拂はないであらうか。個人單位の競作會に就ては、部分的に力を注げば其處丈は多收穫となり選に入ることが出來る。それでは本當の意味の增產にはならぬので、さうした弊害を排除するためには集團單位の競作會が望まれる。北滿の霜害は增產にとつて脅威であるけれど、これは燻燒法によつて或程度阻止することが出來るので、實施して欲しい。水田に鴨の被害も大きいが、自分の所では鴨取競技を行つて、何百羽の鴨と、何千箇の卵を取つて好成績をあげたが、これも一地方をやつたのでは何もならぬので、廣範圍に實施して欲しい。農繁期に於ける休暇では教師校長が先頭に立つた秩序ある協力が望ましい。何となくアイロニイとユーモアの響きがあつて、そのくせ話の一つ一つが生々しいので、雛壇の人達の顏に微苦笑が浮んでゐるし、協議員席や傍聽席からも失笑が起る。現に私の隣りにゐた地方會員らしい滿系の人は聲をたてゝ笑つた。私は丁度私の所から一番よく見える前斜の席にゐる一人の滿系協議員の表情を何時か注意深く眺めてゐた。五十がらみの血色の好い、その何處かの代表は、純朴そのものゝ感じで、何故か好意がもて先程から時々私は眺めてゐたのだ。その協議員は膝の上に行儀よく手を組んで李協議員の話に耳を傾けてゐるが、口のはたに絕えず會心の微笑が浮んでゐて、その顏が時々今にも相好をくづしさうになる。拍手が起ると、我意を得たといふやうに、負けずパチパチと手を叩く。それには何か私の心の安まるものがあつた。例へば、私はかうして全聯を傍聽しながら、農村に關する重要な諸問題が各代表によつて熱心に提出され、檢討され、要請され、政府は溫かく、眞摯にそれに對する對策を披瀝してゐる、この目の前の高く美くしい情景と對象的に、私の目にはもう一つ、全聯も知らず、全聯に於て自分達に關する樣々の重要な問題が考へられてゐることも知らず、そしてそれが自分達にどのやうな影響をもたらすかも知ることがなくて、默々と昨日も今日も土を耕やして

行くであらう多くの農民の默々とした顏が、時々ふつと浮んでこないではなかつた。さうした時、私はあの何處かの滿系代表の、只一人の善意に充ちた顏を眺めてゐると、私はすくなくともあの人の後には本當に幾十人か幾百人かの農民が續いてゐて、あの人が彼等と今日の全聯を繋いでゐて呉れるのだといふ氣になることが出來た。これは私の一片の感傷かもしれなかつた。李協議員の話は正午すぎまでつづき、それが終ると、晝の休憩になつた。私は人の群れにまじつて傍聽席を出た。間もなく預けておいた子供が抱かれてやつて來た。私は母親に早變りし、提供して貰つた、午陽の射す明るい部屋の隅で子供と辨當を開いた。

午後からの會議は、すこし遲れて一時半頃から始められた再び子供を知り合ひの娘さんに預けて、傍聽席に戻ると、もう四平省代表の話がはじまつてゐた。時々話が外れるので議長から注意を受けてゐたが、農村振興對策委員會設置の要望が發言の中心をなしてゐるやうであつた。この人も鮮系であつたさうだけど、達者な日本語であつた。

それから興農部次長の說明が始められた。第一に、勤勞報德精神の昂揚で、家畜・棉花經營の方面に女子供の勞力がもつと活用されねばならぬこと、第二に健土運動の展開で、防水・排水・灌漑の實施・家畜の飼育・管理の改善・それから金肥の問題・健土運動の根本をなすと云へる綠肥を中心とする營農の必要・防風林・植樹は民心を養ふ國家的問題であり、勞力節減の解決案の第一步としての除草器の使用。それから重要なのは農民と土地との結びつきであるが、自作農創定は目下困難な問題なので、小作期間を長くし、地主と小作人の協和が考へられねばならぬ。第三は農事指導の徹底で、農村の優秀な靑年をよき技術指導員として養成することは明年度の重點の一つであり、彼等の自村に對する責任と愛情に訴へるべきである。次に自興村の振興・篤農家の訓練、第四は勞力の配分適正・貨銀の協定・勤勞奉仕制の實施・農具の改良等で、それから農村振興委員會・農村戰時體制・集團單位の競作會に對する贊成意見等であつた。まるで門外漢の私が、かうした說明要旨丈を羅列するのも如何にも能のない仕業だと思ふけれど、只一つ私らしくこの時私の促はれた一つの思念は、近代の西歐的合理主義的ものゝ考へ方が、物質や條件のみを偏重して、精神的なものが凡てそれらに規制されるといふ風に私達に思ひこませた、その根の深さについてゞあつた。こんな事を云ひ出すのは如何にも唐突としてゐるけれど、つまり私

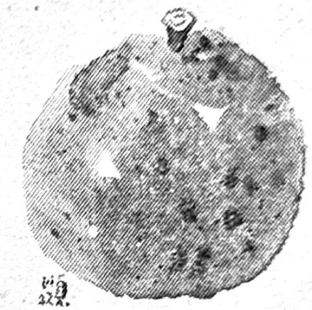
は、興農部次長の說明の冒頭に云はれた、天地人に對する感謝・報恩の勤勞精神こそ、農村振興の重要な條件の一つであるといふ言葉が、決して卒爾に云はれたものでないことを、私自身の反省と共に深く考へたといふ事なのである。協議員の人々の內に、已の地方の增產を阻害する物質的な環境的な諸條件の解決に熱心なあまり、この最初のお話を通り一ぺんの訓辭として聞き流した人があつたとすれば、それは由々しい事だと私は思つたのであつた。

そのあと、滿系の吉林省代表、日系の興安南省代表の發言があつた。私が聞いた只一人の滿系の發言であつたので私は注意を凝らして聞いたけれど、やゝ冗漫で春耕資金貸付に關する內容らしく思はれたのみで強い印象を殘さなかつた。興安南省日系協議員の興農合作社の活動に對する批判と要望には私はすこし心を惹かれた。私は農村同樣、農村を對象とする興農合作社の運動についても何も知る所がないけれど、合作社のみが農民の日常の利害の中に入りこんだ毛細管であることを考へると、官僚化し合作社の人々の一人一人の良心に、何となく頼らずにはをれぬ氣持なのである。なにを素人がとこれも嗤はれる事の一つかもしれないけれど、此處でも良心的な者には惱みが多いといふことを萬更知らない譯でもない。

そのあともう一度興農部次長の發言があり、それから三宅中央本部長が立たれた。今日世界戰爭の時代に、滿洲國國民は何處よりも惠まれた國にゐるので、多少の物資不足等にはすゝんで甘んじなければならぬ。三百萬會員は此際一つとなつて、國民の先頭にたつて指導されたい、といふ意味の事を力強い口調で話され、議長の採擇に入つた。

丁度四時であつた。このあと、緊急議案が提出される筈であるけれど、私は十分間の休憩をしほに立ちあがつた。女には夕方ちかひ陽射しはやはり習慣的に落ちつけぬのだ。子供ももう退屈してゐるにちがひなかつた。私は子供を受取り、手を引いて、明るい表に出た。半日の全聯傍聽は私に非常に面白く、深い感銘を與へてゐた。と云つて、全聯に對してもつともらしい意見や、批判めいたものは何もない。ただ面白さが心身に應へたといふ丈の感銘であつた。許されるなら、翌日も翌々日も傍聽席に日參したい衝動を感じた。

それにしても、斜陽の照りかけた明るい街路樹の街を步きながら、私の眼前にはやはり、全聯も知らず、まるで闇の中を手さぐりするやうに昨日も今日も默々とたゞ働きつづける滿洲の多くの農民の顏が浮んで來るのだつた。



融明樓閒話（前承）

田所耕耘

○幽冥樓を出づ

僕のやうな懶け者でもうちに居る間全然讀み書きをしないといふわけには行かない。六月の半ば、さるやんごとなき方の御伴をして來京した或る旅客に、從來の部屋を讓つて轉居を命ぜられた。引越先の部屋は、其の西側の窓の外に大木の植込が窓を蔽うて立つて居た。殊に夏中生い茂つた枝葉に窓からはいる光線を遮ぎられて室内は晝なほ暗く、おまけに夜の照明も不十分であつたので、僕は時々書見に苦しんだ。孔丘の話に「思ふて學ばざれば則ち殆うし」といつて居る。瞑想してゐるだけでは好くあるまいと思つてホテルの係の人に部屋をかへる事を頼んで置いた處。やつと此の間數箇月振りで此の三階の部屋へ移らせてくれた。此處は南に面して大きな窓が有り、外に遮ぎる物もないので晝は太陽の光線があか〳〵と漲り入る。照明も完全であるから夜も讀み書きに不自由を感じない。當節迷惑至極な長逗留客たる僕の爲に態々此の明るい室を都合してくれた宿の人の好意に對しても、僕は大いに勉强しなければならないやうであるが、それもしたくない。孔丘は又僕に好都合な事を言つて居る「學んで思はざれば則ち罔し」と。實際當節人の書いた物を讀んで片端しから信用する事になると、僕の樣な不敏な者でなくても、わけが解らぬ事になつてしまふであらう。其處で僕は時々わざ〳〵窓のブラインドを下ろし　或ひは夜電燈を消し、又は其の代りに目を瞑つて徐ろに思念するわけである。其處で前回幽冥樓で物語つたと同じ性質の閒話を續けるつもりである。唯

窟そのものは、最早幽冥ではなくして明るさが融り亙つてゐるのであるから、今後は幽明の二字を融明に改め融明樓閒話と題する事にしたい。

○世界形勢瞑觀

日々の新聞を見ると世界各地の重大な出來事が敏速に報告せられて居る。月々の雜誌を見ると現下各方面の形勢が明快に解說せられて居る。それ等を讀むと世界の事象は間斷なく格段な變化を來し、周圍の形勢は犇々と我等に逼つて來る樣に感じる。而も目を瞑つてそれ等の事象を綜觀し徐ろに情勢の推移を味はつてゐる中に少し睡氣を催はす頃になると、丁度重ね寫しにした寫眞の樣に各々の報告の區々の特徵は大概相殺されて消えてしまひ、其後に朦朧と殘つた全體の形勢の印象は比較的平凡なものとなつて現はれて來る。

世界戰爭勃發以來豫想外の出來事が數限りもなく發生した樣であるが、それ等によつて醸し出された全體の形勢は之を大觀するに今日迄の處世界の人々が久しい前から豫想し且つ豫言した所とあまり異つてゐないのが不思議である。

先づ東亞及び太平洋方面に就いて見るに、大東亞戰爭開始の劈頭に於ける日本海軍の赫赫たる戰果は、我々日本人すら大部分は豫期しなかつた程度のものであるから、世界の人人のすべての豫想を超越し其の驚嘆の的となつた事は確かである。而して其の後香港が陷落し、フイリツピンが討平せられ、東印度諸島の敵軍が掃蕩せられ、同時に佛印、泰國以西に於けるビルマ、マレイが皇軍の管制範圍に歸するに至るまで、すべて又理想的な經過であつて、着々たる大成功の連續は以て世界の戰史を飾るに足るであらう。斯くして東亞の三海を中軸とする自給自立不敗の體制は早くも其の基礎工作を了つたのである。

然らば敵側——例へば米國の如き——は此の豫期せざる失敗に遭ひ驚心駭目措を失つて爲す所を知らずといふ周章狼狽振りであるかといふと固より斷じてさうではない。蓋し日本と戰ふ場合、始めは負けるといふ事は彼等が夙に豫想し且つ豫言した所である。たゞ萬一さういふ事になつても、米國はその兩太洋に挾まれた絶好の位置が米國に許與するであらう所の時間の餘裕を利用し、その豐富なる資源を開發し、その莫大なる貯藏材料を動員し、その强力なる設備を活用して、之を作戰に傾注することに依つて、やがて終局の勝利を收めることが出來る、と世界に公言して居つたのであつて、大體自らもさやうに考へてゐたものであらう。

從つて日米戰爭の始めにフイリツピン群島を失ふ如きは昔から米國の筋書にちやんと豫定されてゐた事であつて、フイリツピンが日本の勢力範圍に歸すると共に、東印諸島よりマレー、ビルマに至る與國の屬領も亦日本の國防線内に入り、斯くて南海に瞰する各地方各大島が擧げて一時日本の管制下に入る事も又大體彼等の豫期した所であるに違ひない。たゞ彼等の豫想と喰違つた點はさうなるまでに日本が支拂ふ事を餘儀なくされると想定し

たよりも遙かに少い犧牲しか實際には拂はれなかつたといふ點であり。又斯くなるまでに日本の要する時間が彼等の豫想以下に著しく短く終つたといふだけである。畢竟程度の差であつて性質の違いではない。大局は豫想通りであつて唯細目だけ狂つたに過ぎないと彼等は今更のやうに再認識して、此の頃は只管豫定（？）の筋書き通り結局日本に勝たうと大童になつてゐるものと思ふ。

次に與國獨伊を中心とする歐洲及びその附近の形勢の推移を大觀してみよう。一昨昨年の秋英國の對獨宣戰に頓着せずドイツがさつさとポーランドを片附け、東境方面を料理し了つたまでは萬人の豫期した通りである。ただ一昨年の四月の始めドイツが突如としてノルエー、デンマークに進出し僅か一夜の中に此等を征服して、スカンヂナヴイヤ其他バルチック沿岸西方一帶をドイツの經濟圈内に包容し了つたその手つ取り早さに至つては英國を含む世界の豫想しなかつた所である。その後五月になつてドイツが西進して旬日の中にルクセンブルグ、オランダ及びベルギーを席卷したその破竹の勢も亦恐らく英國を驚愕せしめたであらう。併しそれに引續いてイタリヤがドイツに參戰した事は夙に豫想された成行である。その後英軍ダンケルクに敗れ、佛軍亦脆くも挫折して六月の始めフランス全國の降服を見るに至つた事は更に英國の痛心した所であつたに違ひない。まことに英國の與國フランスが斯くまで脆くドイツに屈服し去つたその早さと、それを償すべく拂つたドイツの犧牲の少なさに至つては英國自らは固よりロシヤその他をして當外れの感を深くせしめた。唯その結果ロシヤのドイツに對する警戒が嚴重となり、爾後獨露間の軋轢益々甚だしく終に昨年に至つて獨露の開戰を見るに至つた事は英米側にとつて人間萬事寒翁の馬焉に豫想以上の好轉である。

元來英國の對獨宣戰は戰闘でドイツに勝つ見込が有つてやつた事ではないから、ドイツがその後附近各地に轉戰して著々と勝利を收めた事は別段英國の意外とする所ではなかつた。唯その爲にドイツはより多くの犧牲を拂ひより長い時日を費すものと當込んでゐたその程度の差だけである。而もそれだけでは英國が最初に高を括つてゐた限界を突破したものではない。即ち假令獨伊は或る程度までその周圍に發展しても、所詮それ等各地は到處ドイツ同樣に人口の割に耕地少く從つて食料に不足する土地柄であつて、年々多額の穀をカナダ・南米・濠洲等遠海地方から求めてゐたのであるから、英國が米國の援助を得てその强大な海軍で獨伊の新に膨脹した勢力圈内全部をそのまゝ外から封鎖し、その食料供給の途を斷ちさへするならば、早晩復たドイツ等をして前の歐洲大戰の轍を履ましめることが出來ると、果然ドイツはその食料等の不足を補ふ爲にロシヤに要求し、ロシヤの應ずる所とならずして遂に獨露の開戰を見る事になつた。この事は半ば英國の豫期した事であるには違ひないが、昨年の夏早くも之を事實として見る事になつたのは、蓋し時期の差とはいへ英米側の豫期以上であつて、此大成功はその前のすべての豫想外れを補ふに足り、而して更にその後に於ける東亞の大失態をも償ふに足るものである。

かういふ風に觀察して來ると偶々生じた豫想違ひも大概は彼此相殺せられて世界戰爭の結局に於ける大勢は、世界は勿論當事國の豫期した所とも大して違つてゐない。之を綜合して眞觀すると今迄の所は豫め人の測つた所と大差がない。

そこで多くの人が又豫想した長期戰の見當が益々當るらしくも見える。唯現在ロシヤの南方からコーカサスに亙つて戰はれつゝある一大死闘の結果こそ、長期戰の豫想に齟しどちらかの大きな狂ひを生じさうに想はれる事態である。蓋しロシアが頑張り通せば勢ひドイツの鋭鋒が此處で挫折する始末となり、英米側から見ればそれで世界戰爭の峠が見えるわけであり、ドイツから見れば東南ロシヤの穀倉地帶を完全にその所有とし、更にロシヤの石油資源年額三千萬トン中その二千八百萬トンを出すコーカサス地方をも掌握する事になれば、當の敵ロシヤはその武力の根元たる機動力を喪失するのみならず、その二億の大衆を養ふ手段にも窮する事になつて、從來登り坂に在ると言れてゐた大國ロシヤが於是その將來の發展をあきらめるのみならず、その獨立的生存をも放棄してドイツに屈服しなければならない事になると思はれるのである。

○僕の日本人觀

日本人がどんな民族かといふことをまともに見當を附けるのは、自分の眼の玉がどんな色であるかといふ事を直接見極めようとするのと同樣に事態むづかしい仕事である。たゞ外國人が日本人をどう觀るかといふことを仔細に吟味し、又自ら方々の外國人を觀察してその通有性を見出すことが出來るならば、反射的に日本人の特性が何んであるかといふ事が言へるわけである。丁度明るい鏡が有れば自分の眼の玉の色もわかるやうなものである。外國人の書いた本に一人の日本人を侮辱する事は總ての日本人を侮辱することを意味

日取高のフケ取り香水！
カガシベーラ
カガシハミガキ

すると、物珍らしさうにいつてゐるのを讀んだことがある。又或る時親しいカナダの人の話に「日本人は我々に向つて日本人の事を何時も我々と言つて彼等とは言はない、まるで日本の代表になつて國際談判に出掛けて來てゐるやうだ」と評したことがある。

誰も知る通り先づ「日本人」といつた後に同じ言葉を繰返さずにいはうと思へば（語る人や相手が日本人であるか否かに拘はらず）彼等といふより外ないのが外國語の語法である。そこで外國語に熟した人は外國人に對して日本人仲間のことを彼等といふことになる。併し何んとなく變な氣持である。それは日本人が日本國民の一人だといふ意識を特に強く有つてゐるからだと言はれると、ちよつと否定しにくい。それを肯定すれば勢ひ我等の四海同胞襟度まで疑はしいといふ結論に成りさうである。然し僕は必ずしもさうは思はぬ。所謂混血雜種の日本人は人種差別の嗅覺が鈍く濁つてゐるのであつて、其同類意識は容易に幾らでも廣がる可能性がある。我等は日本至上主義であるよりも全體主義的である のだ。自分を自分の屬する團體の一分子と見て全體の爲に己を犧牲とする事を敢て辭せないといふ奉仕觀念が特に強いのである。日本人の沒我的に奉仕する團體は或は日本民族であり或は日本國であり、或は又狹く日本民族内の一黨一派であり或は一地方ですらあり得るが、反對に又廣く東亞共榮圈全圈とも成り、條件次第容易に人類全體迄にも廣がり得る。日本集中主義を含むこの全體性の方が前に言つた父性愛乃至母性愛の強いこと以上に日本人を特徴づけるものである。

洵に日本人は主義としてではなく、その習性として全體主義者である。全體の生存發展の爲に、その一分子たる一身一家の生命の繁榮を犧牲とすることを、何とも思はぬやうに生れ附いてゐるのである。或は後天的にさやうに感化せられ習慣附けられてゐるのかもしれぬ。我々はこの奉仕の精神を日本人の眞面目と呼んでゐる。

浪花節でも講談でも小說でも映畫でも凡て日本人のこの習性を鼓吹するものばかりだと言つても大して過言ではないやうであるが、この奉仕的觀念が本來強いからこそ、それに適合した文學藝術が流行してゐるのだといふ因果關係もありさうである。

孰れにせよ、この眞面目さが現に世界戰爭に於て、皇軍將兵の捨身の戰法に具體化されて、世界の驚嘆の的と成つてゐるのである。

我々が此戰爭の前途に就いて樂觀する所以のものも亦主としてこの點に在るのである。

その代り日本人は個性の强さが足りない。或ひは個人の自覺が十分ではないとも言ひ得るであらう。隨つて個人各箇の獨自の特徴を十分に社會の爲に發揮し、その一家の所信を世に貫徹するといふ方面に、十分でない弱點が普遍的であるやうに思はれる。日本人は常に從黨を組み、又は集團の力で大事を行はうとし、一人一箇で以て天下を引廻さうとする氣概に乏しいと外部の者は評する。或ひは然からん。

併し兩善はなか〳〵むづかしい。周公も

「備を一人に求むることなかれ」と言つてゐるが、民族に對しても同樣である。唯民族の中には多くの個人が含まれて居つて、時に變り種が混つて出て來る。我等の場合せめても我等の中に偶々出て來る變り種、主我獨往の傾向、强き仲間を包容し且つ愛護尊重する用意だけは缺きたくないものである。

○僕の漢人觀

日本人評をやつた上は漢人觀も試みるべきものゝやうに見える。蓋し現在日本人は日本民族だけで世界に自立して行かうとして居るのではなくして、專ら西鄰の漢族と連衡して大東亞を經綸せんとしてゐるのである。大東亞の中には又一億數千萬の人口を包容する南海諸地方、諸島も包含せられるのであるが、これは連衡ではなくして合從である。從つてその重點は人的提携に在るのではなくして寧ろ主として物的有無相通の利益に在る。卽ち漢民族の本質、卽ちその特質を知る事の重要性は、南方民族を知る事の重要性より遙に上であつて、正に現下急務の一である。而して僕は滿洲に三十年ばかり、支那本土に二年ばかり居住して、少なからざる漢人に接した經驗があるのであるから、一見又漢人を論じる資格も相當ありさうに思へるのである。處がその實一向に自信がない。なぜかといふと僕の大陸に於ける三十餘年間の生活は短くはないが狹く、且淺いものであつた。從つて長さと厚さと幅を掛合はした分量は決して大きくない。換言すれば僕の接した漢人は、大體限られた境遇の人であり、從つて又漢人中格段な品性を具へてゐる者である。それを重ね寫眞の樣に綜合した所で到底漢人全體に通ずる特性を知るには足りないのである。加之僕は人と交際する場合に常にその人の個人としての特質には注意するが、それ等の人々が屬する民族の通有性をどの程度に分前してゐるか等までも考へた事はない。四海同胞的氣分で同じ人類内に於ける仲間として考へてゐるに過ぎない。純な氣持からだといつても好く、又單に個人々々の特徴の方が彼等の屬する民族の通有性よりも遙かに顯著である事を常とするといふ見解から、民族性の方迄考へなくても大概間に合ふものと高を括つて懶けてゐるのだと謂つても好い。つまり僕の有する漢族の知人を重ね合はせて、其れから民族の通有性を歸納する仕事に對して何の準備もないといふ次第である。

それにもかゝはらず漢人觀を試みようとすれば勢ひ他力に倚るより外なく、廣く漢人の各層に入り込み各種の人々に接してその通有性を看取したといふ人々の意見を憶ひ出して見て吟味するより外に仕方はない。

有名な米人支那通ロッドネー・ジルバートの名著支那の悪い所二の中に、彼は痛烈に漢人をひどくこき下してゐる。曰く「支那人が五千年前黃河の上流地方を根據として揚子江に及ぶ大地域の上に繁殖して、文化大いに興つたその昔から、彼等は早くも墮落の徴候を示し來つたのである。卽ち人口益々增殖して生存競爭益々激烈を加ふるや、彼等は西洋人の樣に自然の征服に進む代りに仲間を搾機搾

取して一身一家の保存と繁榮を計るといふ、一層手輕な方法に競進した。斯くて德教廢れ政治腐敗し、其國家社會は救ひがたき衰頽徑路を辿る事となつた。而もその後偶々支那が大いに興つて四方を風靡する勢ひを示したのは、單に支那の外に漢人以外の蠻族が來寇し侵略して支那及支那人を征服し支配した間だけである。例へば始め中華の元氣を四鄰に示した周朝は西戎の民であつて漢人ではない。その後春秋戰國の內亂時代を受けて再び世界を震駭した秦も亦西戎の出身であつた。秦の後內亂を治めて現はれ出た前漢・後漢數百年の治世こそ漢人の功業として其の最も自負する所であるが、その實然らず、最初の皇帝たる高祖が匈奴に屈服して貢を獻じた事によつても一斑を知り得る通り、終始腑甲斐ない爲體であつた。漢代の中で漢人の至上の誇とする武帝の盛代と言ふに足るほどのものである。漢代の後は恒に同樣な王朝の一起一仆を繰返したばかりであるが、近世に至つて元の盛世を見、その後明の弛緩した時代を挾んで再び清朝初期の勃興を見たのであるけれども、元も清も共に蠻族の支配下にあつた事は萬人の知る通りである。かういふ調子で彼は唐の太宗の偉さなどは全然默殺して問題としてゐない。而して漢族が自ら健全な國家を經營することが出來ない迄に墮落するに至つた契機を細說して更に次のやうに謂つてゐる。

德教廢れたりとはいへ、支那人は依然道德を尊重する民であり、之を高唱力說する事に於て人後に落ちるものではないが、それは斷じて親ら實踐躬行する決心を表はしたものではない。專ら相手特に生存競爭に於ける自己の敵手をして之を實行せしめんとする宣傳である。若し之を實行せしめ得るならば、相手は社會の犧牲となり己はその犧牲の結果たる慶福の一端に均霑することが出來る。若し道德の武器を以て敵と壓服强制し得ない迄も、威赫して其已に對する攻擊を抑制し得るならば、已はその間隙に乘じて、敵手を倒し得る見込が有る。是れ支那に於て敎義の言說獨り常に盛んにして然も實績永久に擧らず、國勢依然として振はない所以である」といふ。

彼の論法が餘りに辛辣であるので、支那人に嫌はれて、彼は支那から退去するより外なき事となつた。實際かういふ口吻で漢人を罵倒しつゝ、漢人と圓滿に生活し共に合作することはむつかしからう。が支那の達人高士の言說そのものにして夙にジルバートの論法を支持し裏書きしてゐるのはどういふものであらう。韓非は謂つてゐる。

昔堯舜の時代には土地廣く人に少く、從つて物資豐かにして生存競爭がなかつたから民途に落ちたる物を拾はないといふ樣な罪惡のない時代であつた。然るにその後人口が等比級數的に增加した。韓非は一對の男女から平均五人の子供が育つと言ふ、急速な人口の增加に拘らず、土地は限られ、物資の生產はさほど急速なるを得ない。勢ひ生存競爭は次第に苛烈を加ふる事になつて、今日澆季の世となつては最早昔のやうには行かぬ。どうしても法を設け、民をして己の分を守り、已の分を行はしめ、之を紊る者を嚴罰を以て制裁せねばならぬ。

是れ卽ち有名なる彼の刑名論の根據である。

哲人孔丘も言つてゐる「始めは我の人に於けるやその言を聽いてその行を信ず。今我人に於けるやその言を聽いてその行を觀る」と更に「小人は道德を人に求める」と言ひ。更に「色厲にして內荏、譬へば之れ小人其れ猶穿窬の盜のごときかな」と喝破してゐる。例によつて春秋式の手嚴しい論法であるが無理ではない。蓋し鹿爪らしい顏附をして道義を宣傳し、人をして社會の爲に奉仕せしめつゝ自らは私に之を怠り、以て故なくして人の餘惠に浴するものは、所謂不當利得者であつて泥坊とその實質を同じくするものに違ひない。

ジルバート批判や孔丘・韓非の漢人觀が果して絕對に正鵠を得てゐるかどうかは別とし又この傾向が漢人のみに限られるかどうかも姑く措き、少くともさういふ傾向が漢族に於て相當顯著なものである事だけは否定する餘地があるまい。譎詭自在權變を以て天下に橫行する策士、豹變して保身する哲人共に漢族社會の寵兒にして而も其寄生害蟲である。故に若し漢族を滅亡の徑路より救ひ之と提携合作して、共に此危機を切り拔け、共に世に榮える事が日本人の念願である限り、日本人は苟くも漢族の因襲に學んではならぬ。空なる宣傳を以て漢族を操縱せんとする如き不心得な野望はゆめ起してはならぬ。須らく不言實行一貫した至誠を以て漢族に對するより他なき事を瞑觀するのである。

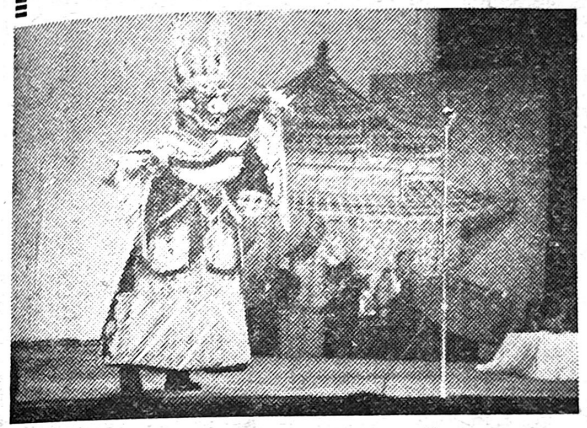
財團法人 南洋協會編
南洋の華僑
規格B6 三五〇頁
定價三圓 送料二十錢
華僑を解剖！華僑對策を明示せる權威書
本書は近衞文麿公を總裁に推戴し、南方各地との經濟的文化的提携に挺身せる財團法人南洋協會が南方共榮圏に經濟的勢力を有する華僑事情とその具體的對策を明示せるものである。現下國民の關心が南方華僑の動向に注がれてゐる秋本書のもつ意義大いなるものがある。

新刊 大陸叢書
廣島高師教授 丸山學著
大陸の思想戰
定價二円五十錢 送料二十錢
大陸の思想戰は如何に展開してゐるか？大陸の戰野を馳驅しつぶさにその現狀を調査した丸山教授が茲に大陸の文化攻勢と思想戰並敎育の全貌解明
廣島文理大講師 佐藤淸太著
北京 轉換する古都
定價三圓 送料二十錢
學都としての北京が日支事變といふ歷史的轉換期に際し、果してどんな横顏を見せつゝあるかを隨筆風に巧妙な筆致であますなく描破し盡くす。
東京神田三 目黑書店 振替東京九〇八二
東京駿河臺

★民族の藝術

—建國十周年慶祝藝文祭—

林田茂雄



一

素晴らしい藝文祭であつた！

主催者みづからが、かう讃嘆せずにはゐられなかつた程の、過程としても、成果としても、空前の意義に輝く豫期以上の立派な出來榮えをみせたのである。舞臺の進行中も、終つたあとの懇談會でも、役員達みんな顔を見合つては手を握り、よかつた、よかつたと涙ぐみつづけたのである。

建國十周年の擧國的壽ぎの盛典に捧げる藝文聯盟としての慶祝行事に「藝文祭」を開催しようといふ案は疾くから立てられてゐた。だがこれについて、昨年の藝文聯盟結成記念に開催された藝文祭に倣つて、各加盟協會の藝術樣式を綜合的に上演しようといふ案と、在滿各民族固有の藝能を網羅して複合民族國家に相應しい藝文協和の祭典にしようといふ案の二つがあつたのだが、後者を提唱したのが今回の庶務班長を務めあげた村松道彌氏であり、それを採擇したのが今回の副委員長たる武藤弘報處長であつた。

だがいざこれを實現するといふ段になれば、日鮮滿露蒙等はまだしもあまり手數はかゝらぬとしても、ゴルチ、オロチヨン、ダホール等の少數民族の夥しい散在と、これらの言語、風俗、文化水準等の相違といふ障壁をのりこえて、限られた期間内に綜合出演の段取りをつけ、豫定の時間中に圓滑な舞臺進行を完了せしめんがために拂はるべき苦心と努力とは全く想像にあまりあるものであり、並々ならぬ自信と決意なしには企てられ得ないところのものであつた。企畫班長は長年在滿各民族固有の藝能研究と蒐集に努力しつゞけて來てゐた電々の丸山和雄氏で、弘報處・祝典事務局・滿映・藝文聯盟・放送局等の各有識有志が班員となつて、計畫・立案・

調査・參加者交涉・參加者出し物の決定等に當つたのであり、輸送と宿泊の斡旋には滿鐵と東亞旅行社、施設準備には市公署・協和會・公會堂が當り、上演班では放送局・公會堂が中心に責任を以て活躍し、記錄班は文藝・藝術・寫眞・舞踊の各協會、民族學會・滿蒙・日蒙・作曲研究會・放送局・滿映等を以て構成し、あらゆる方法と技術とを以て全面的、立體的にこれを記錄して、廣汎な文化資料とすると共にひろく大東亞共榮地域にまでこれを紹介宣傳し、滿洲文化の內容の豐かさと協和治政の成果のあるところを高らかに謳歌せんとしたものであり、その他各地に於ける省公署・特務機關・または滿拓・興安局等を數へあげてくると正に國內全軍官民擧つての援助と協力とによつて出來上つた藝文祭であつた。しかも參加出演者の全部が、種々の困難な諸條件が續はつてゐたにも關らず、全く心からこの祭典を喜んで、欣歡あふるゝ熱演を以てこの舞臺を光輝あらしめて貰つたのであるから、これが名實兼備の國民的慶祝行事として本年中の壓卷たるを絕讃されたとしても、決して偶然ではなかつたのであるといへよう。

なほ特筆されてよいのはその招待方法であつた。國民協賛の慶祝祭典として入場料を取らないといふ事は當然であつたが、單なる入場無料では到底圓滑な會場整理はつきかねるので、全部招待制にした。そしてその招待券の頒布方法を協和會首都本部から各分會を通じて隣組の班單位による事とし、その選に洩れた特殊希望者に對してはハガキ申込みによつて藝文聯盟から招待券を贈つたのである。固より何分にも限られた收容力ではあり、實際に當つては種々な支障や、結果的な不合理も避け難い難點として殘つたにはしろ、この試みを敢へて執つた主催者の精神は劃期的なものとして十分に評價されねばならないものである。當初の計畫では期日をもつと早めて、公會堂の二日間の外に、萬餘を收容し得る大同公園公堂でも公開する豫定だつたのであるが、何しろ九月十五日の式典を中心に諸種の豫定行事が重なり合つてゐて、どうにも割込みがつかなかつた爲に、十月十七、十八日の兩日間といふ事になり、秋といふ名にもなほ冷やかすぎる新京の野外では遂に上演することが出來なくなつてしまつたのである。

今次慶祝藝文祭の意義と成果に就ては、武藤副委員長の挨拶及び閉會直後に於ける關係役員懇談會の席上でも「本年度慶祝行事中第一等の出來榮え」と衷心のよろこびをこめた絕讃の言葉からも窺はれるのであるが、就中十月十九日附「滿洲新聞」にあらはれた社說はこれを簡潔に謂ひ竭してあます所がない。

「……斯くの如く在滿の諸民族が一堂に會したことは建國以來、否建國以前にも勿論なかつた事であつて、今回これが實現を見たのは實にわが滿洲建國十周年の慶びの姿を、おのづからにしてこゝに縮圖したものであり、わけても未だ曾て國都の土を踏んだこともなかつた少數民族達が、不馴れな旅をいとはず、歡び勇んでこの慶祝藝文祭に馳せ參じたといふことは、これ實に、建國十周年にして、僻土の隅々にまでも達し屆いてゐる國勢進展のおのづからなる反映でなくして何であらう。

藝文祭の舞臺に上された各民俗藝文は、一、二のものを除いては殆く興業的な意味に於けるいはゆる觀客を對象とするものでなく、各民族が自らたのしむところの民族色と鄉土色

に滿たされたものであつたが、而もこれを一堂に會せしめ一つの舞臺に上せて、箇々の持味と全體的な感興に於て、悉く參觀者を魅了し陶醉せしめずにはやまなかつた事實は、わが滿洲國における文化的雰圍氣が、いかに各民族の特殊性を生かしながら、而も大なる抱擁力をもつて、おのづからなるそれらの統一を、決して妨げるものではないといふ生きた事實を、具體的にわれらの前に提示したものであり、而してこのことは滿洲文化將來の發展にたいしても、示唆するところ眞に大なるものあるを覺ゆるのである。

二

以下、各代表的な民族藝能について解說、紹介を兼ねた印象記を簡單に綴つてみたいとおもふ。思ひつくまゝで、順序は不同である。

オロチヨン　今回人氣の一方の玉座を占めたのはオロチヨンであつた。といつてもそれが特に優れた藝術を將來したからといふわけではなく、興安省の山中で鐵砲と共に生きる狩獵族としての原始的な野性が、逞しい迫力を以て觀衆のをもつてゐるせゐか、何か似たやうな印象を受けた。松花江下流から黑龍江、烏蘇里河岸にかけての茫漠たる濕原に所々聚落して魚撈と狩獵を事としてゐるといふ。酒と阿片を常用してゐることもオロチヨンに似てゐるが、さうした點には歌も踊も明るく、潑剌たるもので、髯頭中年の婦人によつて歌はれた「婦人送出征の歌」を始め、戰爭や宗教と結びついた譚詩(敍事詩)や民謠等も、格調、聲韻共に健康なもので、なほこれは他のすべてに通じて言ひ得ることであるが、如何にも歌ふこと、舞ふことのすべてが樂しさうで、終始明るい微笑を以て舞臺を飾つてくれたのが嬉しかつた。如何にも建國十周年の國民的慶祝の祭典に欣然と自ら參じたといふ表情にみちみちて、かりそめにも引張り出されて來た」といふ色は見受けられなかつたのである。

チヤム　中部蒙古地帶を代表する喇嘛舞樂として興安南省の葛根廟から參加したチヤムは、文字通りの豪華絢爛たる宗教舞樂の繪卷物をひろげてみせた。解說によれば西藏原始宗教、ボン教の魔術的要素と紅教喇嘛の幽鬼崇拜の要素から成立する惡魔拂ひの一形式だとか色々いはれてゐるが、樂器としては長さ一丈にあまる大喇叭(プリエ又はブロー)チヤルメラに似てやゝ大型なピスクール、角笛やうのもので進軍喇叭のやうな音をたてるが、ガリン、柄をつけて立てたまゝ彎曲した竹の撥の先端でやはらかに叩く太鼓(フングルック又はホゴルグ)それに銅鑼(シヤン)といつた組み立てで、旋律よりもリズムを主にした豪壯なものである(樂器の名前は解說書によつたが「又は」と附記して添へてある名前は僕が直接この參加者中の唯一の日系のお坊さんに聞いた時をしへてくれた名前であるが、この相違は外國語を片假名にうつす上の相違でもあり、又は訛でもあらうから、どちらが正しいといふ工合にせず雙方を出しておいたのである)

舞ひには三・四の種類があり、初めには香を焚いて敎神を祭るらしい崇重なもの、次々に或は牛や鹿を象徵するグロテスクな大きな面を被つて、毒を制するに毒を以てする式の惡魔怨敵退散の跳舞をほしいまゝにし、最後の閻魔大王(?)の面をつけた舞ひは就中の壓卷であつた。舞ひの一區切り〳〵には例の勇ましいガガリンの進軍ラッパが鳴り響いて次の舞ひ手を呼び出すのである。

このチヤムは彼らにとつては最高の神聖なものであり、當り前なら絶對に舞臺などで公開することなど肯じなかつたのであるが、外ならぬ建國十周年の慶祝行事だといふので百方說得の上やつと參加させることが出來たものである。それでも、これはその神聖な宗教行事の一部分なのであるため、肝腎の敎神に捧げる誦經の勤修なしに此の舞樂だけを切り離して上演することは出來ないと頑張られ、そんならばその勤修はどれ位かゝるのかと聞いたら「正味たつぷり二日間かゝる」といはれて目を廻し「しからば御無理でもございませうが、そのお經は現地ですまし、その纏きだけを新京でやつて頂きますやうに」と懇願し、やつとケリをつけたといふ笑へぬ苦心談もひそんでゐる。

朝鮮農樂　出演は間島省明月溝開拓團である。これも晝夜を通じ二十有餘の番組の中で絶讚を博したもの一つであつた。出演者二十名白衣に赤や黃の飾り紐を華やかに纏ひ、帽子の先端にくる〳〵廻る柄のついた白の總をつけ、

ゴルチ族の譚詩

も、これは聞かせるといふよりもむしろ自ら樂しむものであり、それも音だけといふよりも口腔に與へる輕い震動を樂しむのではないかといはれてゐる。

この人達は酒と阿片がなければ一刻も暮せないといふので接待班が苦勞した。酒氣なしには舞臺にも出ないのである。宿も他は全部市內に手配したのだが、オロチヨンだけは南京蟲のゐる宿屋なんか眞平だといひ、わざわざ南湖畔に天幕を張つて野營をした。

ダホール　滿洲原住少數民族中では最も優美な文化面を持つてゐるダホール族からは、民謠と童謠が出演した。その歌謠は嚴格な頭韻を踏んだ蒙古的なものといはれるけれどもわれ〳〵が聞いただけではそんなところまではよくわからない。たゞ興安北省索倫族の國民學校から遙遙出かけて來た少女達の數へ唄による童踊は、われ〳〵の故鄕で今なほ幼き子女たちが「ひいらいた、つぼんだ」をやつたり、輪になりまんじになつて踊つたりするのと、その歌調も殆んど同じなので、民族的な根元の同一如何を詮索するよりも、むしろ時間と空間を超えてヂカにつながりあつてゐる童心のリズムといふべきものに、あはれなつかしき感銘をよびさまされたことであつた。

ゴルチ　三江省富錦地方から參加したゴルチ族の音樂は、習俗的にオロチヨンと相通ずるも

朝鮮農樂紐廻しの舞

首を振るのにつれてこの總が廻る。この總を廻しながら、銅鑼や太鼓を叩き鳴らし、チャルメラの哀調に乘つて、指揮者の采配のまに〳〵、あるひは輪になり掉になり、卽興的な亂舞をつづけるのであるが、首をふり、足を踏み、狂氣のやうに太鼓をたゝいて踊り三昧の神憑り狀態におちてゆく、豐年踊の最高調に入ると、涙つぽろい僕などはひとりでに泣けて來てたまらなかつた。ひたむきに歡喜に徹してゆくもの〻、命そのものを爛漫とぶちまけてゆく純眞な藝術の迫力といふものがそこにある。これは必ずしも僕が貧しき農家の生れであり、營農の勞苦と收穫の秋のよろこびを身にしみて經驗してゐるが故の身につまされた感激とのみは言ひ切れないものであつた。"懸命なる三昧境の美しさ"——とも名附られるものか、僕はむかしの年末大賣出しにジンタ樂を囃してゐるチンドン屋の演奏にも、その打ち込んでゆくひたむきなトロンベットにさへも屢々泣かされた經驗をもつてゐる。そして、われながら泣くことの美しさに自ら打たれ、泣かせてくれたチンドン屋に感謝と愛憎とを持ちとほさせられて來たものである……。これは餘談のやうである。だが今回の朝鮮農樂もまた美しく僕を泣かせてくれたのだ。

この亂舞のあとで、今まで先頭に立つてゐた指揮者の獨り舞臺となり、一同の囃しを伴奏に素張らしい紐廻しの舞ひをみせた。例の帽子の先端のくる〳〵廻る柄の先に十二尋といふ長いテープをつけて、それを前後左右に首を廻しながら大きく美しい輪に描き、或は細飛びの型をみせ、横轉、反轉してテープの輪を巧みに跳びわけてみせるのであつて、むしろ神技と稱すべきものであるが、これだけの曲藝の出來る者は現在朝鮮にも殆んどゐないといはれて居り、喝采また喝采で滿堂しばし鳴りもやまなかつた。

日本舞踊と長唄　新京舞踊家及新京長唄協會の出演、出し物は「老松」であつた。踊は藤間勘多郎、藤蔭千海樹、水木歐徽門と三流仲よく並んで出たけれども、稽古不足が目について異流合同の悲しさをさらけ出し、唄も三味線も就中新京東檢番から動員した「技藝員」の鳴り物の貧弱さは、お世辭にも結構だとはいへなかつた。これは中途半端に職業化して而も修錬の足りないといふ弱點と、生活そのものに卽した

民俗藝術の迫力との對照を殘酷に顯示したものとして甚だ敎訓的であつた。なほ主催者側としての意向は、最初出し物に「越後獅子」を運び舞ひ手を少くとも五、六人は揃へて「布さらし」の美技を見せれば日系代表として恥かしからぬものが出來ようと考へてゐたのだが、都合で實現しなかつた。しかしあとで考へてみるとこれは實現しなかつた方が幸ひであつて、殊にこの「布さらし」の手に似たものとしての朝鮮農樂での紐廻しの舞ひであざやかなところを見せられたのだから、なまじあやしげな「越後獅子」などあらはれなくてよかつたのだと、しみじみ胸をなでおろさせられたことであつた。

三曲合奏　新京三曲協會の出演、出し物は八橋檢校作曲の「六段の調」と久本玄智氏の新作「奉祝合奏曲」三曲といつても三絃が抜けてゐるので二曲であつた「六段」は低調であつたが「奉祝合奏曲」の方は新日本音樂に屬するものとして三樂章の構成をもち、尺八にも第一部と第二部をおき、箏にも高音と低音の二部を持つた構成で、曲としてもなか〳〵の力作であり、演奏にも割合に破綻が少く、長い割合に退屈なしに聞けたのが有難い。この合奏を聽きながら——といふよりも見ながら——不思議でたまらなかつたのは、演奏者の中に一つも美しい顏が見當らないといふことであつた。これは決して美女美男子がゐなかつたといふ意味なのではなく、藝に打ちこんでゆく眞劍さの溢れた、緊張と餘裕とが止揚される極點に見出されるところの、顏の美しさが見當らなかつたといふことである。僕がかつてある戰車部隊を見學したとき、演習終つて愛車の手入れをしてゐる兵隊の顏をこの上もなく美しいと感銘したことがあつた。僕が三曲の人達に探しもとめたのは、その時の兵隊にみたやうな感銘の顏の美しさだつたのである。尺八の方はまだしもであつたが、箏を並べた綺麗どころの令孃、令夫人たちは、みな一樣に人形のやうに指を動かしてゐるだけに見えた。これは或ひは晴れがましい大きな舞臺になれてゐないためた、ただ固くならないためだけに懸命になつてゐたといふ點も割引かねばならないのかもしれないけれども、カザックやコーカサス、ウクライナ等の稍々高級な文化民族から、オロチヨン、ゴルチ等の原始民族に至るすべてが實に樂しげに嬉々として命いつぱいの歌ぶり舞ひぶりをみせてくれたのに對比して、いかにも取りすました樣な感じを受けたのが不滿でならなかつた。これは溫習會の空氣であつて藝文祭の空氣ではなかつた。

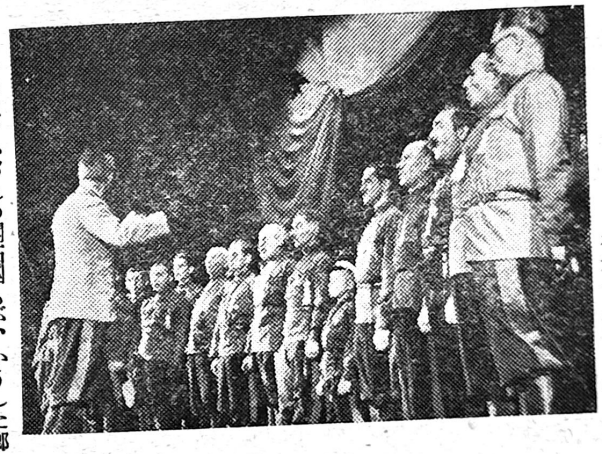
日本民謠と踊　これは牡丹江省仙洞開拓團から獅子舞ひと民謠手踊、吉林省水曲柳開拓團から木會節、伊那節の唄と踊、濱江省大谷開拓團から大黑舞ひと山形盆踊がそれ〳〵登場した。いづれも僕らが故郷で、あるひは盆に、あ

ラジオ
ウオスキー

るひはお祭りに、一度はみたり聞いたりしたことのあるもの、少くともそれを思ひ起させるもので、他のものに比べて珍らしさは取り立てゝいふものはなかつたけれども、その中で傑出してゐたのは仙洞の獅子舞ひであつた。大きな獅子頭に唐草模様の一反風呂敷みたやうなものを胴體の象徴にして、太鼓・笛・手風琴の伴奏二人で舞ふのだが、命なき木彫りの素朴な獅子頭に、命と鬼氣を吹きこんでの、やゝ趣は異つても菊五郎の鏡獅子を思出させる名演であつた。

また同じ仙洞の「さいさい節」と「じよんから節」につけた踊は工藤千代八氏の獨り舞ひであつたが、振りといひ、足拍子といひ、間といひ、全く素人離れのした堂々たるもので、殆んど一分の隙もないとまで言ひ得る位に間然するところなき逸品であり、何々流の看板を掲げた家元連を後へに瞠若たらしむるものがあつた。

開拓團の郷土藝術に接しながら僕は他のいろいろなことを考へた。一つには紋附袴の裝束の美しさといふものへの再認識であつた。仙洞開拓團からの人達はみんな男ばかりで、笛も太鼓も三味線も手風琴も、紋附袴に威儀を正した人達の正座によつて演奏されたのだが、黒地に小さく白く染め抜いた、たつた五ツの紋の配置が如何なる柄、如何なる模様にもまして、しみ入る様に美しかつた。



カザックの合唱

も一つは、いづれの開拓團もが、かうした郷土藝術の演出に必要な太鼓その他の立派な道具を、遙々僻地の奥まで持ちこんで來てゐて、盆ともなり、祭ともなれば故郷の思ひ出さながらに、村中の老若男女が集ひ寄つて、或は歌ひあるひは舞ひたのしんでゐる心情と風景とが、瞼にあつくひろがり出て來て、ここでもまた僕を涙ぐませたのである。

白露系の藝術　白系露人といつても、カザック・ウクライナ・コーカサス（この中にもグルジンとアルメニアがあつた）等々色々にわかれてゐて、みな特有の素晴らしい藝術をみせてくれたが、その恐るべきヴオリユウムを持つた合唱の魅力はカザックとウクライナに止めをさし、妖艶可憐の舞ひ姿はタタールのサガタットとアルメニアが人氣をさらつた。勇壯なカザックダンスに十歳足らずの少年がまじつて拍手を獨占すれば、ウクライナ少女と青年のコンビになるホパックもアンコールをくりかへした。ただ白露系のものに言及するところ少かつたのは、これが既に可なりなポピュラリティをもつてゐると思はれたからである。

（附記）　本稿における各民族及び民族藝能の專門的に亙る解説は殆どすべて藝文聯盟發行の「慶祝藝文祭參加番組解説」によつた。感謝させて頂く。

短歌

大東亞戰爭

小池三良助

——史的にうたへる——

第一歌章　永代借地

△植民地日本の姿を此處に見む永代借地の洋館街區

△同胞を死闘せしむる陰謀が日本の土地の此處に爲されし

△朝光がふかぶかと家ら照らすとき唐人の馬車ゆき交ひたらむ

△丁髷の日本人通詞がおどおどと永代借地を歩きゐる影

△安政の大獄ありし夕べにて永代借地は成り立ちにけり

△梅田・橋本・松陰どちの血に碧へて差し出されたる日本の此の土地

△有村ら十八名が大老の首を擧げたるテロのかなしさ

△大老の首を擧げたる一團がおのおのに腹切りしはおもへ

△外國と同じ仕種をなすための鹿鳴館大舞踏會あはれ

△樺太はロシアに譲れと三條公にグラス投げたる英公使パークス

△小判シルク江戸繪なんどは愛すべき日本なりと言ひしや否や

△舶來のギヤマン・ランプと交換に日本刀など賞られてありつ

△日本のみめ美はしきをみなごに唐人お吉の汚名あらしむな

△お吉汝が魂に强ひたる父祖たちのむごき仕ぐさを今に詫びせむ

△條約改正なされたる日の喜びやなほあり繼ぎし永代借地

△自由民權叫ばれてゐし日本に永代借地は變らずありつ

△街あるく幼な童の口ずさむ英國國歌がかつてありにし

△己れまもるただへつらひに似し生きを弊履のごとく捨つる日は來ぬ

△日本の永代借地よ植民地亞細亞よ我らの媚態は捨てむ

△とどろきにああ近づける一瞬や日本對米英の戰ひを宣す

第二歌章　亞細亞

△アングロサクソンの濠洲なりとは言ひがてて人種平等案を祕かに葬りし

△亭亭とユーカリの樹々立つ原に人間狩獵をなししかれらぞ

△異民族の住める土地らは囚人を流すによしと思ひてためらはず
△不毛の島を開拓したるムツソリニア放置されゐる濠洲の沃土はや
△英國は頼むに足らずアメリカも既にはかなしかくして濠洲よ
△人類に入ることのなき民ゆゑに阿片の痴夢を知らしめしちふか
△炎炎と阿片密輸船燃え盛る大清朝の決意は見よや
△辮髪の警吏の群れが慌ただしく英國領事館を包圍しにけり
△軍艦に積みて持ち來し阿片らが部屋ぬちに高く積み置かれゐる
△蒼ざめし英國領事の甲高きイングリツシュのたどたどしさよ
△長江を溯航なしたる英艦が阿片を強ふと砲火放ちぬ
△黄色の民らに阿片喫はしめて大ロンドンは築かれにけり
△艶のなき紫檀のごとくルンペンがカルカツタの街は彷徨ひてゐぬ
△數人の青年僧侶を先頭に大群衆の行進あはれ
△半裸なる武器もたぬ印度の群れびとに機銃掃射が浴びせられゐつ
△大わだにうねり立つ見ゆたちまちに印度獨立のこれがとどろき
△マラツカの小王國にインドネシヤ解放の歌がうたはれてゐる
△インドネシヤ遠い祖先のつながりにしみじみ亜細亜の解放はうたはむ
△アイリツピンがスペインの治下にありし頃すでに五百の日本人住みつ
△パリアンとラギオの村の中間に日本人部落ありしが見ゆる
△暖流の經めぐるところ亜細亜ありて今ぞ己が手に歴史をしるす

第三歌章　大滿洲帝國

△ヌルハチよ女眞よ遠い追想があとかたもなき土地となりゐつ
△廣漠と人影のなき滿洲に山東人らが移民されにき
△馬賊らが繩張り爭ふ滿洲を日本人が血もて守りつ
△門戸解放機會均等と叫びつつ米英どもの觸手は動く
△在米日人排斥なしたる米國が門戸解放を滿洲に求めし
△滿洲を守れる國を忘れたる東北政權の安らけき痴夢よ
△大滿洲國の建國燦となれる日や亜細亜の意志を世界に示す
△リツトンの視察を受くるまでもなく亜細亜に生れし獨立國家これぞ
△世界支配の體制破られし腹いせに十三對一の決議ありにし
△滿洲の國際管理を言ひし奴が滿洲建國にうろたへてゐる
△巨いなる建國の意志はらみつつビル等掲ぐるつよき標語よ

第四歌章　新生中華民國

△蔣介石を走狗となして大亜細亜を米英植民地となさむ企み
△大亜細亜主義高く掲げし孫文の理想はかくて地に墮ちにけり
△支那主權確立擁護の代償が租界香港ビルマ・ルートか
△支那分轄の野望が凝りて重慶の山間盤居となりにけるかも
△近衛聲明に食言なきをたしかめし汪先生の悲願明るき
△重慶より河内東京とゆゆしくも汪精衛先生訪ね來ましき
△反共和平これぞ中華に單一の主權生れしめむ戰ひなるぞ
△米英の走狗藍衣社の銃口を逃れあへなくて逝きにし曾仲鳴
△反共和平青天白日の旗高く國姓爺合戰の興奮はおもはむ
△反共和平香港上海揚子江亜細亜のものは亜細亜に返せ
△米英らの權益次次に新中華へ返へされてゆく喜びは知れ
△純潔なる亜細亜の血潮精神を國體として護持せる日本
△聰明と力・純潔を確保せる日本よ亜細亜の正しき血すぢ
△歴史的現實が課せる日本の使命は今に起て新中華
△中國の民ら四億が世界史に誓きしるしゆく新中華建設
△十億の亜細亜起つ日や中國に反共和平の旗ひるがへる

第五歌章　撃滅

△嵐呼れて大洋の波しづまらぬ曉闇の母艦を海鷲らとび起つ
△朝燒けが水平線にやや紅き空は大かた晴れてゐにけり
△一機一機とびたつや間なくくつきりと編隊なしてとび去りゆけり
△ねむりゐる敵軍港の中心に躍り込みたる捨身の意志はや
△銃撃輕爆敵飛行機は全滅す既にこのとき雷撃機舞ひ下れり
△行儀よく敵艦列ねゐる一つ一つへ沈着果敢の雷撃だ見よ

△白き筋水面を敵艦へ走る刹那轟沈しゆくとどろききこゆ

△雷擊は終りぬ今や重爆のこれが巨彈を正に見舞はむ

△身命を魚雷となして敵軍港に潜入したる刹那は思へ

△素朴單純かくして不惜身命の行動ありきただにこれのみ

△月明に機雷を抱きし小池らが不敵の笑みを見しと言ふべし

△夜(よる)更けし潮の黒さよ悠悠と平泳ぎなる一隊が征く

△斷雲を縫ひて南海の靑雲ゆ日本雷擊機天下り來る

△瞬間に視野一ぱいにレパルズが擴ごる刹那爆彈放つ

△轟々たる艦隊のスクリュー聽きにつつレキシントンに迫るたまゆら

△ひときはみとどろきつよく聽きにしがレキシントンを眞近(まぢか)に捉ふ

△發！二發瞬時に放つ水雷や魚雷航跡孤をなして著(しる)く

△急潜するたまゆら凄き轟音がつづいて二つ傳はりにけり

△海底にゐまひは交はす喜びや爆雷の搖れやまざるいまに

△悠悠と我が護送船ゆく午後を水平線に敵艦列見えし

△整然と避難に移る船團や敵艦列はやゝに迫りし

△我が艦の寡小は言はじ見敵を必殺はせむ意志のいどみぞ

△次次に敵軍艦が火を吹きて隊伍亂れし今突擊す

△エクゼター他愛もなくて日本驅艦がとどめの魚雷に沈み失せにき

△南溟の闇の水面をかき亂し日本水雷艇の夜襲戰はや

△闇夜襲ふ疾(はや)吹の如く水雷艇が航跡ひきて迫りに迫る

△紺碧の南の空に白く白く落下傘部隊降下すあはれ

△息を呑むたまゆらはつと跳び出(いだ)す落下傘兵つぎつぎにつづく

△紺碧の空にくらげの浮くごとく美はしくしてゆゆしきながめ

△地に着くや瞬間ころりとまろび伏し武器の落ちどへまさぐりよるも

△土に伏す降下兵士の視覺には武器の落ちどが燒きつきてゐむ

△兵隊が武器が降り來る草原に敵機銃掃射が空氣震はす

△降下せる機銃部隊が挺身するこの間隙に砲組み立つる

△追擊に旣に移れる降下兵らの不敵に似たる縱列の行軍

△敵トチカ曉闇のなかに火を吐く〳〵銃もちて泥をはひよりすすむ

大東亞戰爭

△敵機銃擊頭上に迫り又迫るこの口惜しさを紅けにはひすすむ

△逞ましき我が戰爆機の編隊が深き蒼さの頭上過ぎゆく

△機一機突込んでゆく急降下に砲擊と絕ゆるその間の爆音

△息止まるごとき瞬間の靜寂に銃ひつさげてとび出しゆけり

△ビルマ義勇軍印度獨立義勇軍神武征夷の八太烏はも

△タイ兵がたちまち竹できづきたる橋を過ぎゆく日本機械化兵團

△山裾にラワン材切り日本兵團設營したるビルマ進軍

△ビルマ・タイの混血兒ちふ一隊がバグダッドの盜賊の如く武裝しゐきと

△混血兒の一隊が征く山尾根で英兵どちの情報を得られぬ

△英軍に砲擊加ふる喜びを再編インド兵ら語らひゐしと

△黃金のジャポンの富を奪はむと航海したる歷史は過ぎつ

△印度洋に英船どちのＳＯＳが悲鳴のごとく漂ひ沈む

△蒙古風吹き初むる日やサンタバーバラに日本潜水艦の巨砲火を吐く

△歷史いま大きくゆらぐ轉換に亞細亞再建のときは來むかふ

△悠遠の神代につづく祖父たちの心はいまによみがへり來る

△天皇は神にしませば十億の亞細亞びとらを導きいます

△みいくさはいま大らかに世界史を淸めゆきなすこれがすがしさ

快適な能率生活
雲脂だらけで、痒みの募る頭髮では徒らに苛々する許りか第一不衞生此上なし。先づ正しい養毛料を常用、頭髮を淸淨化し「朝の一振り、終日快適」の氣分で、職域に邁進せられよ。
姉妹品
よく落ちて、毛を傷めぬ
ヨウモト洗髮液
（オイルシャムプー型）
養毛劑の始祖 ヨウモトニック
全國の百貨店藥店化粧品店に有
（賣藥部外品）

藝文回顧

★美　術

一年前の十二月八日大東亜戰爭が勃發するや日本では畫壇、文壇、樂壇、映畫界から一時に大勢の藝術家技術家を徵用して記錄、宣傳、宣撫報道と各方面に活用古今未曾有の文化戰線を展開した。そして藝術家達は軍部からこの世紀の仕事に召し出されることを名譽に思ひ今なほ多數の人達が南方現地で活躍してゐる。

わが滿洲國でも對米戰爭必至とみられるや藝文聯盟美術家協會の存在價値を示すはこの秋とばかり美術家の動員體制を整へ、八日「帝國陸海軍は本日未明西太平洋に於て米英軍と戰闘狀態に入れり」の第一報と同時に時を移さず國内宣傳戰に馳せ參じた。

この時の目的は未だ米英の實力を過信する傾向にある滿系大衆に、戰爭の意義や眞實の戰況を繪畫の力を以て手つとり早く認識させるといふにあり、漫畫ポスター、ビラ、繪入り壁新聞、各地で應用出來るアイデアだけの漫畫通信などが盛に製作された。

また全滿各地でも協和會からそれぞれその土地の美術家を動かしてこの目的の達成に邁進したことは勿論である。

×

次ぎに行はれたのが關東軍の報道隊演習である。これは獨逸のP・Kに似た組織であつて、現役同樣の軍隊として訓練し且つ常時でも思想宣傳などに機會あることに活用しようとするもので、この構成は新聞通信記者、寫眞班、映畫、錄音、文藝及び美術の各班からなつてゐる。演習のあるときは臨時に軍屬として嚴肅なる宣誓を行ひ、現役同樣の裝備と規律の下に行動するのである。

その第一回の報道隊演習が本年二月西部國境地方に於て行はれた。酷寒零下四十度を克服して默々と北の護りにつくわが忠勇な皇軍將兵のありのまゝの姿を、文をカメラを筆を繪を通して銃後に傳へ「南の戰果に眼を奪はれて北を忘れるな、だが北はこの通り大丈夫だ」といふことを示す意義を持つてゐたのである。これには阪本牙城・今非一郎・池邊貞喜・太田洋愛の四氏が參加して約二週間從軍の後雪焦けして歸つて來たついで四月には戰車隊見學が行はれたが、これは演習といふほど大げさなものではなく、〇〇の戰車隊の演習を機會に戰車に對する經驗や常識を養つておくためであつた。その代りに演習には新京から十數人の多數に四平からは彫刻の後藤氏が參加した。

五月には開拓地演習といふのがあり、淺枝次郎・阪本牙城・野田武夫・池邊貞喜の四氏が參加し、東北滿開拓地に入植して大東亜の食糧增産に盡してゐる拓士達の生活を故國の銃後に通じて報道した。

七月には產業報道隊が結成され、三班に分れて全滿の重工業地帶を巡り、持てる國滿洲が戰爭完遂のため如何にその資源と工業力を發揮しつつあるかを傳へた。これには池田甚三郎・桑原宏・佐々木順の三氏が加はつた。これまでの隊員作品は九月新京三中井で報道美術展として發表された。

十月には〇〇の戰車・工兵・歩兵學校見學報道隊演習が二日間行はれたが、このときには初めて帶劍を命ぜられ、淺枝書伯以下慣れぬゴボー劍を持て餘してゐたのはちよつと氣の毒でもあつた。參加者は淺枝次郎・桑原宏・佐々木順・本田政民・古長敏明の五名。

報道隊演習といふのは十月本記事執筆までには以上で盡きてゐるが、ほかに興亜勤員大會・十周年式典・慶祝藝文祭等には美術家協會から多數參加した。

特筆すべきは藝文祭に於ける記錄畫寫生會で、このために公會堂本館の一室が提供され、舞臺を終へた各民族の出演者が扮裝のまゝ二十分三十分とモデル臺の上にポーズをつけてくれ、二十餘名の美術家達はカルトンの砲列を敷いて一枚でも多くと熱心に寫し取つてゐたのはむしろ壯觀であつた。

これは美術家が如何に熱心であるかといふことを他の藝文團體や關係方面に再認識させ、驚歎に類する讃辭を得たことは痛快であつた。かくも豊富なモデルを揃へて、かくも熱心に多數の畫家が寫生したといふことは世界でも餘り例のあることではあるまい。

×

日本から來た作家の展覽會は今年は建國十周年に因んでか實に數多く、いちいち名前を擧げたら際限がない。内地の展覽會へ出品した立派な作品を陳列して文化向上に有意義な展覽會もあつたが、中には隨分ひどい賣らんかな展もみられた。九月から十月にかけての内地作家の展覽會は特に多く、毎日二三會場でひつきりなしに催され、觀るのが商賣の筆者も音を擧げてしまつたくらゐである。

それに對して在滿作家の方は黃土坡展・美術文化展・矢崎千代二氏個展・常白生個展などがあつたが、活潑であつたとはいへない。

常白生氏が新京城内の振興合商場で滿系最初の洋畫個展(?)をやつたのは意義深いが、國展出品といふ但書のついたので見覺えのない作品が隨分あつたのは遺憾である。聞けば名前を替へて何枚も出品し、一度賣れた作品は同じ圖柄を再製して入選買上げ作として發表してゐるとか。滿系といつてもこんなずるいやり方は默過するわけにいかない。淺枝委員長から屢々本人に對して警告を發してあるはずである。

×

大規模な展覽會としては國展と聖戰美術展があつたが、國展については度々書いたから割愛しよう。

聖戰美術展は關東軍報道部と弘報處の肝入りで陸軍美術協會、滿洲美術家協會、それに滿日、滿新、康德三社の共同主催のもとに哈爾濱を振出しに、新京、奉天、大連の四大都市で公開されたが、曩くも天覽を賜つた陸軍作戰記錄畫を始め三百號二百號といふ大作百點が一堂に陳ひ、規模内容に於て滿洲有史以來のものといへる。

（古長敏明）

★演　劇

十月の十五日だといふのに、十二月の決算原稿を書かねばならぬ。少し辛い！九、十、十一月の三箇月に亙る各劇團慶祝公演の結果も報告出來ない。が總括して報告出來ることは、弱は强へ、强は更に强固へ、無は有へと活動が進められてきたこと

である。今年は演劇亦進備一期の決算歲である。來春より逞ましき再出發がなされるのである。

×

先月多忙で失禮してゐる間に、東安に「劇團東安」といふ日系の劇團が出來た、近日結成公演を行ふ。之に對して何時か警告しておいた「劇團ハルピン」の日語部が、その華々しき出發に似ず、崩壞の憂き目をみた。唯一の日系專門劇團といふ意味で期待はしたが、所詮附燒刃では駄目だといふことがはつきりした譯である。愼重なる再起を希む。滿語部は仲々活潑にやつてゐる。妙な野心めいた仕事は、基礎がかたまる迄は早い。

×

「奉天協和劇團」が秋期大公演をやつたが、之は去る八月の厚生大會出演の劇なので、一寸寂しい。「大同劇團」は目下、通化省下の「林則徐」公演中である。之が「林則徐」の最後公演となるだらうが、百五十二回の公演數は記錄である。日、支共に之が映畫化を進めてゐる時、滿洲の先發は一寸面白い。

×

演出家の鈴木英輔氏が來滿した。從來日本よりの演劇人は高等旅客であつた傾向にひきかへ、氏は「大同劇團演劇工作隊」に從いて、今熱河の國境に入つてゐる。每日の勞苦がしのばれるが、滿洲演劇のためには大きな收穫である。氏の勞苦に感謝したい。

建國十周年を期して、是非共日本語專門劇團を結成しやうといふ機運が濃厚である。前述の「劇團ハルピン」の結果に鑑み、如何にその結成が困難であるかを如實に示されてゐるだけに、愼重な態度が希ましい。それに何時も言ふ樣に、どうせやるからには、育てるだけの內容あるものでなくてはならぬ。育てぬ方が悪いのでなく、育たない柔弱兒が悪いのである。—來春早々呱々の聲をあげるとか聞くが、左樣次第お忘れなく。

×

大騷ぎをして十人の日本演劇人來滿であつたが、十月の滿洲演劇月のリヤウ〳〵さは何を意味するのか？空騷ぎはこの時節柄禁物。——十月初に新京に乙女歌舞伎（女歌舞伎に非ず）といふモノが公會堂で公演したが、寶塚公演の後丈に後口の悪いこと、之は滿藝のお仕事ではないそうだが、何とかならぬものか？六代目の時は六十何圓のプレミアムがついたといふのに對し、この芝居では水商賣の女共に何枚かづゝ强制的に買はせたといふ。不平だら〳〵の巷の聲を聞く度に思ふ。何とかならぬか？と。

×

日系職場劇團（イヤ新京の場合は勤勞者劇團）の共同發表會を劇團協會で企畫してゐたが、進むに從つて新京放送劇團も應援參加して大東亞戰爭一周年前に華々しく公演するといふ。職場劇團の持つ目的を考へる時、まことに好ましい。之を機會に職場劇團が會社に十分理解され、本來の任務につとめること。又他の會社も大いに研究して欲しいものである。芝居といへば顏をしかめるエラ方に、演劇といふことを教へたいものである。

×

今年程全滿各地を歩いたことはない。そして痛切に感じたことは、娛樂の貧困だ。都會は別として、縣公署所在地すらも、聊かの餘裕もない無味極るものである。閑間々々と腕

拳つけた日本演藝隊の來滿（招聘）も結構だが、滿洲自體としての後に殘る慰問隊が欲しい。特に滿系に關する限り何があらう？政府、各機關會社の派遣は日系に限られてゐるかの樣だ。來年こそは、もう一とふんばり力を入れて、滿系に與へて欲しい。滿系はひからびてゐる。

×

日本の移動演劇聯盟も、その內容は、漫才、歌謠、輕技、舞踊、演劇となつてゐる。これらが滿人對照に出來ぬことは絕對にない。十組もつくつて、常時活動せしめれば、一朝ことある時も何の恐れることがあらう！もう出來ていゝ時だ。イヤ今つくらねば、ならぬ時だと思ふ。劇團協會と演藝協會の任務の一端はこゝにもある。

×

「大同劇團」は十一月に「清天壯志」第一部といふ慶祝公演をやる。後二月の成果は、何れこの次委しく報告する。

（藤川研一）

★映畫

統合によつて新たなる體勢を以つて出發した松竹・大映・東寶の三社は、それぞれ現代劇に時代劇に、その陣容を整へた。私は少なくとも、最近の日本映畫の製作態度にある信賴を持てるのではないか、とさへ思つてゐたのであるが、これは私の餘りに甘い考へ方であることに氣づかないではゐられなかつた。作品の上で、その實例をあげれば松竹「日本の母」「原研吉・大映「お市の方」野淵昶などの如きは實にはづべき愚作である如く、月に六本といふ少數のフイルムを以つて、日本の劇映畫の全部の活動となさんとする、さうした時代に、一本の映畫を最も立派な映畫として登場せしむることが大切であることは云ふまでもないが、映畫會社がおのおの餘りに營業政策的になつて、或ひはむやみに俳優の顏ぶれを並べ、或ひは誤まれる日本の精神を普及するが如き傾向が見られるのである。これは、映畫を製作すべき根本の指導方針を企畫も立つてゐないことを明らかに證明してゐるものである。三社が各自良いやうな勝手な考へのもとに、今後とも製作されてゆくことは、日本映畫の發展の上に大きな支障を來すべきものであると思ふ。

「映畫旬報」九月二十一日號の白井信太郎氏に訊く座談會に於いて、白井氏は次のやうに云つてゐる。

「東亞共映圈に於ける晚畫營團を拵へたらどうかと考へてゐます（略）究極の目的はよい映畫を拵へるにあるわけです。所が我々が意見を述べてもどうも利益追求の魂膽から云つてゐるやうにとられる。これは實に殘念です。映畫事業といふものは丁度魚釣のやうなものです。魚釣は必ずしも釣つた魚を食べるのが目的ではなく、魚を釣ることそれ自體が樂しみなんです。釣上げる瞬間の面白さ、さうして、見てゐる人が「あゝ釣つた」といふ、それを聞く得意さ又釣れた魚は持つて歸つて近所に配つたりして必ず自分が食べない」

又、林文三郎氏は企畫審議會といふ言葉で白井氏の映畫營團と同じ意味のことを提言してゐるが、このやうな機關の問題は今の日本映畫に當然實現されなければならないことで三社が個々別々の企畫を立てる、その上になくてはならないものであると思ふ。

又、大陸に於ては「大陸映畫聯盟」の誕生を見て、滿映、中華、華北の提携した活動が期待されるが、これも政治的な、營業的な提携から更に積極的に製作の上に提携されるやう期待してやまない。

滿映、華北、中華はそれぞれ、その土地に於ける獨占的な配給位地を持つて、この經濟的に基礎づけられたる上で　三社一體の大陸映畫作品の誕生を待ちたいのである。

「鴨片戰爭」は滿映、中華最初の提携映畫として製作ずべく計畫されてゐるやうであるが、これが實現を望む次第である。

次に、滿映の本年度の作品は、文化映畫では「逞しき草原」芥川光藏「松花江」森信「北の護り」高原富士郎などが最もよく、劇映畫では「龍爭虎鬪」水ケ江龍一「愛的微笑」山ケ内英三などが問題にされてゐる。滿映は本年度は誕生以來初めての人事大改革によつて、古きものを捨て、新しき者さを以つて編成された製作陣容で、康德十年度の期待をはらんでゐる。

中華映畫では「鐵扇公主」張善琨「木蘭從軍」張善琨が日本に大陸にその異色を放つて、中華の活動は愈々期待される。兎に角、大陸映畫は劇映畫に記錄映畫に於ても　康德九年は愈々その活動の火蓋を切る正に濟備時代として大きな嚆矢がなされ又大きな夢をはらんでゐると云へよう。

日本の劇映畫では、松竹「元祿忠臣藏後篇」溝口健二、松竹「母子草」田坂具隆は最も勝れてゐる。又「父ありき」小津安二郎「白い壁畫」千葉泰樹「次郎物語」島耕二「山參道」島耕二「將軍と參謀と兵」田口哲「指導物語」能谷久虎「獨眼龍正宗」和泉浩「大阪町人」森一生などが佳作であつた。

日本映畫社の「記錄映畫、空の神兵」「マレー戰記」「ビルマ戰記」など、いづれもカメラマンの精神を打ち込んでゐる態度に敬意を表したい。

尚外國映畫で滿洲で上映されたものでは「青春亂舞」フランス、アレクゾノカル「晩春の曲」獨ウファー「白鳥の死」フランス「毀れた瓶」ドイツなどは外國映畫のない本年度に於て、大いに愛された作品であつた。

（鹽木三平）

★放送

本年度の滿洲放送界は、大東亞戰爭の展開、勝利の歷史に即應して、而も、建國十周年記念祝典の年に當つてゐたので、その弘報、文化的、政治的活動の意義も大であつた。マイクと言ふ一つの機械的な技術的な操作對象のみを謂はず、文化事業としての放送を採つてみれば、既に明かな樣に、滿洲に於て果しつゝある放送事業は營當事者の文化的役割はまさに滿洲文化促進の一大拍車である。

この樣な放送事業が、勿論、外廓團體としての音樂、演藝、映畫、新聞等の諸種のグループと協力相俟つて始めて完全な擴進をなし得るものではあるが、往々にして、是等諸團體と、放送局との交錯上に、放送事業と言ふ國家的文化的事業を徹底化せしめないケチな根性が支障してゐる事は、遺憾と言ふよりむしろ來るべき年の吾々滿洲の放送事業促進の爲、此の際、一擲拂拭すべきである。

その第一は、音樂關係であると言ふ事だ。その行掛りや、一切末節は改めて此處に是非する必要もないが

第三者として—先づ本年當部より十周年記念行事を始めその他の催物で參加交涉を持つた當事者として、既に承知の通り—如何にさうした結果は、大乘的立場に立ち得なかつたケチ臭い根性の醜聞をさらけ出すかは明かである事を一言するものである。必ずしも放送局の側にのみ立つて音樂團體のみを攻擊するものではないが、ともかくに、トンボの樣な神經を振りかざす樣では、健全闊達な、明朗な藝術もないし、文化も促進しないと言ふ事である。

大都會化し、分派し、文化人が增殖し始めると、すべてに事は纖細化して而倒になるが、それにしても吾吾は、今一歩、大きく踏み出して鐵の如き頑健な文化人的行動をしたいものである。

祝典行事の中でも、藝文祭は、極めて成功した催物の一つで、時に放送局の是に對する參加役割は注視され、買はれていゝものがあつた。放送事業が、單に技術的な傳播行爲に止らないで、かゝる滿洲諸民族の協和的活動に力を盡した點には、滿洲放送事業の文化的特異性が然らしむるからだ。是は、放送の限界外ではないのである。かゝる諸民族を對象とする放送自體の基礎的研究調査がたま〳〵此處に放送の傳播錄音技術操作と相俟つて結果したに過ぎない。放送事業の基礎にこの民族對象の研究が吾が滿洲放送事業の重要な特異態としてある事は認識されたわけである。

處で、本年度の放送事業は、決して、省みて完璧の結果とは謂へなかつた。まだ〳〵積極的に乘り出すべき多くのものもあつたし、事業上の宿題も亦、未解決的な形で終末してゐるものもあるからだ。是等は、人材のないと言ふ事よりも勉強研究の不足にあることを此際徹底的に究明して行くべきであらう。

（仁智蘂坊）

★音樂

今年は建國十周年に當つたので、各界共多事だつたが、とりわけ我樂壇は恐らく建國以來最も精彩を放つた年と云へやう。筆者の寡聞を以てしても十指に餘る事柄が採り上げられる程である。此の國の行方通り先づ組織の上から變革があつた。所謂「藝文要綱」に基き、一團行がかりを捨て、樂團協會が實際的に働き出したのも今年であり、延いて新京音樂院が劇的終幕を下し、音樂團に誕生したのも此の年であり、唯一の定期演奏會が有形無形の裡に消滅したのも此の年である。

興亡盛衰は世のならひである。況や發展的解消とあらば更に光明を前途に期す可きであつて、寧ろ大に慶祝してよろしいとも云へやうが、筆者は文化財の統制は生必品の統制に比べ、一段と難かしいことを知るが故に、今からでも遲くはない、將來の發展の爲には、理論倒れに終らぬやう、ほんとにピチ〳〵働き出すやうに、關係者は宜しく三省事に當る可きだと考へるのである。

今年は親邦のからなる祝福によつて、在滿好樂家は十分たんのう出來た筈であるが、こんな事で安心してはいけない。自らのものを持たなければ心細い。揚ぎなき基礎の上に情熱に躍動する演奏を、せめて三月に一べんでいゝから聞かして貰ひ度い。

×

十周年慶祝歌が制定せられ、上野耐之氏によつて、ラヂオを通じいや

といふ程教へ込まれた。何だか聞き覺えのあるふしの接續みたいな歌だが、歌ひ易いし、相當浸透した樣に聞いてゐる。とまれ秋天晴朗の下、晴れがましくも嚴かな南嶺に於て、數萬の人々によつて唱和せられた時此の歌は本來の使命を達成したと云ふ可きであらう。

本年度の樂壇關係で一番嚴肅な事の一つは新國歌の制定であるが、此の事は前號にも採り上げたから、改めて觸れない。乍然苟も立派な國歌が制定された以上、之が普及徹底には、一層出精す可きである。奉唱に當つて口許りパク〳〵やつてゐるてあひが相當多いことは、寧ろ不謹愼と云ふべきである。

×

後半に至つて樂壇は多彩な使節を迎へ、いささか興奮した形であつた。上野からは、關本敎授指揮による管絃樂に、演奏地別に演奏效果を巧に織り込んだ獨奏を加へ、各地共絶讃を博した樣だ。日本の文化といふものが、此の戰爭中に拘らず、これ丈の高さを以て培はれつゝある有樣を、この複合國家に於て展示し得た事は、正しく大なる收穫と信ずる。

入場料と入場券の取扱ひは主催者側は劃期的だと信じてゐる相だが、筆者は學校團體の權威に基き高い入場料などとらせなかつた其筋の方々の明斷に敬意を表すると共に、學校當局も、主催者側も、聽衆も、等しく此點に關する心構へが十分だつたかどうかと考へるものである。

上野はいはゞ旅の人であつたが、山田氏の慶祝樂團は之とはいささか趣を異にするから、我々の關心も一段と深い譯である。臺木はおなじみの新京音樂團、つぎ木は新鋭の古豪揃が山田氏だからといふ丈でなく、上野の裝に對する前垂といふ譯でもない。結局此の樂團の中から何人新京に殘るだらうかといふ興味である。仄聞するに、あまり殘り相もないといふ話。何が國都新京をして魅力なからしめたか。色々あらう。がとも角落附いて職域奉公の出來るやう施設する事も契緊事の一つと心得ねばならぬ。とまれいまにも素晴らしい樂團が、全編成で聞けるなどと思つたのは、いさゝか早まつた樣だ。結局步一步理想に近づくやう致方はあるまい。

筆者の聽いた千秋樂の夜は、いささかお疲れのていで大に同情した。席次の點で思ひ切つた手際をみて意を强うしたが、所謂慶祝曲は、伊の田園交響樂詩が、とらはれず、のびのびと歌つてゐた美くしい印象を與へて呉れたのを除けば、日獨共に洵に辭有うと申上げる外はない。

第二部日本の作曲家のものは、中中滋味深きものがあり、特に興味を勇かして呉れたが、日本的だと感心する前に、より朝鮮的だと感心したり、管絃樂法のうまさに感心し乍ら打樂器の用法に眩惑されたりして、今日の管絃樂に於て所謂日本的とは何ぞや―などと考へさせられた。

×

樹々が色づくと藝文祭がひらける。複合民族が一同に會する丈でも大變であるのに、各々がその代表する民藝を熱演するのであるから、之は容易ならぬ聽物であり、之を企畫し運用した方々には心から敬意を表する。偶々旅行中の筆者はハルピンのヤマトホテルで擴聲器を前に傾聽してゐる人々にまじつて運よく聽くことを得た。之等とりぐの音樂は錄音され、採譜される相であるから繪になり、フイルムになつたものと

共に、それ自體尊い資料となる計りでなく、將來この國の文化面のすゝめ方、まとめ方に對して偉大な貢獻を爲す事であらう。

×

最後に、けん爛たる行事の陰に、逞ましくも成長の姿を示して呉れた一、二のものを拾はう。ピアノ塾の發表會が二つ。岩田門下の方は後で知つたので聽き損ねたが、和泉門下の方は在滿十年の喜びも加へ謝恩會の形に催されたのを聽いた。鍵盤にあこの觸れるやうな小さい人々迄律動や和聲に對する感覺の逞ましさに微笑むと共に、あの位彈けるなら是非管絃樂と共に、彈かし度いと思ふ程の優れた一、二の少女達を發見して意を强うした。

合唱もブレクトラムも作曲もそれぞれ皆一所懸命の樣だつた。

（井村雷太郎）

★寫眞

建國十周年を迎へ滿洲寫眞界の發展と其の使命は益々重要性を帶び之に從ふ寫眞家の進む可き方向も自から定められて來た。從來の寫眞家は所謂如何に技術を表現するか、に汲汲たる有樣であつたものが、現在に至つては、寫眞の持つ特異性をもつて、如何に傳へるか、にまで進んで來た。博覽會・展覽會・窓飾展會・ポスター・グラフ・パンフレット・雜誌等、あらやる面に、活用され、文化面に於ける國策遂行上に必要缺く可からざるものとなり、其の具體性から言つても、大衆性から言つても、百聞一見にしかず、言論或は、文章にも優るは誰も認める所であらう。特に我が滿洲國内に於ける滿系を對象とした所の宣傳性に至つては然りである。此の特異性を持つ最高文化に活躍する寫眞家が、國策を論じ、或は、指導者となり、運動に參加する面まで進み、最近に至つては幻燈・寫眞・紙芝居等の寫眞に關するあらゆる範圍まで乘り出して來た。

×

本年度來滿した主なる報道寫眞家は、内閣情報の村寫眞情報長を初め土門・湯澤の兩氏、或は從來のモスターヂュ萬能主義を廢して新らしい行方をして居るフロントの發行もと東方社の木村伊兵衞・渡邊勉・濱谷浩の諸氏及び、滿鐵が招聘した日本報道寫眞家協會の渡邊義雄・小石諸氏の一行で、いづれも日本に於ける寫眞界の第一人者として活躍されて居り、又、アマーチュア界では特に親しい人達であつた。

×

十周年慶祝を兼ね第一回全滿寫眞師大會が八月二十二日より三日間新京記念公會堂に於て開催せられた。大東亞戰爭遂行の爲には、あらゆる困苦缺乏に堪へ、飽くまでも物質不足を克服する不動の信念と、覺悟を鮮明せる趣旨と、經濟統制下に於ける營業寫眞家の方向なるものが論議せられた。從來ともすると營利方面に走つて居た之れ等業者が今回の大會を期して、政府の統制ある指導の下協力したいと言ふ情勢まで進んで來たのは、洵に喜ばしい事だが、協議内容的には材料の配給要望云々と言つた物資需給上に現はれたものに陷つてしまつたが、決戰體制下に於ける今後の實業寫眞家は如何にすべきかと言ふ所の突進んだ運方針まで檢討すべきで有つたであらう。

×

博覽會事務局に於て會場内撮影の懸賞寫集が行はれ、これに應募した

作品は、莫大な數に上つたが、其の殆んどが會場入口と大東亞戰爭館、新京館、大阪、東京と第二會場の一部等の同一な作品に終つてしまつて事務局の狙ひとは聊か違つたもので あつた。內二十點が優秀作品として入選したわけだが、技巧は兎も角其の內容が餘りにも狹い面を取り上げたものばかりで、大東亞戰に相應はしい、壯大美の面に缺けて居た。アマーチュアはやはりアマーチュアであると言はれる所以も、こんな所から來るのであらう。物資不足の今日國家的資源愛護からも、誠に憂ふ可き存在である。第二回組寫眞募集を行つて總體に亙る寫眞を募集したのだが果して希望ものが集つたであらうか。

×

本年度第一回科學技術聯合協議會（科技聯と稱す）が開催せられた。協議內容としては、土木・建築・醫科關係のものであつた。科學技術部門として寫眞も入つて居るわけだが、寫眞技術及び其れから生れる文化に關する議案は全然入つて居なかつた。協和會運動の中に、開拓部會科學技術部會のある今日、藝文部會なるもの、存在が無い。文化の第一戰を行く藝文部門は當然この部會として協和運動に入る可きものでは無からうか。

×

藝文指導要綱なるものが出來て以來寫眞藝術界に於ける方向が確立し寫眞家協會の確立を見、又指導者達の努力の賜で非常に建設的なものばかりになつて來たのは誠に歡ばしい事だ。國展に寫眞部門の云々される今日、滿洲國が世界に類のない獨創國であり、既に建國十年の今日までの發展によつて國の基礎は益々强固に建設せられた今日、日本の例に囚はれず新らしい行き方として入れて見たらどうだらう。本年度國展を寫眞家の觀た所からの感じを述べて見れば、畫のテクニックは別として內容的には滿洲國と言ふ立場からの時局に認識した指導精神に缺けて居る作品の多かつた事が感ぜられた。滿人の生活面の表情或は部分的に狹く取扱つた、所謂不健全な滿洲の裏長屋的存在面は現在の寫眞界では過去に葬られた世界であらう。又工藝展のある作品を例として見れば、滿洲の勤勞奉仕は國民運動の礎ともされる程重要に取り擧げられて居る今にも拘はらず、滿洲の勤勞奉仕に日日の丸（日本の表現）をして居た作品を觀た。我々には一寸解釋に苦しむ所であつた。かう言ふ點では滿洲國に於ける寫眞藝術家の時局に對する認識と取るべき態度なり行き方は進んで居ると思ふ。これ等を觀察すれば國展に寫眞部門は當然入れるべきではないか。

（小塚光彦）

人類飛行の黎明時代

美保千代和

十五世紀のイタリーが生んだ文藝復興期の科學の天才、ダ・ヴインチの業績をしのぶ「ダ・ヴインチ展」が今秋日本世界文化協會、イタリー大使館情報局、陸海軍省などの手によつて東京上野公園、不忍池畔に開かれた。

一面、優れたる藝術家でもあつたダ・ヴインチが誠心、科學した心。その成果こそ今、大東亞を築き上げんとするアジア復興の時局に學ぶべきものであるのだ。こゝにダ・ヴインチをしのびつゝ現世紀の驚異にまで發展した人類飛行の黎明時代を回顧してみやう。

鳥は空かけり、蝶は春光のもと、舞ふ。人類が鳥の如く昆蟲の如く大空を自由に飛びたいといふ理想を抱くやうになつたのは何時頃であらうか。恐らく地上に人類の權力が認められるやうになつたその頃からであらう。

然し何時か游泳を覺え、筏を發明し、舟をこしらへ、水上の征服に成功した人類の祖先も、燕や蜻蛉の羽に代るやうな何物も持つてゐなかつたため空中飛行の念願は叶はなかつたのだ。しかもこれは殆んど近代まで不可能事とされてあつたのだ。

だが人類の空中飛行の理想は不可能と思はれてゐながらも、連綿として各時代の人々の心を強く搖り動かし、どうかしてその目的を達しやうとする、根強い努力が續けられて來たのである。そして彼等が試みて來た飛行の方法は、その悉くが鳥類の自らそなへてゐるやうな〝つばさ〟を發明したいといふ一念にあつた。そして傳說その他に殘された鳥類飛翔を模倣しやうとした話は幾多もある。

ところが、そのうちで最も確實であり、しかも今日から見ても驚くべき著想であつたと思はれるのは、即ちレオナルド・ダ・ヴインチの發明であつた。ダ・ヴインチは解剖學的に鳥類の羽翼研究をなし、しかも鳥翼と空氣との關係を結びつけた。これがラテン語の著書で「空中飛行」といふ貴重な文獻となつて遺された。この書はダ・ヴインチが逝去の際、友人のフランシスコ・メルツイに與へられたが、一七九六年頃ナポレオンの手に入り一八九三年にパリで出版されてゐる。

ダ・ヴインチの發明した航空機は翼を蝙蝠に

倣したもの、後方には安定と方向をとるため尾翼のやうな舵やうのものを設け搭乘者を鞣皮の帶で水平に結はへ、翼の各關節は鋼鐵の蝶番となりその上下にある紐を引いて鼓翼せしめるやうになつて居り、一四九五年頃の考案であると言はれてゐる。さすが、畫家としても有名であつたダ・ヴインチであつただけに圖解も巧緻を極めて居り、これが恐らく文獻に現れた鳥翼摸倣の最初の發明であつたであらう。

この最初に現れた羽撃機（オルニトプテル）——輕い材料で鳥と同じやうな大きな羽を作りこれを背負つて手足ではばたきして飛ばう——といふ原始的飛行も人間の手足で出し得る馬力は瞬間的には一、三馬力、八時間勞働では八分ノ一馬力（扇風機のモーターの馬力程度）であり、これでは到底飛べなかつた。

ダ・ヴインチに次で鼓翼式の航空機を考案したのがテフランのサブレにゐたといふ錠前屋のペスニエである。彼は二本の棒の兩端に中央を蝶番仕掛けにした翼を取附け、それを身にしばつて水中を泳ぐやうに空中を飛んだと言はれてゐる。又、一七四二年にはパリで伯爵ブラックヴイルが同樣、羽撃式飛行機を發明し、セーヌ河の橫斷を圖り、ポン・ロイアル凱旋門近くの河中に墜落、片足を折つたといふ。然し今日から推斷してこの兩名の飛翔事實には多くの疑問が殘されてゐる。

ところが、十六世紀から十七世紀の間にも、ダ・ヴインチに劣らぬ鳥翼飛行の學術的研究者があつた。その一人をボレリと言ひ、鳥類の飛翔を理論的に考究した「動物の飛翔」といふ著書があり他の一人は實際に鼓翼式飛行機を設計、製作し、熱心に實驗したロバート・フークである。だがフークの實驗もつひに成功しなかつたものゝ、その態度はダ・ヴインチの如く眞面目な學究的のものであつたと言はれてゐる。

かうして、後には動力附の羽撃機も設計されたが、極く小さな模型機以外には今日まで

に飛び得た羽撃機は一つとしてなかつた。

ところで我が國にも鼓翼式飛行機の發明者が二人ゐた。その一人は菅茶山の「筆のすさび」に書きしるされた幸吉といふ人である。その隨筆によると「備前岡山の香具師、幸吉といふもの一鳩を捕へてその身の輕重、翼の長短を計りわが身の重さを掛け較べて自ら羽翼を製し、機を設けて胸先に括り拵つて飛行す、地より直ちに揚ること能はず屋上より羽打ちて出づ、或る日郊外を翔廻りて一ところ野宴するを視下し、若し知れる人にやと近より見んと地に近づけば

風力弱くなりて思はず落ちたりければその男女驚き叫びて遁れ走りける後、酒呑澤山に篭りたるを幸吉、飽くまで飲み食ひてまた飛去らんとするに地より立ちあがりがたき故、羽翼を収めて歩して歸りける、後に市井の聽に呼び出され、人のせぬことをするは娛樂と雖も一罪なりとて兩翼を取上げ、その住める巷を追放せられて他巷に移しかへられける、一時の笑話のみなりしかど珍しきことなればしるす、寛政の前のことなり」と記されてある。寛政元年は西暦一七八九年であり、前記セーヌ河に墜落したブラックヴイル伯爵の逸話と殆んど近い時代の出來事であつたらう。

今一人は、沖繩縣中頭郡獲得久村の「飛び安里」なる人の發明で、時代は判然とせぬが五代目の現の子孫から推察して一百年は前と見てよい。彼の考案した鼓翼飛行機は彈力の強い弓を水平に支柱に取附け、弓上には鳥翼を模倣した兩翼を設け弓の弦は兩足に結び身體の伸縮によつて鼓翼を行ふ裝置であつたと言はれる。彼は或る暴風の日、同郡泡瀬村の斷崖から風向に向つて**翼をはばたいて飛んだと言ひ傳へられてゐ**る。その板に描かれた設計圖がツイ近頃まで保存されてゐたといふが、その後住家改築の際紛失してゐる。

この二人の飛行を二つながら信ずることは出來ないにしても、我が國における貴重な文獻と言ひ得るであらう。

「人が鼓翼の方法で飛行するのには腕の力よりも脚部の力を有効に利用することによつてはじめて成功し得るだらう」とダ・ヴインチも彼の經驗から述べてゐるが、巧妙な鳥類の飛行を模倣するのには餘りに人間の筋肉の運動は力量不足であり物理學、機械學の發達した現代においてすらそれは不可能なことゝなつてゐる。

然し世の中には傳統的にこの鼓翼飛行の理想を斷念することが出來ないのか、その發明に沒頭した人間も幾多ある。けれどもその殆んどすべてが地上を帆走する程度で離陸し、飛び得たと言ひ得るものはなく、常に自身の安定を失つて破壞し負傷するなどの空しい結果に終つてゐる。

かやうに、實に永い、そして多くの空中飛行**發明家が現れたにも拘らず人類の鼓翼飛行は未**だに實現したいが、かうした古代からの一貫した鼓翼式人類飛行の思想があつた時、二つの異つた空中飛行の發明が行はれた。その一つは凧である。古代人が現代の物理學に合致した平面艦を傾けて、それが風壓を受ければ上昇し、空中に安定することに着眼し、今日の凧を創造したことは正に偉大にして、しかも興味あることと言はねばならない。眞僞の程はともかく石川五右衞門は凧に搭乘して名古屋城、金の鯱ほこを盜まうとしたと傳へられてゐる。これがうそであつたにせよ、當時人間が乘れる位の凧はあつたと言はれてゐる。又德川時代には敵に包圍された城から拔け出す道具として城凧といはれるものを秘密に製作してゐたと言はれてもゐる。とにかく凧に人間が乘つて空中を飛行したといふ話は羽ばたいて空中を飛行したといふ話よりも信用のおけることであり、電信の發明者として有名なグラハム・ベルも多面式凧を飛ばして飛行の實驗を行つてゐる。

今一つは滑翔機の出現であつた。一八六〇年頃フランスの船長、ル・ブリはあほう鳥が翼を**はばたかず水面すれ／＼に滑走するのを見て、**

風向に逆つて翼に風壓を受ければ人間も飛べるに違ひないと、あほう鳥を捕獲して研究、つひに滑翔機を發案した。同じ鳥類飛行の模倣であつたにせよ、實にル・ブリの著想は偶然であつたかも知れぬが、今日航空力學に合致してゐた。そして彼は十メートル位の高さの滑翔に成功した。

それから二十年後の一八七〇年頃盟邦ドイツのオツトウ・リリエンタールが純學理的に曲面翼の研究に著手、その實驗の結果と鳥翼の運動に對する私見をまとめ「飛行の基礎としての鳥類の飛翔」を著し、一八八九年に公刊されてゐる。そして彼は一八九一年頃から製作に著手、最初のものは重量六十封の單葉式であつたのを後に複葉式に改め、盛んに實驗飛行を行ひ相當の高度にまで達するやうになつてゐたが、一八九六年八月九日惡氣流に災ひされ八十米の高度から四十八歳を最後として惜しくも墜死した。

彼は死に至るまで實に二千回以上の滑翔實驗を行つてゐた。今日彼の墜死の地、グロッス・リヒテルの野にはレオナルド・ダ・ヴインチの詩「彼がはじめての飛行はほめられることゝおそろしかつたことで胸が一杯になり、丘の上の怪鳥であると迎へられた。おゝ、彼があらたに生れたこの地は永遠の名譽である」と刻まれたピラミッドの碑が建てられてゐる。ダ・ヴインチは誰のためにこの詩を作つたか知らないが或ひは後世現れるであらう鳥人のために謳つたのかも知れない。

その後、研究の進歩と共に貴い征空の犧牲者の數も幾多に上つた。しかも彼等の開拓により漸く人類の飛行の黎明がほのぼのと明けそめて來たのであつた。

學習社文庫
青少年向讀物の最高峰
大宮昇著　新刊　石炭を生む山　A5判・二〇八頁　價六五錢・送十二錢
文部省推薦　炭山の勤勞の汗の尊さを描いた藝術と科學握手の新創作讀本。
松田伊之介著　新刊　二宮金次郎　A5判・二八〇頁　價六五錢・送十二錢
日本出版文化協會推薦　新進劇作家が沈潜多年、新たに示す定本二宮傳。
好評滔々必讀の書
鐵甚平著　三韓昔がたり　A5判・二五六頁　價六五錢・送十二錢
安里延著　南洋諸島の話　A5判・二一四頁　價六五錢・送十二錢
湧原貞雄著　日本武士道　A5判・二六六頁　價六五錢・送十二錢
村崎毅著　神國魂吉田松陰　A5判・二五八頁　價六五錢・送十二錢
高木卓著　遣唐船ものがたり　價六五錢・送十二錢
文部省・日本出版文化協會推薦　塚原健二郎著　佐久間象山の生涯　價六五錢・送十二錢
丸川久俊著　科學七つの海　價六五錢・送十二錢
三苫正雄著　模型工作　航空機の發明　價六五錢・送十二錢
土手[illegible]雄著　火の科學　價六五錢・送十二錢
大木直太郎著　北海の鷹　價六五錢・送十二錢
東京市神田區神保町一ノ一（呈目錄）振替東京七三八七七番
學習社

エミグラントの年中行事

大野澤緑郎

中央寺院がハルピンの都心にあるやうに、宗教は白系露人の精神生活の中心であり、糧であり、祖國のない彼等にとつては、今はそれ以上の絶對的なものでさへあるかのやうにみえる。白系露人の年中行事が、何れも彼等の深い信仰の上に行はれるのはむべなるかな。

このところが日本のそれと多少異つて、ロシヤ人の年中行事と言へば何れも宗教上のお祭りならざるものはない。しかし、日本でもさうであるやうに、それら年中行事の一つ一つが几帳面に執り行はれてゐるかといふと必ずしもさうではない。復活祭に次ぐ大祭は合計十二あるのだが、僕等が不斷氣附いてゐるものと言へば、パスハ以外は、降誕祭・洗禮祭・イエルサレム入城記念日・三位一體祭くらゐのものである。

ハルピンに始めておりたつた人が、たくさんの寺院やロシヤ人をみて直感するあの宗教的エキゾチツクは、彼等の祭日を見てゆき、獨得な、いかにも農業國らしい、そしてロシヤの王侯や自然や國民性と深く結びついた、スラヴ民族固有の年中行事であることを發見することによつて裏附けされるであらう。以下順を追つて簡單に書いてみよう。

※基督降誕祭　所謂クリスマスである。ロシヤ人の年中行事は總て舊暦によるので、正月の七日が、この日に當る。主として子供のお祭りでパスハに次ぐ大祭とされてゐる。

白系露人のお祭りで特記すべきことは、その前に所謂「精進」が實行されるお祭りのあることで、降誕祭もこの例に洩れない。もつともパスハの精進に比べたら物の數ではないが、まづ前日の六日は朝から一切食物を攝らず、夕闇がたれこめ一番星が輝く頃始めて甘い麥粥を食べる。それから教會へ出かけるのである。僕等にも何かなし懷しいあのクリスマス、ツリーは、若樅や落葉松のヨールカでヨールカは綿の雪や銀紙の星やチヨコレートの松の實やおもちややお菓子などで飾られる。

六日の夜、子供達の枕許には、サシタクロース、ロシヤ語でヂエード・マローズが靴下の中に贈物を入れて置いてゆくことになつてゐる。ヂエード・マローズについてはロシヤ人の獨得の解釋があるさうである。それはともかく七日の晩になるとヨールカに灯が入れられ大人も子供もその下に集つて樂しい時を過すのである。そしてこの祭日は三日つゞく。

※洗禮祭　これは毎年一月十九日松花江の氷上で行はれる。この祭禮は復活祭よりむしろ有名な位知れ渡つてゐる。名稱は洗禮祭であるが、十字架を切り拔いたあとの溝に裸で飛びこむのは、熱烈な信仰心のほとばしりからで、あの時洗禮を受けるわけではない。丁度日本の水垢離みたいなものである。大僧正が自分の持つてゐる十字架で氷を突き、そこから湧いた水を聖水と稱して瓶につめて持ちかへり、病氣のとき患部をしめしてなほしたりするのは日蓮信者などのする事と共通するところがあつて面白い。

ソ聯では宗教を否定してゐるから、あゝいふ寒中で行はれる洗禮祭は今はたしかに世界唯一のものであらう。それにしても之は何と冷たくも嚴かなそしてエミグラントらしいヨルダンの流れであらうか。

今年は丁度松竹の撮影隊が來てゐて、教會から行列がくり出し、キタイスカヤをねり歩いて、氷上で式が終へる迄をクランクした。例の「迎春歌」といふ映畫のロケーションだつたのだが、ハルピンは始めての木暮實千代孃は餘程寒さがこたへたらしく、クランク合間の一休みごとに防寒靴をばたばたさせるし李香蘭孃といへば、之また普通のハイヒールなので、よくすべるといふ始末。撮影は恐らくさうして三時間以上もつゞいただらうから、氷上のロケーションなどといふものは、はたからみてゐても、裸で零下三十度の寒中水の中へとび込む以上の難行苦行らしい。お蔭で例年なら式が終へたら散つてゆく見物の群衆も、去りやらずこの珍らしいロケーションを眺めてゐた。

※基督奉獻祭　二月十五日、舊暦で二月三日。聖母マリアが生後四十日の基督を神殿につれてゆき、猶太の法に依つて神に供物を捧げ、シメオンが基督をみて救世主なりと言つた、その日に當る。

※聖母受胎告知祭　この祭日は舊暦三月二十五日、新暦で四月七日。この祭日迄に謝肉祭週の週間があるが、このマースレンニツアは、基督教以前の原始的太陽祭が、のちに基督教と結びついたもので、パスハ前の八週間目の一週間、つまりパスハの精進が始まる前の一週間のことである。

この週間の最後の日曜日は「仲直りの日曜」と稱して、ふだんどんなにいがみ合つてゐる連中も、この日は對手を許して仲直りするさうである。ロシヤ人はこの祭日中ブリンヌイといふ餅を作つて喰べる。以前はこの日にマルスなどへ入ると、給仕の女がブリンヌイを喰はないかときいたものである。この週間は永いパスハの精進の前なので、ロシヤ人は肉類などの榮養分をたらふく喰べて榮養をとり、精進にそなへておく。

さて聖母受胎告知祭であるが、之は字の如く「處女マリア、天使長ガブリエルに依り、神の子基督が宿れる事を告知」された日である。この日は彼等には母の日でもあつて、女性は愼んで一日を過すことになつてゐる。けだし「小鳥も巣を營まず、處女は下げ髪を編まず」といふあの有名な節あたりから來てゐるのであらう。この日、市内各寺院では敬虔な祈禱式が行はれ、特に松花江岸にあるヴラゴウエシチエスキー寺院は、その名の由來をこの祭事にとつてゐるので、最も盛儀を極めるのである。

※基督イエルサレム入城記念日 復活祭直前の日曜日。一名猫柳祭ともいはれてる。それは、基督が驢馬に乘つて受難の地イエルサレムに入つた時、イエルサレムの群衆が、自分の著物を脱いで道に敷き、棕櫚の枝を伐りとつて道を覆ひ、基督を迎へた故實によるのであるが、ロシヤには棕櫚が無つたゝめ、猫柳を用ふるやうになつたさうである。ロシヤ人達は猫柳（ウエルバ）を祭日の前夜教會へ持つてゆき、祈りを終へて家に持ち歸り、聖像の傍らに供へておく。

この祭りが近附き、もはや春めいた甃の上を、金髪にいつぱいの陽光をうけて、猫柳をかゝへた娘達が歩いてゆく風景は、いかにも初春の哈爾濱らしく、僕等でさへもう春だとほつとするやうな、浮々した喜びを覺えるのである。例年なら、このウエルバのお祭りの前後に、松花江の流氷が始まる。

※復活祭 僕はこの街に永年住んでゐるくせに中々パスハを見る機會がなかつた。去年は四月二十日だつたが、十九日の晩は生憎、大粒の雯がびた／＼降つてゐて、行かうか行くまいかと迷つたが結局十一時頃起き出して中央寺院に行つた。院内に東寶の撮影班がカメラの上に傘をさして待機してゐ、その側に哈響のO氏が立つて居られた。僕はオーバーの襟に顔を埋めてO氏と竝んでみてゐた。

教會一周まではまだ時間があるので、僕はO氏と世間話などをしてゐたが、眼の前には雯の中に教會の塔が黒くそびえ、その上に電飾の十字架が夜目にも鮮かに浮き出てゐて、あちこちの扉からは、はみ出た信徒の群と、内部の燈明の灯がみえるばかり、祈禱がどんな風に行はれてゐるのかさつぱり判らない。

やがて正十二時になると、大僧正が十字架を捧げてあらはれた。信徒は大僧正の後に從つて行列を作り、愈々教會一周が始つた。

待機してゐた東寶のカメラマンは、一せいに晝をあざむくフラッシュをたき始め、十字架や大僧正の金ピカや、敬虔につき從ふ群衆を降りつのる雯の中に映し出した。本當に嚴肅な、印象的な光景である。教會を一周して入口に戻ると扉が閉つてゐる。大僧正は扉に近づき「基督は甦り給へり」と叫ぶ。すると群衆はそれにつゞいて一齊に「實に實に甦り給へり」と唱和する。これを合圖に扉は開かれ灯りがさつと信徒達を照らし出した。すなはちこの瞬間基督は復活したのである。鐘が高らかに鳴り出し、群衆は歡喜の絶頂に達して聖歌を合唱する。まことにそれは歡喜そのものといつた感じであるが、この信徒たちの歡喜ぶりについては、復活祭前七週間の精進（ポスト）を語る必要がある。熱心な信者の

（エミグラントの年中行事）

家では、この七週間といふもの、一切の肉類や魚類、バター、牛乳及びそれに類した一切の乳製品を攝らず、精進料理だけで過すのである。殊に、復活祭直前の、所謂「受難の週間」には、何處の家庭でもこの精進を行ふ。

ロシヤ人の家の聖像の前に、年中灯つてゐる「消えざる灯」は、この受難の週間の木曜日の晩に教會から持ちかへつた灯なのであるが、この晩は教會で祈禱式が擧げられ、基督受難の經過そのまゝ、最後の晩餐、ゲッセマネの園の祈り、イスカリオテのユダの裏切り基督の捕縛……の順序で、十二節が讀みあげられる。信徒達は、持つていつた蠟燭を教會のなかの、基督受難の十字架の前に燃えてゐる蠟燭に近附け、その灯をうつして持ちかへるのである。この灯は基督の受難に對する、信徒達の變らぬ信仰心を象徴してゐ、年中絶やされぬ大切な灯なのである。

かういふ永い期間の精進、基督の受難になぞらへた自らの精進のあとの復活祭であるから、宗教の勝利、萬物甦生の喜びにひたるのはけだし當然なことであらう。

さて話を前に戻して、教會での行事を終へた彼等が家に歸ると、食卓には主婦の丹精こめたパスハの御馳走を竝べられて待つてゐる。パスハの御料理には缺くべからざるものがあるのだが、それはクリチー、パスハ、卵の三つである。クリチーといふのは圓頭形のカステラパンで、小麥・パン種・卵・バター等でつくられる。パスハはクリチーのそへ物で、トワローグ・バター・卵などで作られる。卵は我々もよく知つてゐる赤、青、黄などに染められた茹卵のことである。

クリチーは日本のお正月餅に匹敵するもので、パスハとは切つても切れない關係がある。それといふのも、パン種のやうに、人間の魂の中で醱酵するといふところから來てゐる。ソ聯ではこの日の近くにメーデーがあるのだが、宗教を否定されてゐるので、ひそかにメーデーの御馳走をしてこのクリチーをつくり、むかしをしのぶ者があるさうである。卵は復活の喜びを象徴してゐる。

この他御馳走は山の如く、ソーセージ・ハム・鶏・鵞鳥・家鴨などの肉料理・燻製の魚・野菜料理・菓子・果物、といつた夥しい料理がテーブルにはみ出る。之らに飲み物のウオツカや葡萄酒が加はつてじやん／＼攻めたてられるのだから、胃の腑の小さい日本人のお客はいくら喰ひしん坊でも參つてしまふ。

何時の場合でもさうだが、ロシヤ人はこつちの事なぞ考へてくれず、無暗と飲ませたり食はせたりするから大弱りでる。降誕祭が子供の祭りなら復活祭は青年のお祭りといふところ。

かうして祝祭はひとを訪問したり訪問されたりして三日間つゞく。例年の復活祭は、陽差しも暖かく全く春來るの感が深い。復活祭は舊暦に依る春の滿月から數へて初めての日曜日と定められてあるので、パスハの日は毎年一定せず、したがつてパスハに關聯をもつ他のお祭り日も異つて來るわけである。

去年は、川端康成さんがこのお祭りを過ぎてから十日目ぐらゐに來られたのだが、お宿がニューハルピンだつたので、車が驛からホテルに向ふ途中、サボールがみえ出すと、パスハを見たかつたのだがと殘念さうに言はれ

た川端さんは、かういふ事を向ふで讀んで來られたのだらうと思ふ。あとで哈爾賓のO氏に頼んで、ロシヤ人の家庭に小半日を過されたのであるが、川端さんの感想は、きつと彼等の宗教的な雰圍氣が、その一部を占めてゐるに相違ない。

復活祭に附隨して、日本の盂蘭盆に似たものに、ラードニッツア第一火曜日がある。之は復活祭次週の火曜日に行はれる。この日信徒は皆墓地に出かけ、お墓を清掃して、菫・パンジイ・鈴蘭・アラセイトウなどの春の花を飾り、パスハの御馳走を供へて死者の靈を慰めるのである。

※基督昇天祭　基督復活後四十日目の祭日この日基督はエレオン山上から、弟子達の眼の前で昇天したのである。

※三位一體祭　復活後五十日目。この日使徒達の上に聖靈天降り、神祕の力を授けた。ハルピンの人なら大抵知つてゐる、松花江のボートに青草が敷いてある日。主婦達はこの日、屋内をきれいにし、野の青草を床の上にしき、白樺・ポプラの小枝などで聖像や家具を飾る。芳しい青草の香りが室内に充ち、ウェバ祭りなどと共に、いかにもロシヤ人らしい行事である。去年のこの日、僕等はヨットクラブでI氏の隨筆集出版記念會をやつてゐたが、もはや強い陽の光は河一杯に照り映え、そよ風はボートの上の青草の香りを運んで來るやうで、松花江に夏來るの感が深かつた。

以上の他大祭としては次の樣なのがある。

※基督顯現祭（舊八月六日）基督受難の日近き頃、ファオル山上にモーゼ及イリアと會し、受難のことにつき談合す。ロシヤではこの日から果物を食べていゝとされ、つまりそれはこの祭が秋のお祭であることを意味する。

※聖母昇天祭（舊八月十五日）この日聖母マリア死去。

※聖母マリア降誕祭（舊九月八日）

※聖十字架祭（舊九月十四日）基督受難三百年後のこの日、ローマのコンスタンチン大王の母エレーナに依つて、基督が磔された十字架が發掘された。

※聖母マリア宮入記念日（舊十一月二十四日）聖母マリアが三歳のとき、兩親が彼女を神殿に託して神に供へしめた日。

これらの祭日以外には以前帝政時代に、皇帝誕生日があり、ニコライ二世の誕生日は五月六日であつた。同帝の死去は七月十八日で今でも之らの日に教會へお祈りにゆく者もあるといふ。又舊二月十九日は、アレクサンドル二世が、一八六一年に農奴を開放した日で帝政時代はやはり教會へ行つてお祈りしたものださうである。農夫はこの日始めて牧舍をはなれるのである。

野に放つといはれる。

之も今は忘られた行事らしいが、軍人のお祭りのゲオルギイ祭や、シベリヤの聖人、イノケンチ・シベリスキーをまつるお祭などがあつたさうである。ゲオルギー祭の方は、**從軍して勳章を頂いた人だけが行つたものらしく**、十二月に行はれたが、この日はロシヤの武器の庇護者ゲオルギーの命名日なのである。また、イノケンチ・シベリスキーのお祭りは、このシベリヤの聖人の偉德を慕ふシベリヤ人が盛大にやつたらしく、舊十一月二十六日がその祭日に當つた。

農業の方では、舊七月二十日のイリアの日などがある。この日はイリアが天を車に乘つて渡つた日で、農夫はこの日必ず夕立があると信じ、又大抵實際に降るといふから不思議である。農夫たちは空を眺め、夕立がぼつ〳〵やつてくると、そうらイリアが怒り出した。と言ふさうである。この日は農家でお祭りをする。日本の秋祭みたいなものだらう。農夫たちはこの日から、永い冬に備へるための、干草などを始めるさうである。

又基督の弟子たる二人の使徒「ペテロ及パウロの日」から、農家では穀物の收穫を始めるといふことである。最後に一寸變つた年中行事を御紹介しよう。

※舊モスクワ大學記念日（舊一月十二日）一七七五年一月十二日、シュヴロフ伯爵は、母のタチヤーナの誕生日であるこの日、かねて時の皇帝エリザベータ女王（ペートル大帝の娘）に願ひ出てゐたモスクワ大學創設の許可を得た。すなはちシュヴロフ伯爵こそはモスクワ大學の創設者なのである。伯爵の母タチヤーナの名は、以來ロシヤでは、學問、文化の庇護者たる宗教的な象徵名となつたのである。かうした例はさきに述べたゲオルギー祭のゲオルギーにしてもさうであつて、ゲオルギーは神樣ではない。また夕立を降らすといふイリアも、ロシヤの傳說的勇士であつて神樣ではない。

さてこの舊モスクワ大學記念日（タチャーナ・デーニ）には、帝政時代には各學校ともこの日全然講義がなく、學生たちはこの日ばかりは公然とレストランに入つて醉つぱらふことが出來たさうである。さしづめ日本なら一高の寮祭といつたところか。ハルピンでは今も北滿學院あたりがこのイミテーションみたいなものをやつてゐるらしいが詳らかではない。かう書いてくると、ロシヤの年中行事が宗教的なものであり、それがロシヤ人獨得の解釋の上に行はれてゐるものが多く、それは又農業國としてのロシヤの行事らしく、例へばパスハが春の祭、トロイツッサが夏祭、ペレプラジエーニエが秋の祭り、といつた工合に、天候や自然と密接な關聯をもつてゐるのである。

ふるいロシヤの年中行事は、かくして今はたゞエミグラントのみによつて、大方はくりかへされる。さうして年と共に、かうした彼等の年中行事が、パスハや洗禮祭などはともかく、餘り眼立たなくなつてゆくやうな印象を與へるのは、この街にすむエミグラントが減つてゆくことを物語るのか、或ひはまた僕等の、彼等ロシヤ人の年中行事に對する、新鮮な好奇心のごときものが、失はれつゝあるためなのであらうか。(完)

草莽唱

秋原勝二

一

人間が住む所は、都會だけである——さう、人は、いつから信じこむやうになつたのであらう。田舍は、都會の爲にのみ存在するといふことを、抑々いつの頃から、疑はなくなつたのだ。

田舍には、大した高等な人間はゐないものだ。勤務の都合で田舍廻りをさせられると、すつかりボケてしまつて困るんだ、そんな氣持が、まるで當然のことのやうに、人間の胸に巢喰つたのは、一體、いつであらう。運のいゝ人間や、腕の立つ人物は、たとひ、田舍に住みたいといつたつて、世の中が住まはしておかないものだ、などゝ、平氣で、信じこむやうに、お互が、なまくらになつたのは、さて、どの位、昔のことなんだらうか。

眞木は、實際吃驚した。

生れたときから、都市に育ち、幼いころ、滿洲に來た眞木は、殆ど田舍を知らない。滿洲の田舍のことは更々であつた。

滿洲には、田舍がないんだ、——眞木は、うつかりすると、さう、信じこんでゐたのかも知れない。とんでもないことである。

彼自身の氣持では、これは、自分獨りのことではない、と思つてゐる。滿洲の都會に多く住む日本人は、みな滿洲には田舍はない、と思ひこんでゐやしないか。證據があるのだ。あなたも、君も、おまへも、滿洲の田舍に、自分の血族を持つてはゐない。

それにしても、これほど、自分が、無知であるとは、思はなかつた。行つてみて、吃驚した。

眞木の住む、吉林自體が、都會か田舍か、議論の餘地はありさうだが、彼は近ごろ、それよりもつと田舍の方を、歩く仕事が多くなつた。

今度も、鐵道の施設調査で、山や、野や、濕地の中を、毎日のこと、線路に沿つて歩いたのである。そんな所では、用意なしには、到る所で宿はとれない。近い所は、吉林から通ひ、遠い處は、比較的便利の多い、田舍街に宿を求めて、そこから通ふといふやうになつた。

久々に都市を離れ、さうした所に呼吸をすると、——きつと、空の廣さ、草の深さ、密林の厚さ、それから、今から書かうとする事柄に、心洗はれたのであらう、不思議と、都市のことが、顧みられたのである。

驚いたのは、こんな所と思ふ地域に、人が盛んに住んでゐたことである、線路に沿つて、いや、線路からずつと離れた所にも、人は住んでゐた。

田舍は生きてゐる。——眞木は吃驚した。土地と人に、未だに血のつながりを持たない日系だけの、これは、救ひ難い錯覺であらうか、さう思ふと、息がつまりさうであつた。

現實に、そんな所に住んでゐるのは、滿系の人だけではなかつた。日系の人も、それ〴〵の星の下に、滿洲のこんな山の中や、河のふちに生きてゐる。驚きは、そこで一層、眞木をゆさぶる。——都會に住み、省みることの淺い心よ、愧ぢよ。

何といつても、仕事をもつて、具さに、大地を歩いたおかげだ、と眞木は思ふ。汽車にのつては、既に何度通つた地域か知れない。汽車の窓に、行きずりには、幾度みた部落らであつたか。

眞木は、心弱く、ぶきつちよな、無類といつてよい、心配

性の男である。就中、滿洲の日本人に對する懸念は、大層なもので、彼の胸は、四六時中、この憂ひで充たされ、消えることがない、といつてよかつた。それは、彼の性格と、幼いころから滿洲に育つて來たといふ彼の小さな歷史に負ふもので、彼は、自分の生きる道を思ふことは、滿洲の日本人といふものゝ、眞の生き方を思ふ以外ではない、としか、考へつかない。滿洲の日本人、その眞の生き方を思ふことは、無上の祖國、日本を思ふことゝ、少しも渝らないといふ自覺は、それを一層勵ましてゐるのである。

思ふといふことが、若しも、體現することゝは別々だといふならば、思ひ、且、體現することこそ、彼の希ひの焦點で、それには、一方で、滿系の人たちのことを、どうしても考へないでは居られない。

試みに、彼の手帳の一節をのぞいて、その資料としてみやう。

×月×日

今、私らが、滿洲のことを考へると、どうしても、滿系の人たちのこと、を考へずには居られない。滿系の人たちのことを考へると、どうしても一樣に突き當る或るものがある。それは、誰が考へてもさうであり、誰が考へまいとしても、依然としてさうなのだ。そこから、人によつて、はじめて、それ〳〵に考へが分れる。考へてはいけない、と或る者はいひ、考へても無駄だと或る人は思ひ、考へる奴は、底なしのお人善しよ、といはれる。みんな、だん〳〵氣づかぬふりをするやうになつた。

滿洲のことを、眞に思はぬ人たちは、滿洲の日系らは、考へるとなると、誰も彼も、同じことしか考へない。馬鹿の一つおぼえで、たつた一つの寶物を奪ひ合ふやうに、同じ命題に、いつまでも、よつてたかつてゐるやうに、思ふか知れないが、この寶物打ちこぼたねば、一歩と門に入り難く、この哀しさは、氣づかずいふのであらう。陣地突破を命ぜられた兵士、陣地突破に死魂を盡し、突破は困難を極め、突破々々が繰り返される。そのさまに人は、世迷ひ言が出て來るか。それとこれとは違ふ、などゝいふのは間違ひである。違ふとすれば、兵士の死魂に至らざること遠いといふ、その點だけ。命題の重大さに變りなく、千萬人、一億萬人、束になつて考へたつて、ちつとも多すぎやしない。一億の人、聲をそろへ、となへても、ひと吹きにこれは片づかない。ひと吹きに片づかぬのが、命題のたゞならなさ。——これも長期戰だ。考へつけて、はじめてこれに氣づくと、ホツとする。要するに直ぐには片づかない事だ、あまり無やみと考へ惱むな。その結果、何も考へなくなる。誰もがそんな風になつた。それがいけない。

みんな、仲よくしたいのだ。所が、どうしたら仲よくなれるか、それが分らない。苦しくなつて、いろ〳〵そこから拔け道を考へだす。譯のわからない所へ行つてしまひ、お互がボンヤリしてゐる。人はさま〴〵。考へ方、姿勢、多少違ふのに文句をいふのではない。文句をいひたいのは、心配で心配でならぬのは、そこで情熱が杜絕えることだ。それでは、解決どころか、再び混迷の中に叩きこまれ、千里霧中、何がどうなるのか分らなくなつて、しまひには手がつけられず、子孫に惡い禍根を殘す。情熱は何處かに置き忘られ、打つちやつておけば、その中解決されるかのやうに誤られ、われら平民は、共に惡い安心の中にゐる……。

日本人の本性を、深く信ずる人は、心配は要らぬ、日本人の自覺に生きよ、さう神經的に騷ぎたてるな、といつてくれるかも知れぬが、どうか、その理由で、われら人民の傍觀的姿勢を見逃さぬやうに。日系にせよ、滿系にせよ、最も難すべきは、傍觀者であることだ。

つまり、彼は、滿系の人たちのことを考へると、拔き難い障壁にぶちあたつたやうな焦慮に、ふだんから、かなり悶えてゐるといふことが分る。滿系の人と一緒に、職を奉ずる彼は、それがしこりのやうに胸に殘つてゐる。それを思ふと、焦慮は沸々として、時には、靜めるのに暫く苦しむことさへあるほどだ。

滿系と日系が、同じ國にゐて、同じ町に住み、同じ職場に働いて、心は、別々のことを想つてゐる、といふやうなことが、いつまでもあつてはたまらない。眞木は、落ちつかない日系の人民は、まだ十分、眞に正直でないといふこと、滿系の人民は、心を閉ざしがちで、職場だけでは、いゝやうに、その日暮しに働いて、あとは全く、別な世界に生きてゐる。一人や二人の日系が、胸を裂いて近寄つても、中々直ぐには信じない。眞木自身、或ひはこんなことは、自分の環境だけのものかも知れぬ、などゝ考へてもゐるのだが、これにはほとほと惱みぬいた。どちらがよい、どちらがわるいとは考へない。そんな事實がある、といふことを確實に悟つてゐるだけだ。神聖の日本の心に誠に申し譯けが立たない、眞劍に彼は思つてゐる。ちつとして居られない氣持ちになることさ

へある。

かうした男の心に觸れ、ゆさぶつた、行く先々の見聞を、出來るだけ、簡單に書いて行かうと思ふ。彼が、それを非常に貴重と考へてゐることはいふまでもないが、それは、眞木のやうな人間だからのことであつて、果して、誰人にも、その共感をかち得るかとなると疑問なきを得ない。たゞ、彼がそんな人間であること、今に、それを貴重と信じてゐること、それが、全くの事實であることなどだけは、いく度でも念を押せる。

二

最初、眞木は、或る男に心ひかれたのであつた。

老爺嶺の、平らな密林の巓を、まだ遠くに望む――小さな村に住んでゐた。眞木たちの仕事を、默々と手傳ひ、默々と去つた朴實の男で、眞木は、はじめ、滿洲に蔓つた、日系の風采に對する、間違つた概念にたぶらかされ、その風態から、ひとめで、日本人のしるしを、見つけえなかつた男である。無口で、眉がつり、視線のはるかなものを見透すやうに据つた淺黒い顔は、筋骨の逞しさと共に、まるでさむらひのやうで、滿系には、めつたにない顔だと思はれた。言葉や擧措で、日系であることを、悟つたのである。

男は一見、年齢の判斷も許さない容貌だつた。偶然、その妻君の顔をみた。その若さから、はじめて、男の若さに氣がついた。こんな若い人たちが、土から生えぬくやうに、そこに生きてゐたのに、眞木は發止と胸をつかれた。

それだけのことであつた。滿系ばかりの村に、男は今も傍目もふらず、妻を從へ、線路を守つて、潛々と、生きてゐることであらう。

三

何日か、密林の山の間を縫ひ通り、「老爺嶺」といふ名の村に出た。眞木は、その日の仕事を終へ、線路の傍で憩んでゐると、―その邊りは、いくつも隧道をくゞつて來た鐵道線路が未だ平地に降りられなくて、山々の腹を削り、辛抱強く、幾曲りにも曲つて行く地帶で、その村も、大きな山の斜面の、驛舍に身を寄せ合ふやうな、二、三十戸の草葺の集りで、村の上手は、密林の名殘りが、いくつにも縁どつた、かなり廣い開墾地、その上は、傾斜が益々急となり、頂上はすつかり密林に包まれた所であつた。線路のある帶廣の平地から、上手の山の斜面を眺めると、恰も、舞臺でも見上げるやうな恰好になる。

眞木はそのとき、さうした眼近の斜面に、女の人がゐるのを發見した。左手の綠と樺色に彩られた、丸太造りの驛舍からは、三、四十米はなれた所で、その少し上手は、叢林になり、そのまた上手は、前記の開墾地で、叢林は右手にずつと連り、やがて、密林地帶に續いてゐて、邊には他には全く人影がなかつた。

姉樣かぶりのその人は、小さな畑で、野菜の手入れに餘念がなかつた。若い女であつた爲か、それは綠の中に花のやうに眺められ、妻君か、娘かは知らないが、こんな山奥に、さうした人が安居してゐるといふ、その事實が、眞木には無性に快かつた。

すると、その人が、急に立ち上つた。それがたゞではない。脅えたやうに、上手の叢林を窺ひながら、二歩、三歩、浮足立つて、やがて小走りに、翩る姉樣かぶりをとりながら、驛舍の柵に馳けこんで行つた。眞木は、離れてみてゐた爲に一體何であるのか、直ぐさま見抜けたが、女の人は柵の内に身をしのばせると、やつとのことで、その正體を見極めにかゝつてゐる。

牛が四、五頭、叢林から、のろ〳〵と、陽射しを浴びて現れた。滿系の牛飼ひは、叢林から出て來ると、鞭をビシリと鳴らし、けものゝやうに、再び法外な聲で吠えたてる。

女の人は笑つてしまつた。眞木らをみて、間が惡さうに、もとの畑に、そろ〳〵戻つて行つた。

ずつと早く、牛の姿を木の間に發見してゐた眞木は、こちらで笑つてみてゐたが、ふと、此處が、警戒心の、そんなにたやすく醒めがちな所であつたのに氣がついて、その人が、其處に、明るく、丈夫に生きてゐるといふことを、とても美

農學博士 石井悌著　小山内龍装幀
南方昆蟲紀行
B6 312頁 函入 價2.60 〒32
實地踏査三ケ年、斯界の權威が語る南方生物紀行の珠玉篇！原色圖寫眞圖版多數

嘉治隆一解説・校訂　長谷部言人 金平亮三 跋
南島巡航記
B6 354頁 上製 價2.50 〒32
明治廿三年南進先覺田口鼎軒博士による我國最初の組織的南洋探検實記圖版多數

ソ領トルキスタン潜入記　Gクリスト著 齋藤・関共譯　價二・〇〇 〒二二
亞細亞大陸横斷記　フェーヴル著 関 丙 合譯　價二・八〇 〒三二
大陸に生きる　望月百合子著　價一・八〇 〒一八

振替東京173011　大和書店　東京・芝濱松町4

しく、嬉しく思つたのであつた。

眞木はそれから、村の裏手の開墾地や、密林の間を少し歩いた。

近くの小さな密林には、山葡萄が、枝から枝にからみつき別の地域には、食ひごろの若芽をつけた櫨の木が無數、刺だらけの細い膚を、廢墟のやうに白く陽に光らせてゐた。地面には毛むじやらの腕のやうな、奇怪な姿の鬼ぜんまいが一杯で、既に開ききつたものもあり、道でない所は、通り抜けなど思ひもよらない。見上げると、頂き近い密林の中から、長方形の奇岩が一つ、空に手をのべるやうに突き出てゐた。

開墾地には、木の根株と、花崗岩の大岩石が澤山埋つてゐた。畝は、それを縫つて、やつとのことで出來てゐる。木の根株が、あちこちで、火を放たれ、初夏の陽射しに、透明な燄をたてながら、音もなく燃えてゐた。

人氣の全くない、開墾地のへりを下つた。密林に沿つて、左に曲ると、不意と、大根株を起してゐる三人の滿農にぶつかつた。恰度、一人は根株に手をかけて一方にひき、あとの二人は、丸太を樹の根にさしこんで、手頃な石を臺にして、一齊におこしてゐる所だつた。親戚同志の者らしい、三十五に二十八、二十二といつたやうな年配で、ひとしきり起してはまた深く差しこむ、といふ工合にたゆみない。

「辛苦な」

暫くみてゐた眞木は、聲をかけた。

「辛苦沒有」

と、笑ひながら、手をやめない。

密林開墾の困苦は、容赦なく、邊りに充ちてゐるのに、彼らは綽々と、朗かであつた。

四

ふと、哀しむべき話を、眞木は、きかねばならなかつた。

噂の人は、今も、內地に、妻子を置いてゐるといふ。

仲居か、何かであつた、女の人と、手をきりたさに、滿洲の、何處か大きな町から、この山奥に、內緒で、仕事をかわらしてもらつたのださうだ。

女の人は直ぐに悟り、こゝまであとを追つて來た。

今は一緒に暮してゐる、といふのである。

眞木は偶然、女の人を、その家の前でみかけた。新建の、土造、草葺の家である。

年增の、都會仕込みの、その人は、陽射しを一杯に浴びながら、襷がけで、せつせと洗ひ張りをしてゐた。

その姿が哀しく、それが又、附近の眺望にまるつきり、そぐはない異樣なものにみえ、人間の儚さ、人間の勁さ、そのすべてがたゆたふてゐるやうで、それきり、みられなかつた。

五

そのあくる日、老爺嶺村から、小姑家に向ふ途中の、線路の際で、死人をみた。

線路が、老爺嶺の山險から、愈々、平地まぢかに弧を描いてかけ下る急勾配の所である。顏はみえない。大きな二つの花崗岩のきはに、靜かに打伏してゐた。

山砂を、そこまで、七、八米ずりとんだあとがある。もう少しとんだら、その花崗岩にみぢんであつたかも知れない。黒い鞋、黒の褲子、同色の大掛兒、すべては著古した中年らしい男であつた。

とんでもない所の、灌木の枝に、赤い風呂敷包が、ひつかかつてゐた。これがかりが、生きものゝやうに、あかあかと息づいてみえる。

山は知らぬ顏に陽に耀き、風にそよいでゐた。しかし、どこかゝら、切々と千萬言を語り傳へて來るやうでもあつた。

この男は、誰知らぬ間に、此處に死んだ。それは、誰もが知らない間であつた。それが眞木の胸にしみた。

きつと家族がゐるだらう。その家族は、男が今尙生きて、汽車にゆられてゐると信じてゐるだらう。或ひは數日の間、ひよつとしたら數十日を、そのまゝ信じこんでゐるかもしれない。眞木は、ふと、その空隙に悶えをおぼえた。

發見者は、その附近に働きに來た線路手であつた。眞木らが通りかゝつたときは、報告がとんだあとであつた。今朝方の汽車から顚落したのだらうと眞木らは語り合つた。ほどなく檢屍の人たちが來るであらうが、それまでは、決して觸れてはいけまいと、みんなと話し合つた。だが眞木は、そのときふと、自分が心にいひわけしてゐるのを感じた。衆目は既に骸だとしか認めてゐない。しかし、彼は、檢屍が來てからでは既におそく、たつた今なら、この男は生き返るのではないか、といふ氣がしだした。

「もう駄目だらうか」

眞木はおづ〳〵と叫ぶ。伴れの一人が、

「もう駄目だらう」

と、はつきりいふ。しかし、もう駄目だとは、何をもつていひきれるのか。駄目かも知れない。が、たつた今、手當をしたら、萬が一、生き返るかも知れない。

鈴蘭峠は、老爺嶺山系の末端に、小姑家驛の向ふ側を、塞ぐやうに、盛り立つ山である。

義勇隊訓練所や、滿鐵の苗圃に行くには、この峠越えが最も近い。二つの頂きをつなぐ、僅かな低みを登る小徑が、それであつた。その山は、左手の頂きに、目標か何かのやうに、一本の喬木が立つて居り、麓の邊に灌木が群つてゐる程度で、あとは殆ど草膚であつた。峠を登つた、道の兩側に滿目の鈴蘭畑があるので、その名がある。

この邊から、地形はすつかり、谿けてゐる。鈴蘭峠から見下ろすと、老爺嶺の屋根つゞきの、なだらかな岡々と、その間にはさまれた濕地帶は、晴れた日など、たゞ茫乎と遙かまで起伏して、柔かな敷物に包まれたやうに、綠一色で美しい。所々、田の水が鈍く光り、遠くからはみえないが、一すぢの帶のやうな流れや、沼地などもある地帶だつた。——その果てに、突兀と聳える拉法山、その麓に、次の目標である拉法があつた。

眞木たちは、豫定通り、そこでの仕事を終へ、晝食をすまし、拉法へ向けて、出發準備にかゝつてゐた。

すると、何處かで、歌聲が急に湧いた。一人や二人のものではなく、數十、數百の、遠い唱和で、眞木は思はずかけだ

—だが、さう思つたゞけであつた。どうすればそれが確認出來るのか、彼にもはつきりは分らない。周圍の意見を押しきつて、何かをやつてみる勇氣は起らない。結局、人と同じやうに、それを骸と認め、檢屍があるまで、手をふれてはいけないのだ、といふことを自分にいつてきかせる外はない。……ほんたうは、根本は、觸れるのを忌んで、無難な所に腰をおちつけたのだ。眞木はそれを感じた。それからは、獨り苦りきり、一方ではしきりといひわけしながら、かなり、自信を喪つて、そこを離れた。

少し歩いた。山の腹を一つ廻つた所に、工事場があり、鮮系の工人が、數十名、土崩れの起りやすい軟な土崖を切りとつて、斜めに堅く叩きかためてゐた。一人々々が、陽に灼け脈々として、逞しかつた。……

山の中にはほど近く、こんなに澤山の人間がゐたのに、先刻の男の死は、やはり、知られなかつた。一步離れた人間同志は、そんなにも孤獨になり合ふものか。眞木は、そんなことを考へ考へ、しかし、ほんたうは、もつと自分の本性に關することに苦しみながら、歩いた。

六

してゐた。こんな所で、それは一體、何ものなのか、見極めないでは居られなかつた。

「あ、あそこ、ほれ」

傍から、さういはれた。鈴蘭峠の小徑のあたりは、綠ばかりで眞木には何もみえなかつた。

「あ、分つた」

見當違ひの遠い峠の小徑を、黑い列の一隊が、こちらに向けて下りて來る。歌聲はそこに發し、天に散り擴がつてゐた。

「訓練所の生徒だ、荷物とりだな」

誰かゞ呟く。

眞木も分つた。さつき仕事で調べた貨物ホームに、菰で包んだ行李らしい荷物が堆高く野晒しに積んであつた。そのとき、聞いたのであるが、山向ふの、今迄の隊員は、訓練成つて、ほど近い地域にめでたく入植し、つい一週間ほど前に、新しい隊員が、內地から、そのあとに這入つたばかりであるといふことだつた。

眞木は、嬉しかつた。彼らと、こんな所に行き遇はふとはほんとに想像もしなかつたことだ。一隊が此處に來るまで、何とかそこにゐたいものと思つた。

懸念は要らなかつた。眞木らが、仕事のことで氣をとられてゐる間に、一隊は既に、鈴蘭峠を下りきつて、眞木らが、愈々、拉法に向けて出發しはじめたときには、なだらかな臺地の灌木の間に、忽然と、大きく、その姿は現れてゐた。歌聲は大きく空に散り、多勢の氣配が犇々と迫つて來る。

一隊の中の數名は、太い荷役用の丸太棒や、棕梠繩で編んだ網などをかついでゐた。が、殆どは何も持つてはゐなくて小學校で著古したものらしい、黑や、國防色の服を著たり、中には、ツンツルテンの短い服で、手を振り振り、唱ひながら、やつて來た。十四、五から十七、八の少年達で、頤ひげをのばした、いかめしい姿の、指導員らしい男が引率してゐる。

疊つた空のせゐか、歌聲は空にこもり、烈々さはなかつた。みんな、意氣軒昂といへるほどでもなく、隊伍も整然といふほどではない。

眞木は想ふ。老爺嶺や、その屋根の擴がるこゝの自然が、これら若い心に、どんなに響いてゐることだらう。今は來たばかりである。もしや、さま〴〵なものゝ訪ひが、彼らを惱ましてゐるのではあるまいか。

すると、突然、空にひろがる歌の言葉が、眞木の耳にきゝとれた。

骨を埋づめる覺悟にて
住めば都よ
北の空——

歌聲は、忽ち空に吸はれて行つた。眞木はその一節に深く胸を刺されたのである。

繰り返しきいた。他の部分は耳につかなかつた。彼らの聲がこの歌詞の所に來ると、不思議と生き生き眞木に分る。何の變哲もないこの歌詞が、慰めや、覺悟や、萬感の情を、沸沸と漲らしてゐるのに、眞木は想ひで一杯となり、暫く佇立してゐた。眞木の仲間は、ずつと先に行つてゐたが、今は線路に下り、そこを唱ひながら横斷してゐる少年達に、一々心うばはれ、彼らの立てる砂埃の中に、まるで、香ぐはしの空氣を吸ふやうに、滿足して突つ立つてゐたのである。

七

三年ほど前、拉法には一度、魚釣りに來たことがある。拉法の驛と村は、拉法山に近く、拉法山と、もう一つの小さなこんもりとまるい山の間にあつた。山は二つとも、他の山系とは關りなく、濕地の中に獨立して居り、拉法山は、遙かに

域とみえた。

山の根の、大池の岸は、どれだけの歳月をかけたものか、底知れない深さから、厚い葦や蒲の屑が、積み重つて、形成されたものらしく、行けると思つて踏みこむと、ズブ〳〵と忽ち沈下して、脛まで水に漬つてしまひ、そのまゝ居れば、どこまで這入つて行くか知れない恐怖にかられて逃げだしたほどで、そんな所がその周りには諸所にあつて、氣味わるさに、水際にはたうとう近寄れなかつた。

その大池と、驛との中ほどに、荒れ果てた、土をこね上げた小屋が一つあつた。そこには、眼がくづれたやうに、眼脂を流した母親や、榮養のなさすぎる大勢の子供を、抱へた夫婦が、どうして暮してゐるのか考へつけない恰好で生きてゐた。

池で糸を垂れてゐると、遠くで一發の銃聲が鳴り渡つたりした。どういふ銃聲かは分らぬが、人類の住みつく、最も外れの地域とは、かうした所であらうか、そんな氣がして、今後とも、そこに人間が、深く住みつけるとは、眞木には想像も出來なかつた。

所が今度、拉法に辿りついて、よく〳〵みると、それらがすつかり變つてゐる。拉法の村に近い濕地は殆ど水田と化し

疲勞に
性藥酒
強力
メタボリン錠
結核とビタミンB₁缺乏……その關係は最近頻に注目せられ、結核性疾患がビタミンB₁缺乏素地の上に好發する事は諸大家の認めるところである。
V・B₁の大量投與は結核菌毒素によつて惹起せる疲勞、倦怠感、發熱、盜汗、速脈及び其の他の胃腸障碍を好轉せしめ、全身的狀態を改善せしめ、生体の抵抗力を增強す。
V・B₁含有量
一錠中〇・五㎎
★一〇〇錠 三〇〇錢
滿洲武田藥品株式會社
奉天市大和區春日町

巨大で、枯草膚の急傾斜から忽ち岩壁が峨々ときり立ち、偉容を中空に聳えさせてゐるのに反し、もう一つは、灌木に包まれた、むつくり肩のまるい、ずつと小柄な山であつた。とはいへ、それも比較の問題で、小柄な方でも、人間からみれば、一寸登るのには骨の折れる、それ相應の高さがあつた。

先づ一番目の大池は、その小さな山の足許に、二番目の池は、直ぐその隣、それからずつと飛び飛びに、六つも七つも池は、この大濕地帶の諸所に延び擴がつてゐる。

眞木は、その多くは知らないが、そこでは、鮒と鯰、まれにはライが掛ることもあるさうだ。眞木がそのとき釣つた池は、一番の池にほど近い第二の池であつた。

恰度、風が吹くと、大氣のかなり冷えてゐるのが分る、秋の深いころであつた。枯れた葦が、みるかぎり、地にひれ伏し、白金の無數のすぢを陽に耀かせてゐた。天高く時折雁が鳴き交はし、翼の音さへきこえるほどで、想へば、すさまじい靜寂が、天地の間に充ち滿ちてゐた。

未だ曾て、人間に呼び醒まされたこともないやうに、拉法山は、薄紫に、荒み、眠つた表情で、も一つの灌木ばかりの小さな山は、一面、全く赫ちやけ、空だけが抜けるほどに晴れ、邊はすべて、不逞の風雨の荒れるにまかせた、未開の地

池の周圍はずつとかたまり、拉法や、その近邊には、いつの間にか、澤山な日本の開拓團が住んでゐた。

眞木は、驚き、且、喜んだ。さうして、機會をみて、一番近くの開拓村に一度は行つてみたいと思つた。

或日、調査の方が早くすみ、列車が來るまで數時間のひまが出來た。所在なさに、眞木は仲間と離れ、開拓村の方に出かけた。

眞木は最初こそ、開拓村に出かけて行くのは何となく嬉しかつたが、いざ、となると、いつでも行けるといふ氣がし、また、一體何の用事で出かけて行くのか、と考へつくと、自分の興味を直ぐには信用出來ない氣がしてためらつた。開拓村には別に知人が居る譯ではない。自分は直接開拓に關係ある人間でもない。國民的關心事だ、とはいへ、何か、好奇の心で出かけて行くなら、つまらぬことだ、さう思ふと、何だか、強いて行かなくともよい氣がする。しかし、別の氣持が、やつぱり行きたがつてゐた。滿洲に住みついたつもりの一人として、內地の人がこんなに澤山身近な土地に、自分よりもつと根強く、住みついてくれたのを見ることは、仲間が殖えたやうで、思つただけでも、胸の底が溫まる嬉しさがあつた。見物ではないんだ。開拓村の人たちと、何も特別な話など出來なくたつてよい。開拓村の道を歩いて、その人たちが、生き生きと暮してゐる模樣をみれたら、それだけで、滿足だ。さう思ふと、はつきり心が定まつて、よい機會だと、ほんとに行く氣になつた。

驛から、拉法山に向つて、百米も行かない中に、土塀にかこまれた村の門があつた。眞木は仕事のまゝのいでたちで、門から眞つ直ぐの道を進んだ。開拓村はそこではないらしく兩側に軒を並べた土造の家には、滿系や鮮系の人たちが住んでゐるだけで、たゞ一軒、右側に開拓村附屬の宿泊所があつただけである。村の裏手の方であらうと思ひ、そのまゝ歩いたが、それらしいものが分らぬ中に、突き當りの土塀が近づいて來た。眞木は、當ずつぽうに右手に曲つた。

兩側は、粗朶柵の中に、野菜畑や草葺の家があるだけだつた。家屋には大した特徵もなく、滿系の農家と似てゐるのでどれが拓士の人たちの家か、見當つかない。

その中、干しものが、日本の著物であつたり、厩や物置のつくりが、なんとなく內地風であつたり、また、日本馬などが眼について、漸く、その邊が、開拓團の人達の住む所だと分つた。

眞木はすつかり滿足して、長いその道を歩いた。右手の柵の中は、廣い畑になつてゐて、その中ほどに、倒れた粗朶柵を、バラ〳〵にほどいてゐる女の人がゐた。

髮をながくうしろになびかせ、よく陽灼けした、身體の岩乘な人だつた。開拓團の妻君の一人だらうと、眞木は想像した。

その道もつきた。そこから又、右と左に行けた。左に少し行つた所に、村のうしろに出る門がみえたので、眞木はその方に曲つた。

みると、直ぐ前を、一人の男が、牛車に堆肥を積んで歩いてゐる。眞木は喜んだ。けれど、次の瞬間、その男のあまりの威勢のなさに、內心すつかりおどろいてしまつた。背を圓くして、とぼとぼと行く。三十代の人の、こんな老けた歩き方を、眞木は、みたことがなかつた。

直ぐに追ひついた。男は棒片れで、習慣のやうにぼんやりと、牛の背骨を一つ撲つた。牛は別に急ぎもしない。

「こんちは——」

さういひながら追ひ越した。窺ふやうに、男がのろ〳〵頭を廻すのを眞木は感じた。

「あ」

といつて、後で頭を下げたらしい。何となく間の抜けた感じに、眞木の心は滿たなかつた。

門を出ると、直ぐ前に立ちはだかる、拉法山に向いて、眞つ直ぐ歩いた。

灌漑用の、水のたんまり流れてゐる土橋を渡つて、少し行くと、眞木は振返へらずに居られなかつた。

先刻の男は、右の方に斜めに折れた往還を、先刻のやうな恰好でとぼついてゐる。その道は、恰度土堤の上を歩くやうに、一段と高くなつてゐた。午後の深まつた太陽が、折柄、西南の方、男の向ふから照り映えて、男と牛車の姿は、陽の中に、まるで影繪のやうにクツキリと浮び上つた。

再び拉法山に向つて歩くと、直ぐ、幅十米餘りの川に出た。拉法山と村の間に、こんな川があることは、聞いてはゐたが見たのは始めてだつた。

ひどく減水してゐる。川原の玉石は、水際から數米も、泥にまみれてよごれてゐる。水から離れた所ほど、それが皮のやうに乾割れて、反りかへつてゐるので、川原は美しくなかつた。

眞木は、田畑の水が足らないことを想ひうかべた。この邊でも、今年は水が足らなくて、田植が思ふやうにやれず、水爭ひが頻々であることは、今日きいたばかりである。よ

れた玉石の幅だけ水が減つた。川でさへこんなでは、ひどいだらう。すると、運よく、先刻の男の氣勢のなさが、想ひ返されたが、それとこれとは結びつかなかつた。——それにしては、今渡つた灌漑用の水は、よくもあれだけひけてるものだ。

川はそこで二曲りしてゐた。右側の下手は見通せず、そこだけに瀬音が少し起つてゐる。眞木は、乾割れた泥のついてゐない、玉石の川原をえらび、拉法山を眞つ直ぐ見られるやうに、仰向けに寢た。

不屆きな鳥、郭公が、拉法山のどこかで啼く。樹木のないその山は、急角度の草膚から、直ぐ岩山になつて、嚴然と聳えてゐた。

三年前みたときと、全く趣が違ふのに、眞木は感心した。拔けるやうな空をみて、ずつと以前、知り合ひの或る滿系がしみ〴〵いつたことを、ふいと想ひ出してゐた。——日本の方と、滿人が、ほんとに一德一心なら、心から喜びます。——だけど、滿洲にゐる普通のお國の人、決してさうではありませんね、永く滿洲にゐた人はいゝんです。新しく來た人が、この頃は大變殖えました。——眞木は、それを、今も忘れられない。

拉法山のどこかには、底の知れない洞穴があるさうである。眞木は寢たまんま、どこかに見えるかも知れないと、あちこち、岩肌を眼さぐつたが、見つけだせなかつた。

歸り道は、同じ門から、また開拓村にはいつた。すると、二人の著物を著た、裸足の、五つ六つの姉妹に行き遇つた。開拓村の子だ、一眼で分つた。眞木は一度は行きすぎたが、直ぐに戻つてかくしのキラヤメルを二粒づゝやつた。二粒づゝしかやらないのに、女の子たちは、小さな兩掌をそろへて、何の惑ひもなく受けとつた。

眞木は、不思議な感動に沸き立つた。開拓村の人たちに、やつと、話が出來た氣がした。無性に嬉しくなり、急ぎ足で其處を去つた。

八

あくる日、眞木のこらえてゐた熱は、沸々と出だした。仕事に根がなく、仕事の間、陽蔭に憩むとグツタリした。彼は、今迄堪へてゐたやうに、頻りと氣を奮ひ立たしたが、いやな生汗が出て、瞭に、仕事は無理であることを感じた。

老爺嶺の中頃から、氣溫は不順であつた。非常に暑くなつたかと思ふと、急に天候が變り、冷えはじめる。

老爺嶺を越えた頃までは、それでも何ともなかつたが、間もなく、すつかり風邪をひきこんでゐた。老爺嶺のこちらも氣溫の變化はひどく、彼の風邪は、癒る所か、益々進むらしかつた。

眞木は、仕事の責任だけは果さうと決意してゐた。一人が缺けることも出來ない調査の途中である。

期間を區切つて、少數の人間が、全員交替で出てゐるので他の人に代つてもらふといふ餘裕はない。强いて交替を望むことは、調査が、相當苦しいものだけに、代りに出る人に、氣の毒で、出來なかつた。毎日、吉林に歸ると、直ぐに寢て、頭を冷やす、藥を飲む、濕布をする、發汗をはかる、一夜で追ひ拂はふと、幾夜努めたか知れないが、翌日は、直ぐ、陽に照りつけられるので、成功しなかつた。抑へ、抑へて來たが、たうとう發熱は本格的となつたものであらう。

陽に照らされながら、線路を行くと、一步毎に、響きが、後頭部にコクン〳〵を打ち上つて、頭は何ともいへず、嫌な感じに痛んだ。眞木は、心に念じて、それに堪へた。仕事が蛟河までやつと進んだ翌日、一日中、雨に降りこめられたときは、寒さに、ガク〳〵と震へ、六月だといふのに、ストーブを焚いてもらひ、氣も遠くなりさうになりながら、斷え斷えにすごした。それでも自分の交替日までは、辛うじて持ちこたへ、役目を終つたその夕方から、倒れるやうに寢こんだ。風邪と、疲勞と、輕い日射病だと、眞木は病床に呻吟しながら、獨り診斷した。

休養期間は、六日であつた。四日寢込むと、幸ひかなり恢復出來、あとの二日を事務所に勤めると、再び、他の人と交替に、調査に出かけられた。その間に、調査は、威虎嶺山系に這入りこみ、黃松甸附近まで進んでゐたので、あとはもう一週間ほどの旅程だつた。吉林からは、もう通へないので、蛟河の街を根據に、毎日調査地區へ通つた。

威虎嶺山系にはいつてみて、眞木が一番驚いたことは、山間の小驛をはさんで、その附近が非常に發展してゐることである。威虎嶺山系は、老爺嶺に比べ、いくらか低くみえるがやはり、頂きの平らな密林に閉された山々であつた。

むかしは、驛を央にして、部落をその附近に掻き集め、有刺鐵線の柵を、附近の山の稜線傳ひに、すつかり四圍に張り繞らし、その中に、部落はひたすら、逼塞してゐたものが今は逆に、全く活氣を取り戻し、材木の集散に、膨脹し、自力で、土壁柵や、板柵を、自分の部落の周圍に張り繞らし、日日に新た、日日に精氣を差し加へ、この山間に、自ら淋漓と

してゐる樣が、一眼で分つた。鐵道は、さういふ點で、部落のことまで心配せずともよく、鐵道のことだけに心を注げるやうになつてゐることを、眞木は看取出來た。建國十年の、國家の苦闘を知る故に、この變化に、油然とうかぶ晴れやかさを、眞木は、抑へ得なかつた。

調査の最後の日のことを書かう。その日は、威虎嶺驛附近で仕事をした。

四圍を、密林の山々に圍まれた、山間の小さな平地に、威虎嶺の村もまた、さうした部落二つで出來てゐた。一つは、驛前の山の左手に、一つは、驛を距てた反對側の、昔は濕地とおぼしき低地にあつて、恰度、その日は、舊の端午の節句の日であつた。

眞木らは、滿系線路手に手傳ひをさせるのを、その日は遠慮した。モーターカーの運轉手だけは、仕方がないので、必要に應じて手傳つてもらふことにしたが、他は一切、自分たちでした。折角の、彼等の待ち兼ねの日を、出來るだけ邪魔したくない、と思つたのである。

その日、威虎嶺驛に下りてみると、驛附近に積まれた、木材の山の間に、二本の大丸太を、高く組んだ、ブランコがつくられ、萬國旗が張りめぐらされて、附近には、賑かに人々が集つてゐるのが望見された。端午の節句には、鮮系の人たちは、ブランコに乘るのだ、と誰かゞ云つた。眞木は、今日は、滿系も鮮系も、舊曆で暮す人々は、それ〳〵何かを祝つて暮すのだな、と始めて氣がつき、その日を休まずに働く日系の姿を想ひうかべた。が、さて、あんな大きな、妙な形のブランコを造つて、それに乘つて、一日暮し、それがどんな風に愉しいのか、よく分らなかつた。それよりも、そのブランコが、遠くからみても、貨物積卸場の土盛の上にたてられてゐるので、鐵道の施設に、あんなに近接して場所を選ばれては、施設を破損するおそれがある、と考へられ、或ひは、あとから、部落の人たちや驛長に、注意を喚起しなくてはなるまい、などと考へてゐた。

豫定の最後の日であるのに、仕事は澤山殘つてゐた。蛟河に引き擧げる時間を氣にしても居れないので、その日は、特別の支障が起きない限り、夕方おそくなつても、豫定の仕事だけは、すまして行く氣だつた。仕事がだん〳〵進むにつれて、眞木らは、廻り廻つてブランコの傍を通つた。ブランコの丸太は、案の定、貨物積卸場の土盛に植ゑこまれ、太い綱で四方に張り支へ、その太綱の二本は、線路側の木造擁壁の支柱に結びつけられてゐた。

これはいかんな、と眞木は思つた。けれど、その木造擁壁は、既に破損甚だしく、破損して居ればこそ、その支柱に結びつける隙間が出來たのだ、とも判斷された。それにしても看過出來ないことであつたが、眞木は、そこに集つてる人たちに、何かをいふ氣は起らなかつた。そのときブランコは、全く使用されてゐなかつた故もある。既に午後であつたし、もう使ひ終つたやうにもみえた。

人々は、ブランコから少し離れて、圓陣をつくり、何かに熱中してゐた。

好奇にかられて、眞木たちも近寄つて覗くと、角力である。それが、風變りなので、時間のないのも忘れて、少しの間、見物した。

その附近は、木材の山の間に、一寸した廣さがあつた。地面は、濕地の上に、木屑や鋸屑が敷きつめ、踏みかためられたやうな所で、恰度、砂地のやうであつた。

別に土俵もない所を人々は取り卷いて、眞ん中では、四つに組んでゐた。全く、固い取組みで、二人とも、右手を相手の後の腰帶に廻し、左手は、相手の右腿に卷いた布切れをつかみ、互に動きがとれないでゐる。そして、たゞ、相手を足かけで後に倒すか、横に覆へすか、だけに專念してゐた。その中、大きな方の男が、めんだうなりと、先に外掛けを試みた。痩せた方の男は、それをひねり返して、勝負がついた。

一勝一敗といふ所であらう、同じ取り手が、直ぐまた勝負することになつた。眞木たちが、最も風變りだ、と思つたのは、日本の角力のやうに、兩手をついて睨み合ひ、ハツケイヨイヤアと始まるのではなく、最初から、右四つにガツキと組ませ、相手の右腿の布片れを左でつかみ、平等に腰が据つた所で、審判者は、二人の背中を同時にパタツと叩き、始まることである。

二回目は、取り手は何れも鋸屑を踏んで、息切れするほど揉みに揉んだが、勝負がつかぬ中に、眞木たちは、仕事に返つた。

眞木は、取り手の一人が鮮系で、一人は滿系であることをその衣服によつて判斷したが、部落の人たちが、奇聲を發して、聲援に熱中してゐるなか、如何にも、心に滿ちる事柄と注目された。

ひよつとして、工合よく、夕方五時ごろの列車で引き擧げられゝばよいが、と思つたが、二十分ほどの差で、それには乘れなかつた。あとは、七時半ごろまで、列車はないので、眞木たちは、暇つぶしに、また角力見物に出かけたのである。

行つてみると、角力は、もうとつくに終つたあとであつた。しかし、白や、桃や、綠の、朝鮮服の人々は、別にそこから立去らうともせず、何かを待つ風であつた。

人々は、ブランコを央にし、その前の方を明けて、思ひ思ひの位置に、立つたり、腰かけたり、ブラ〳〵したり、してゐる。滿系の男が、その急造の大ブランコに乘つて、一寸、振つてみたりしてゐる。眞木たちも、これは何か始まるな、と、ブランコのすつと前方、薪材の山の傍に、その一つをお互腰にしいて、ゆつくりと、見物することにした。

一人の、色あせた薄茶の洋服を著た、鮮系の婦人が、ブランコをゆす振りはじめた。綱の長いブランコは、一揺りするのにも、相當骨が折れるらしく、ゆつたりと大きく弧を描いて、それでも、次第に高く揺れはじめる。一體、どういふことを仕様といふのか、分らなかつたが、多分、何らかの形で競技をやるのであらう。ブランコの競技であるなら、どれだけ高く振れるか、を競ふのか、ブランコから跳び下りて、一番遠くに跳んだものが勝といふ、さうした競技をやるのかと、いろ〳〵空想してゐると、その中、ブランコは大揺れに揺れて、相當高くまで、振り上げられた。

すると、その前方に、十米ばかりの二本の細竹の尖に、長い糸を結へたものが、張り渡された。はゝあ、これは、高く振る競技で、あの糸の線によつて、振られるブランコの高さが測定されるのだな、と思つてゐると、程なく、ブランコは、その糸擦れ擦れの高さに屆きはじめた。

たうとう越した、と思つたとき、バリ〳〵といふ音がした。ブランコは、上の方から糸をひつかけ、下がる力で、糸を切らず、竹を折り割つた。

同時に、周圍から拍手が沸き起つた。その日の優勝者が決定した模様である。といふのは、件の婦人は、もう振ることをやめ、さも滿足さうな面持で、惰力で揺れるブランコの上に、グツタリとしてゐたのである。

あゝ今日の花形だな、と思つてみてゐた。婦人は漸く降りると、人々の中に、歡び迎へられながら、その中から幼兒を受けとつて、乳房をふくませはじめた。眞木は感心した。陽灼けした、二十五、六の、女にしては背の大きな、痩せぎすの人であつた。

あらゆる觀衆の前で、賞品授與が行はれた。

先ほどの、滿系の男が、明いたブランコにまた乘つて、懸命に振つてみてゐたが、とても、婦人の振つた所までは行けず、間もなく諦めてやめた。してみると、婦人のその日の成

績は、拔群のものであつたに違ひない。

ブランコの支柱が、掛聲勇ましく、手際よく、部落の若者たちに押し倒された。擁壁の木柱に結びつけられてゐた太綱も同時にほどかれて、眞木を安心させた。しかし、眞木は、先きほど、この人たちに、その點で何もいはなかつたことをよかつたと思つた。

この人たちは、こんなに、この日を愉み、優勝者は、滿足と譽れに、しびれるやうに醉つてゐる。ひよつこりこゝにやつて來た自分らが、規則ばつて、何かをいひ出せば、それらの愉樂は、いくらかは減じられたかも知れない。眞に重大な支障の起らぬことで、餘計なことをいひださないでよかつたと、心から眞木は思ひ返してゐた。

驛に戻つて、附近の深井戸の、氷のやうな水を水筒につめたりした。時間はまだまだあつた。夕食の用意をして來てゐないので、水餃子を料理屋に頼んでもらつた。端午の節句で店は休みでないかと危んだが、幸ひ、休んでゐなかつた。節句だといふのに、眞木らの必要に應じて、モーターカーを運轉したり、お茶を汲んでくれたりして、殆ど、休まない滿系の運轉手は、そのときも、料理屋まで二度も足を運んでくれた。

列車到著一時間ほど前、眞木らは野天で、漸く屆いた水餃子を頬ばつた。一切調査を終へて、これで切り上げるかと思ふと、いろいろ感慨が浮ぶ。

威虎嶺の驛ホームには、墨の色も薄れて、今は判讀しにくくなつた說明板が立つてゐる。

以前、このすつと山奥に、駐屯してゐた日本兵の一小分隊が、共產匪に四圍をかこまれて、危險迫り、その情勢を知つた、他の地域にゐた指揮官が、撤退を命じた所、兵士らは、敵を前にして、みす〳〵撤退することは無念であると、獨力討伐に向ひ、敵を蹴散らしたが、遂に全員華と散つた、といふことが書かれてあつた。

眞木は威虎嶺の山々を見渡す。部落のある山を背にしてゐると、前方の左手と右手にそれ〴〵密林深き山が一つづゝ寢そべつてゐる。眞向ひの低地の部落の向ふには、かなり荒されたことの分る密林の岡がある。この山間の部落々々の平和な息吹きも、もとはそのやうな力によつて、かち得たものであることを想つた。

滿洲は、日に日に、立派になつて行きつゝある。たとひ、滿系と日系が、まだ十分に同じ心になりきらなくとも、滿洲の、この土と、水と、風と、光は、やがて、その中の樣々な

心を一つに纏め上げて行くであらう。今こそ、それがまさしく信頼する理由があることを彼は悟り、確信に心は明るむのであつた。

老爺嶺といふ山の名は、長敬する吾が主の山、といふ意味をこめたものださうである。老爺嶺といふ山が、所々にあるのは、そのためで、住民が長敬する山は、往々、かうした呼び名をもつてされるらしい。老爺嶺を越えただけに、眞木らは一週間を費してゐる。偶然、一週間も、毎日その山の膚近くに暮した譯だが、いつの間にか、老爺嶺の放つ香氣に、眞木は魅せられてゐた。

或ひは、累々たる密林に蔽はれた、重厚な、崇高な、あの山々の香氣こそ、すべての憂ひを氷解し去る淵源なのかも知れない。

眞木は、崇嚴の氣立ち籠める老爺嶺に深く叩頭する。住民が崇めるのと、同じ心で、その山を振り仰げる氣がした。滿洲の、土や、水に、眞に額づく人々に幸あれ。――

威虎嶺の空に夕映えが來た。密林の山々は、クツキリと、その中に浮び、靜かに風が流れた。眞木たちの歸る列車が、這入るのももう間もない。

（完）

青野季吉著
文學の美德（評論）
時代と文學の悩みを身で生き抜く氏の眞筆にして周到なる論調は文學や藝術への永遠の憧憬を語つて熄むことを知らない。
B6判三五四頁・價二圓二十錢〒一五

佐藤春夫編並解說
國木田獨歩傑作選
自然主義と浪漫主義の偏向を正し、兩者を渾然統一せしめたる天才作家獨歩の傑作集。
B6判二六〇頁・價二圓〒一五

和田傳著
草の蔭に（隨筆）
健康な日本農村建設に挺身する著者が、その折々にふれての隨筆集。
B6判三二〇頁・價二圓〒一五

福田清人著
春節（小說）
大陸に於ける眞の苦鬪と建設といふ現實の面にまで導いてくれる小說。
B6判三〇〇頁・價一圓八十錢〒一五

野口米次郎著
起てよ印度（詩文集）
印度の榮光を讃へる詩文集
A5判三二〇頁・價三圓二十錢〒二〇

サマセット・モーム著 鶴巣尙譯
支那の屛風（紀行）
在支外人の淺ましき行狀記
B6判二七八頁・價一圓八十錢〒一五

富澤有爲男著
凍土（ツンドラ）（小說）
北滿に取材せる野心的雄篇
B6判三一二頁・價二圓〒一五

室生犀星著
筑紫日記（隨筆）
詩と俳句とに表現された珠玉
B6判三二〇頁・價二圓〒一五

田山花袋著
田舍教師（小說）
明治文學の遺せる不朽の名作
B6判三五〇頁・價二圓〒一五

東京市神田區一ツ橋二ノ五
振替東京四五一〇七番
小學館

白鼠

——十二月八日への銘記——

冬木羊二

「本實驗ニ供セル動物ハ、健康ナル、白鼠ニシテ、體重百瓦以上ノモノヲ選ビ、高粱、野菜、水ヲ以テ飼養シ、一乃至二週日經過セシメ、體重ニ動搖無キヲ確カメタル後、使用セリ。」

實驗記銘簿の餘白に、この様に書き留めると、佐多は、ペンを置き、亂雜になつた實驗臺の上を整け始めた。血に汚れた、メスや、鋏は一括して流し場の容器に投げ入れ、シヤーレや、試驗管、其他、細々したもの一切を漸く近頃馴れて來た手順と動作で次々と在るべき場所へ收めて行つた。その途中、一寸、方向轉換したが、それは、相當に騷がしい音を立てる水流ポンプの水を止めに行つたのだつた。それとて、よくあり勝ちな氣まぐれに、何かの仕事最中に他處へ注意をそらしたと云つた風なもので、彼の毎日の順序に狂ひが、あつたなどとは、考へられる程のものではなかつた。實驗が濟めば、使

用しない水流ポンプの水を止めるのは、當然のことで、早く止めるに越したことは無いのである。が、平常は、佐多は一番最後に、つまり實驗室を去る前に止めてゐたのである。

二箇所の卓上電燈を消すと、殘りの乳色硝子に掩はれた天井からの光線が、和らかに周圍の器物に影をつくり、急に晩になつてることを思はせ、それと共に佐多の心は何か知ら氣忙しく、せかせかと動作も荒つぽくなり、時には腰掛の脚につまづいたりする事にもなつた。

最後に彼は、寄せ集められた、白鼠臟器の殘骸を次室の汚物桶に捨てに行くのだつた。次室は佐多が學生の頃、特技實習で、先輩の助教授から教習を受けたことのある部屋であつたが、凡そ十年も經つて、佐多が再び母校に研究に歸つて來た時には、すつかり模樣替へされて、佐多の屬する教室專用の實驗室の一部と變つてゐた。佐多はこの部屋に共同實驗者と、劃つて、自分達の實驗動物（主として白鼠だつたが）を置いてゐた。

動物室は別に在るのだつたが、第一に手の屆き易い處、それに飼料の注意が要るので、時に無責任な事を平氣でする、飼育係りに、まかせては置けなかつた。そこでこの部屋に大きな金網籠を運びこんで來て、最初の數十匹を飼育し始めたが、結果が良いので、箱を增し、更に他の動物も置くことにした。寒さを防ぐ爲には、電氣炬燵を仕込んだ巢箱を、有り合せの木片と金網で造つてやつたりした。けれども、それ以來隨分、清掃には意を用ひた積りであるが、この部屋は、南京蟲と蚤の巢窟ともなつてしまつた。

籠の中の白鼠共は、人氣がないので、とりわけ響く足音の近づくのに驚いて、藁の中に、もぐりこみ、もぐりこみ損つた奴は、右往左往走り廻つた。持つてた容器で、籠のふちを叩くと、とたんに、ぴたりと、その喧騷は止む。全部、すくんで了ふのだ。がしばらくすると、又、がさがさ、やり始める。佐多は、容器の中から、肝臟や心臟の殘りをつまみ出して、投げ入れてやつた。間もなく、それ等は此奴等の奪ひ合ひとなる。今まで逃げたことなどは、忘れた様に。

「ふむ。友喰ひか。あさましかりける次第なり。」鹿爪らしくさう言つて、佐多は汚物桶に、殘りを捨てた。と、此處で彼は心中、チエツと舌打ちした。それはこれ等、白鼠が嚴密に言つて、高粱、野菜、水だけで飼育されては居らない事に、又しても思ひ至つたからであつた。現に此奴等は五時間程前に一緒に居つた仲間の臟器を貪り喰つてゐる。然も高粱、野菜を喰ふ時とは、全く異つた形相で、凄じいばかりの勢ひで

ある。——體重百瓦以上ノモノヲ選ビ、高粱、野菜、水ヲ以テ——でなく、——主トシテ、高粱、野菜、水及ビ時ニ少量ノ動物蛋白質、即チ供用セル實驗動物臟器ヲ與ヘ、——とでも訂正しなければ、ならないことだつたのだ。

だが、その様な書き方をした先人の文獻があるのだらうか。佐多の、今までぶつかつた範圍では、まだ無かつた。佐多と共同實驗者が、白鼠に、この様に動物臟器を投げ與へる様になつたのは、白鼠共が、何かの調子で斃死した仲間を、寄つてたかつて、貪り喰ひ、殘すところは、一枚の皮と尻尾だけといふ現場を見つけ出されたことからであつた。逃げられる筈のない籠から、時々、姿を消す、行衞不明減數の原因が分つたので、更に、二人は、試みに實驗濟みの腹部を開いた一匹を投げ入れた處、忽ち、前記の始末を再現した。それから殆んど毎日實驗殘りの臟器を與へることにしたが、これは、確かに此奴等の生存に必要なことであるらしかつた。發育が良く、活潑になり、强者から襲撃を受けて嚙み殺される弱者が減少する一方、肉食の滿足からか、隙あらば襲撃せんとする意圖も幾分は麻痺されるらしく、何よりも、佐多にとつて痛い減數が皆無と云つて良い程になつたことは有難いことだつた。三四年前には一匹三十錢位の相場だつたものが、一圓二十錢もするのだから、毎日數へて見て、一匹も減つてゐない、元氣な奴等の姿の前には、佐多は、この方法の成功を疑へなかつた。それまでは、大方、半數位が實驗まで持たなかつたのである。

「本來、此奴等は、肉食動物なのだ。それでなくて、如何して、あんな貪り喰ひが出來るものか。」と、佐多の共同實驗者は言つた。

佐多は、それの究明は兎も角、白鼠が、共喰ひする事實を見た以上、かうした一群を一つ籠で飼育する場合、××缺乏食餌飼養などといふ、食餌制限の實驗は成立しないことが非常に氣になつた。實驗者が、いくら飼料を計り、一定の養素のみを與へて、すましてゐても、白鼠の奴は弱りかゝつた仲間に飛びかゝり、これを喰ひ盡し、舌なめずりしてゐるのでは全く、とんでも無い話である。そこで、かうした場合、白鼠は一匹づゝ分離して飼養せねばならないことになる。幸に、佐多達が行ふ實驗は、こんな制限食は必要なく、むしろ、何でも喰つて、元氣であつてくれれば、くれる程、好都合なのだ。それにも拘らず、佐多が、飼料の件に就いて、實驗記錄簿の記載をとやかく思ひ惑ふのは、先人の文獻にあるを言ふは易いが、無いと斷言せんが爲には、とてつも無い多くの文獻渉獵を行はねばならない、その勞苦を思ふ憂鬱さからと言ふよりも、仲間達が醫局で戲れに名附けた「實驗室性神經衰弱」に侵されてゐると見た方が正しいのかも知れなかつた。

さて佐多は、空になつた容器を下げてその室の電燈を消し再び實驗室に歸り、流し場に行き、容器に水を滿たすと、かかつてゐる手拭ひで手をふいた。これで彼のその日の實驗は終了したのである。一わたり室を見廻すと、記錄簿を取り上げ、扉口で消燈し、廊下に出て施錠した。廊下の電氣時計は九時五分を指し、彼の腕時計と少しばかり違つてゐた。暗い階段を昇り、醫局に行つた。もう誰も居なかつた。

白衣を脫ぎ、上衣を著、外套をとる。この頃から、彼は、ひどい空腹感に襲はれるのだつた。空の辨當箱の這入つた代用革の鞄の中へ、記錄簿を押しこみ、そゝくさと醫局を出た。守衞の居る玄關に廻り、表に出ると、初冬の冷い風が、俄かに身に沁みる。彼は此處から二里ばかりある北陵の住家へ、十時の終バスに遲れない様に、小西邊門まで歩いて行くのだつた。空腹で歩くのは疲れる。

人並みに五時か六時頃、大學の食堂で、食事を取つても、十時過ぎに家に著く頃は、再び食事をせねば寢られない事が多いので、むしろ、午から、十時過ぎまで喰はずに頑張る事にした。恐ろしいもので馴れて來ると如何やら普通の夕食時には、空腹を感じなくさへなれた。けれども、家路に著く頃になると、反動的に、ぐつと、こたへて來るのであつた。「いつまでも、こんな生活を續けてゐると、膵臟炎になるぞ。俺は。」などと、醫者らしく食事時間の不規則に就いて、考へて見たりする。四年ばかり地方に勤めてゐた間に。佐多にとつては、第二の故郷にも等しい、奉天の街は、便利な、その中心地區には絕對に佐多の家族を容れようとは、しなかつた。足を棒の様にして歩いた借家探しは思つても、ぞつとする位

だつた。漸く這入れたのが北陵の、五年も持てば良い方だと、建てた會社側で公言して憚らない、間に合せ集合住宅の一戸だつた。然し、水道も瓦斯もあり、風呂もあるのだから、この時勢に文句を言つては罰が當らう。たゞ使つてる資材が、すべて古物の爲に、風呂の釜は底に孔があき、水道管は腐敗して、時ならぬ噴水を呈しては、徒らに子供達を喜ばせ、時には天井壁までが、遠慮なく落ちて來て油斷をさせない。窓や戸の隙間だらけの造作は、どれだけ去年一冬を辛く、悲しいまでに暗い氣持ちにしてしまつたことか。氣の張つてる佐多を除いて、一家が感冒やら肺炎で枕を並べて寢こんで了つたのも、その時だつた。また、その寒さが、もう目の前に近づいてゐるのだつた。さうかと言つて街の家には移つて行けないのであつた。偶に空家があつて交渉に行つても、權利金五千圓などゝ、途方もないことを、ふつかけられては、如何にもならず、引き下るより仕方が無かつた。「街に住めたら、實驗の能率が違ふのだが。」今では、それのみが、唯一つの未練で、他の不便さは、あらかた、あきらめることも出來てゐたけれど、思ひは同じと見えて、往くさ歸るさの、バスの中では家に關する話題が、何より先づいつでも交されて盛んであつた。

小西邊門までの路を歩く味氣なさ、殊に塀の蔭に凍てついた薄氷に足を踏み入れた時など、ぞくつとし、堪へ難い空虛を覺える。今やつてゐる實驗に對する不安やら憔悴、自分の將來への故もない疑惧、同僚に關聯する樣々な被害妄想、それ等が、とめ度なく、それからの佐多の胸を押しつけ、心を搖さぶつた。いつしか肩は、前屈みに落ち、見るからに卑屈な姿勢で歩いてる自分の姿に氣づかう氣力もなかつた。

小西邊門から北陵に向ふ終バスは、酒氣を帶びた乘客で充滿する。この時刻に、素面でこのバスに乘るのは乘務員と佐多を含めた極僅かな人間に限られてゐた。狂人共に、とりまかれた正常人は、むしろ悲慘である。性の惡い醉漢に、からまれるのが厭はしく、それ等少數の人達は、一樣に小さくなつて、視線のやり場にも深い注意を拂つてゐるかに見えた。

酒に醉ひ痴れた、我物顏の大勢の狂態に、以前とは異り、腹立たしさを覺えるのは如何したわけであらうか、佐多とてもこの二、三年前までは、深夜の鋪道を、在滿作家と謂はれる仲間と共に、醉態を盡して歩き廻つた事もあるので、今更、他人のことに立腹するのは可笑い話だが、それだけに、その

感情が、內訌して、一種、異樣な重壓となり、何かの折には爆發も、し兼ねない激しいものが身內に流れるのが感じられ、この人達は、これで樂しんでゐるのだと思ひ返すまでには相當な時間が、かゝるのだつた。

珍らしくその夜は途中で故障も起さず、バスは新開地の十字路の終點まで到達したが、其處からは家は近かつた。溜息に似た深呼吸を二三度やりながら、佐多は歩く。

家の戸を叩くと、子供達の甲高い聲と駈け出て來る足音がする。軋る錠を外して戸を開けた、佐多の妻は、顏を見るなり、近くの社宅からの往診依頼があつた事を告げる。これを聞くと、無言で彼は鞄を差出し、引き換へに家に置いてある會社診療所の往診鞄を渡す事を、その動作で要求するのだつた。そこで、

「すぐいらつしやるの。」と、妻は言ふ。

「ああ。」

「御飯すましてからでは」

「先に行つて來る。」それだけの思ひやりがあるなら、食事が、濟んでから、上手に切り出せ、何年、醫者の妻をやつてるんだ。胸の中では、さう叩きつけてやる。往診先を氣にしながら、飯が落ち附いて喰へるか。氣の利かない奴！

が、子供達の不安さうな顏に氣づくと硬ばつた表情を崩さずには居れず。

「何だ。まだ起きてたのか」

「うむ。」

「すぐ、歸つて來るから、もう寢なさい。」

「うむ。」

思はず頭に、手をやり、お河童髪を、二三度代る代る撫でる。別に子煩惱ではないのだが、その一日異常のなかつたことを思はせる生氣ある顏を見ると、至極、和まされる佐多だつた。やがて妻の渡す往診鞄を受け取り、彼は再び出て行く。行く先は彼が糧の道を得てゐる會社の社宅の一棟であつた。彼はこの會社が持つてる小さな診療所に勤め、「勤務に支障無き時間に於て研究を許可す」と云ふ、まるで足に鎖をつけられてる樣な許可證を會社から貰つてゐる。往診も亦、勤務の中なので、歸宅の、とたん、これに出會すと、如何云ふものか、今までの空腹感は麻痺し、反對に胃袋の充滿感が起つて、食慾は、すしんと、落ちて了ふのが常だつた。

その翌る日、實驗室では、意外なことが、佐多を待ち構へ

てゐた。診療所の務勤を終つて、黄昏れ近い街の通りを、幾分放心氣味で、鞄を、ぶら〳〵振りながら、大學の門をくゞつた彼は、教室醫局に上衣を脱ぎ、實驗室に降りて行く階段の上で、ばつたり共同實驗者に出會つた。不機嫌な顔で、佐多の挨拶には答へず「君、えらい事をやつて呉れたね。恒温槽は、使へないよ。」と、明らかに憤激を祕めた語調で、捨てる様に、浴びせると、その儘、擦れ違つて上へ昇つて行かうとした。

「えツ？如何して？」いぶかしがる佐多の顔に、共同實驗者は、皮肉な笑を浮べて振り返り、實驗室に行つて見給へ。電熱棒は燒き切れてるよ。君は、昨日、スキツチを入れたまゝ歸つたんだらう。今朝、僕が、來た時は、もう萬事休止すさ火事にならなかつたゞけが、幸せさ。

佐多は、唾液を呑みこんだ。共同實驗者は、二、三歩階段を昇り

「あの電熱棒は、此處の工作部ぢや、修理は出來ないよ。内地にでも送らなければ、さうすれば、半年以上は駄目だ。まあ、ゆつくりやり、ませう。」と、最後は揶揄的に、平常の調子に歸つてゐたが、生硬な、表情は、押へてる怒が、如何なものかを、明白に語つてゐるのを、佐多は感じた。

「濟みません。うつかりして、……」後は言葉とならず、佐多は、實驗室へ走り込んだ。恒温槽の傍に行つて見ると、燒け切れた、棒狀電熱器は、既に分解されて、人造石臺の上に投げ出されてあつた。鍍金された、ニツケルは、黒い焦片と變り、手からぴ、觸れば、ぼろ〳〵と落ちた。燒けた心鐵は赤褐色の醜い色を見せて、佐多を冷笑してゐる様であつた。確かにこれは、失態だ。

佐多は、ぎつと脣を噛んだ。何と云ふ、へまな事をやつて了つたもんだ。自分の迂闊さが、情なく、慘めであつた。恒温槽は、この電熱棒と、自動調節裝置で、今まで、百％能率をあげて來たのだ。電熱棒が、この有様では、連る、自動調節裝置も廢物同然用をなさなくなるのだ。何としても追ひつかない、常識を疑はれても仕方がない、而もそれはいつも佐多の來る時間前に、その裝置を用ひて、類似の實驗を行つてゐる、先刻の共同實驗者の、研究を阻止する事にもなり、何とも、はや、やり切れない失態であつた。恒温槽は昨日までは、水を充たし、スキツチを入れると電熱棒に電流が通じ、水を温める、一方附屬の電動機が廻轉し、それによつて、水中の小さなスクリユウが水を攪拌する。水温が段々昇つて所定の温度に達すると調節槽内で膨脹した水銀柱が、電熱棒への

の電流を遮斷して、それ以上の水温上昇を防ぐ。そして水温が下つて來ると、再び電流が通じ水は温められ、かうして、始めに攝氏三十八度なら三十八度と調節して置けば、槽中の水は常に同一温度の限界で保たれる様になつてゐた。その中に試驗管を入れ、種々の實驗を行ふのであつたが、も早、この便利な裝置は、佐多の手拔かりによつて使へなくなつて了つたのである。佐多は昨日、恒温槽の、スキツチを切るのを忘れ、その癖、槽中の水だけは、ゴム管で底の栓から排水して歸つたものだから、温めるものなき、電熱棒は、どん〳〵熱せられ、自身が灼熱、遂には融合して、ショートか何かで自然斷流するまで、今では厭ふべき、科學の眞正直さを演續してゐたのであらう。其處此處に、こぼれてゐる水銀の小さな球は、調節器中のもので、電流遮斷どころか、高熱の爲に急激に膨脹し過ぎて、飛ばされて了つたのを物語つてゐた。

佐多は昨日、水流ポンプを、常とは違つた時に止めに行つた。何故さうしたか、それは今でも解らない。いつも一番最後に止めることにしてゐたことが、識らず、その日も恒温槽のスキツチは既に切つて了つたものと、思ひ込ませたので、丁度、其時、水温は所定の温度にあつたし、スクリユウの廻轉も止つてゐ、彼の注意を、遂にひきつけずに終つたらしい。

彼は常の如く、排水のゴム管の尖端を流場に插入し、その流れ落ちる水音を聞きながら、汚物を捨てに次室に行つたのだつた。自分の失態が、どれだけ、共同實驗者に迷惑をかけるものであるかは、佐多には嫌といふ程、解つてゐた。改まつて、再び詫びに行かなければ、濟まない事であつた。

恒温槽は、今までの様に便利なわけには行かないけれど、別に火力で、やるのがあるので、實驗そのものが全然出來なくなつたのでは無かつたが、その代り、それに依ると、火加減と水温に始終氣を配らなければならないのでその能率は著しく低下し、何にしても困つた事は、その實驗に、今までの數倍の時間がかゝるであらうことだつた。これは、佐多の様に時間を限られてゐる、研究生には、隨分應へるのであつたが、それすら共同實驗者への償ひの心の重さに較べれば、何でもないと、しなければならなかつた。

佐多はその償ひの爲に共同實驗者の使用した試驗管の洗滌とか其他、實驗準備に必要な種々の事を、許された時間内で出來るだけ、自分が、これから引き受けて、やつて行かうと思つた。が、そんな事位では、佐多が今まで、彼から受けてゐる好意ある處置の何十分の一にも値せぬのではないかと、考へて來ると、佐多はもう、自分の迂闊さを、如何にして償

り、鞭打てば、滿足出來るのか、いら〳〵して來るのだつた。

こんな風で、その日は到底、仕事にならなかつた。佐多はふらりと次室に行き、白鼠共の前に立つた。まさか今日は實驗がなく、犠牲に供されるものが無いと知つたのでもあるまいが、白鼠共は、悠々と寢そべつてゐるもの、向ひあつて立ち上り、角力をとるもの、金網を傳はり走り廻るものなど、非常な陽氣さである。

思へばこの白鼠も數多(あまた)殺したものである。佐多が、最初の一匹を斷頭してから二年ばかりの月日が經つてゐたのだが、その間、屠られた數は二百を越えてゐる。慘酷だの、動物愛護だの、言ふも滑稽な位で、殊に白鼠などは毫も生き永らへさすべき動物では無いと思ふやうになつてゐる。この赤い眼をした、純白な軟(やは)かな皮毛に包まれた、可憐な輩に、この様な憎しみを抱くのは、友喰ひの嫌らしさもあつたが、それは、とりたてゝ言ふ程の理由でなく、むしろ殺し、殺し、首を刎ねる、その現實の峻烈さが、蓄積された擧句の副作用であつた。と、佐多は跳びはねてゐる仲間の下積になつてゐる、常態ならぬ一匹に氣がついた。ぶつかつて來たり、明らかに攻撃して來る仲間のものから逃れ様とするのだがその動作は奇妙に右下に激しく首を振り、步行が自由にならない態(さま)を見せてゐた。佐多は、傍の長攝子を取つて、その白鼠を、つまみ擧げ、外へ出した。體重は、二百瓦にも達しさうな、大きな奴であつた。臺の上に放して見ると、步行し始めたが、右下に頭を叩きつけながら、右へ右へと廻轉する樣に、甚しい跛行振りで、腦部か何處かの神經麻痺症狀が來てるらしかつた。眼は見えるのか如何か、口吻を擦りつけて動くのは必要以上に觸毛に便つてるらしく思へた。佐多は、これを隔離すべき網籠を手近かに探し求めたが、適當なのが、なかつた。他所で探して來るまでを、過ぎる日、仔を生んだので、親仔とも隔離してあつた別の巣箱に、一先入れ樣と思つた。その箱には、雌鼠と、それが生んだ仔鼠が四匹、飼はれてあつた。

白鼠は生れた時から手馴づけると、大層、よく馴れるもので、この仔鼠達も、佐多の肩の上に這上つたり、手掌の上で食物を取る位になつてゐた。流石に實驗室の虐殺者も、この仔鼠までを斃すのは躊躇されるのか、所要材料員數として計上してはゐなかつた。

今、その箱に手を入れて、餌皿を横へ押しやらうとした時、あツと、佐多は聲を立てた。親鼠が不意に彼の指先に咬みついたのだ。三角の齒型が喰い入つて、血が垂れた。

「こん畜生ツ。」彼は指を振り、試藥棚(しやくだな)から、沃度丁幾の瓶を慌てゝとり、滴らした。滲みこむ痛をしかめた。今まで遂ぞ、こんなことはなかつたのである。咬みついた雌鼠は、薄暗い箱の奧から、尙敵意の眼つきで、彼の方を窺つてゐた。

彼は構はず長攝子で、例の首振り鼠を、その中へ落しこんだ。すると雌鼠は、又しても、さつと身構へて、後脚で立ち上り挑む樣な氣配を示した。首振り鼠は確かに眼が見えないらしく、それに對して反應も示さず、たゞ觸覺と嗅覺で以つて、雌鼠の脚元へ、身體を、ずらせて這ひ寄つた。雌鼠は、二、三度闖入者の身體を嗅いでみたが、その時は、もう挑戰の姿勢は和らいでゐた。佐多は、それで安心し、網籠を探しに、去りかけた。戶口まで來た時、急に彼はけたたましい啼泣がその箱の中から聞えたので、走り歸つた。見ると、如何だらう。哀れな、弱つた盲目の首振り、脚蹙えた白鼠と思つてゐた奴が、仔鼠に咬みつき、旣に一匹を斃し、他の三匹も咬傷を受け、狂ひ逃げに走り廻つてゐる中で、早くも斃れた仔鼠の上に乘り臓腑を喰ひちぎつてゐるところだつた。そして親

タイラー
セジヰク 共著　ビゲロウ改補　安田春夫譯
自然科學史 上下卷
B六判三五〇頁　價各二・五〇〒一五
難解と云はれる科學史もこゝでは一般歷史書を讀む如く面白い。本書の古代から中世に到る部分を讀むと、何人も科學史に興味を覺えるであらう。

K・フォルレンダー著
廣島定吉譯
入門哲學史 上下卷
B六判三二〇頁　價各二・〇〇〒一五
初學者を對象に書かれた本書は、古代から近代に到る哲學の發達史を平易に述べたもので、入門書としては最適である。

ブーニン作　B六判　三二〇頁
中村白葉譯　價一・八〇　〒一五
村
詩人ブーニンの傑作、ロシヤ唯一のノーベル受賞作で、ロシア農民の無骨な生活像を活寫しながらこれら農民に限りなき愛着を示し、詩情が全篇に漂つてゐる。

ラゲルレフ作　前田晁譯
エルサレム
B六判三二〇頁　價一・八〇　〒一五
北歐の農民生活を描いた傑作。

今日の問題社
東京市芝區田村町四
振替東京五九七四八

の雌鼠は、——呆れたことに、佐多の指まで咬んだ雌鼠は、片隅で、悠々と、高粱を拾ひ、口吻を、もぐもぐ、させてゐるのだ。

佐多は、考へる間もなく、長擲子に力をこめて、欺瞞者の首筋を摑み出すが早いか、あり合せた鐵棒で。一撃のもとに、その頭腦を碎いて了つた。擲子の下に痙攣する振動が傳はるのが感知されると、力一杯、足元の、コンクリートに、叩きつけた。更に長擲子はのびて、雌鼠も、同じ結末に片づけられた。殘つた仔鼠共は、相變らず巢箱の中を走り廻つてゐる。

——ふむ、動物愛護だとよ。動物の母性愛だとよ。動物心理だとよ。何を譫言云つてやがんだ。俺が見、俺がやつたのは、この始末さ——

佐多は餘憤、覺めない震へる手で、二匹の死骸を汚物鑵に捨てると、さつさと、其處を出て行つた。

轉換が、佐多に起つた。今まで、何をするにも、襲ひかゝつて來た痴愚に等しい憂が消失し、樂しくは無くとも、心憂くはなくなつた。小西門への夜路は靴音高く、バス待つ間は、酔拂ひの口說も面白く聞き、家に至つては、すべての缺點を、美點とまでは無理に考へないが、且て經驗した奥地の生活を思ひ省みるだけの悠りを生じた。

漸く寒風凛冽の冬の夜、我が家の扉を叩けば、迎へる妻の往診依頼を告げる不手際は、相も變らずであつたが、これこそ醫師の妻の正しい道なので、手際如何の問題ではなかつたのだ。「病ひを診るのは、神に仕へまつること。」と、日本醫道の根本精神は、神代より既に明らかに呈示されてゐるのを、物の本によつて知り得た佐多は幸せであつた。

嚥ふべし、實驗室性神經衰弱。假面を剝ぎ、本症を暴露した白鼠は、躊躇なく、叩き殺し、腦藥を碎かねばならないのである。

昭和十六年十二月八日、この日！人類の白鼠が、忽ち、その腦藥を叩き碎かれた。

（完）

この一年

——大東亞戰爭重要日誌——

一、大東亞建設
二、驀進日本
三、滿洲（輝く十周年）
四、動く世界

（本社編輯部編輯）

大東亞建設

▲昭和十六年十二月八日

▽ハワイ海戰　米太平洋艦隊主力潰滅

▽皇軍マレー上陸

▽在上海英艦擊沈　米船拿捕

▽皇軍泰に友好進駐開始

▽米マリン武裝解除（天津・北京・秦皇島）

▽香港封鎖

▽英軍泰に侵入、日本軍直ちに反擊

▽シンガポール附近空襲

▲九日以後

一〇▽マレー沖海戰　英東洋艦隊主力全滅▽皇軍比島上陸▽グアム島上陸▽ルソン島北部に上陸

一二▽皇軍九龍占領　▽グアム島占領▽ルソン島南部に上陸

一六▽皇軍英領ボルネオに上陸

一八▽ペナン占領

一九▽ミンダナオ島上陸

二一▽比島ダバオ陷落

二五▽皇軍ウエーキ島占領　▽香港陷落　香港方面陸軍最高指揮官

驀進する日本

▽米英に對する宣戰布告の詔書並に臨時議會召集の詔書渙發

▽大本營陸海軍部「帝國海軍は本八日未明西太平洋に於いて米英軍と戰闘狀態に入れり」と發表

▽陸海軍に勅語を賜ふ

▽大詔を拜し政府所信を聲明

▽外務省對米交涉經過を發表

▽緊急中央協力會議開催

▽泰國通過に關する日泰協定成立

▽日佛印軍事協定調印

一〇聯合艦隊司令長官に勅語を賜ふ

一一▽對米英戰共同完遂に關する日獨伊三國協定調印

一二▽聯合艦隊司令長官に重ねて勅語を賜ふ　▽今次戰爭の呼稱を「大東亞戰爭」と決定、情報局發表

一三▽大詔奉戴國民大會擧行　▽企業許可令施行

一五▽第七十八臨時議會召集▽「極東」の字句抹殺を情報局決定

一六▽臨時軍事費追加豫算成立▽物

滿洲（輝く十周年）

▽日本帝國の米英に對する宣戰布告に際し詔書渙發

▽滿洲國政府聲明發表

▽張總理談話發表

▽臨時國務院會議開催

▽關東軍報道部長談話發表

九▽武部總務長官談話を發表▽米英撃滅國民大會擧行（全滿）▽緊急農産物寃荷打合會議開催▽治安部流言蜚語取締を全國に指令

一〇▽皇帝陛下建國神廟に戰捷を御祈念▽協和會康德九年度運動方針決定發表

一一▽在滿鄉軍「米英撃滅大會」擧行（全滿）▽梅津駐滿全權大使在滿學生生徒に訓令▽米英系資産凍結緩和規定一切取消を經濟部發表す▽在新京トルコ・タタール、打倒米

動く世界

▽英、米、濠、メキシコ等對日宣戰布告

▽獨軍當局東部戰線休止聲明

▽關印政府・キユヴア政府對日宣戰布告

▽ウルグワイ政府近く米國と共に對日共同戰線に立つことを聲明

▽埃及對日外交關係を斷交

▽ソ大使（リトヴイノフ）ルーズベルト大統領に信任狀提出後、日米戰爭につき協議

九△メキシコ政府、對日資産凍結を命ず

一一▽獨伊對米宣戰布告

一六▽米兩院大統領に特別權限付與

一七▽米ハワイ三長官罷免

一九▽ヒ總統陸軍總司令官に就任▽ブラジル中立宣言

二二▽チャーチル訪米

二四▽英軍北阿戰線にスペンガヂ攻略

二六△チャーチル米上院に於て米英合作を强調▽英蘇軍事同盟締結

酒井隆中將　海軍最高指揮官新見政一中將と發表
二八▽香港入城式▽マレー・イポー陷落　▽ボルネオ島クチン占領
三一▽東部マレーのクワンタン占領

▲昭和十七年一月

一▽ボルネオのラブアン島占領
二▽マニラ完全占領
四▽長沙完全に占領
八▽帝國潜水艦、米水上機母艦ラングレーを撃沈
一〇▽病院船ハルピン丸敵潜水艦により沈沒
一一▽海軍落下傘部隊メナド攻略に參加▽陸軍先鋒部隊クアラ・ルンプール突入▽オロンガポ港占領
一二▽米航空母艦レキシントン型一を撃沈
一四▽わが精鋭ジョホール州に突入
一五▽陸軍部隊マラッカを占領
一九▽皇軍ビルマに進入ダヴオイを占領
二三▽ウェーキ島を大鳥島と假稱
二四▽陸軍部隊バリックパパンに敵前上陸▽ダヴオ完全占領
二五▽泰國米英に宣言
二六▽海軍特別陸戰隊ケンダリー完全占領
三一▽モールメン占領

▲二月

一▽泰、新金本位制採用
三▽バアン占領
四▽ジヤバ沖海戰
五▽比島臨時政府事務開始
九▽マカツサル、ガスマタ占領▽シンガポール敵前上陸成功▽泰佛印境劃定會議
一〇▽バンジエルマシン完全占領▽マルタバン完全占領
一一▽シンガポール港市街に突入
一四▽陸軍落下傘部隊パレンバンに大擧降下
一五▽シンガポール攻略成り英軍司令官無條件降伏
一七▽專任內相に湯澤三千男決定
一八▽シ港陷落祝賀に當り應召者に資統制令公布施行
一七▽衆議院本會議、大東亞戰爭目的貫徹に關する決議案可決▽高等捕獲審檢所設置
一八▽日獨交換放送協定締結
二一▽日泰攻守同盟調印▽言論取締法施行規則實施
二二▽陸海軍總司令官に勅語を賜ふ
二三▽敵產管理法公布施行
二四▽「土民」の語、使用廢止▽第七十九議會開く
二七▽翼賛會事務總長に橫山助成氏就任
二九▽俘虜情報局設置

一▽爲替相場の英米基準廢止、圓建、政府公定制實施
二▽毎月八日を以て大詔奉戴日と決定
一〇▽勞務調整令實施▽
一四▽善通寺俘虜收容所設置
一五▽產業機械統制會創立
一六▽大日本翼賛壯年團創立
一八▽日獨伊新軍事協定調印
一九▽香港占領地總督部設置、總督に磯谷廉介中將親補
二一▽第七十九議會再開、東條首相大東亞戰指導要綱を闡明
二四▽臨時軍事費追加、百八十億と決定
二七▽日東貿易會創立
三〇▽德川、永田、松田、砂田氏等現地要職に就任

二▽大日本婦人會發會式
五▽日本新聞會設立總會
六▽藤原銀次郎等五氏海軍顧問に就任
九▽マレー方面陸軍最高指揮官山下奉文中將と發表
一五▽南方方面最高指揮官陸軍大將伯爵寺內壽一、總參謀長陸軍中將塚田攻と發表
一六▽シンガポール攻略に關し陸海軍に優渥なる勅語を賜ふ▽日銀の外國爲替基金廢止
一七▽專任內相に湯澤三千男決定
一八▽シ港陷落祝賀に當り應召者に英示威の行進
二三▽臨時全國省長會議
一五▽國防保安法並國防資源祕密保護法施行▽外商取引許可失効を經濟部布告
一六▽臨時省次長會議
二二▽第六軍管區國境に蠢動せるスパイ四名の死刑發表
二四▽政府康德九年度一般會計豫算八億二千萬圓と發表
二七▽政府建國十周年慶祝行事發表▽泰國滿泰公使交換を正式に申入す
二九▽經濟部對外爲替相場公定實施要綱發表

一▽經濟部に貿易司新設▽特殊會社社員給與統制令實施
五▽詔書奉戴日制定を國務院佈告を以て發表
六▽日滿兩國政府滿洲開拓第二期五箇年計畫要綱發表
一四▽協和會中央本部常任委員會を改正戰時即應體制を確立
一五▽滿伊國際放送協定調印
二三▽通貨吸收三億目標へ中銀國民貯蓄運動展開
二四▽全滿開拓、實業廳長會議▽協和會科學技術聯合部會結成
二五▽滿關貿易聯合會創立
二七▽日本帝國議會にて井野拓相滿洲開拓政策の强行言明
二八▽第一回滿鮮連絡會議開催▽滿洲開發第二次五箇年計畫は農鑛併進主義によると竹內對滿事務局次長議會にて言明
二九▽日滿華鐵資材懇談會東京にて開催▽全國法院、檢察廳次長會議開催戰時下思想對策協議▽第十一次開拓團入植協議會開催

三▽スペイン初代駐滿公使ホセ・グレゴリー氏に決定▽全滿商工公會總會開催▽米英の謀略による金密輸團六百名檢擧記事解禁
四▽滿洲鐵鋼業日本鐵鋼統制會參加を決定▽勞働者緊密就勞規則概要民生部より發表▽本年度貯蓄目標十五億圓と決定
六▽恩賜財團普仁資金、萬壽の佳節に創設
八▽皇帝陛下の臨御を仰ぎ協和會臨時全國聯合協議會開催
九▽臨時全聯「國民時局對處決議」を發表し對時局決意表明
三〇▽ヒ總統米英痛撃
四▽英內閣改造
六▽米英合同參謀本部團を結成
七▽米英共同軍需品配給局新設
九▽五億弗援部借款案成立
一〇▽太平洋軍事會議
一九▽チャーチル內閣を改造、クリップス入閣
二四▽駐土バーベン獨大使襲撃事件
二七▽英落下傘部隊北佛奇襲反撃さる
二九▽チャーチル、カナダ訪問
三〇▽ソ聯、英ソ會談コンミュニケ發表

一▽二十六箇國反樞軸同盟條約調印▽チリー中立を聲明
一三▽米、戰時生產局、戰時勞働局を新設
一五▽汎米外相會議リオデジヤネイロに開催
一七▽チャーチル歸國
二三▽汎米會議、對樞軸斷行案可決
二九▽英下院、チャーチル首相を信任▽英・ソ・イラン三國同盟條約調印▽獨伊ベンガチ奪還

一七▽**パレンバン完全占領**
一九▽海鷲ダーヴイン大攻撃
二〇▽バリ島附近海戦▽**チモール島敵前上陸**
二一▽海鷲、敵航空母艦大破炎上
二四▽**帝國潜水艦カリフオルニア州沿岸の軍事施設を砲撃**▽ベンクレンを完全占領
二六▽泰國内閣補強
二七▽**スラバヤ沖海戦**

▲三月

一▽**バタヴイヤ沖海戦**▽ジヤワ島敵前上陸
四▽南島島に敵機來襲を撃退▽ホノルル再度空襲
五▽**バタヴイヤ完全占領**
七▽蘭印政權接收軍政布告
八▽**ラングーン完全占領**
九▽蘭印軍全面的**無條件降伏**
一〇▽泰新内閣成立
一二▽昭南島特別廳開設
一三▽メダン無血占領
一四▽今村最高指揮官スラバヤ入城
一五▽レイトンをセイロン防衛司令官に任命
一七▽マッカーサー大將比島脱出、復權の恩赦▽天津、廣東租界行政の國府移管を發表
二一▽大東亞建設審議會官制公布
二三▽翼賛政治體制協議會初總會開催
二四▽十七年度貯蓄目標二百三十億圓
二五▽臨時中央協力會議開催
二六▽第二回重臣會議
二七▽大東亞建設審議會初總會▽翼賛壯年團長會議開催
二八▽駐ソ大使に佐藤尚武親補
三▽地方長官會議開催(七日迄)
五▽日米外交官交渉諒解に到達
六▽衆議院議員選擧運動等取締規則改正公布施行▽特別攻撃隊の偉勲及九軍神二階級進級發表
九▽ビルマ方面最高指揮官 飯田祥二郎中將、蘭印方面軍最高指揮官今村中將と發表
一〇▽東印度御嘉尚、勅語を賜ふ▽中小商工業再編成要綱決定
一三▽全國警察部長會議開會
一六▽興亞同盟整備統一要綱決定▽張謝恩特派大使入京、參內▽貿易業整備要綱細則發表
一七▽兒玉伯等を軍政顧問に起用
一〇▽外國人土地法公布
一五▽張總理シンガポール陷落に際し談話發表▽三宅協和會本部長談話を發表、全協和會員の奮起要望
一八▽大東亞戰爭戰捷第一次祝賀大會
二五▽共産匪首趙尚志十二日鶴立縣にて射殺の旨治安部より發表
二八▽滿洲學校報國隊結成
一▽建國十周年建國節▽建國十周年詔書渙發▽**恩赦詔書渙發**▽滿洲事變出境者に對する詔書渙發▽政府は「歸來許容」の佈告公布▽減刑令、復權令公布
天皇陛下より御祝電▽高松宮殿下台臨の下に建國十周年祝賀午餐會東京に開催
三▽張總理の謝恩特派大使として日本派遣を政府發表
七▽滿蒙新經濟協定調印
八▽滿華連絡協議會開催
一一▽**張謝恩特派大使一行出發**
一二▽第二次祝賀會全國各地に擧行
一四▽阿片密輸取締連絡會議通化に
二▽西南太平洋及樞軸聯合軍司令官ウエーヴエル罷免
九▽米海軍作戰部長ハロルド・スタークよりアーネスト・キングに更迭
一一**▽英政府、クリツプスの印度派遣を決定發表**
一四▽獨伊經濟協定成立
一八▽土大統領重ねて中立聲明
二七▽**英軍フランスに上陸作戰を企圖、失敗**
二八▽**英印會議開始**
二九▽英印第二次會談
三一▽**印度國民會議派、英提案拒絶を決定**

蒼惶▽わが潜水艦印度、ビルマ沿岸に活躍、戰果發表
二一▽米將間に五億弗援蔣借款調印
二三▽アンダマン島奇襲上陸、英軍無條件降伏
二五▽廣東沙面行政移管式擧行
二六▽英機我が病院船を爆撃
二七▽全スマトラ戡定完了
二八▽天津租界行政移管式擧行
三一▽儲備券の僞法幣等價交換廢止▽皇軍クリスマス島占領

▲四月

三▽バタアン半島總攻撃開始
五▽海軍部隊コロンボ攻撃
六▽**印度本土初空襲、印度洋作戰展開**
七▽印度國民會議派英の對印修正提案拒否
八▽ビスマルク群島戡定完了
九▽英航空母艦ハーミス撃沈
一〇▽皇軍バタアン半島マリブレス山占領、セブ島に敵前上陸▽英印會議決裂
一一▽バタン半島完全攻略▽皇軍セブ島完全占領
一九▽伯の暴擧に帝國政府嚴重抗議
二〇▽各宮殿下金鵄勳章受賜▽支那事變生存者行賞に畑、寺內、岡村の三大將に功一級授賜發表▽日ソ漁業協定成立▽海戰法規一部變更を制定公布
二二▽翼賛選擧訓制定
二四▽翼賛選擧協全國支部長會議開催
二五▽第七十九通常議會議事終了▽海軍管理令同施行規則公布施行
二六▽十七年度豫算實行方針決定▽法王廳に特派公使派遣決定
三一▽軍と統制會懇談會開催
一▽國鐵旅客運賃・書狀・電報・電話料金引上實施▽船舶運營會創立
二▽興亞宗教同盟結成
四▽總選擧を四月三十日とする詔書公布
六▽印度洋作戰につき東條首相聲明
八▽九軍神海軍合同葬執行▽日ソ漁業議定書公布
一一▽北ボルネオ方面最高指揮官に前田利爲中將親補
一三▽比島最高指揮官本間雅晴中將と發表▽臺灣軍司令官に安藤利吉て開催
一六▽張謝恩特派大使一行帝都入り
一七▽張謝恩特派大使一行天皇陛下に謁見仰付られ國書捧呈▽第一四半期の圓資金、三億六千萬圓と政府發表
一八▽全國警務廳長會議開催▽滿鐵調査局擴充
一九▽在滿半島人教育問題に關し、民生部次長談話發表
二四▽臨時資金統制法改正施行規則公布▽張特派大使一行東京を出發
二五▽全滿防諜團體初會合
二七▽勞働者に對する生活必需品配給要綱成る
一▽關東州增稅斷行▽銑鐵、鋼材價格引上げ▽勞働賃金統制規則公布▽滿鐵創業三十五周年▽開拓農場法公布▽滿華中貿易連絡會議開催
四▽張謝恩特派大使一行歸任
七▽滿蒙經濟調整委員會張家口にて開催
八▽滿洲民族學會發會
九▽滿鮮華蒙首腦會議を開催(大連)
大陸經濟の連繫强化
一七▽農勞賃金統制を政府全國省長宛訓令
一▽太平洋軍事會議ワシントンに開かる
八▽米參謀總長、英首相と協議
一四▽**イラン對日斷交決定**
一八▽**ラヴアル佛新内閣成立**
一九▽**マッカーサー西南太平洋及樞軸聯合軍司令官に正式就任**
二二▽英軍ブーロニュ上陸企圖失敗
二三▽南阿聯邦對佛國交斷絶
二六▽ドイツ國會と總統に完全獨裁權賦與
二七▽ル大統領特別敎書を以て生活

ブ島上陸▽東印度の外人に登錄制布告
一六▽皇軍パナイ島上陸
一八▽海軍部隊ギマラス島占領
二一▽國、バーツ等價改訂に關する日泰經濟提携成立▽德王滿洲國訪問
二二▽孫良誠將軍國民政府陣營參加
二三▽パナイ島殲定作戰終了
二九▽皇軍コタバト占領

▲五月

一▽マンダレー完全攻略
二▽日泰間圓決濟正式調印
四▽アキャブ飛行場占領
五▽雲南省境突破、龍陵占領
七▽**コレヒドール島攻略▽珊瑚海々戰**▽汪國府主席滿洲國訪問
八▽珊瑚海々戰々果擧る（米戰艦一、空母二擊沈、敵機九十八機擊墜）▽皇軍ミイトキーナ完全占領
九▽**本間指揮官マニラ入城**
一〇▽ミンダナオ島殲定成る▽皇軍騰越占領
一六▽小スンダ列島殲定作戰成る
二四▽晋冀魯市邊區共產軍殲滅戰開始
二七▽國民政府僞法幣の法的通貨性剝奪
三一▽**特殊潛航艇マダガスカルの**

中將親補▽第一回醫術院賞決定
一五▽飛行師團司令部制定
一六▽金產聯解消決定
一八▽**米機日本本土を初空襲忽ち擊破**▽金融統制團體令公布
二四▽十七年度物動計畫決定
二五▽泰國慶祝使節團入京
三〇▽**第二十一回總選擧執行**（棄權率一割六分八厘）

七▽米國の根據覆滅を御嘉尙勅語を賜ふ▽興亞同盟改組
八▽十七年度生產擴充計畫決定▽朝鮮に徵兵制實施準備決定
九▽**臨時議會召集**（五月二十五日）詔書公布▽金扇回收令第六條發動
一一▽ビルマ、印度洋作戰を御嘉尙勅語を賜ふ▽殉職報道戰士慰靈祭執行
一二▽珊瑚海の大捷に勅語を賜ふ
一四▽翼贊政治會綱領宣言決定
一五▽大政翼贊會機能强化方針確定
一六▽金融事業整備會公布實施▽金子堅太郎伯薨去▽リヒアルト・ゾルゲ等の國際諜報團檢擧事件發表
一九▽陸軍航空軍司令部新設、六月一日より施行

一八▽自興村設置要綱發表
二〇▽外交部新設初代大臣重光葵
二一▽德王十周年を祝して訪滿
二六▽滿洲衣料纖維統制協會設立
二七▽**第二回滿鮮連絡協議會開催**（京城）

一▽電信電話線のアルミ化世界に魁け電々竣手▽第二次電力開發計畫發表
二▽皇帝陛下皇國軍傷病兵御慰恤に御內帑金を御下賜
七▽**汪中華民國主席新京到着**
一四▽高松宮殿下御差遣の御沙汰日本政府發表
一五▽井野最高法院長參議に特任
一六▽建國功勞者謝靈祭嚴修
一八▽**興亞國民動員大會開く**
二一▽皇帝陛下興亞國民動員大會に臨御
二三▽青少年學徒詔書奉戴日記念式典擧行
二六▽日滿間二重課稅調整要綱公布▽御差遣宮殿下空路大連御安着▽

四▽**英軍マダガスカル上陸**
五▽米、英のマ島上陸支持を表明
七▽英軍デイエゴ・スアレス占領
八▽獨羅軍ケルチ半島に攻擊開始
一〇▽ガンヂー英人撤退を說く
十五▽獨軍ケルチ占領を發表
十六▽米・ペルー通商協定成立
十八▽アルフオンゾ・ロペス、コロンビア大統領に再選▽米、物價停止令を實施
二〇▽米、マルチニック島の佛艦を武裝解除
二一▽伊潛艇、大西洋で米戰艦メリーランド型一隻擊沈
二八▽イラク重慶友好條約批准
二九▽ブラジル獨軸國と事實上戰爭狀態に入り政府公式擊明▽ハリコ

設計を提案
二九▽獨伊兩互頭ガッツブルクに會談

英艦二擊破▽特殊潛航艇シドニー港に潛入、軍艦一擊沈

二〇▽翼贊政治會創立總會、總裁に阿部信行大將就任▽水產統制令公布、卽日實施
二三▽全國金融統制會創立總會擧行
二五▽**第八十臨時帝國議會召集**▽十七年度國民動員計畫決定
二六▽高松宮殿下、滿洲國建國十周年御慶祝のため東京御出發
二九▽小磯國昭大將朝鮮總督に親任
三一▽**關門國道感道貫通**

▲六月

一▽從化、鳳院を攻略（南支）
二▽ボートモレスビー爆擊▽ソロモン諸島殲定▽泰軍ビルマ、ミユウ市占領▽反英暴動激化印度西部に戒嚴令
三▽ネクロス島殲定▽江西省進賢占領
四▽ビルマに軍政布告▽ダッチハーバー空襲（飛行機一四擊墜、大型輸送船一擊沈）
五▽ミツドウエー强襲（米航空母艦二擊沈、飛行機一二〇擊墜）▽オルドスに大進攻作戰開始▽江西省撫州攻略
六▽日本近海で敵潛水艦四擊沈を發表▽浙江省衢州城攻略▽ボルネオ

一▽初代航空軍司令官に安田中將親補▽緒中華特派大使使命言上▽小磯大將、翼贊政治會總務辭任
二▽資金統制計畫、貿易計畫決定
三▽御差遣宮御歸京
四▽日佛印經濟交涉妥結
五▽內閣及各省委員設置制決定
八▽南方地名協議會新設
九▽安藤翼贊會總裁無任所相に親任
一〇▽內閣各省委員正式發令▽大政翼贊會全面的改組斷行
一一▽商工省機構改革、企畫局新設決定▽交通、電力兩動員計畫決定
一三▽翼政顧問、評議員、政調會首腦決定
一五▽內務省首腦陣容大異動

鷄泊湖水力發電完成
二七▽初代駐泰公使鄭禹氏と決定
二八▽**御差遣宮殿下新京御安着**
二九▽御差遣宮殿下帝宮に御參入、建國十周年を御慶祝▽康德七年度總決算を政府發表
三〇▽御差遣宮殿下奉迎式を政府、協和會主催にて擧式▽高松宮殿下關東軍に對して令旨を賜ふ
三一▽御差遣宮殿下　皇帝陛下お揃ひにて特命觀兵式に御臨

一▽御差遣宮殿下御離京▽非鐵金屬販賣價格引上げ實施▽在滿中國系銀行全面的廢業
三▽全滿稅關長會議開催
四▽國民勤勞奉公制創設要綱成る
五▽華蒙兩政府へ答禮使派遣を政府發表（中國に張總理、蒙疆には子大臣）▽全滿中等學校長會議開催、梅津全權大使戰時下教育方針明示
六▽國民儲蓄令法を制定
七▽藝能使節尾上菊五郎歡迎觀劇會
八▽天皇陛下より國軍將兵御賜勳の御沙汰を拜す
一〇▽紙配給統制規則公布
一一▽電力協議會設定幹事長に平島

フ戰完了
三〇▽**メキシコ、日獨伊三國に對し正式に宣戰布告**

一▽獨軍ルブルクに進擊（リビヤ戰線）▽米英聯合空軍結成方式協議成立
二▽米大統領ダニューブ三國に對する宣戰を議會に要求▽獨土武器借款交涉妥結▽米支武器貸與協定調印▽米社會黨反戰を決議
三▽英、石炭不足により炭坑藥統制
四▽英國內に於けるベルギー軍再編成に關する英白協定成立
七▽獨軍セバストポール攻擊
八▽ヒ總統洪首相と會談
一〇▽太平洋軍事會議急遽開催（參加國英、加、濠、ニュージーランド、蘭印亡命政府）

五州長官任命
七▽日本潜水艦ニューカッスル、シドニー砲撃
一〇▽晋冀豫作戦劉伯承軍殲滅
一三▽汪國府主席廣東訪問△泰軍モンカーク占領(ビルマ戦線)
一五▽ミッドウエー強襲戦果中米甲巡サンフランシスコ型一、米潜艦一追加、撃墜せる飛行機一五〇を追加發表▽江西省上饒を完全占領
▽印度獨立聯盟總會
一六▽江西省鷹潭貴溪占領
一七▽ヴァンクーバー島、オレゴン州砲撃
一三▽印度獨立總會コンミュニケ發表
二四▽麗水飛行場占領
二五▽キスカ、アツツ兩島占領
二八▽ビルマにアジア青年聯盟誕生
二九▽浙贛戈陽完全占領

▲七月

一▽浙贛作戦東西兩部隊握手
三▽ベナン放送局開局
四▽泰國外國爲替管理實施細則發表
五▽ジャワの栽培企業、軍政部管理
六▽ビルマ八地方長官任命
七▽泰國政府、國民政府を承認
一七▽翼賛會に戦時貯蓄動員本部設置▽專門の海防艦建造▽中央物價協力會議總會▽標準漢字、審議會で正式決定
一八▽泰國に二億圓借款供與
一九▽行政簡素強力化實施要領發表
▽大東亞建設審議會新委員任命
二〇▽泰國へ特使派遣(廣田弘毅氏)
二一▽翼政、政調會總會開催
二三▽國民運動團體統制方針成る
二四▽食糧管理法施行令公布
二五▽國民運動團體協議會解散
二六▽南方要員錬成機關創設▽生活必需物資動員計畫成る
二八▽大日本生産黨解消
二九▽東北振興第二期計畫案決る
三〇▽翼賛會部長、副部長級異動▽南方進出農民錬成所設置▽廣田泰國答禮使節團出發
六▽優生結婚資金借用者に恩典
七▽支那支變五周年記念祝典擧行▽地方長官大異動▽
八▽ソ聯新大使ヤコフ・マリク氏信任狀捧呈▽帝國大學總長會議開催
九▽關門航送船閉航
一▽企畫處機構改革擴大强化さる
▽日滿經濟懇談會開催(三日間)
五▽滿洲開拓第二期計畫滿洲側實行案成る
七▽支那事變五周年記念日に張總理談話發表
一一▽英ソ條約、米ソ諒解成立△獨軍北阿ビル・ハケイム占領△獨土會談
一三▽獨、交戰水域擴大を宣言▽獨羅新經濟協定成立
一四△伊空軍、英艦隊撃砕
一七▽西南太平洋軍事會議開催(メルボルン)▽太平洋軍事會議開催(ワシントン)
一八▽米英會談開始
二一▽獨伊軍トブルク占領
二三▽亞國大統領辭職
二四▽英下院首相不信任案提出
二五▽赤軍ピヤンスク撤退公表
二七▽米英會談共同聲明發表
二九▽獨機ジブラルタル猛爆△樞軸軍マルサ・マトルー占領(北阿戰線)
一▽セバストポール陷落▽獨軍東部戰線總攻撃開始
二▽獨海軍、北氷洋に米大護送船團を屠る
七▽獨軍、ヴオロネジ占領
八▽佛、亡命ギリシヤと斷交

八▽ハワイ海戰參加部隊に感狀授與
▽軍管理七機關を國府に移管(南京)
九▽ガンヂーに全指導權を依囑▽國民政府强力新國民運動展開
一一▽滿蒙國境(察哈爾東部地區)に新作戰開始▽浙南溫州城攻略▽泰佛印國境劃定調印▽印度會議派釋放決議
一二▽廣田遣泰特使國書捧呈
一四▽印度英政治勢力撤退決議
一五▽浙江省瑞安占領
一八▽日佛印經濟協定調印▽西印度洋南阿方面作戰の潛水艦の成果二五隻二〇萬噸と發表(自六月上旬至七月上旬)
二二▽加藤建夫少將の武勳發表
敵機撃墜破實に二六八機
二三▽(大東亞建設金根本方策確立)
二五▽タウンスビル(濠)初空襲▽馬來沖海戰參加航空部隊に感狀
二九▽浙江金華西南に新作戰開始
三〇▽アラフラ海三群島攻略
三一▽日英外交官交換交涉成立

▲八月

一▽ビルマ長官任命傳達式
三▽ボート・ヘッドランド初空襲
一〇▽東北地方振興計畫決定▽戰時造船關係勞務對策要綱決定
一三▽霞ヶ浦、土浦兩航空隊に行幸▽中央食糧營團設立委員任命
一五▽海軍武官、兵の官職階改正
一六▽食糧營團設立方針決定
一七▽閣議豫算先議方針確立
▽大政翼賛會調査會運營方針決定
▽中央協力會議刷新要綱決定
二〇▽大久保東京市長辭職▽設備營團シシヂケート團結成
二一▽天皇陛下、宇都宮飛行場に行幸、航空機攻防演習を天覽▽文部省「大東亞史」編纂に着手▽思想結社三十六團體許可
二二▽東亞農業研究所設立
二三▽大東亞建設根本方策確立
▽計畫造船勞務對策實施要綱發表
二四▽電源開發計畫成る
二八▽產業新體制確立▽行政簡素化實施案決定▽日本銀行、儲備銀行に一億圓借款供與▽大東亞教育學術技術連絡協議會設置▽
二九▽廣田遣泰特使歸國
三〇▽第一回全國商業報國者大會
▽翼賛會統制委員任命▽陸軍定期異動
九▽滿洲開拓第一期計畫の成果發表
一一▽產業開發第一次五箇年計畫實績報告並に第二次五箇年計畫實施方策協議會開催▽日滿華國民運動連繫强化の原則的諒解成立(協和會、新民會)▽十周年慶祝東京大相撲新京場所開場
一五▽建國神廟元神祭▽建國神廟を淨月區に御造營佈告
一六▽地籍整理完了地域に新地稅法を施行▽事業統制組合制度、產業統制法を制定し統制經濟體系を確立▽政府、協和會の人事交流を發表
二〇▽經濟顧問(大村、鮎川、吉野岡田)會議開催第二次五箇年計畫を檢討
二二▽建國十周年慶祝東亞教育大會開催(二日間)
二四▽第十一次滿洲國體育大會兼建國十周年慶祝東亞競技大會滿洲國內最終豫選會開幕(三日間)
二五▽滿洲帝國協和會創立十周年記念式擧行
二六▽郵政十周年記念式典擧行
九▽ドン河作戰終了
一二▽佛政府、マイヨット島不法占領に對し對英抗議
一六▽佛、對米交涉經過を發表、米の不法要求を糾彈
一七▽ヴオロシーフグラード陷落
▽ハワイで米陸軍大演習
二一▽カリー特使、蔣と會見△ウイリアム・リーイ、米總參謀長に就任
二二▽アルゼンチン、汎米ブロック絡緣宣言
二四▽ロストフ陷落
二六▽獨長距離砲英本土砲撃
二八▽チリー中立態度聲明
三〇▽カナダ增援部隊着英
八▽ソ聯援助會議モスクワに開催
九▽獨軍マイコープ油田占領

四▽浙江省松陽縣占領▽スマトラ各州知事決定▽印度政廳ガンヂーの對日交涉案暴露
五▽衡陽で米機撃墜
七▽全印委員會開催▽ソロモン海戰米英艦隊、船團潰滅（撃沈艦船三五、撃破五）▽比島人俘虜釋放範圍擴大
九▽印度會議派領袖逮捕さる
一一▽印度騷擾愈激化
一二▽比島第二回地方長官會議開催
一四▽比島最高指揮官田中靜壹中將親補さる
一六▽回教徒聯盟運用委員會開催
一七▽ギルバート諸島に米軍來攻完全に驅逐
二〇▽國民政府機構改革斷行
二一▽馬來ヒンズー回教兩派合同
二四▽第二次ソロモン海戰（米空母一大破、戰艦一中破）
二七▽濠洲ブルームを爆撃
二八▽印度騷擾加擔者卽時射殺布告
二九▽阿片戰爭百年記念
三〇▽英空軍フレ族部落爆撃
三一▽アリューシャン列島奇襲米甲巡一大破、潛艦二撃沈▽蒙疆正副主席推戴式△マハサバ委員會卽時獨立要求

三▽東京市長岸本大將當選
四▽第二次配電統合方針決定▽內地稻作「良」の見込と發表▽産組戰時對策審議會設置
五▽興亞商工同盟結成さる
九▽野村、來栖兩大使等昭南着
一一▽官吏待遇改善實施案決定
一四▽師範學校制度刷新要綱決定
一五▽皮革統制會に設立命令
一八▽醫師會、齒科醫師會改組▽南方國語教育政策決定▽海上戰爭保險率改正
一九▽海洋漁業統合決定
二〇▽敵産特許第一回處分の發表▽統制會へ權限委讓原案成る
二一▽行政簡素案成る▽劃期的學制改革案成る（中高等學校修業年限短縮）▽結核豫防根本對策決定▽民族學協會發會
二五▽安藤副總裁協力會議長就任
二七▽十六年度國庫現計發表▽海事振興會擴充强化
二八▽南京特派大使團決定（平沼、有田、永井）
三一▽固定資産强制償却規則公布決定

六▽大東亞操觚者大會
七▽建國十周年慶祝馬事大會開幕
八▽皇帝陛下東亞競技大會へ御臨▽慶祝東亞競技大會開幕（十一日まで）▽日滿交驩武道大會開會
一一▽皇帝陛下日滿交驩武道大會に御臨
一二▽大東亞建設博覽會開會
一五▽大豆振興會創設▽「海外同胞訓」制定さる▽建國十周年慶祝音樂使節（東京音樂學校職員）歡迎演奏會開催
一八▽皇帝陛下國軍徵兵檢査場に侍從武官御差遣▽東亞厚生大會（三日間）奉天にて開催
二〇▽第十一次集團開拓團の全貌日滿兩國政府より發表▽滿洲鐵鋼協議會發會
二二▽初代駐滿泰國公使ピラヨータ氏着任▽日滿農政研究會技術委員會總會開催
二四▽駐泰公使以下正式決定
二五▽協和會全國科學技術聯合協議會開催
二六▽全滿開拓主任官連絡會議
二七▽調停法全面的改正成る
二八▽日滿農政研究會總會開催
二九▽滿獨第二次經濟協定成る

一〇▽獨軍ピアチゴルスク占領▽モスクワ會議終了
一一▽西地中海々戰（英航母イーグル撃沈）
一二▽米英ソ三國會議始る
一八▽英中東軍司令官更迭
一九▽英、北佛上陸作戰失敗
二一▽ブラジル對獨宣戰
二二▽米東亞空軍司令官任命
三一▽獨伊軍埃及大攻勢開始

▲**九月**

九▽アキャブ來襲敵機撃墜
一〇▽英再度マダカスカル島侵略
一四▽日本機米本土初空襲
一八▽海軍落下傘部隊に感狀
二二▽帝國政府邦人の不當待遇に關し對英抗議▽軍神加藤少將の陸軍葬
二三▽三特派大使國書捧呈
二五▽帝國海軍大西洋に進出▽汪主席三特使と公式懇談
二六▽華北中央物價協力會議創立
二七▽交換船龍田丸橫濱着
二八▽日華蒙經濟懇談會▽國府に日華三億借款に基く武器讓渡
二九▽國府青年組織訓練計畫大綱成る

一▽大東亞省創設決定▽東鄉外相辭表提出▽國土防衞軍要談話發表▽中央食糧營團創立
二▽內地稻作狀況良好と發表
三▽東京市機構刷新▽蒙疆政府最高顧問廢止
八▽翼賛會錬成方針要綱決定
一一▽大東亞省官制案要綱決定▽金屬生産確保要綱成る▽ジャワ俟地に總務長官設置
一五▽改正電氣供給規定成る（電力消費規正實施方針要綱決定）
一六▽第二回敵産特許處理決定
一七▽外相谷正之氏、國務相青木一男氏親任式▽谷外相外交方針闡明▽全購販聯事業方針決定▽重役陣頭指導要綱決定
一九▽勤勞顯功章令公布
二一▽經濟部土木部廢止縣決定
二二▽轉廢小賣業評價新基準決定
二六▽第三回中央協力會議▽陸軍防衞召集規則公布▽支那事變記念章令公布
二六▽金鵄勳章敍賜條例中改正公布
二七▽日獨伊三國條約締結二周年
三〇▽翼賛會全國局部長會談▽首相貯蓄五百億突破記念放送

一▽改正調停法正式公布▽向ふ三箇月を非鐵金屬增産月間と發表▽國稅徵收法改正▽慶祝佛教大會開催▽滿洲開拓五箇年計畫實行大綱發表▽滿洲總人口四千三百二十九萬六千七百六十二人と發表
五▽新國歌日滿兩語で制定發表▽建國十周年に當り建國神廟臨時親告祭並に建國忠靈廟臨時奉告祭執行仰出さる▽國債總計二十四億四千九百萬圓（六月末現在）と發表▽滿鮮聯合醫學會開催（奉天）
九▽在滿日本學校報國隊生る
一三▽在滿印度人協會發會式擧行
一四▽建國忠靈廟臨時奉告祭
一五▽滿洲建國十周年式典▽建國功勞者表彰式
一六▽滿洲建國十周年祝賀會▽慶祝觀兵式擧行▽訪日飛行部隊出發
二〇▽國都市民慶祝大會
二三▽皇帝陛下博覽會御臨
二五▽鏡泊湖水電牡市へ送電開始
二六▽全滿に亙る産業實態調査開始
二八▽滿洲國政府首腦部異動
二九▽駐日大使王允卿氏發令▽北鐵殘務整理事務部廢止
三〇▽大東亞博覽會成功裡に閉幕

一▽獨軍カラチ完全占領
四▽米濠協定成立
五▽獨軍タマンスカヤ占領
六▽ノヴォロシースク陷落
七▽伊、對ブラジル宣戰▽ヴイシー政府對米抗議▽米大統領爐邊談話
八▽獨軍スターリングラード周邊丘陵地帶占據▽駐米重慶大使胡適辭任
九△米特使ウイルキー、土首相と會見△リトヴイノフ、ハル會談
一三▽グル前駐日大使、對日認識に關し米國民に警告
一五△英、トブルク上陸作戰失敗
一七▽英佛マダガスカル島停戰交涉決裂▽ウイルキー、ソ聯着
一九▽獨軍スターリングラード市街過半を占據
二一▽ウイルキー、スターリンと會談
二九▽ウイルキー重慶着
三〇▽ヒ總統戰爭完遂の決意披瀝▽米インフレ抑制案可決▽獨軍ツアプセ港攻擊開始

▲十月

一▽英兵俘虜輸送船リスボン丸を米潜水艦が撃沈▽魯西平原に殲滅戦展開
二▽大金山莊を占領(魯西作戦)
五▽北支軍治安圏本年當初に比し三倍に擴大と發表
六▽山東方面殘匪一萬五千投降す
八▽山東省西部に新設第八軍を覆滅▽洛陽大空襲敢行
九▽**シドニー特別攻撃隊四勇士鎌倉丸にて無言の凱旋**▽國民政府軍事行政機構改革
一〇▽張希賢部隊二千投降(山東戰線)
一二▽陸軍南方軍政會議開催中央現地一體を強化▽日泰兩軍間に郵便鐵道運賃協定
一六▽ボルネオ島戰定完了
一九▽**非道の敵機 搭乘者嚴重に處斷**(防衛總司令官布告)(關東軍、支那派遣軍同時佈告)▽**大本營、日本本土空襲の米人を嚴重處分と發表**
二〇▽國府改組中樞首腦部發表
二一▽米國製飛行機三機編隊冀東を空襲
一▽勞務報國會結成▽青少年國民登錄開始▽都、國民兩新聞合併「東京新聞」創刊▽杉山大將等五氏ヒ總統より獨最高戰時勳章贈與さる
二▽工員、徴用員に初の恩賞▽泰佛印向鐵鋼輸出統制成る
四▽訪滿學生飛行隊羽田を出發
六▽陸運增强措置決定▽米作豫想平年實收高の六分一厘增と發表
九▽陸軍兵器行政本部新設
一〇▽中央社會事業全國大會▽產業再編成、物資配給現地調査完了
一三▽日滿華興亞團體會議開催
一四▽鐵道開通七十年記念式典擧行▽關東州に侍從御差遣
一五▽朝鮮米收穫豫想高一千五百萬石と發表▽初代兵器行政本部長に小須田中將親補▽三井物産株一億五千萬圓公開
一六▽天皇 皇后兩陛下靖國神社に行幸啓▽大東亞戰爭初の論功行賞の御沙汰あらせらる
二〇▽日滿支間戰爭保險料率引下げ
二二▽昭和十八年度重要國策、閣議で審議
二〇▽敵性特許權第三次處分發表
二一▽朝鮮電力會社(資本金四億圓)設立決定
二二▽**昭和十八年度重要國策を審議、二十九件優先豫算化を決定**
二三▽輕金屬配給規則制定
二四▽食糧管理委員會官制公布
二八▽海軍航空本部制度改正發表
二九▽麥類政府買入價格大巾引上げ農林省食糧委員會で決定
三〇▽學制頒布七十年記念日に御沙汰を文部大臣賜る
三一▽對滿事務局、拓務省廢置
一▽**皇帝陛下 御臨戰時下協和會全國聯合協會開幕**▽訪日 國軍飛行隊歸還▽十年度米穀買入價格決定▽日本國內遊休設備を產業設備營團により滿洲國に供與
二▽全聯にて張總理と武部長官施政方針を述ぶ
四▽大東亞軍用大展覽會開催
五▽建國十周年慶祝電氣大會
六▽新產業統制法制定(統制品目八十五種に擴張)▽華北政務委員長王揖唐氏以下訪滿慶祝使節着京▽訪滿學生飛行隊着京
七▽鄭初代泰駐公使赴任に當り擧明發表▽建國の佳辰に恩赦に浴すもの七萬一千餘名と當局發表
八▽武部長官東上▽全聯第八日民生部大臣勤率制の實施內容を說明▽石炭增產並に選炭に奬勵金制度實施▽入滿華北勞工一月以降七十七萬と發表▽滿洲鐵鋼協議會理事會開く
九▽全國協和會聯合協議會閉幕
一二▽定例次官會議(日本)に於て總務長官康德十年度物動計畫の說明を行ふ
一三▽鮮滿貿易經濟懇談會開催
四▽ダカール防衛に佛艦隊出動▽**スターリン、聯合國對ソ援助の無効果を指摘**▽獨軍 モズドク地區占領(コーカサス戰線)
五▽獨軍ヴォルガ河制壓
六▽伊潜艦、大西洋にて米戰艦ミシシッピー型一隻擊沈▽援ソ議定書調印
七▽ウイルキー重慶にて「惡性インフレは重慶の敵」と聲明△獨軍マルゴベク占領(コーカサス戰線)▽カナダ內閣改組
八▽米、對佛爆撃を辭せずと聲明▽獨軍、スターリングラード攻略達成と言明
九▽米英在支治外法權撤廢
一〇▽**赤軍政治委員會廢止決定**▽重慶救援大會開催(ワシントン)
一一▽獨機、英本土大爆撃
一二▽ソ、豪間外交關係開始
一五▽スチルウエル(ビルマ印度支那派遣米軍司令官)訪印
一六▽**ダゴールに戰闘開始、佛軍、米英軍と對峙**
一七▽西阿リベリヤに米軍侵駐▽獨軍スターリングラード全市席捲▽イラクに反英再燃

二一▽俘虜派遣規則公布
二二▽マレー關稅統一、州間關稅撤廢
二三▽大東亞戰爭一周年行事を「戰力强化運動」と「戰爭生活運動」と決定(十二月五日—十一日)▽武漢攻略戰果發表
二五▽汪國府主席新民會全國協議會に出席のため華北入り▽香港に敵機來襲
二六▽**南太平洋海戰** サンタクルーズ諸島北方洋上にて交戰敵空母四戰艦一、船型不詳一擊沈、有力艦隊損害一一、飛行機二〇〇以上屠る▽印度東部テンスキア及びチッタゴン急襲(敵機四三擊墜破)▽印度總督更迭
二七▽第二次ソロモン海戰以後の綜合戰果發表空母以下三〇擊沈破、敵機五一九擊墜破▽新民會全聯開かる
二八▽日泰文化協定調印▽ボルネオ方面陸軍最高指揮官前田利爲中將陣歿發表、特旨を以て大將に親任後任に山脇中將親補

▲十一月

一▽**大東亞省設置**
一四▽建國神廟に新穀進獻の儀取り行はせらる
一五▽吉林省特命檢閱實施▽牡丹江新京間長途騎乘森林調査隊牡丹江出發
一七▽藝文祭閉幕(一二日間)▽柳の堰境工事竣工
一九▽探鑛奬勵金規則を擴充▽國境取締法制定、軍機保護法改正
二一▽結核豫防對策案成る
二二▽武部總務長官歸任▽滿洲中央銀行法改正要綱發表
二三▽簡素化による關東局、州廳退職者官吏滿洲國に導入
二四▽遼陽、鞍山間自動車道路起工
二五▽本溪湖煤鐵宮原第二熔鑛爐火入式
二六▽滿洲中央銀行法全面的に改正▽**國民勤勞奉公局開廳**(局長に牛田敏治)▽朝鮮人滿洲開拓五箇年計畫成る
二八▽大東亞文學者大會滿洲代表山田清三郎、古丁、爵青、小松、吳瑛の諸氏出發
三一▽建國十周年慶祝繪畫呈上式行はる
一九▽**米軍シリアに侵入**
二〇▽チリー內閣總辭職▽獨伊、英兩軍埃及戰線に四百機の大空中戰展開△伊空軍ジブラルタル爆撃
二一▽駐米、ソ聯大使米大統領と會見▽チリーに反米熱擡頭
二二▽チリー新內閣成立、**米洲連帶主義維持擁護方針闡明**▽佛ダルラン總司令官ダカールに急行▽**重慶政府法王廳に公使派遣**
二四▽獨軍「十月工場」占領

編輯後記

△大東亞戰爭勃發して、正に一周年。此處に本誌は其の記念號をおくる。世界史變換の嚴肅なる一瞬を劃し、世界新秩序建設の雄渾なる構想下に大東亞民族の融合一體共榮圈確立を完遂せんとする本戰爭が、緒戰の當初より壓倒的優位を確保してあらゆる局面に米英陣營の根本的瓦滅を齎しつゝ現在に進展せる歷史的事實を視るまでもなく、如何に史上未曾有の偉大なる力と嚴固たる意義を持つものであるかに就ては、最くも聖戰の大詔に仰ぎ奉る通り、今更贅言を要するまでも無い。御民われ、齊しく大御稜威の前に唯々感激の新たなるを覺ゆる次第である。

△卷頭を飾る長谷川關東軍報道部長の「大東亞戰爭一周年と思想戰概觀」は更に高度なる國防國家體制確立の根幹要素たる思想國防と思想戰の核心を衝いて讀過すべからざる大獅子吼。また開戰と同時に南方作戰に赫々たる武勳を轟かした各部隊長を圍んでの「南方作戰と原住民族」を語る座談會は、本誌記念號に相應しき厚卷と自負するに足るもの。敗戰に敗戰を重ねて正に凋落の一途を辿る米英國家群の運命的樣相を輯錄せる「崩れゆく米英國家群」は、印度の烽起と共に注目を惹く讀物。大東亞戰爭一箇年の輝く戰果と世界情勢の變轉を一見のラチに綴つた戰表「この一年」は、本誌編輯部の苦心に成るものである。

△新しき國民理念として國家推進組織的基礎動力たる國民勤勞奉公制が、第二建國の强靱なる意志に基づいて設定された。これが運用と進展の實踐的段階は今後に觀るべきとして、滿洲國國民勤勞奉公制の根本精神と實踐の方法論たる牛田勤奉局長の「勤勞奉公制の理念と內容」並に大森協和會參事の「國民勤勞奉公制度の國民基礎」を特輯した。

△田中榮太郎氏「興村方策への唱道」は滿洲農村建設工作に對する示唆を全面的に含み、伊藤硯郎氏「世界石油戰の一端を衝く」は殊に現下戰爭渦中にあつて戰爭と石油を繞る列國の運命と因果關係を說いて興味深く、東西兩洋文明交流の神秘を探る柿沼介氏「中央アジア學術探檢の話」は今次戰爭の目標と對比して讀みごたへある解說。

△決戰體制下初の滿洲國全國聯合協議會開催に際し、本誌は特に牛島春子氏に傍聽を依頼した。其他大野澤綠郎氏「エミグラントの年中行事」西田彰一氏「滿洲溫泉巡見」松井武州氏「華中雜記」等何れも好讀物である。創作には秋原勝二、多木羊二兩氏の力篇を得た。

△本誌も創刊以來此處に一年、江湖の熱心なる支持と顧撻のお蔭を以て名實共に滿洲國に於ける唯一の綜合雜誌たる基礎を着々と固めることが出來、更に第二年を迎へ飛躍的發展充實の段階に入らんとするに當り、より一層の指導叱正を願ふ次第である

藝文 第二卷第十三號 十二月號

定價八十錢（郵稅三錢）

康德九年十一月廿五日印刷
康德九年十二月一日發行
發行人 小原克巳
編輯人 石河馨
印刷人 太田信三
印刷所 太田信三商店

誌代

一箇月	八十錢	郵稅三錢
半年	四圓八十錢	郵稅共
一年	九圓六十錢	郵稅共

新京西七馬路一四
發行所 藝文社
電話二一六九〇五番
振替新京一五一番

配配元 滿洲書籍配給株式會社
全滿、日本、北支各書店にて販賣

◎廣告一手取扱
新京特別市中央通
滿洲國通信社
電話三一四三二一番

同各地支社 奉天・哈爾濱・大連 東京・大阪

藥布濕便簡いよで分卅

ツイラモルデ

感冒・肺炎・喉痛に
旅の疲勞・倦怠に
簡便で効果の多い濕布藥

この濕布を卅分間患部にあてますと 爽快な感じと共に体内に作用して 熱や痛みを和らげるのみでなく 病氣に對する抵抗力を增し 体內の病原菌や疲勞素を除去します 之等は從來の濕布劑に見られない獨自の作用であつて 又 血液の循環を良くし 血壓を下げて 潑剌とした健康を齎らす卓効を發揮します 御旅行には是非御携行下さい

感冒・肺炎
氣管支炎
肋膜・腹膜炎
肺門淋巴腺炎
肩凝・腰痛
消化不良症
神經痛
打撲症
扁桃腺炎
疲勞・倦怠

奉天・大連 株式會社 滿洲藤澤友吉商店 天津・上海

かぜ

引かぬよう……

大陸の酷寒季の脅威…寒冒や結核に對するからだの備へは先づ細菌防禦（アンチインフエクテブ）ビタミンの補給から…ハリバの一―二粒はこのビタミンを充實して、皮膚や呼吸器粘膜を強化し病菌侵入を許さぬ頑健な抵抗力を培ひます。

五百粒・百粒

奉天市青葉町十一　田邊藥品株式會社